
異常快樂殺人症

緋薇鶴 夢月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異常快楽殺人症

【NNコード】

N3503W

【作者名】

緋薇鶴 夢月

【あらすじ】

殺して、何が悪い？

人間というものは面倒だと、常々思つ

感情があるから

けど、その感情がなければ、喜びは得られない

面倒だ

異常と狂氣と正常と（前書き）

あつと世間は、僕の事を異常だ、狂ってる、殺人鬼等と呼ぶんだろう。

だが、僕は正常だ。狂っていない、異常じやない

異常なのは周りに溢れてる愚民達の方だ。誰でも僕のよつになる可能性を抱いてるのに

まあ、僕の楽しみが邪魔されなければそんな事はどうでもいい
僕に共感出来るのなら、君も殺してみるといい。とても、気持ちがいいから

でも、世間の愚民共はきっとこう思つよ
異常だ つて

狂つてるとか、善と悪なんて誰が決める？

真つ当に生きようなんて馬鹿のすることだ

僕は、自分の欲に忠実に生きる

それの、何が悪い？

殺して何が悪い？

異常と狂氣と正常と

わあ、始めよ！

ゆっくり痛め付けて、いたぶつてあげよ！

さあ、殺そう

止められるなら止めてみせるがいいよ

僕の狂氣を

でも僕は異常じゃない

狂ってる訳じゃない

狂ってるなんて誰が決める？

僕自身だ

だから、僕は狂っていない

欲望に忠実なだけだ

血が見たい

悲鳴が訊きたい

殺したい

誰でもいいから

何か悪いか？

何が悪いのか言ってみろ

人殺しはいけないとか、ありきたりな答えはいらない

ただ、僕に殺されろ

答えられないのなら、君が死ぬかい？

さて、これから一人の少年の話をしようか 実に滑稽な話を

六月一日 乾 圭織・海洞 捺彦

乾 圭織、海洞 捺彦、免許証を見てみたらこの一人はそいつの名前らしい。

乾 圭織は二十一歳、海洞 捺彦は二十五歳みたいだ。

今日の僕の獲物。

一人で手を繋ぎながら歩いているところを、背後からバッドで殴つて、勿論、死なない程度に殴つて氣絶させた。

どんな恐怖に染まつた顔を見せてくれるのか、恐怖と苦痛に染まつた悲鳴を上げてくれるのか楽しみだ。

どうやつていたぶつて殺してあげようか。

一年前に殺したカツプルはどうやつて殺したんだっけ？

ああ、そうだ。男を女の目の前で散々痛め付けて殺したんだ。女は泣きながら『やめて、やめて！殺さないで、殺すなら私を殺してえ！』と言つていたつけ。

女の泣き叫ぶ声を聴きながら男を殺すのも、とても楽しかった。気持ちよかつた。

男を殺した後で女を散々痛め付けて、陵辱の限りをつくして、殺したんだ。

そうだ。海洞 捺彦の田の前で乾 圭織を痛め付けるところを見せつけよう。きっと満足させてくれる反応を見せてくれるに違いない。海洞 捺彦は……まあ、乾 圭織で飽きたら首を切り裂くなりあつさり殺してあげよう。

「早く起きてくれないかな……？早く痛め付けたくてうずうずしているんだ」

きっと今僕は、暗い笑みを浮かべてるんだろう。

僕の笑みを見た人間は必ず息を呑み、恐怖の色を露にする。あの表情は好きだ。邪魔な感情は全て削ぎ落とされ、純粹な恐怖しか存在しないあの表情はたまらない。

恐怖の表情こそ、恐怖から上げる悲鳴こそ、人間の一番美しい表情なんだ。

「おや……？」

乾 圭織の瞼がぴくっと動いた。

「いよいよお田覚めだ。」

「さあ、始めようか……。」

乾 圭織の瞼がのろのろと開く。

焦点が合わないのか、目が泳いでいる。じばらくして、よじやく僕を見た。

最初はきょとんとした顔をしながらも、じばらくして状況を認識したのか、恐怖の色を露にする。

「えつ……誰？何で私、縛られてるの？」

「何でつて君を殺すため。彼氏の目の前で痛め付けて、殺してあげる」乾 圭織の顔に触れてみた。顔のラインに沿つて指を這わせる。

「いや……触らないで……」

乾 圭織が嫌悪感を露にして顔を背けようとすると、

「こうこう反応は気に入らない。僕に捕まつてここに縛られている以

上、僕の物なのだから逆らわれるのは気に入らない。僕の表情の変化に気付いたのか、乾 圭織が怯えたように息を呑んだ。

「君た、今の状況分かってる？僕に逆らうんなら、彼氏を君の目の前で殺してあげてもいいんだよ？」

その一言が引き金となつたのか、触れられても何も言わず大人しくなる。

「何で……殺されなきゃならないの？私達が何かしたの……？」

目に涙が滲んでいる。

「何も。初対面だし。ただ運が悪かつたんだよ。僕に捕まつたんだから。ゆっくり痛め付けて殺してあげるよ」

乾 圭織の横に座り、覗き込むよつとして顔を見る。

髪の毛に触つてみる。肩胛骨まで伸びた栗色の髪は柔らかく、触り心地がいい。

持ち上げ匂いを嗅いでみる。シャンプーの匂いがする。

「…………」

微かに呻き声が聴こえ、海洞 捺彦を見てみる。海洞 捺彦がゆっくりと顔を上げていた。

意識がはつきりしないのか、焦点が定まっていない。じづくじづくしてようやく僕と乾 圭織を見た。

「ふふ……愛しの彼氏がお目覚めみたいだよ」

そう耳元で囁く。

「お前…誰だよ?何で俺と圭織が縛られてるんだよ?」

その質問に乾 圭織の顔を僕の胸に抱き寄せながら答える。

「何でつて君の田の前で君の大切な彼女を痛めつけて、殺してあげるために。君は大切な彼女が殺されるところを、そこで見ているといいよ」

「ふざけるな!圭織に何かしてみる、俺がお前を殺してやるー。」

思わず笑ってしまった。

椅子に縛りつけられてるのに、匕首を差して僕を殺すんだろう。面白くて仕方がない。

「ねえ、どうやって僕を殺すの?縛られてるのに。それと、その縄は君には切れないよ。すぐ頑丈な縄を使つてるから」

さっかから力任せに縄をほどこうとしてから言つてみた。言つたところでもう二度とやるのをやめはしないんだ。

まあいいや。海洞 捺彦はほつといつ。

今は乾 圭織で楽しめばいいんだ。

乾 圭織に覆い被さり、顎を掴み、唇を重ねる。海洞 捺彦が色々と叫んでるけど、気にしない。

舌を入れようとしたら、舌を少し噛まれた。だからそういう抵抗は気に入らないんだ。

仕方ない。自分が僕の支配下にあるって自覚させてあげよう。

「ねえ…僕に逆らえば、彼氏がどうなるか…分かつてるとか…?」

乾 圭織の髪を弄りながら耳元で囁く。ほんの少しの怒りを込めて。囁いた瞬間、びくっと身体が震えたのが伝わってきた。もう一度唇を重ねる。舌を入れたら、今度はすんなり僕の舌を受け入れた。

歯茎や舌の裏、口腔内を余すとこなく舐める。

唇を吸つて、一旦離すと泣いているのが目に入った。

これからもっと酷いことをするのに。

もう一度唇を重ねて舌を入れる。

乾 圭織は泣きながら僕の舌を受け入れる。

さあ、これからが本番だよ……？

ああ、びつやつて悲鳴を上げさせようつへびつやつて恐怖と苦痛にまみれた悲鳴を上げさせようつ。

骨を一本一本へし折つていぐのもいい。生きたまま腹を切り裂いて腸を引き摺り出すのもいい。

さて、どちらにしよう…？

今は血が見たい気分だから、生きたまま腸を引き摺り出してやる。そうと決まればナイフを出そう。

部屋の隅に置いてある机に向かう。

引き出しを開けると、中に納めていた大振りのナイフを取り出す。今まで三十人以上の血を吸つたナイフだ。

三十人以上の血と恐怖と苦痛の染み込んだナイフ。

このナイフで今まで三十人以上の人間を殺してきた。

ナイフを持って乾 圭織に視線を向ける。

僕の視線に気づいた瞬間、さつきよりも怯えた表情をしている。

ああ、あの怯えた表情が更なる恐怖と苦痛に至る瞬間が楽しみだ。ナイフを持って、微笑みながら乾 圭織に近づく。

「おい…？それで圭織をどうするつもりだよ…やめろよ、俺を殺せよ…なあ…」

海洞 捺彦は叫ばせておけばいい。どうせ、後で殺すんだから。

乾 圭織の上に馬乗りになる。

「ひつ！？い、いや……それで何をするの……！？」

何をするのって……そんな事分かりきった事じやないか。

僕はナイフの刃先を舐め、

「何つて……これで今から腹を切り裂くんだよ……ああ、服は邪魔にな
るね」

刃先に服を引っ掛け、見せつけるように切り裂く。
さあ、これで邪魔な物は無くなつた。

「ふふ……ねえ……腹を切り裂く時、悲鳴を上げられると思つ？」

ナイフの刃先を乾 圭織の腹の皮膚につつ、と滑らかせる。
あまりの恐怖に悲鳴すら上げられないみたいだ。

ナイフを腹に押し当てる。皮膚が少し切れたのか、血が滲む。
滲んだ血を指で拭い取つて舐める。ついでにナイフに着いた血も舐
める。

血の独特な味と香りが口の中に広がる。

そろそろ、腹を切り裂いて腸を引き摺り出そう。
ゆっくりと僕の頭の高さまでナイフを持ち上げる。
ガタガタと震えながらナイフを見ている。

そして、ナイフを一気に降り下ろす。

ぞぶつとナイフが皮膚を切り裂き、血管を破り、内臓に突き立つ、
とてもいい感触がした。

そのまま力を込め、股間の辺りまで切り裂いていく。

返り血で顔や服が血塗れになるけど、そんなことどうでもいい。

一旦ナイフを抜くと、血が逆流しているのか、口から血が垂れてい

る。

呼吸も儘ならないのか、とても苦しそうな表情をしている。切り裂いたところに手を入れる。ぬるっとした血の感触と内臓の暖かさを感じる。

内臓を掴むとゆっくりと、でも乱暴に引き摺り出した。

乱暴に引き摺り出したためか、所々ぶちぶちという音が聴こえた。びくびくと乾圭織の身体が痙攣している。

痙攣しているのを眺めながら、ナイフにべつたりと着いた血を舐める。

次第に痙攣は弱くなり、びくとも動かなくなつた。

「ふふ、あはは……死んだね、死んじゃったね……一あはは、あははははっ！」

殺した後の興奮と余韻が収まるのを待つて、海洞捺彦を見る。シヨックが大きすぎたのか、焦点の定まらない瞳で虚空を見つめる。

あーあ…あれじやあ楽しめそうにないや。楽しめないんならいいや。さつさと殺そう。

ナイフを持つて海洞捺彦の前に立つ。
何の反応も示さない。

だつたらいいや。壊れた玩具なんかいらない。

海洞捺彦の髪を掴み、首筋がよく見えるようにする。

そこに、ナイフを深々と突き刺す。

引き抜くと、おびただしい量の血が溢れ出す。

なんだか海洞捺彦の血が美味しそうに見えた。

指で拭い取り舐めてみる。

思つたより美味しくなかつた。

ああ、そうだ。死体処理をしなきや。

今日は一人分あるから少し骨が折れるけど、一人増えたくらいどうつてことない。

わざと済ませて帰つて寝よ。

次に僕の餌食になるのは誰かな……？次が楽しみだ……。

六月三日 表日常

また朝が来る

朝は嫌いだ

仮面を被り、偽りの“僕”を演じなければならぬから

そして、誰も彼もが“僕”に騙される

目覚まし時計のけたたましい音が響く。
うつ伏せのまま手探りで目覚ましを探す。何かが手に触れた。形を探ると間違いない目覚ました。勢よく手を降り下ろす。
けたたましい音がようやく止まった。

時間を確かめる。午前七時。いつも通り。

ベッドから下り、寝ぼけ眼を擦りながらカーテンを開ける。
気持ちいい日の光が差し込んでくる。ん~っと背伸びをする。
さて、制服に着替えると。

欠伸を繰り返しながらクローゼットに掛けある制服を出す。寝間着を一通り脱ぎ、制服に着替える。

時計を見ると七時十三分。僕の部屋は一階にある。そろそろ一階に下りて顔を洗つて、朝食を食べよ。

その前に時間割に間違いかないか確かめる。

数学、理解、世界史、音楽、体育、英語、間違つてない。大丈夫だ。

鞄を部屋に置いたまま部屋を出る。

一階に下つるとすぐに母さんに声をかけられた。

「おはよー、かなえ 鼎」

テーブルには父さんが座つて先に朝食を食べている。

「おはよー母さん。顔洗つてくるよ」

洗面所に向かう。

蛇口を捻り、ばしゃばしゃと顔を洗う。
冷たい。眠気覚ましにはぴつたりだ。

ふと鏡を見る。男にしては線の細い顔が写し出される。
鏡に写った自分の顔に触れる。

「…………」

「鼎、早く食べないと遅れるわよ」

リビングから母さんの呼ぶ声が聴こえる。

「分かってる、今行く。」

素早く歯を磨き、リビングに戻る。

テーブルに座ると「ご飯のいい匂いが漂つてくる。
ご飯、豆腐とほうれん草の味噌汁、卵焼きに焼き鮭。朝は決まって
このメニューだ。」

「やういえば兄さんはどうしたの?」

「那奈瀬なら、大学は今日は遅からりと言つてたから、まだ寝てるんじゃないのか」

「ふーん。いいなあ、ゆっくりで」

僕には三歳年上の大学生の兄、那奈瀬がいる。背が高く、スタイルもよく、顔つきも整つている。文句のつけようがない。

時計を見る。七時四十二分。そろそろ学校に行く時間だ。急いで残りを搔き込む。

「そろそろ準備してくる」

「ちやんと忘れ物なこようにな

「うん。分かつてゐるよ」

手を合わせ、「ちやんと忘れ物なこようにな」と言つて立ち上がる。そのまま一階に上がり、忘れ物がないかもう一度確かめる。よし、忘れ物はない。

そう思つた時、シャランと何かが落ちる音がした。確かめてみると、見慣れないネックレスが落ちている。手に取つて眺める。

ああ、そうだ。このネックレス昨日殺した乾 香織の物だ。デザインが気に入ったから持つて帰つてきたんだっけ。

丸い輪つかの中に十字架が下げられているデザインのネックレス。そのネックレスをとりあえず机にします。

さあ、学校に行こう。

僕の名前は杜塚 鼎。高校一年生の十七歳だ。

昼は普通の高校生、夜は

快樂殺人者に変貌する。

通学路を歩きながら今更ながら自覚するけど、久しぶりに一人分死体処理をしたせいが少しだるい。でも絶対に見つからない完璧な場所に隠したのだから、だるいのも心地いいくらいだ。

「杜塚ー、おっはよー！」

ぱしつと背中を思い切り叩かれた。

「薪沢……何度も何度も言つけど、朝から人の背中を叩くのやめてよ。それとも、そんな簡単なことも理解出来ないくらい知能低下しちゃつたわけ？」

そう、隣で呆けた顔をしてる男は薪沢 波哉斗、何故か一番仲のいい友達だ。

「知能低下って、人のことをサルみたいに言つなよ」

「サルみたって、薪沢の知能がサル並なのは事実だよ」

「うわ、ひつでーお前。遂にはサル呼ばわりかよ」

「なんなら三日月でもいい」

「ひ、ひどい……」「ジンロウで……」

はらはらと泣く真似をしながら歩く。

まあいいや。あんなのはほつとこてわつたと 学校に行こう。

「ちょ、 杜塚置いてくなよ~」

薪沢が急いで走つてくる。

「生憎、 知能がサル並の阿呆を相手にしている暇はないんだ」

「うわ~、 そこまで言ひのかお前。 流石に傷つこちやうぞ」

「傷ついたりしないくせによく言ひつよ

一人でふざけながら歩いていると、 校門が見えた。

今日も 一日頑張ろう。

チャイムが鳴り響く。

八時二十五分知らせるチャイムだ。 八時三十五分にもう一度チャイムが鳴れば一限目が始まる。

一限目は確か…… そう数学だ。

「なあ杜塚~、 一限目って数学だよな?」この前の抜き打ちテスト帰つてきちゃうよなあ?」

薪沢が机に突つ伏しながら訊いてきた。

「多分、 帰つてくるだろ?」

「あ～そ～か～や～ぱ～そ～か～。ど～じよ～俺、ぜ～て一～ヤバ～よ。死～るよ～。テストの点数ヤバイって」

死んだ魚の田をしながらぶつぶつ呟いてる薪沢の方がよっぽどヤバイよ。

その時、八時二十五分を知らせるチャイムが鳴った。チャイムが鳴ると同時に数学教師、芹中 勉が教室に入ってきた。

几帳面なのか、授業が始まる時間に遅れたことは一度もない。

「おしゃべりは終わりですよー。委員長、司令」

「きつーつ、礼」

委員長である日比野 奈火魅が、あまりやる気のない声で号令をかける。

皆立ち上がり礼をする。

「着席」

座る時だけは監視。

「IJの前のテストを返します」

周りからえー、とかいろいろ聴こえてくる。

あの抜き打ちテスト、手抜きだからきっと六十点くらいだろ？

他の生徒がテストを見て喜んだり、落ち込んだりするのを眺める。

立ち上がりテストを受け取る。

「次、杜塚」

机に戻りテストの点数を確認する。八十一点。手抜き元しきは思つたよりもいい点数だ。

「杜塚へ、お前何点……？」

「八十一点」

「すげえいい点数だな。俺なんて四十一点だぞ」

「ちゃんと勉強してないからだろ」

「そういう杜塚は勉強してんのかよ？」

「しなくてもこれくらいは点数取れるからいいの」

「くああーーー限むせびその頭脳！俺の頭どじり違つんだー！」

「やつぱ出来の違いでしょ」

そんなことを話している内にテスト返却は終わり、テスト問題の解説が始まった。

一限目は解説で終わった。

一限目英語、二限目音楽、四限目世界史と続きやつと匂ひになる。

「あーーやつと匂飯だー」

「五限目って体育だつけ？」

「なんだよ毎飯もまだ食つてないのに、次の授業の心配かよ？」

次の授業の心配というより、ただ学校が早く終わって欲しいだけだ。

「薪沢みたいに暢気にしてないからね」

「ひつで。俺はそこまで暢気じゃねーぞ。お前が几帳面なだけだろ」

「几帳面……ねえ」

几帳面? そうじゃないよ。ただ演じているだけ。

“学校での杜塚 鼎”を。

あの興奮とこの上ない快楽と、それらを混ぜ合わせた満足感を得るために人を殺すには、周りを騙すための仮面を被り、演じ、騙さなければならぬ。

だから皆、仮面を被った僕に騙されているんだ。

“仮面を被った僕”を“本当の僕”だと信じて。

家族も友達も先生達も、ましてや警察でさえも“仮面を被った僕”に騙されている。

“学校での杜塚 鼎”も“家族の前の杜塚 鼎”も“警察の前の杜塚 鼎”も、全て仮面を被つて演じているだけ。

誰も僕が快楽殺人者だなんて疑わない。

警官に何度も、被害者の写真を見せてきて「この人を見なかつたかな?」と訊かれたことはあつたけど、僕が殺したとは疑わない。

見ていて愉快だ。犯人は目の前にいるのに。

まあ、散歩は口実で本当の目的は勿論、獲物を狩るためだ。

人気の全くない場所で獲物を待ち伏せして、たまたま通りかかった獲物に背後から襲いかかり、気絶させた後に鞄に詰めて隠れ家の廃墟に運び、そしていたぶつて痛め付けて、最後に殺す。

もし僕が快楽殺人者だと知つたら、周りの人間は僕にどんな視線を向けるだろう。

きっと恐怖と嫌悪と蔑みと、色々なものが入り交じった冷たい視線を

を向けるんだろ？。

どんな視線を向けられようと構わない。僕の邪魔をしないんなら他人に興味はない。

でも、邪魔をするのなら話は別だ。邪魔するのなら、容赦なく殺す。例え殺し損ねたとしても、いつか必ず殺しに行くよ。

僕は執念深いんだ。

それはそうと、今日はどうしよう？

あまり寝不足気味になるのはよくないし、今日はやめておこうか。今日はやめておいてゆっくり寝て、明日楽しもうか。そうしよう。今日はゆっくり寝て、明日存分に楽しもう。ふふ……なら明日が楽しみだ。

明日はどういう風にいたぶつて痛めつけて殺そつか……？

五限目体育、六限目理解と続き、今日の授業は終わった。

学校にいる時間が一番嫌いだ。吐き気がするほど嫌気が指す。

でも、ちゃんと学校生活を送り、普段の生活を送らなければ人を殺せない。

一度でも怪しまれたら駄目だ。

一度でも怪しまれたら人を殺せなくなる。下手をしたら警察に捕まる。

それだけは嫌だ。何としても避けないと。

今までにはうまくやつてきた。まだこの先何年かは大丈夫だろ？と思う。

でもいつかはここを離れて別の場所を探した方がいい。

いつまでもこの場所で殺戮を繰り返すのは危険だ。

大学を選ぶ時は遠い場所にある大学を選ぼう。

「杜塚？お前何考えてんの？」

薪沢が僕の顔を覗き込みながら訊いてくる。

「大学行くんなら何処の大学行くか考えてた」

「かーーやっぱお前の考える事は俺達と違うねえ！」

そりゃあ違うよ。だつてどうしたら長い間、疑われずに殺戮を繰り返せるか考えてるんだから。

「じゃあ杜塚、俺用事でこっちから帰るから。また月曜に。じゃあな

「うん、それじゃあ

手を降りながら別れる。

そうだ。明日は土曜日。学校等という牢獄に縛られずにする。ふと古本屋が目に止まつた。あの古本屋に行ってみよう。探してた本が見つかるかもしれない。

扉を開き中に入る。古い本も色々置いてある。これは期待出来そうだ。

端から端までじっくり見ていく。

「あ、あつた！」

本を手に取り確かめる。確かにこの本だ。
レジに持っていく。三十代くらいの男が座っている。
代金の三百二十円を払ってわざと店を出る。
よつやく見つけた。

タイトルは世界の殺人鬼。

こういう本は参考になるんだ。人の殺し方について。

今日と明日はこの本をゆっくり読むとしよう。
色々と考えていたらいつの間にか家に着いた。

「ただいま」

「お帰りなさい」

母さんが笑顔で玄関まで出でてくる。

学校から配られたプリントを母さんに渡してリビングに入る。

ニュースが流れている。

田村 光輔二十八歳会社員が行方不明。

田村 光輔……？どこかで聴いた名前だな。

顔写真が画面に写し出される。

ああ……あの会社員、一週間前に殺した会社員だ。

「最近行方不明者多いわね。鼎も気をつけてね」

「うん。気を付けるよ」

でもね、母さん。気をつけるも何も、犯人は僕なんだ。

夕食までの間、買って来た本を読むことにする。

目次を開くと一番目を引くのは切り裂きジャックだ。有名だし。

切り裂きジャックのページを開く。

「…………」

ああ、駄目だ。切り裂きジャックの殺し方じゃ僕は満足出来ない。
確かに腹を切り裂いて腸を引き摺り出したりするのは好きだけど、
いきなり急所を狙つて悲鳴を上げさせない、抵抗さえもさせない殺
り方は、恐怖を味わわせ悲鳴を上げさせたい僕にとっては満足出来

ない。

次を探そう。

ヘンリー・リー・ルーカス……」これは参考になるかもしれない。女を散々犯した後にアキレス腱を切つて逃げられないようにし、車で轢いたり、拳銃で撃ち殺す。

流石に車で轢いたり、拳銃で撃ち殺すことは出来ないけど、犯した後にアキレス腱を切つたことはあるな。アキレス腱どころか、足首を骨しか繋がつてない状態になるまで切り裂いたことがあるし。ディープキスをして舌を噛み千切る。

これは案外したことなかつたな。今度試してみよう。毒殺……はやめとこう。毒殺するのも面白そうだけど、下手をしたら僕自信に危険が及ぶ。

面白半分で使って自分が死ぬとか、間抜けもいいところだ。うん。やめとこう。

「鼎、夕食出来たわよ」

「はーい、今行く」

本を閉じ、見付からない場所に隠す。

一階に下り、リビングに入ると、那奈瀬がテーブルに座っていた。

「あれ、帰つてたの？」

「部屋で課題やつたからな。気付かなかつたんだろ」「さうかもね」

テーブルに座り、ご飯を食べ始める。

「お風呂沸いてるから、『』飯食べ終わったら入つていにがらね」

「うん、ありがと」

ゆつべりー飯を食べる。しばりー飯を食べ終わり、

「『』おやつもでした。じゃあ風呂入つてくわ」

「ゆつべり入つてきてね」

「うそ」

食器を片付けてソビングを出る。

さて、風呂に入ろう。

風呂に入る準備するために一階の部屋に戻る。

タンスの引き出しを開け、寝間着と下着を取り出す。

一階に下り、リビングには入らずに廊下の一番奥にある左の扉を開けると浴室だ。

脱衣室に入り、寝間着と下着を洗面台の隣に置き、服を脱ぐ。

全裸になり脱いだ服を洗濯機に入れ、浴室の扉を開ける。

浴室の温かい湯気が流れ込んでくる。

浴室の扉を閉め、シャワーを頭から浴びる。

シャワーの水が排水口に流れていくのを眺める。血と混ざり、真っ赤に染まったシャワーの水が排水口に流れしていくのを連想する。

いつもするように口の中を洗う。

いつもなら血と水の混ざった味がするんだけど。

シャワーを止め、髪を洗う。髪を洗い終えた後、身体を洗う。最後に顔を洗い、浴槽に浸かる。

浸かりながら浴槽の縁に頭をもたれさせる。

十分程浸かって浴槽から出る。これ以上浸かってたら逆上せる。

浴室から出てバスタオルで身体を拭き、寝間着に着替える。
ついでに歯を磨く。

脱衣室から出てリビングに入る。

「母さんは風呂上がったよ。次誰入るの」

「母さんは後でいいから那奈瀬先に入らせて」

「分かった。言つてくるね」

「うん。お願いね」

一階に上がる。那奈瀬の部屋の扉をノックする。

「兄さん。母さんが先に風呂入つてつて」

「あーい、分かった。ありがとな」

「うん。じゃあ僕部屋に戻るから」

「鼎、今日は夜の散歩はしないのか?」

「今日はしない。寝不足気味になるといけないから」

「これは本当だ。」

「ふーん、そつか。あ、もう戻つていいで」

「うん。おやすみ」

部屋に戻る。ベッドに横になる。今日はこのまま寝てしまおう。
布団を被り目を閉じる。

明日、獲物がどんな恐怖と苦痛に満ちた悲鳴を聽かせてくれるのか
考えると、なかなか寝付けなかつた。
もつすぐ夜になる。

日中は宿題をやつた。一時間程で終わつたから、残りの時間は今日
の殺害方法について考えた。

女ならやはり、犯すのが一番恐怖と屈辱を煽る方法だひつ。
男なら、性器を切り取るのもいい。

まあ、どう殺すかは殺す前に考えよう。

夕食を食べて風呂に入つたら出掛けよつ。

ああ、まだなのに興奮する。

感情も身体もものすごく昂つてきているのを感じる。

ああ、早く恐怖に染まつた顔を見たい。

恐怖と苦痛に染まつた悲鳴と断末魔の絶叫を聴きたい。

あの、滴る真つ赤な血を見たい。

でもまだ我慢だ。今はまだ本当の姿を、快樂殺人者の杜塚 鼎を出
しちゃいけない。

今はまだ、家族の前の杜塚 鼎を演じなければ。

「ふふ……あはは、あはははつ……」

僕の本当の姿に誰も気付かないのが面白くて笑いが込み上げてくる。
ほんの少しいい子を演じるだけで、ここまで誰も疑わないなんて。
皆、表の顔を信じすぎだよ。皆の前で見せる顔だけが全てじゃない
んだ。

皆の前では見せない、自分が知つてている自分の前でしか見せな
い顔が、誰にでもあるはずなんだ。

だから、先生達も同級生も家族でさえも、その人の全てを信じる訳

じゃない。

皆、家族の前で見せる姿と皆の前で見せる姿とは絶対違うんだ。
だから誰も、本当の意味で信じない。

本当の意味で信じられるのは自分だけだ。

「鼎、ご飯出来たわよ」

「はーい、すぐ行くよ」

普段通りの明るい声を出す。

違和感は全くなかった。上出来だ。

一階に下りる。リビングに入ると父さんが暗い顔をして座っていた。

ああ、思い出した。昨日の一コースで失踪と報じられた田村 光輔、
父さんの部下なんだった。

まあ、だからといって罪悪感も感傷も感じないけど。

声をかけづらいからちょっと気まずい顔をする、フリをする。

「鼎、そんな気まずい顔をしなくていいだ。すまないな。気遣わせて
て」

「でも、行方不明になつたの父さんの部下なんでしょう？心配だね。
早く見つかるといいね」

「ありがとな」

ゆっくりご飯を食べた後、風呂に入る。
湯船に浸かりながら思う。

もし、田村 光輔を殺したのは僕だと知つたらどんな顔をするんだ
ろ？。

田村 光輔の殺し方を知つたら、父さんきっと発狂するだろ？な。

だつて、至るところの骨を折り碎いた後に、死ぬまでの間ずっとナイフを何度も何度も身体に突き刺したんだから。

「ふふ……あはは」

獲物が死ぬ瞬間を思い出すと、自然と笑いが漏れる。
さて、上がろう。

素早く身体を拭き、服を着る。
自分の部屋に戻り、ドライヤーで髪を乾かす。
しばらくして一階に下り、

「母さん、気分転換に散歩しに行つてくれるよ」

「あら、こつてらつしゃい。あまり遅くならないようにね。鼎、いつも十一時になつても帰つてこないでしょ?」

「「めんなさい。なるべく早く帰るよ!」

「やつしてね。こつてらつしゃい」

「うふ。こつときます」

玄関の扉を閉める。

家から一步外に出れば、ここからは快楽殺人者の杜塚 鼎の出番だ。
夜は快楽殺人者の杜塚 鼎の時間。

さあ、心置きなく殺そつ。

六月四日 金守 修

えあ、心置きなく殺そう

次は誰にしようか？

君に決めた

君にもう選択肢はないんだ

おとなしく、僕に殺されてもいいよ

君はどんな恐怖と苦痛に満ちた悲鳴を奏でてくれるのかな？

抵抗したらどうなるか……分かるよね？

ふふ、逃げられると思わないでよ

絶対に、逃がさないよ……

獲物を探す前に、獲物を氣絶させるためのバッドを持ってこなーと。
一度廃ビルに戻ろう。

家から廃ビルまでは歩いて一十五分くらいの距離だ。
ちょっとした山の中に廃ビルはある。

回りに建物はなく、全く人気がない。

廃ビルを隠れ家に選んだ日から、この周りを人が歩いているところ
を見たことがない。

だからこそ、廃ビルを隠れ家に選んだ訳だけど。
廃ビルが見えてきた。

扉を開け中に入ると、微かな血の匂いが鼻をくすぐる。

ああ、やつぱりここが一番安心する。一番居心地がいい。

とはいっても、一階はほとんど使っていない。

使っているのは一番奥にある広い部屋と、シャワー室だけだ。

一番奥にある広い部屋に入る。

ベッドと机と椅子があるだけの部屋だ。

この部屋が一番血の匂いが濃い。まあ、この部屋で獲物を殺してゐる訳だから当たり前だけど。

ベッドに置いてある制服に手を伸ばす。

洗いきれなかつた血がたっぷりと染み込んだ制服。

中学生の頃の制服だ。中学生の頃からあまり身体つきが変わつてないから、未だにこの制服を着て殺している。

殺る時は必ずこの制服を着て殺る。

快樂殺人者の杜塚 鼎の正装だ。

壁に立て掛けているバッドを手に持つ。怪しまれるといけないから、

鞄の中に入れる。

さあ、準備は整つた。

獲物を狩りに行こう。

近くの公園まで足を運ぶ。

獲物はすぐ見つかる日と、見つからない日がある。
今日はすぐ見つかった。

トイレの近くで男が三人、楽しそうに話している。

服装、髪型、髪色を見る辺り、どうやら不良みたいだ。

不良なら家にもあまり帰らないだろうし、家族もあまり心配しないはず。

失踪しても気づかれ難いはずだ。

よし、あの三人の中の誰かにしよう。

話し終わるのをひたすら待つ。

早く話し終わつてくれないかなあ。焦らされるのは好きじゃないんだ。

十五分待つてようやく話し終わつて、三人散り散りになる。好都合だ。

誰にしようかな…？よし、真ん中にいた金守 修と呼ばれていた男にしよう。

僕は気づかれないように、金守 修の後を追いかける。

強く吹いた風が、木々を揺らした。

怪しまれないように金守 修の後をつける。

周りに誰もいないか確かめる。よし……誰もいないみたいだね。

鞄からバッドを取り出す。

足音を立てずに金守 修のすぐ後ろに近づく。

そしてバッドを振り上げ

後頭部を殴りつける。

一発で倒してくれて助かるよ。

一発で倒れない獲物が五人に一人くらいはいるんだ。

もう一度殴りつける時、加減を間違えて撲殺しちゃう時があるんだよね。

最近はもうそんなヘマをしないけど、一発で倒してくれた方が助かる。

うまく脳震盪を起こしたみたいで、起き上がつてくる気配はない。

バッドを鞄に直し、金守 修を鞄に詰める。

うまく手足を折らないと、なかなか入らない。

持ち上げてみると案外軽い。

廃ビルまで早足で戻る。

いくら人気がないといつても、万が一ということがある。警戒するに越したことはない。

山の入り口でもう一度周りを見渡す。誰もいないみたいだ。

それからじぎらぐ歩き、廃ビルが見えてきてほつとする。

廃ビルの中に入つて、金守 修を一番奥の部屋に置いてあるベッドに寝かせる。

机の中から縄を取り出す。

今日は……後ろ手に縛るつか。ついでに足も縛る。

さあ、これで準備万端だ。

「ふふ、さあ……楽しませてよ金守 修」

「どうやって楽しもうか？」

楽しむ方法はいくらでもある。

恐怖と苦痛を味わわせる方法はいくらでもあるんだ。

ああ、田玉を抉り出すのはどうだい。

この前田玉を抉り出した風俗嬢は、とてもいい悲鳴を聽かせてくれた。

抉り出した田玉は美味しかったなあ。

金守 修にも同じことをしようか。

とても痛いから、心地いい悲鳴を聽かせてくれるだろつたなあ。わくわくする。

さて、起きる前にナイフを用意しよう。

机の引き出しからナイフを取り出す。

一昨日新しく乾 香織と海洞 捺彦の血を吸つた愛用のナイフ。ナイフを蛍光灯の光にかざす。蛍光灯の光を反射して、鈍い光を放つ。

ナイフの刃先を舐め、

「ふふ……もうすぐ新しい血を吸わせてあげるよ……」

金守 修に視線を戻す。

いつの間にか起きてたみたいで、縄を外そつと躍起になつている。無駄なのに。

「やあ、田が覚めたみたいだね」

ナイフを持つて近づく。

金守 修は怯えた顔で僕を見ている。

「ひつ……来るな、来るなあ！嫌だ、助けてくれ、なんでもするから……」

ああ、この表情だ。余計な感情を全て排除した恐怖の表情。たまらない。ぞくぞくする。

これからどんな悲鳴を聽かせてくれるのか、わくわくする。でも、命乞いは気に入らない。

ざわざわと血が騒ぐ。

ものすごく興奮してくれる。身体も感情も限りなく昂つてくれる。唇が更につり上がるのを感じた。

僕の表情を見て、金守 修は声にならない悲鳴を上げる。ベッドに上り、わざとゆっくり近づく。

金守 修は悲鳴を上げながら、縄をほどいて必死になる。とてもいい反応だ。悲鳴が耳に心地いい。

もつと恐怖に染まった表情が見たくて、わざとベッドにナイフを突き立てた。

「ひつ……ー？」

金守 修は突き立てたナイフを田を見開いて見つめる。

金切り声を上げながら、僕から少しでも離れようと身体を捩る。面白くて頬に指を這わせてみる。

ただ頬に指を這わせただけなのに、磨り潰されるような悲鳴を上げる。

楽しくて仕方ない。

田に手を伸ばす。

ぎゅっと田を閉じられた。

まあ、田に手を伸ばされたら、反射で閉じるのは当たり前だよね。でも、抵抗は気に入らない。

ベッドに突き立てていたナイフを抜くと、柄をしつかり握り、金守修の腕に突き刺した。

「あ、あ、あ、あああ！」

耳に心地いい悲鳴だ。

ナイフを抜くと、思つたより血が溢れ出した。ナイフに着いた血を舐める。

「嫌だ、助けてくれ……死にたくない……」

……そんな命乞い、どうでもいいんだよ。聴き飽きた。お前のその命乞い、あの女に似ててイライラするんだよ。

『嫌……死にたくない……』

ああ、思い出したじやないか！

……駄目だ。あんな女のことを思い出して熱くなるな。冷静になれ。ゆっくりと呼吸を繰り返す。なんとか落ち着いた。ナイフを脇に置き、金守 修の頸を掴む。

右田の瞼を親指と薬指で閉じられないように押さええる。

そこに入差し指を捩じ込み……
ぶぢゅ……

「う、あ、あ、あああああー！」

するり、と田玉を引き摺り出す。視神経らしきものも一緒に出でた。

眼窩から血が垂れる。

それを眺めながら引き摺り出した田玉を口に入れると、

噛むと血が溢れ出してくる。

田玉ってなんだかやで卵の白身の食感に似てる気がする。
しばらく田玉を噛み、「くん」と飲み込む。

案外美味しかった。

金守 修は残った左目だけで、震えながら僕を見る。

本番は、これからだよ……？

わざと頬にナイフをつつ、と滑らせる。

最早、空気が漏れるような悲鳴を上げるだけだ。

さつきから何か言つてゐるけど、何を言つてゐるのか分からぬ。
きつと命乞いだらう。

最初から殺すつもりなんだから助けたりしないよ。

左手を掴み、掌にナイフを突き刺す。

突き刺したまま、ナイフを左右に動かし傷口を抉る。

「あ、あああああー！」

「はは、あはははっ……！」

ああ、楽しくて愉しくて仕方ない。

そろそろ本番といこうか。

金守 修を無理矢理うつ伏せにさせる。

暴れるから首を掴み、強引に力づくで押さえつける。

「嫌だ……死にたくない……助けてくれ……」

「うるさいなあ……少し黙つてよ」

服を切り裂いていく。うつすらと日焼けした肌が露になる。
人差し指で背中を撫でる。

今まで以上に震えているのが伝わってくる。

うつそりと笑う。

ナイフをしつかりと握り、背骨を避けてナイフを一センチくらい刺す。

そのまま腰までゆっくりと切り裂いていく。

腰まで切り裂いて一旦ナイフを抜く。

切り裂いたところから血が背中を伝い、ベッドに染み込んでいく。

切り裂いた皮膚をつまみ、そこにナイフを宛がう。

ゆっくりとナイフを動かし、皮膚を剥いでいく。

ある程度剥いだところでナイフを置き剥いだ皮膚を掴むと、力任せに引き剥がす。

ぶぢぶぢぶぢ……！

皮膚と血管がぶぢぶぢと千切れる音と感触が伝わってくる。
肉の剥き出しになつた背中にわざと爪を突き立て、引っ搔く。
爪の間に肉の破片が入り込む。

そのままにしておくと気持ち悪いから、歯で取り除き飲み込む。
もう悲鳴さえ上げられないのか、痙攣だけを繰り返す。

もうそろそろ死んじやうかもしけないな……。まあいいが。

痙攣するのを眺めながら残りの皮膚を時間をかけてゆっくりと剥いでいく。

「あれ……？」

いつの間にか痙攣どころか、ぴくつとも動かなくなつたのに気がつく。

「おーい、死んじゃつた？」

死んだか確かめるためにナイフを背中に突き立てる。
何の反応も示さない。

「あーあ、死んじゃつたかあ。もう少し楽しむつもりだつたんだけ
ど……まあいいか、楽しめたし……ふふ……あはは、はは……あは
はは、あはははははつ！」

笑いが込み上げてきて仕方ない。

殺した後の興奮とこの上ない快樂と、それらを混ぜ合わせた満足感
がぞくぞくと背筋を駆け抜けて全身に回つていぐ。
しばらくの間興奮と快樂と満足感に浸る。

それらが過ぎ去るのを待つ。

ようやくそれらが過ぎ去つて落ち着きを取り戻す。
ふう、と息を吐く。

ああ、死体処理をしなきゃ。

これくらいなら、すぐ済みそうだ。

一時間かけて死体処理を終わらせる。

死体がなくなつて、僕が殺したという証拠がなくなつてほつとする。
ベッドに座り、壁にもたれる。

身体を見ると全身血塗れだ。

殺す時よりも死体処理をする時が、一番血で汚れる。
頬を触るとぬるとした感触が伝わつてくる。

この感触だ。この感触に全身を包まれてゐる時が一番心地よくて、
気持ちよくて、安心する。

手を天井に伸ばす。気持ちいいくらいの赤が手を包んでいる。手を口に運び、指に着いている血を舐める。

金守 修の血は今まで殺してきた不良の中では一番美味しかった。もう少しこのままでいたいけど、あまり帰りが遅くなつて怪しまれるといけないから、そろそろ血を洗い流そう。

億劫だけど立ち上がる。

立ち上がりナイフを持つてシャワー室に向かつ。

脱衣室に入り、バスタオルと家から着てきた寝間着が置いてあるか確認する。

二つともちゃんとある。

制服を脱ぎ、全裸になる。

洗うために制服とナイフを持ってシャワー室に入る。

洗面器に水を溜め、制服を洗う。血がべつとりと着いていて、水洗いだけじゃ絶対に落ちない。

血が染みついでいる方が好みだから、落ちなくとも別にいいけど。洗い終わって適当に絞り、隅の方に置く。

シャワーを浴びる。ザーッという音と共に血が洗い流されていく。

血と混ざり、真っ赤に染まつた水が排水口に流れしていく。口の中をゆすぐ。血の味も一緒に洗い流されていく。少し残念だ。それでも、今日は嫌な事を思い出したな。

あの女だけは未だに許せない。絶対に許さない。許してたまるか。あれだけいたぶつて痛めつけても、まだ足りないくらいだ。

あつさりと死にやがつて。お前らは僕を騙したくせに。僕の気持ちを弄んだくせに。

まあいいさ。最後は苦しんで死んで逝ったんだから。

まあ、お前にひとつだけ感謝するとしたら、人を信じると馬鹿をみる、人を信じたら裏切られるってことを教えてくれたことに感謝してやるよ。

さて、身体を洗おう。

掛けてあつたタオルを取り、身体を洗う。

しばらくして血がちゃんと落ちているか確かめる。
よし、ちゃんと落ちているみたいだ。
ナイフを洗う。

「ふふ……金守 修で三十三人目…」

そう、金守 修で三十三人目。まだまだ殺すよ。
ナイフの血も落とし、制服をもう一度洗う。今度はきちんと絞り、
シャワー室を出る。

バスタオルで身体を拭き、服を着る。

脱衣室を出て、奥の部屋に戻る。

元々掛けてあつた制服をハンガーから外し、洗った制服を掛ける。
乾いている制服をたたみ、ベッドの真ん中に置く。

ナイフを机に直す。時計を見ると午前二時十八分。
思ったより時間かからなかつたみたいだ。

そろそろ帰ろう。

部屋を出る前にもう一度部屋を見渡す。
染み込んだ血は仕方ないけど、拭き取れる血は一滴残らず拭き取れ
ているみたいで満足する。

さあ帰ろう。

扉を開けると満月が見えた。月は好きだ。特に満月は。
満月を光を浴びて帰ろう。

二十五分かけて家に帰る。

音を立てないように鍵を開け、扉をそつと閉める。
靴を脱ぎ、足音を消して廊下を歩く。

脱衣室の洗面台で歯を磨いた後、部屋に戻る。
午前三時九分。日覚ましを九時に設定する。

布団に潜り込む。
目を閉じる。

夢を見た。

七年前・七月八日 きつかけ

夢を見た

七年前の、僕が快楽殺人者となるきっかけとなつた夢を
きつとほとんどの人間が『こんなことがきっかけとなるのか?』と
思うだらうね

僕にとっては充分なきっかけ

何をするにも、君達にもきっかけがあるはずだよね?

何がきっかけとなるのか分からぬ

何がきっかけとなるのか人それぞれなんだから

七年前の、僕が快楽殺人者となるきっかけの事件の夢を見た。

あの日の事は今でも鮮明に覚えてる。
きっとあの日にあんな物さえ見なければ、僕が快楽殺人者になる事
はなかつたのだと思う。

今更もしも、きつとも、ないのだろうけど。

あの日まで僕もただの子供だったんだ。

自分の中に、どんな闇と狂氣が潜んでいるか知らない子供だったんだ。

自分の中टてどんな闇と狂氣を抱え込んでいるのか気付いていない子供。

あの日はいつもと変わらずに始まった。

あの日はいつもと同じように見せかけて始まつたんだ。

あの日、那奈瀬は友達と遊びに出掛けで、僕は母さんと、母さんの友人の鈴波 璃依と一緒に近くのレストランまで食事しに行つたんだ。

何を食べたかまでははっきり覚えてないけど。

それから公園に行つたんだ。

僕は蝶を追いかけたり、いろんな虫を探して遊んで、母さん達は話に花を咲かしてた。

蝶を追いかけるとか、思い出すとかなり恥ずかしい趣味だ。

まあ、今も変わらないけど。

それは置いといて、蝶を追いかけて、母さん達から見えにくい一番奥の茂みを搔き分けた時だ。

あるものが僕の目に飛び込んできた。

それはあまりにも非現実過ぎて、最初それが何なのか理解出来なかつた。

しばらく動けずにいたけど、やつと脳が理解出来るよくなつて、急いで母さんを呼びに行く。

「母さん、急いでこっち来て！」

腕をぐいぐい引っ張る。

「かなぢやん? じりしたの? そんなに急がなくても…」

「いじからー」

母さんを奥の茂みまで引っ張る。

茂みを搔き分け、あまりに非現実過ぎるそれを指差す。

「母さんあれ、何?」

その瞬間、一人分のひつ、と息を呑む音が聴こえた。
もう一度それに視線を戻す。

そこに無造作に落ちているそれは、女性のバラバラに切断された死体

瞳孔が開きどんよりと濁った瞳が、僕を見ているように感じた。
母さん達が「警察に電話しなきや」と騒いでるのを感じながら、僕は死体にじっと見入る。

なんだらう。あの死体に凄く惹かれる。

心臓がどくどくと激しく脈打ち、呼吸が浅く荒くなつてくる。

今まで感じたことがないほど、興奮してくる。

興奮……?

そうだし、僕はあの死体を見て興奮してる。
だってあの死体から目を背けずに、むしろ惹かれてじっと見入ってるのがその証拠じゃないか。
母さんが僕の前にしゃがむ。

「かなぢやん、可哀想に。怖かったでしょ。でも、あひちに行きま
しよ」

「うん……」

母さんは僕に死体が見えないよう立ち上がり、死体の見えない位置まで手を引く。

ちらりと死体に視線を向ける。

この感情を口に出してはいけない。

一度でも口に出したら、奇怪なものを見る冷たい視線を向けられるに決まってる。

だつてあの死体を見て綺麗だ、と思つたんだから。

。

僕の中ではあん、と何かが音を立てて割れた音がした。

割れたところから、黒くてどろりとしたものが溢れ出してくるのを感じた。

この黒くてどろりとしたものは何？

これは僕の中にずっと潜んでた、僕が抱え込んでた狂氣？

じゃあ、これだけどす黒いのは、それだけ闇の深い狂氣だから？

ああ、そうか。今粉々に砕け散つて割れたのは、この黒くてどろりとしたものを塞き止めておく“壁”だったんだ。

“壁”がなくなつたから、この黒くてどろりとしたものが溢れ出して來たんだ。

塞き止めておくための“壁”がなくなつたんだから、際限なく溢れ出してくるに違いない。

僕の心を狂氣で染め上げようとするに違いない。

僕は、僕の中にずっと潜んでたこの狂氣を暴れださないようこぎつゝ抑え込まなきゃいけないんだ。

じやないとこの狂氣は必ず人に牙を剥ぐ。

僕も、ああいう風に人を殺してみたいと思つたんだから。

しばらくして警察が来て、現場検証が始まった。

サスペンスで見る現場検証そのものだ。

母さんは死体を発見した経緯を警察に話している。
ベンチに座つてそれを眺める。

「鼎君大丈夫？顔色悪いよ」

鈴波 璃依が僕の顔を覗き込みながら訊いてくる。

「うん、大丈夫。おばさんこそ大丈夫？」

「おばさんは大丈夫じゃない。鼎君の方が大丈夫みたい」

そりやあね、大丈夫といえば大丈夫だよ。
だつてあの死体を見て綺麗だつて思つたんだから。
きっとこの感情を誰も理解出来ない。
目の前で警官がしゃがみ込んだ。

「やあ、私は濱沼 えいじ 瑛士つていうんだ。君は杜塚 鼎君でいいかな
？」

濱沼 �瑛士か。年齢は三十代前半に見える。耳くらこの長さの髪に、
誠実そうな顔つきをしている。

「辛いことを訊くけど、死体を見つけた時のこと話をしてくれるかな？」

「あの、僕、蝶を追いかけて遊んでたんです。奥のあの茂みを搔き
分けたら、あの、バラバラの死体が…」

どうしよう。あの死体を思い出したら興奮してくる。興奮して、うまく言葉が話せなくなる。

「『じめんね。もういいよ。それだけ訊けたら十分だから』

俯いて地面をじっと見る。

この人も鈴波 璃依も僕が怖がつてると思つてるんだ。

違うのに。僕はあの死体にどうしようもなく惹かれるんだ。

あの死体を見て人を殺してみたいと思つたんだ。

人を殺してみたいなんて思つちゃいけないのに。

どうしたらいいんだろう。分からぬ。

このままだつたら、僕は狂気に覆い尽くされてきつと人を殺す。

この狂気が暴れださないようにするにはどうしたらいいんだろう。

この狂気が怖い。

「かなちゃん、璃依、警察の人もう帰つていって。そ、帰りま
しょ」

「そうね。帰りましょ。死体がある場所にいたくないわ

僕の目の前に伸ばされた母さんの手を握る。
結局、家に着くまで一言も喋れなかつた。

こんな恐ろしい狂気に気づかなかつたらよかつた。

あの死体を見なれば、こんな恐ろしい狂気に気づかなくて済んだ
のに。

家に着く。

靴を脱ぎソビングに行こうとしたら、

「かなちゃん、大丈夫？夕食まで部屋で寝てきたらっ・夕食になつた
ら起こしてあげるから」

別に眠くはないけど、一人になりたい気分だから母さんの言つ通りにする。

「うん。じゃあ、部屋で寝とくね

「夕食には起こすからね」

「うん。ありがと」

二階に上がり、自分の部屋に戻る。扉をぱたんと閉め、ベッドに倒れ込む。

仰向けになり、手を天井に伸ばす。
なんだか疲れた……。

それなのに興奮がまだ收まらない。

これからどうしたらいいか考えないと。
この狂氣は押さえつけて溜め込んでいくのは危険だ。
かといって発散させることも出来ない。
まあ、考える時間はいくらでもあるか。
なんだか眠くなってきた。
目を閉じる。

「ん……」

窓から射し込んでくる朝日が眩しい。

布団を頭まで被つて目が光に慣れるのを待つ。
数分してやっと目が慣れてきて、何時だらうと思つて時計を見る。
午前六時八分。

今日が日曜日であることを考へると、起きるにはかなり早い時間だ。

九時まで寝ておこつ。

ふと、夢の内容を思い出す。

「珍しいなあ、七年前の夢を見るなんて……。そういえば僕、最初は人を殺すことが怖かつたんだっけ……？」

今となつては、なぜ怖かったのか全く分からぬ。理解出来ない。一度でも人を殺したら狂氣を止められなくなるから？
警察に捕まりたくなかったから？

別にどうでもいいや。過去のことなんて振り返つたってどうにもならないんだから。
もう一度寝よう。
目を閉じる。

今度は夢を見なかつた。

六月五日 表日常

そつか、今日は那奈瀬の誕生日なのか
忘れてたよ

はつきり言つて家族の誕生日だらうが興味ないんだけどな

仕方ないか……

安眠を妨害する目覚ましのけたたましい音がする。
気持ちよく寝てたのに。目覚ましを黙らせる。

それにしてもう九時か。

欠伸を繰り返しながらベッドから出る。

カーテンを開け、窓を開ける。

六月にしては冷たい空気が入り込んでくる。

ぼ～としながら、しばらく冷たい空気に当たる。

なんとか目が覚めてきた。着替えよう。

タンスを開け服を出す。

寝間着を脱ぎ、黒のTシャツにGパンとお決まりの服に着替える。

お決まりというか私服とつたら、黒のTシャツにGパンしか持つてない。

選ぶのもめんどくさいし、黒は好きだから他の服なんかなくても充分だ。

お洒落だかなんだかに時間を割くなんて、気が知れない。

一階に下り顔を洗い、リビングに入る。

「おはよー、母さん」

「おはよー。今日は何の日か分かる?」

母さんが嬉しそうに話す。母さんがこいつ風に訊いてくるつてことは、今日は何か特別な事がある日つてことだ。

今日は何があるんだつけ……?

あつ……。

「兄さんの誕生日だ……」

やつぱりと、母さんは嬉しそうに笑う。

「やつ、今日は那奈瀬の誕生日よ。今日夜の予定はなにわよね?」

「ないよ。大丈夫」

「今日母さん頑張るわよ。鼎も楽しみにしてね」

「うん。楽しみにしてるよ」

ああ、今日は那奈瀬の誕生日なのか。

はつきり言って家族の誕生日だろうが興味ないんだけど。そもそも他人に興味ないんだ。興味があるのは自分だけ。

今日も獲物を狩るつもりだつたんだけど、仕方ないか。今日はやめにしよう。

表面上だけは祝つてあげるよ。

夜になるのをひたすら待つ。

それにしても誕生日か。

誕生日なんて祝つことに意味はあるのかな。僕には誕生日を祝う意味が分からぬ。

生まれた日を祝つてどうするんだろう。

本当にただ、その日に生まれたってだけじゃないか。

自分の誕生日ですらどうでもよくて忘れてる時があるの」。

まあ、気持ちとしては祝つつもりは更々ないけど、家族の前の杜塚 鼎を演じなきゃならないんだから、表面上だけは祝つてあげよう。

はあ……めんどくさい。

思つてもないことをいつも以上に偽つて言葉にしなきゃならないのか。

まあいいや。

時計を見る。もうもうもう母さんが呼びにくる時間だな。

「鼎~、下りてきて。出来たわよ

「はーい」

さて、めんどくさいけど家族の前での杜塚 鼎を演じよう。リビングに入る。

母さん本当に頑張ったんだな。普段食卓に出ない物がたくさんある。那奈瀬は先に座つて、座るよつに手招きしてくれる。

「鼎やつと座れよ。今日は食べるぞー」

「うん。母さん本当に頑張ったんだね」

「せりやあそりよ。年に一度しかない大切な日なんだもの。父さんいなのは残念だけどね」

そつか、父さんは今日出張なんだつけ。

「ま、父ちゃんは仕方ねえよ。父ちゃんの分まで俺が食べるから心配しなくていいって」

「あら、太るわよ」

「太る料理作つてんの母さんだけ」

「嫌なら食べなくていいわよ~」

「いや、食べさせていただきます」

一人の会話を聴きながら笑う。勿論表面上だけ。

その日は最後のしめに、ケーキを食べて終わった。

さあ、言つていらっしゃよ

骨を折られるなら何処がいい?

右腕? 左腕?

指を一本づつ折っていく?

右足? 左足?

それとも肋骨?

君は何処から折られたい?

「終わつた……」

やつと学校が終わつた。これで牢獄から解放される。
清々しい気分だ。

「杜塚へ、帰るつぜ」

「悪いけど、今日は用事があるから一人で帰るよ」

本当は用事じゃないけどね。

薪沢は見るからに残念そうな顔をする。相変わらず表情豊かだね。
僕には無理だよ。

「うー、そつか。じゃあ仕方ねえか。んじゃまた明日」

「じゃあね

薪沢が手を振つてきたから僕も振り返す。
さて、駅まで行こう。

駅に着く。下校時間とあって駅構内は学生で溢れてる。
さて、どちらに行こうか。

右に行くとホテルや高層ビルが多い。

左に行くと住宅街。

右に行こう。もしかしたら格好の獲物候補が見つかるかもしれない。
信号を右に曲がる。あまり歩かない内に、高層ビルやホテルが多く
なる。

勿論、高校生の姿はない。こんな所に用のある高校生なんていない
だろ？。

の、はずなのに、三十代くらいの男と一緒に歩く女子高生を見つけ
た。

なんだか見覚えがある。

「あれは……如月 薫……？」

きわいわ
かおる

そうだ。クラスは違うけど、同じ一年の如月 薫だ。
どうして三十代くらいの男と一緒に歩いているんだろう。
父親とか？違うか。親子なら顔が似てなさすぎる。なら、恋人？だ
としたら結構年離れてるな。

それか……援助交際？……可能性はあるな。

一人には見えない位置で、一人を観察する。

楽しそうに話ながら周りを気にし出す。

周りに誰もいないことを確認したのか、如月 薫は男の首に腕を回し、顔を近づける

ああ、それ以上はやめる。

見たくないのに、目が釘付けになる。

二人の顔が近づき、そして、唇を重ね合わせた

それから長い間、お互いの唇を貪るような口付けが続く。ようやくお互いの唇を離す。

そして男は鞄から財布を取り出し一万円札を一枚、如月 薫に手渡した。

ふーん……、やっぱり援助交際なんだ。これからラブホテルでも行つて本番か？

毎日違う男と寝てるのかな？

だとしたら何日か尾行でもしようか。

どうなるのか楽しみだ。今日は帰ろう。

午後九時三十六分。僕は薄暗い自分の部屋で写真を眺める。写真といつてもただの写真じゃない。如月 薫のように尾行して、不倫現場や援助交際の現場を収めた写真。

如月 薫は明日から尾行して写真に撮るけどね。

ふふ……楽しみだ。

もうひとつ、机からある物を取り出す。

僕の餌食となつた獲物達の免許証や保険証。学生証もある。

獲物の身元を証明する物を集めるのが好きなんだ。言わばコレクションだね。

たまに免許証も保険証も持つてない獲物がいるけど、その時は仕方ないから諦める。

獲物が持っていた鞄や鞄の中に入っている物は、近くのマンションのごみ捨て場に他のごみと混せて捨てる。まあ、現金はもつたいないから貰っていくけど。

免許証や保険証を見ていく。たまにこんな人間殺したつけ?と疑問になる獲物がいる。免許証がここにあるんだから殺したんだろうけど。

一通り見て、ゴムで束ねて机の引き出しの奥に隠す。

写真は、少し分厚い本のページを真ん中だけくり貫いた中に収め、本棚に直す。

僕の部屋に人が入るのはあまりないけど、見つかり難いように用心するに越したことはない。

もう一度引き出しを開け、デジカメを取り出す。

デジカメを学校指定の鞄に入れる。

ふふ……明日はどんな写真が撮れるかな……?

でも、僕は本当は不倫や援助交際をする人間が一番嫌いなんだ。許せない。

理由? 理由は追々分かるよ。

不倫や援助交際をしてる人間はどんな理由であれ、どんな人間であろうと真っ先に殺したくなる。

だから如月 薫も最後まで付き合つてもうりつよ。

さて、今日はもう寝よう。

電気を消し、布団に潜り込む。

目を閉じる。

今日は早く起きて早めに学校に来た。

如月 薫のロツカーガどこか知るためだ。

ロツカーガ近くで怪しまれないように如月 薫が来るのをひたすら待つ。

なかなか来ないな……。もつ八時二十五分になるべく。
ほとんどの生徒が教室に戻り始めてるのに。

おや……？ やつと来た。

さあ、君のロッカーの場所を僕に教えて？

如月 薫は慌てて上履きに履き替える。

ふーん……右から八番目、下から三段目が君のロッカーか。
ちゃんと覚えたよ。

楽しみにしてよ。君に恐怖をプレゼントしてあげるから。
さて、教室に戻ろう。

「杜塚、何処行つてたんだよ」

「別に。少しごらりごらりただけ」

「これで学校での準備は出来た。
くすくす……楽しみだ。」

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。
ふふ……学校を一步でも出たら始まりだ。

「杜塚～、また明日な」

「うふ。じゃあね」

薪沢には今日も用事があるからと言つてある。
教室を出て如月 薫を探す。

いたいた……

前からちょうど如月 薫が教室から出てきた。
目の前を通るけど、素知らぬ顔ですれ違つ。

後を付ける。

見失わないように注意して靴に履き替える。

もう少しで学校の敷地を完全に出る。

学校さえ出てしまえば、僕にとっては無法地帯も同じ。好きなように行動出来る。

さあ、始めようか。

如月 薫。

如月 薫の後を怪しまれないように付ける。
付かず離れずに。

僕の尾行に全く気付いてないみたいだ。

駅を通りすぎ、昨日と同じビルの密集地に入る。

あるビルの前で立ち止まつた。

僕も木の影に隠れて立ち止まる。

あそこで男と待ち合わせかな…？

如月 薫は人待ちが嫌いなのか、イライラとした様子で頭を搔く。
デジカメを取り出し、電源を入れる。

五分ほど経つて、一人の男が如月 薫に近づく。昨日の男とは別の男だ。

四十代くらいの男。

如月 薫は男に気付くと、イライラした様子は微塵も見せずに男に笑顔で手を振る。

如月 薫は男の首に手を回し口付けを交わす。

その様子をデジカメに収める。

口付けが終わると男は一万円札を四枚、如月 薫に手渡した。

その様子もデジカメに収める。

それにもしても、よく四万も手渡すな。その前に、援助交際なんかしている女なんか、よく抱けるよ。抱く男の気も知れない。

そんな腐敗した身体なんか抱いたら、こっちまで腐る。

ふん……まあ、抱きたい男は抱けばいいや。僕の知ったことじやない。

如月 薫と男が歩き出した。僕も追いかける。

きつとラブホテルだらうな。

しばらく歩いて一人であるホテルに入つていぐ。

入つていくところもデジカメに収める。

ホテルの看板を見ると【ハルマゲドン】と書いてある。

ハルマゲドンって確か、新約聖書ヨハネの默示録にある、善と惡の最終戦争じゃなかつたつけ？

何を思つて店名にしたんだる。

まあ、ラブホテルでこれから本番つてことは、少なくとも二時間は出でこないだろうな。下手したら一晩中。

今日はこれで打ち止めにしよう。そこまで待つほどい、僕は気が長くないんだ。

帰ろう。

午後十時一分。いつものように薄暗くした部屋で、デジカメで撮つた写真をパソコンで確認していく。

ふふ……よく撮れてるみたいだ。
これをプリントアウトしよう。

サイズを写真サイズにして、印刷ボタンを押す。
印刷し終わつて仕上がりを確認する。

本当によく撮れてる。満足いく仕上がりだ。
写真を封筒に入れ、鞄に入れる。

ふふ……本当に明日が楽しみだなあ。

待つててよ、如月 薫。お前に相応しい恐怖をプレゼントしてあげる。

さて、寝ようか。

おやすみ。

今日も早くに起きて早めに学校に来た。
封筒の中身をもう一度確認する。

昨日撮つた写真が間違いなく入つてる。

周りに誰もいないか確認する。

誰もない。やるなら今だ。

如月 薫のロッカーを開ける。なんだこの上履き。興味なくて見てなかつたから分からなかつたけど、ポスカか何かで派手に落書きしてある。

正直こんな風に落書きする神経が分からない。上履きの生地は白だからいいんじやないか。

まあそんなことは置いといて、封筒を鞄から取り出す。
封筒を上履きの下に置ぐ。上履きの下に置いておけば、否応なしに気づく。

ロッカーを閉める。

ふふ……これを見て、どんな表情を見せてくれるかなあ？

如月 薫が来るのを待つ。やつぱりなかなか来ないな。
まあいいさ。いくらでも待つよ。見たい表情を見せてくれるまでは。
期待通りの表情を見せてくれるかな。
もうすぐ八時二十五分になる。

ああ、来た来た…。

如月 薫は慌てた様子でロッカーを開け、上履きを取り出す。
封筒が床に落ちた。

如月 薫は封筒を手に取り、中身を見る。
ああ、この瞬間がたまらないんだ。

早く見せてよ、恐怖の表情を。

中身を見た如月 薫は驚いた表情をした後、封筒を取り落とした。
落とした拍子に、写真が地面に散らばる。

如月 薫は写真を見られまいと必死に掻き集める。

写真を拾い終わって立ち上がりつた時、如月 薫は恐怖の表情を滲ませていた。

ああ、その表情が見たかつたんだ。

ふふ、誰かに見られてる気分はどうだい？

まだまだ、こんなものじゃ終わらせないよ。

もっともっと恐怖をプレゼントしてあげる。

この後、如月 薫はどんな行動を取るのかな。

全部僕が見ててあげる。

本当に楽しみだなあ。

ふふ……。

学校が終わって、尾行を開始する。ざつやからビルの密集地に行くみたいだ。

あの写真を見たばかりなのに、今日もやるのか？

如月 薫が昨日と同じ場所に立ち止まる。

僕も昨日と同じ木の影に隠れて監視する。

しばらくして男がやって来た。また別の男。

神経疑うよ。あの女どんな神経してるんだ。

また見られるかもしれないとは考えないのか？

僕だったら絶対無理だ。

しかも、口付けの瞬間や現金の手渡しの瞬間をその場所で撮られたっていうのに、堂々とやってのけるなんて。

今日も撮らせてもらつたよ。

ラブホテルに入るところまで一部始終撮つたよ。

ふふ、これで十分。

明日も楽しみにしててよ。

薄暗くした部屋で、今日撮れた写真をプリントアウトしていく。

ふふ……今日もよく撮れてる。

いきなり、部屋の扉が開いた。

「鼎、母さんが風呂入れつて」

「分かった。ありがと」

「じゃあ、俺寝るわ。おやすみ～」

「おやすみ」

扉を閉め、那奈瀬の姿が見えなくなる。
危なかつた。

シャツを捲り、背中からベルトに挟んだ写真を出す。
本当に危なかつた。隠すのが後一瞬でも遅れてたら、見られるところだつた。

見られたら言い訳出来なくなる。
写真を封筒に入れ、鞄に入れる。
明日も楽しみだ。

さて、風呂に入ろう。

今日も八時二十五分まで如月 薫を待つ。

しかし昨日はあの写真を見た後で、あの男とやつたのか? だとしたらいろいろんな意味で神経図太いな。

まあ、いくら図太くてもああいうことをしたら流石に神経参るだろうね。

楽しみだな。

あ、来た。

ロッカーを勢いよく開ける。そして手が止まつた。

封筒を開け、恐る恐る中身を見る。

表情が変わつた。驚いてる驚いてる。

まさか本当に今日は入つてないと思つたのか?

こんなところでやめるはずがないじゃないか。

世間一般ではこういうのをストーカーって言つんだっけ? 僕はああいう女が嫌いだからやつてるんだけど。嫌いだからこそ、楽しい。

如月 薫がキヨロキヨロと周りを見る。

誰もいないとみたのか、封筒をごみ箱に乱暴に投げ捨てた。

忌々しげに封筒を見つめ、唾を吐きつける。

酷いじゃないか。折角綺麗に撮れたのに。

ああでも、勿論恐怖の表情の方が見たいけど、忌々しげなあの表情も面白いかも。

さて、流石にそろそろ教室に戻ろう。

「なんだ、今日も用事か。杜塚そんなに毎日何してんの？」

「調べもの。色々と調べることがあるんだ」

勿論、嘘だ。

「ふうん。ま、頑張れ。俺は気楽に学校生活を送る」

「じゃあ、僕は行くよ。また明日」

「おー、調べもん頑張れ」

教室を出て如月 薫が出てくるのを待つ。

今日はどんな行動を取るのかな？そろそろ流石に恐怖を感じる頃のはずなんだけど。

ふふ、浮かない顔をして出てきた。

お前のその顔が見たかったんだよ。

今日もお前の行動を一部始終見ててやるよ。

尾行を開始する。やっぱりビルの密集地に行くみたいだ。

でも、流石に警戒してると、昨日と違う場所を歩く。

なるほど、さつきの電話は男に落ち合つ場所の変更を連絡してたのか。

如月 薫が立ち止まる。

僕も、建物の影に隠れる。

デジカメの電源を入れる。

男が来た。どうやら最初に見た三十代の男みたいだ。
あんな女なんかによく金を渡してセックスなんてやるな。

考えただけで吐き気がする。

おや……ふーん……流石に学習したんだね。

周囲を気にしながらラブホテルに行く道を歩く。
不安そうに周囲をキヨロキヨロしている。

ふふ、その不安そうな表情が僕を興奮させるんだ。

五分程歩いてラブホテルに入る。

へえ、金の手渡しはラブホテルでやるんだ。

写真を撮られないための対策のつもりかなあ？

そろそろ追い討ちをかけようか。

写真の比じゃないよ。別にお前が行動するのを待つ必要はないんだ。
完全に僕が主導権を握ることになる。

そして如月 薫、お前は僕の影に怯えるがいいぞ。
早めに家に帰つて準備をしよう。

これからが本番だよ、如月 薫。

「なあーんだ、学校も携帯会社もセキュリティって甘かつたんだ。
こんなに簡単に入り込めるなんて」

学校と携帯会社、両方から如月 薫の個人情報を探し出す。
つまりはハッキング。

ついでに言うとハッキングした事実が発覚してもいいように、家からじゃなくネットカフェからハッキングしている。
指紋も採取されてもいいように革手袋をしている。

あ……やつと見つけた。如月 薫の住所と携帯番号とメールアドレ
ス。

へえ、如月 薫って僕の住所の近くに住んでるんだ。

ハッキングなんてしなくて、もっと簡単な方法があつたと思つけど、ハッキングした方が面白い。

如月 薫の個人情報を携帯に保存していく。

さあ…準備は整った。

始めようか。

今まで以上の恐怖をお前にプレゼントしてやるよ。

ふふ…始めよ。

保存した如月 薫の携帯に電話する。

……なかなか出ないな。男とやつてる最中なのか？
あんな不安そうな表情しておいてよくやれるな。

お前には金と性欲しかないのか？

これ以上僕をイライラさせるなよ。

『もしもし、だあれ？』

やっと出た。出るのが遅すぎるんだよ。イライラさせやがって。
まあいいさ。電話に出たんだから。

『もしもし？誰つて訊いてんだけビ』

何も喋らない。喋るつもりはない。

『あなた誰よ。切るわよ？』

そろそろ本当に切るな。切られる前に僕から切る。
さて、次はメール。

僕は見ているぞ

これで送信。ふふ…どんな表情でこれを見るのかな？
ちなみにこの携帯は僕のじやない。

如月 薫が警察に行かないとも限らない。携帯の電波で発信地や誰

の携帯なのがが分かるつて言ひつし、用心するに越したじことはない。

この携帯は最近僕の餌食になつた金守 修の携帯。
他人の携帯を使えば僕が疑われることはない。
もつ一度メールを送りつ。

僕は見ているぞ。今日の相手の三十代の眼鏡をかけた男とは何回目？

ふふ、如月 薫も流石にこれをずっとやられたら参るかなあ？
これをやって参らなかつた獲物はいなかつたけど。

そういえば、一年半前に不倫現場を尾行した主婦は面白かつたなあ。
ポストに不倫写真を入れたら、夫が不倫写真を見て夫婦喧嘩が始まつたんだ。

僕は庭に潜んで、夫婦喧嘩の一部始終を眺めてたんだ。結局その夫婦は離婚したけど。

その後、僕がその主婦をどうしたか、分かるよね？

どうしたかは君の想像に任せよ。

さてと、そろそろ出ようか。用事は済んだし。

受付に行き、料金の千五百円を払う。

外に出て時計を見る。十時三十六分。思つたより時間経つてないな。
もう一度電話してみようか。携帯をポケットから出し、如月 薫の番号を押す。

.....。

やつぱりなかなか出ないね。今度は電話に出ないつもりかな？
そつちがそのつもりなら、僕もお前が出るまでかけ続けるよ。
もうそろそろ一分は経つかな。やつと出た。

『もしもし...?』

はは、声が震えてる。なんだ、まだ始めたばかりなのにもう怯えて

るの？

お前はやり甲斐がありそうだよ。

『もしもし…、誰よ、あんた誰なのよ』

勿論、答えない。

そんなこと聞いて答える馬鹿はいないと思つけどね。

電話を切る。そしてメール。

ねえ、今日の相手の三十代の眼鏡かけた男とは何回目？…いつも何万もひつてるの？

ふふ…これを見てどうこう行動を取るのかな。
これでまだ男とやれるような、相当神経図太いけど、今の様子からいつたら無理そうだね。

金だけもらつて家に帰るんじゃないかな。次の約束をして。
そんな気がするよ。

そうしてくれたら嬉しいんだけどね。
とりあえず家に帰つて次の準備をしよう。

「ただいま」

「お帰り～」

リビングから那奈瀬の声だけ聴こえてくる。

そつか…母さんと父さんは演劇見に行つてるんだっけ。

「鼎、『』飯いいのか？」

「後で食べるよ。ちよつと仕上げなきゃいけない物があるんだ」

「そつか。頑張れ！」

自分の部屋に入り、扉を閉める。
パソコンの電源を入れる。如月 薫の写真が保存してあるファイルを開く。

全ての写真をプリントアウトしていく。

全部で三十八枚。少し大きめの封筒に入れる。
さて、明日どうなるかな。

楽しみだな。僕は今、如月 薫の家の前にいる。
ちなみに今は午前七時十八分。今日は六時に起きたんだ。このため
に。

写真の入った封筒を出す。これを見て喜んでくれるかな。
封筒を如月家のポストに入れれる。

誰が最初に封筒の中身を見るかなあ？

母親とか父親なら面白いのに。

楽しみだな。本当に。

ふふ……。

建物の影に隠れて如月家の様子を観察する。

まだ誰も出てこない。

朝の支度で忙しい時間帯だから仕方ないか。

あ……やつと誰かってきた。

なんだ……如月 薫か。母親か父親を期待したのに。

それより、やっぱり家に帰つてたんだね。

如月 薫がポストを開ける。

なんだか残念。母親か父親が写真を見つけて如月 薫を問いただす
画を期待したのに。

まあ、仕方ないか……。諦めよつ。

如月 薫の手が止まる。恐る恐るポストに手を伸ばす。

ふふ、写真の入った封筒を見つけたみたいだね。あれは間違いなく写真の入った封筒だ。

恐る恐る中身を見る。

あ、封筒を服の中に隠した。家族に見られないため？ 憂く不安そうな、怯えているような表情をしている。ああ、ぞくぞくする。その表情がたまらないんだ。もう少し、付き合つてもらひよ。

如月 薫。

さて、早速メールだ。

今の行動が簡抜け、なんて君なら怖いでしょう？

[写真どうだつた？綺麗に撮れてたでしょ？？？ そういうえば服に隠してたね。家族に見られないため？ 家族は知らないの？ 援助交際していること。何も知らないなんて可哀想だね。君の両親

送信。

これを恐怖に怯えながら見るのを期待するよ。それはそうと如月 薫、学校に行くかなあ？

行つてくれなきや困るんだけど。

時計を見る。七時四十六分。もう少しだけ待つか。十分ほど待つて如月 薫が出てきた。

ああ、本当に僕を興奮させる表情をしてるよ。そのまま壊して壊して、壊し尽くして殺したくなる。でも、お前があの女に似てないとは限らない。今までの行動は、あの女に似てる。

これで喋ることまで似てたらどうしようかな。壊す前に、怒りに任せて殺しちゃうだろ？ 別にそれでもいいけど。

さて、如月 薫の姿は見えなくなつた。

学校のロッカーに写真が入つてなくてほつとするかな？

ふふ、今日はロッカージャなくて、お前の家のポストにもう一通、封筒を入れておくよ。

もう一通入れておけば、お前の両親が見つけるだろ？
見つけたら、両親はどう思つかなあ。お前を問いただすかな。
それは学校が終わった後、ここに来れば分かる。

ぜーんぶ、見てやるよ。

一部始終、ね……。

さぞや、見物だらうなあ……。

授業終了のチャイムが鳴り響く。

ふふ、今から面白いものが見られる。
どんな画が見られるかなあ……。

「杜塚、お前楽しそうだな。何かあったのか？」

「もうすぐで調べものが終わって完成するんだよ」

「何が完成するんだ？」

「それは秘密」

「ふーん、ま、いいけど。頑張れ」

「ありがと」

薪沢と別れる。さて、如月 薫だ。

ああ、今朝よりはほっとした表情をしてるなあ。でも、家に帰つたら地獄が待つてるよ。

地獄を作つたのは僕だけど。

自分の娘が援助交際をしてるなんて知つたら、どう思つだろ？
僕だつたら許せないな。相手の男皆殺しにするね。

ま、僕が恋愛して結婚して子供を作るなんてあり得ないから、想像すること自体無意味だけど。

おやあ、今日はおとなしく家に帰るんだ。

僕としては好都合だけど。

家族はどんな顔をして如月 薫を待つてゐるのかな?
今日も男と寝てるのか、とか心配してゐるのかな?

如月 薫が家の中に入る。

姿が見えなくなつたのを確認して、如月家の前に立つ。
さあ、お楽しみはこれからだ。

家中中、どうなつてゐるかな。

庭の方に回る。これくらいの塀なら飛び越えられそうだ。
周りに誰もいなか確認する。誰もいないね。

塀から少し離れる。助走をつけ、塀を飛び越える。

あまり音を立てずに静かに着地出来て満足する。

ここら辺の家は木とか隠れる場所が多くて助かる。

さて、家の中の様子がよく見える場所はどこかな。
ここならよそうだ。木の側に背の高い植物が密集していく、隠れるには最適。

見つからないように背を低くして、家の中を観察する。

ああ……やつてるやつてる……。

言い争つてる。窓が閉まつてゐるから、何を言つてゐるのか聴こえない
けど、僕がポストに入れた写真を母親が如月 薫に見せながら、問
い詰めてる。

見ていて凄く楽しい。如月 薫のあの泣きそうな表情、ぞくぞくす
る。たまらない。

必死に言い訳しようとしてるけど、写真に写つてゐるのは紛れもなく
自分自身なんだから、言い訳出来ないよねえ。

あははははっ！本当に楽しいよ、如月 薫！

本当に楽しくて愉しくて仕方ない！

このまま壊して殺してしまいたいけど、まだ我慢だ。

まだ最後の仕上げが残つてゐる。
さて、と……そろそろ帰ろうか。

見つからないように氣をつけながら木を上り、塀の外へ出る。
誰にも見られていない。

「ふふ……はつ……あはは、あはははははつー。」

小声で笑う。

本当にいいもの見させてもらつたよ。人の家の不幸は見ていてたまらない。

本当にたまらないよ。楽しくて楽しくて飽きない。
すごく、愉快だ。

ふふ……明日、最後の仕上げをしよう。
今日はその準備。

本当に楽しくて愉しくて興奮が収まらないよ。
ふふ……最後の仕上げだ。

写真をプリントアウトして、封筒に入れる。
そして明日、ある所のポストに入れる。

これが終わつたら、いよいよ本番。一番の楽しみ。
壊して、殺そう。

最終的には、殺すことが一番の楽しみなんだ。
今までのは余興。

ああ、楽しみだなあ。如月 薫はどんな悲鳴を上げて、鳴くんだろ。

そうだ、電話してみようか。

何を言うのか面白そうだ。

携帯を取り出し、如月 薫の番号に電話する。

『もしもしし…』

案外早く出たね。しかも涙声。泣いてたのかなあ？

『もしもし…あんた、写真を入れた奴…？なんであんなことするのよ…家族にはバレたくなかつたのに…』

援助交際なんかするお前が悪いんじゃないか。
家族にはバレたくなかつた？都合のいいこと言つなよ。
まだ何か言おうとしたから、電話を切つた。
まだあんなこと言つなら鬱陶しいから。
メールにしよつ。

家族にはバレたくなかつた？随分と都合のいいこと言つね。援助交際なんかするお前が悪いんじやないか

おや、返事が帰つてきた。

私が援助交際しようとして、あんたには関係ないでしょ！

ふーん、そう来るか。
確かにそうかもね。でも、

僕の目についたのが悪かつたんだよ。御愁傷様

送信。電源オフ。

そういうえば、封筒をあそこに入れて警察沙汰になつたら、指紋採取つてするのかなあ？

警察沙汰になるか疑問だけビ。

一応写真も封筒も、指紋を拭き取つておいつ。

革手袋を嵌めて指紋を拭き取る。

これくらい拭き取れば大丈夫だろつ。

「写真を封筒に戻す。

さあ、明日は最終劇だ。

学校に来た。今の時間なら教師もまばら。

やるなら今だ。

革手袋を嵌め、封筒を取り出す。

封筒を学校のポストに入れる。

ふふ……これを教師が見たら、如月 薫どうなるかなあ？

良くて謹慎処分、悪くて退学処分だろうなあ。

まあ、学校も悪い評判立たしくから、警察には言わないか。心配する必要なかつたかな。

学校も所詮そんなもの。

さて、と……後は教師が如月 薫を呼び出すのを待つだけ。

謹慎処分か退学処分、どちらになるかな？

「やつやら如月 薫は家に帰されたみたいだ。

一限田が始まる前に荷物を持って帰ったから。
謹慎処分か退学処分、どっちになつたのかな。

まあ、電話をすれば分かることだから、焦らなくてもいい。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴つた。

今日は掃除当番じゃないからすぐ帰れる。

「杜塚、なんか楽しそうだな。この前言つてたやつ、完成したのか
？」

「まだだよ。でも、明日には完成するんだ。だから楽しみなんだよ
」
「やつか。じゃあ明日までは一人で帰るのか。終わつたら俺に付き
合えよ」

「分かつてるよ。じゃあ

「おー、じゃあな」

薪沢に手を振り、わざと学校を出る。
しばらくして、携帯を取り出し如月 薫に電話をかける。
「おや、すぐ出た。

『なんてことあるのよー』の変態！ストーカー…おかげで退学にな
つたじゃない。』

へええ、退学処分になつたんだあ。

よかつたよ。最悪な結果になつて。謹慎処分じゃやつぱみつ面白くないから。

『なんか言いなさいよー。なんで「こんな」とかあるのよー。』

なんで「こんな」とするのかつて？

お前が援助交際なんかしてるからだよ。
僕の目についたのが運のつき。

『酷いわよー私になんか恨みでもあるのー？』

酷いって？何が酷いんだ。やるなひととひとをやるよ。ヒトと不幸に貶めてやるよ。当たり前じやないか。

電話を切る。

明日の夜十時に大駿公園おおぶくちに来い。そしたら教えてやんなよ
六月十一日　如月　薰

ふふ、君はこい悲鳴を聽かせてくれるね

すいじへ興奮するよ

もつといだぶりたくなる

うん？何を言つてこらのかよく分からない

もつといだり言つてよ

ああ、でもそんな酷い状態じゃ、まつきり声なんて出ないか

ほら、耳を近づかせてあげるから言つていらっさよ

何？助けて？

何言つてるの。助ける訳ないだろ

君は僕の玩具として死ぬんだよ

まだ死なないでよ。まだ楽しむんだから

もつといたぶつてあげる

君は分かつてないなあ……

そんな恐怖と絶望が入り交じった瞳が、更に僕を興奮させるんだよ

僕を興奮させる君が悪いんだよ

もつと悲鳴を上げさせてあげるよ……

後四十分で十時になる。今日は十曜日。
今までゆっくりしてた。

如月 薫、公園に来るかなあ？

来るよね、必ず。

どうやつていたぶつてあげようかなあ……？
どんな悲鳴を上げるのかなあ。

想像するだけで興奮する。

ああ……、本当に興奮してきてたまらない。身体がものすごい昂

つてきてる。

このまま絶頂まで達しそうだ。

世間の人間には理解出来ないかも知れないな。

いたぶつて殺すことが性的興奮でもあるなんて。

だつてほら、ただ想像しただけでこんなに勃起してる。

少し触つただけでかなりぞくぞくくる。

誤解のないように言っておくけど、いくら僕でも援助交際してる女なんか犯したくない。

興奮するといつても、殺人という行為に対して性的興奮を覚えるんだ。

死んでもあんな女なんかに、性的興奮なんか覚えてたまるか。
さて、そろそろ家を出ようか。

引き出しからスタンガンを取り出す。

いつもと違つて不意をつけないから、機動性を考えて今日はスタンガンを使おう。

人を氣絶させるに十分な電圧に設定する。

スタンガンをポケットに入れ、玄関に向かう。

「あら、鼎今日も散歩?」

「うん。行つてくるね」

「いつてらっしゃい。氣をつけてね」

「はーい」

玄関の扉を閉める。

さあ……快楽殺人者の杜塚 鼎の時間だ。

本当の僕の姿を剥き出しにしよう。

大駁公園に来た。まだ如月 薫は来てないね。

この大駿公園は廃ビルに近くて、如月 薫を運ぶのに便利だから、ここを選んだんだ。

時計を見る。九時四十四分。ちょっと早かったな。

まあいいか。さて……と、木の影にでも隠れておこうか。
姿が見えなかつたらなんて言つか面白そだ。

「…………？」

遠くから人影が近づいてくる。

目を凝らしてみる。あの身長、あの髪型、如月 薫に間違いない。
案外早く来たね。それほど立腹とか？

木の影に隠れて如月 薫を観察する。

「来たわよー出てきなさいよ、この変態ーどうせこるんでしょー！」

いるよ、勿論。どうせなら、もつとこっちに来てくれないかなあ。
ふふ、来た来た。

「隠れるのー？早く出てこいって言つてんだよ、変態野郎ー！」

大声出さなくていいから、さあ、そこで後ろを向いて？

飛び出してスタンガンで氣絶させてあげるから。
やつと向いた。スタンガンをポケットから出す。
やるなら今だ。

木の影から飛び出し、全速力で如月 薫に向かつて駆け出す。
流石に音に気づいたのか、僕を見る。

今更気づいても遅いけどね。

抵抗する間を与えずに、腹にスタンガンを押しつける。
一瞬びくっと痙攣して、僕の腕の中に氣絶する。
ふふ……。

どうやつていたぶつてあげようかなあ……。
どうやつて壊してあげようかなあ……。

ふふふ……。

如月 薫をベッドに縛りつける。

ふふ……準備万端。ナイフも用意した。

これで後は、如月 薫が目を覚ますのを待つだけ。
でも、スタンガン使ったから、いつもより待たなきゃ駄目かなあ？
さつさと起こしちゃおうか。

さて、どこを切らうかな。

太ももにしよう。スカートだから切りやすいし。

つつ、とナイフを太ももに滑らせる。

滑らせたところに、赤い筋が浮かぶ。

もう一度同じところにナイフを滑らせる。何度も何度も。

次第に身体が反応するようになる。

最後に、ナイフを思い切り滑らせた。

「あ、あ、あ、あああ！いたあい！」

ふふ、痛いよね。そりやあ痛いよねえ……。

太ももを思い切り切つたんだから。血が溢れてる。
でも、この女の血を舐める気はない。

「やあ、如月 薫。はじめましてじゃないけど、はじめまして。僕
が誰か知ってる？」

「知らないわよ、あんたなんか！いいからこれ外しなさいよー。

「外してよーなんでおこんな目に合わなきゃなんないのよーそれ
外すわけないじゃないか。これから楽しむのよー。

「外してよーなんでおこんな目に合わなきゃなんないのよーそれ

とも何？あなたも私を抱きたいの？」

。

今、この女、なんて言った？

抱きたい？お前を、僕が？

ふざけるなよ。誰がお前みたいな腐敗した女なんか抱くか。
それ以上何も言つなよ。あの女を思い出して、おかしくなりそうだ。

「抱きたいの？お金をくれるんなら、抱かれてあげるわよ。」

ああああああああ！

黙れ！黙れ、黙れ！！

あの女と同じことを言つな！

あああああああ…つるわこ…つるわこ…！

何も思い出すな…どうして出でてくる…どうしてあの女の言葉がまだ、
僕の記憶から消えない！

「どうしたの？私を抱きたいから、こんなことしたんじゃないの？」

あああああ……本当に、つるわこ……。

これ以上僕を怒らせるなよ。

ナイフを如月 薫の首に押しつかる。

「いい加減黙れよ……。僕がお前を抱きたい？いい気になつてんじ
やねえよ、淫乱女が。これ以上そんなことを言つてみろ、爪の間に針
ぶちこんで生爪剥がすぞ」

あああああ……耳の奥で、チリチリ音が鳴つてゐる。
マズイなあ……。ここまで来たら止められそうにないや。

あーあ……最近は少し落ち着いてたのに。

僕は案外、すごく凶暴な部分があるんだ。
だからコントロールしようとしてたのに。

最近は本当に落ち着いてたのになあ。

まあいいさ。僕を怒らせるお前が悪いんだ。
たつぱりいたぶつてやるよ。

「わあ、たつぱりこだわつてやね。まあせんじかうこいつか~。」

「いや、助けて！死にたくない！」

僕が聞きたいのは、命乞いなんてつまらないものじゃないんだよ。

だから、たつぶつと悲鳴を上げちゃうやつ。

お前が一番傷つけたくない場所はどうだ?」「

「そんな」と聞いて、驚かぬ様。

「こんなところは誰がなくていいんだよ。わざわざ駆けつける

「か、
顔
」

顔、ね。

ナイフを目印に、一センチくらい突き刺す。

おせはははは！

「痛い？そりゃあ痛いよね！あははははははーーもつとその悲鳴を上げさせてやるよー！」

「あ、次は何処がいい？たーっぷりいたぶってやるよ」「あはははははははははーー！」

頬にナイフを滑らせ、笑いながら叫ぶ。
ああ、もう樂しくて樂しくて止まらない。止められない。
これからどうしようかなあ？どうやしてやうつかなあ？
女なら、胸とか傷つけられるの嫌うかな？
この女なら嫌いそうだなあ。乳首を切り落としてやうつか。
服を切り裂いていく。

「や、やめて……助けて、なんでもするから……」

「へえ、なんでも？生憎、僕はお前をいたぶって殺すことしか考えてないよ。あえて言つなり、僕の玩具になつて死ね」

そう言つたら、明らかな絶望の色が瞳に浮かんだ。
ああ……その絶望の色もたまらない。
今は凶暴さが顔を出してきて、ものすごい興奮してゐるから、余計たまらなこよ。

あはは……本当にたまらない。乳首を切り落としてやうつ。
切り落とすといつて、ナイフを胸に当てる。

「こや……こやあ、やめて……助けて、殺さないで……」

泣きながら命乞をしてくる。

命乞いは気に入らないけど、その泣き顔はそそる。

胸にナイフを滑らせる。

皮膚が切れて血が滲み出し、赤い筋が浮かぶ。

胸を掴み、ナイフを真横に滑らせた。

「あ、あ、あ、あああああ！」

切り落とした胸の一部を、床に落とす。

べしゃっと床に落ちる音が耳に心地いい。

切断面から、脂肪と筋組織らしきものが見える。

切断面に爪を立て、ぎりぎりと爪をめり込ませていく。

「ニギヤアアアアア！」

あはは。本当そこいつ悲鳴はたまらないよ。たまらなく好きだ。

「やめ、て……やだ……私が、何をしたの……？あなたには……何もしてない、じゃない……」

まだそんなこと言つのか。

あの女も同じこと言つてたよ。

私が何をしたの？あんたには何もしてないじゃない。あんたが勝手に舞い上がってただけでしょ、って！

ふざけるな！最初に関わりを持ったのはじつうだ！？お前じゃないか！

僕は最初お前を信じたんだ！

信じたのに、裏切ったのはお前じゃないか！

あの女も、一番身近で一番信じたあの女も！

僕を裏切ったじゃないか！

許さない、許さない！

如月 薫！お前はあの女の代わりになつて死ね！

ナイフを、

胸から離し、

怒りと憎しみを込めて脇腹に突き刺す。

「あ、あ、あ、あ、ああああー。」

「決めた。お前はこれからたつぱりいたぶつて殺した後に、バラバラに解体してやるよ。解体して、ごみ捨て場にでも置いてやる。そして、彼氏を殺人犯に仕立て上げてやる」

「そ…そんなこと、出来る訳…」

「残念だけど、殺人犯に仕立てあげるなんて簡単に出来るんだよ。物的証拠さえあれば、警察は簡単に騙されてくれるんだよねえ。例えば、お前の血がべつたり着いたナイフを、彼氏の部屋に置いておくとかね」

そう、物的証拠さえ発見されれば警察なんて簡単に騙されてくれる。血がべつたり着いたナイフを、援助交際の相手の松栄まつさか哲也てつやの家に置いておけば、警察は松栄 哲也を容疑者として逮捕するに違いない。

もしもの時のために、愛用のナイフじゃなくて予備のナイフを使つていてよかつたよ。

愛用のナイフだつたら愛着があるから、捨てるに捨てられない。後、革手袋もしといよかつたよ。

なんとなしに、左腕にナイフを突き刺す。

「あ、あ、あ、あああー。」

同じ場所に何度も突き刺す。

そのうちに、左腕がボロボロになる。筋が切れ、骨が見えている所もある。

「おねが……助けて……」

「助ける訳ないだろ。さつきも言つたじやないか。僕の玩具になつて死ね」

悲鳴を上げるのに疲れたのか、瞳に涙を溜めて、助けを求めるように僕を見る。

そんな瞳で僕を見たつて無駄だよ。余計僕を興奮させて、凶暴にさせるだけだ。次は何処にしようかな。

この女が顔の次に大切な場所つていつたら……やつぱりあそこかな。一旦立ち上がり、如月 薫の足元にもう一度しゃがむ。足を閉じられないように身体を割り込ませ、スカートを捲り上げる。

「や、やだ……何すんのよ……」

「何つて、顔の次にお前の大切な場所つていつたらこいつだらう? 膀胱にナイフを入れたら、どうなるだらうなあ?」「な、何言つてんのよ……やめてよ……」

やめないよ。やると決めたらやるんだ。
ふふ……やつたことないから楽しみだ。

ショーツは邪魔だから切り裂く。

このナイフは愛用のナイフより小振りで、刃渡り十一センチくらい
だけど、膀胱なんかに入れたらかなり痛いだらうなあ。
痛いどころじゃないだらうね。

どんな悲鳴を聽かせてくれるのかなあ。

かなりぞくぞくするよ。
ナイフを膣に宛がう。

「や、いやああああー…やめてよおー…やだああ…」

ああ……ほんと興奮するよ。身体が昂つて仕方ない。
このまま射精出来そうな勢いだよ。

でもまだ我慢だ。

ナイフを膣に少しずつ入れていく。

徐々に、徐々に……。

その度に血が滲み、如月 薫の悲鳴が酷くなつっていく。

その度に、僕の興奮も極限まで高まつていく。

ああ……ほんとたまらないよ……。このまま射精してしまいたい。

ふふ、最後の楽しみは最後まで取つておいつ。

刃の部分を、膣の中に一気に入れる。

「あ、あ、あ、あ、ああああーー！」

ふふ……あはは、あはははははっ！

あはははははははっ！

本当にたまらないよ、如月 薫！

その悲鳴！邪魔な感情を全て削ぎ落とした、恐怖と苦痛に染まりきつたその表情！

まさに僕が唯一愛する、人間の一一番美しい姿だよ！

あははははははっ！

「たまらないよ、如月 薫！痛いよな？そりゃあ痛いよなーあははははははっ！」

かす。 もつとだ。 もつとその悲鳴を僕に寄越せ！ 膣の中でナイフを少し動

「ひ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああつー！」

凄まじい悲鳴を上げる。股関は既に血塗れ。これじゃあ、もう使い物にならないだろうね。

あはははは。いい気分だよ。

ここで何人の男をくれえてきたのか…

最後に僕がズタズタに壊してやるよ。もつ壊してやるけどねえ。
一気にナイフを引き抜く。

おややあ、もつ悲鳴ひびき上じられなくなつてきた？

足を切りつけていく。ズタズタに。見るからにもつ一度と、歩けないくらいに。

腕も同様に切りつけていく。
切りつけていく度に、悲鳴は弱々しくなり、次第に虫の息程度の悲鳴しか上げられなくなる。
もう楽しめそうにないな。まあいいか。十分楽しんだし。

「おねが助けて」

にい、と笑い、如月 薫の耳元で囁いてやる。

「助けないよ。ここでお前は死ね。バイバイ、さよなら、淫乱女。

地獄にでも墮ちてろ」

ナイフを振りかざし、心臓目掛けて突き刺す。

ドスッ 突き刺した瞬間、如月 薫の身体が痙攣する。ナイフを抜き、もう一度突き刺す。

六八一爻指吉也。一歲亦吉，利有孚惠心勿

人の身体にナイフを突き刺すことで、なんでこんなに気持ちのいい感触がするんだろうね。

また抜き、また突き刺す。四回、五回、六回、七回……。返り血で血塗れになる。

口の中に血が入り、じわり、と血の味が広がる。

ああ、せうはじ不味しなあ。今更そんな」と云ふでもいい上手だ。

目を閉じて、天井を仰ぎながら笑う。

「あはははは……あ、たまんない。笑いながらイツちゃつたよ」

下半身に手をやめ。触つてみると、ぬるりと濡れていの感触が伝わってく。

佐々木角之助 奥村一平 每野口千鶴子 田中千鶴子

なんだか一回目もイケそうな勢いだ。

今は死体処理が最優先。

いつも使つてゐる斧を使つて、さつさと解体してしまおひ。部屋の隅に壁に立て掛けたある斧を手に取る。

初めてこの斧を使った時は重かつたけど、使い始めて一ヶ月もした
ら重さに慣れるものだね。

今は片手でも扱える。

如月 薫の死体を眺める。

あの女共もこういう風に壊して、殺したんだっけ。
初めて人を殺したのはあの二人だったな。

いや、三人か。

女「人に男一人。計画を立てて一人ずつ……。

一人は、計画を立てたけど計画通りにいかなかつた。
まあ、結果的にはうまくいったからいいけど。

まあ、今はそんなことどうでもいいや。

解体しよう。

ベッドから下ろすために死体を掴み、床に落とす。

ああ…如月 薫、血塗れになつたその姿の方が美しいよ。

斧を振りかざし、右腕目掛けて降り下ろす。

血飛沫が舞いごり、と音がして斧が止まる。

やつぱり一発で骨を断ち切るのは無理か。

もう一度振りかざし、降り下ろす。

骨が断ち切られ、斧が床にがつん と当たる。
左腕も同様に解体する。

足は長いから、膝と股関節に分けて解体する。

最後に首。うつ伏せの状態にして、足で胴体を押さえつけて首に斧
を降り下ろす。

首も案外切り難い。一回に分けて解体する。

これでいい。ごみ捨て場で拾つた大きな黒い鞄に詰めよう。

ほんとなら、この後の処理の仕方が違うけどね。

まだいつもの処理方法言つてなかつたっけ？

まだ内緒にしておこう。その方が面白いだろ？

鞄に死体を詰めていく。

そうだ。内臓を少し引き摺り出しておこうか。

その方がインパクトありそうだし。

ナイフを掴み、腹を切り裂く。手を入れ、内臓を引き摺り出す。

そのまま鞄に詰める。

これで解体作業終了。

さて、シャワーを浴びて最後の仕上げとこひ。僕は今、松栄 哲也の家の前にいる。

如月 薫の携帯を調べたら、やっぱり松栄 哲也が一番親交が深かつたみたいだ。

住所は前々から調べてあったから、見つけるのに苦労はしなかった。如月 薫の死体を詰め込んだ鞄は、この近くの「み捨て場に置いてきた。

見つかりやすいようにファスナーを全開にして、手だけをわざと鞄から見えるようにして。

朝になれば必ず見つかる。

扉をノックする。反応はない。ドアノブを回したら、開いた。無防備だねえ。僕にしたら好都合だけど。

周りを見渡す。誰かに見られたら今までの計画が全部水の泡だ。誰もいない。扉を開けて中に入る。

「何この部屋……。散らかり放題だし、埃くさいし……最悪……」

松栄 哲也の部屋は、人が住む環境とは言い難い。

食器さえも片付いてないし、ゴミはそこかしこに散乱している。ここ二年くらいは掃除していないような有り様。

念のためにスリッパ持ってきてよかつた。

土足のままじや、足跡で誰の靴なのか分かるつていうしね。用心するに越したことはない。

スリッパを履いて部屋に入る。床に足を下ろした途端、埃がぶわっと舞い上がる。

ほんと最悪……。マスクも持つてくるんだった。

この部屋で呼吸するなんて嫌気がさす。
さつさと用事を済ませて帰る。

ズボンを捲り、その下から新聞紙で包んだナイフを取り出す。
そして、携帯。勿論、如月 薫の物を。僕の指紋は完全に拭き取つて、血を付着させといた。

どこに隠そつかな。普通にタンスでいいか。
「ハ」の山を崩さないよに、慎重に歩く。
少し躊躇ただけでも、雪崩を起こしそうだ。
やつとタンスに辿り着き、タンスを開ける。

「これは……ふうん……そういうことか……」

タンスの中には、色とつぢりの髪の毛。

色や長さによつて、髪の毛用の「ムでまとめてある。結構な量だ。

ふふ……なるほどね。松栄 哲也だつたんだ。

最近連續して起きてる、女性を襲つて外傷は負わせずに、髪の毛だけを切つていく犯人は。

これは好都合。如月 薫殺しの容疑も簡単に期せられる。
指紋を残さないように革手袋もしてるから、僕が疑われることはない。

ナイフを髪の毛の上に置き、タンスを閉める。
さて、さつさと帰ろ。

それにもしても、松栄 哲也は何をしてるんだろう。
他の女と援助交際とか? だとしたら随分と性欲がお強いやうで。
まあ、僕には関係ないからいけど。

周りに誰もいないことを確認して、松栄哲也の部屋を出る。
後は……携帯はもう用がないから捨てるか。

携帯を取り出し、地面に落とす。
落とした携帯を思い切り踏みつける。

足を退けると携帯は粉々に破壊されている。普通に捨てたんじゃ、

もしかしたら調べられる可能性があるかも知れない。

破壊すれば、この携帯のデータは調べられることがない。
破壊した携帯を掴み、近くの川に捨てる。

「最後に役に立つたよ。バイバイ金守 修」

これから松栄 哲也がどうなるのか楽しみだな。

さて、帰って寝よう。六月十三日 表田常

あーあ、死んじやったか

でも楽しませてもらひつたよ

れて、わざわざと処理しよう

え？ 処理の方法？

訊きたいの？ 訊かない方がいいんじゃない？

仕方ないなあ、**るんだよ

* * の部分にいろいろな言葉を並べて嵌めたら、いつか答えに行き着くよ

まだ完璧に教えてあげない

教えていいかな、と思つた時に教えてあげるよ窓から差し込んでく

る田の光で田が覚める。

そして携帯の着信音。誰だ？。こんな時間に。
携帯の通話ボタンを押す。

「もしもし……」

《よ、杜塚。今日暇か？》

薪沢か……。お前がこんな時間に電話かけてくるつて、あれしかな
いよな。

「まあ、用事はないけど……何？」

《今日俺に付き合へ》

やつぱり。だと思ったよ。

まあ、今日は違う意味でも用事はないから、付き合つてやるか。

「分かったよ。何時に哪儿で待ち合わせ？」

《こつも通り、十二時に駅前で待ち合わせ》

「オッケー分かった。じゃ、十一時

《おー、じゃあな》

「じゃあ

通話を切る。今田はやつぱりいたけど、まあいいか。
断る理由もないし。

服を着替えて朝食を食べて、そつと準備しよう。もつあぐで十一時になる。

薪沢はまだ来ない。あいつ、自分で呼び出しておいて、また遅刻するつもりか。

いつものことだからいいけど。

「杜塚、わらいわらい。家出んの遅れた」

へらへら笑いながら来た。

「八分四十五秒の遅刻。きつちり十一時に来れない訳?」

「あはは…すまん。てか、毎回毎回よく遅刻時間数えてられるな

「暇潰しこはなるからね。それより、そつと行くよ

そつと歩き出す。

「で、どに行くの?」

訊いたら、薪沢は南の方を指差し、

「そりやデパート。服とか買いたいんだよ」「服?まさか、またTシャツ買つの?」

「うん。ダメか?」

「駄目じゃないけど…」

薪沢のTシャツに書かれている文字を見る。

黒い生地のTシャツ。

胸のところに大きく、『ババ妄想族』の文字。

「…………」

どこのこんなTシャツ手に入れてくるのかな。

「どうした?」

「いや……ちょっと後ろ向いて」

「?.はいよ」

後ろを向く。背中には、『俺の心臓を貫いてくれ!』の文字。
よくこんなTシャツ着てこれるよね。

そんな奴の隣を歩いてる僕も、周りから見たらイタイ人間に見える
のかな。

まあ、今更どうでもいいけど。

そういえばこの前見た時は、胸に『喧嘩上等』、背中に『本当に喧
嘩仕掛けて来ないで!優しく抱き締めて!』の文字が書いてあつた
つけ。

「ねえ、またそんなふざけたTシャツ買うの?」

「ふざけてねえ。買うの」

「ふーん……」

そんなことを喋っている内に、服売り場に着く。
なんかふざけたTシャツ売ってるし。

この間でこんなTシャツ売り始めたんだろ。

「あ、これいいんじゃね? 杜塚、どう思ひ?」

Tシャツを見せてくる。胸に『敵は何処だ!』、背中に『I'mだ
あー』と書いてある。

「こち、うちの方がいいんじゃな?」

Tシャツを広げて新沢に見せる。

背中には何も書いていないけど、胸に『馬鹿もいじめでくれば藝術
だな』の文字。

「それは俺に、お前は馬鹿だと云いたいのか?」

「違ひの?」

「いや、もういいです。馬鹿呼ばわりは悲しくなるけど、そのTシ
ヤツ気に入ったから一緒に買つ

「買つんだ」

Tシャツを新沢に渡す。

レジに持つていて、本当に一枚とも買って戻ってきた。「なあ、
昼飯食つた?」

「こや、朝だけ」

「じやあお食食おつせ」

「うん

地下に下りる。食べ物を見た途端に、腹が空腹を訴えてきた。
何食べようか。

「杜塚何食べんの?俺はラーメン食ひ」

「僕は牛丼とラーメンとチキンカレーと、デザートにイチゴパフェ
食べる」

何故か沈黙が支配する。

隣を見ると、薪沢が僕をじっと見ている。

「何?」

「お前、ホントにそんだけ食べれるの?..」

「食べれるよ。まだ少ないくらい

鞄を置いて、財布だけ持つて買いに行く。
しばらくして注文した料理が全て出来て、テーブルに運ぶ。
薪沢が畠山と料理と僕を見る。

「相変わらずどこうか…一段と食べる量増えてねえか?」

「やう?変わってないと思ひナビ

「よくそんだけ食べて太らねえよな」

「体质じゃない?」

食べながら話す。

「そして食べる速さが異常に早いよな」

「アリ？普通だけど」

「既にラーメン完食してんじゃん。俺なんてまだ半分しか食ってねえぞ」

「薪沢が遅いだけじゃない？」

そんなことを話しているうちに、牛丼を食べ終わる。
薪沢が唖然としている。

そんなにびっくりするとかなあ。
お互にしばらく静かに食べる。

チキンカレーも食べ終わり、「ザガートのイチゴパフェ」を一分で食べ終わる。

全てを一十分で完食。

「うふ。美味しかった」

「ホントに食べやがった」

「いや、アリてえ無理」

「ふーん…？」

そういうものかな。そういうえば母さんも父さんも、那奈瀬もあまり食べないな。
僕くらいか。

「次、どこ行く？」

「じゃあ、ゲーセン

「ゲーセンね。じゃ、行く」コロコロキャラをする薪沢をじつと見る。

景品は生キャラメル。
なかなか取れない。

「だあ！また失敗した！」

「これで何回目？ちよつと貸して」

薪沢を横に退かし、百円を入れる。

「薪沢さ、下ろす位置が悪いんだよ。前すぎたり後ろすぎたり。これなら、真ん中より一センチ後ろを狙えばすべ落とせる」

喋りながらボタンを押していく。

寸分の狂いもなくキヤッチャーが景品を掴む。
そして狙い通りに落ちる。
取れた景品を薪沢に渡す。

「はい」

「すっげ、どうせたらこんなすぐ取れるんだ？」

「逆にどうして取れない訳?」

「誰でも杜塚みたいに、どこを狙えば取れるかなんて見極められねえって」

「もうこいつものかなあ?」

「もうこいつもんだって」

「もう。他に取つて欲しい物があるなら取るけど?薪沢に任してたらお金の無駄」

「じゃあ、あれ取つて。ステイッチの巨大ぬいぐるみ。妹に取つてこいつて命令されたんだよ」

「分かつた」

そのまま、景品を計十三個僕が取つた。
僕の物が四個で、薪沢が九個。

総額千九百円。「いや~楽しかった。ありがとな杜塚」

「うん。次呼び出す時は遅刻しないようにね」

「なるべく気をつけねば、あまり期待するなよ」

「もういいと思つたよ」

わざとらしく溜息をつく。

「まあいこや。また明日」

「おへ、じや、また明日な」

手を振つて別れる。時計を見ると四時五十六分。
一旦帰るとして、今日まだじうじょうかな……。

昨日十分に楽しんだし、今日まゆづくら寝よつか。

「…………？」

駅の方を振り返る。
気のせいかな。今、誰かに見られてた気がしたんだけど。

多分気のせいだろう。

帰ろう。

「ただいま」

「お帰りなさい。今日は楽しかった?」

靴を脱ぎながら話す。

「それなりに。また遅刻されたけど」

「あら、また?」

「あまり気にしないよつとしてるね。何か甘いものある?」

「テーブルにロールケーキ置いてあるから、それ食べて」

「ありがと」

リビングに入り、テーブルに座り、テレビのチャンネルを変える。

「ふふ……うまくいった……」

テレビではニュースをやつてる。

如月 薫のバラバラ死体のニュースを。

容疑者として、松栄 哲也の名が挙げられている。

松栄 哲也は警察の職務質問を振り切り、逃走したらしい。如月 薫の殺害容疑は、自宅で発見された如月 薫の血が着いたナイフと携帯が決め手になつたみたいだ。

それと同時に大量の髪の毛が見つかり、連続していた髪切り魔の容疑者としても、警察に追われている。

本当、警察つて騙すの簡単だなあ……。

ロールケーキを一口かじる。

僕は証拠を残さない。警察なんかに捕まつたりしない。

僕を捕まえなければ、捕まえてみせるがいい。

いくらでも、相手になつてあげるよ。六月十五日 とある教師の視線

僕がどうして人を殺すのかって？

今更そんなこと訊くの？

殺したいから殺すんだよ

理由なんかない

理由なんかいらない

殺したいから殺すだけ

理由が必要なら、殺したいから殺す、それが理由だよ

じゃあ訊くけど、人はどうして人を殺しちゃ 駄目な訳?

戦争とかで国そのものは人を大量虐殺するくせに、どうして人を殺すなって言うの?

誰か答えられる?

ーとある誰かの視点ー

教科書の問題を説明しながら、非常に虚しくなる。
後ろでガヤガヤとうるさい生徒のせいだ。

私が分かりやすく説明してやっているというのに。
真面目に聴いているのは数人だけ。

その中でも熱心に聴いている生徒の一人に目をやる。
絹糸のような綺麗な黒髪。

憂いを帯びたぱっちりとした瞳。
透き通った色白の肌。

白魚のような細い指。

百六十一センチという、男の子にしては小柄で華奢な容姿。
全てが芸術作品のようではないか。

私は、男の子にしか欲情出来ない性異常者だ。

あの子は、私の求める全てを兼ね備えている。

あの子を、私の物にしたい。

あの子の身体に触れたい。ああ、ああ、あの子を私の物にして、閉じ込めたい。

あの子を、犯したい。

あの子の身体は、いつたいどんな感触がするのだろう？

犯したら、どんな鳴き声を上げるのだろう。

ああ、あの子が欲しくてたまらない。

私の心をここまで虜にするあの子の匂せ

杜塚 鼎。ぱつと振り返る。

「…………」

まだ。また、どこからか視線を感じる。

学校からずつとだ。

誰かが、僕を見ている。ストーカーのよう。

まさか僕がストーカー被害に合つてる？

いや、まさか。でも……また、あの時のように……。

いらないことを思い出すな。

あれは、思い出しちゃ駄目だ。絶対に。

でも、似てるんだ。

ずっと追いかけてくる視線。その視線はねつとつとしていて……。

「…………」

ぎゅっと腕を掴む。

大丈夫。もう、二度と、あんな目に合つことなんかない。
でも、もし、またあんな目に合つたら？

嫌だ……。あんな目に合つだけは、絶対に嫌だ。
更に、ぎゅっと、腕を掴む。

そこで、身体が僅かに震えていることに気づく。

「大丈夫……視線なんて、気のせい……」

全速力で走る。走る僕を見ている視線を感じるなんて、気のせい。

気持ち悪い。

ーとある誰かの視点ー

ああ、あの子が走り去ってしまった。
私の視線に気づいてるようだ。

一昨日、あの子が友達と一緒にいるところを見つめていた時も、あの子は私の視線に気づいた。
気づかれぬようにしていたのに。
あの子はとても敏感なようだ。

やはり、あの子は格別。今までの子とは違う。
容姿はいかによからうと、中身が駄目な子が多くった。
あの子は成績も、生活態度も共に素晴らしい。
あの子は私に相応しい。
あの子の身体に触れたい。
あの子の匂いを感じたい。
あの子の匂いを感じたい。

ああ、どうしてあの子が欲しい。

無理矢理にでも、あの子を私の物にしたい。

ああ、止まらない。止められない。

私の感情は既に暴走している。あの子を手に入れないとい、治まらない。

あの子以外では、駄目だ。

ずっと、あの子を見つめていた。

あの子を見た時は、衝撃を受けた。

私の求める全てを兼ね備えたあの子。

あの子……いや、鼎。君は私にこそ相応しい。

そろそろ、あの子を手に入れるために、行動するとしよう。

愛しているよ、鼎……。部屋のカーテンを閉める。

あの視線が、僕をずっと見つめているようで、気持ち悪い。

“怖い”

久しぶりだ。“怖い”、なんて感情は。

まだ僕にも、恐怖を感じる心が残ってたんだ。

あの視線がたまらなく“怖い”。

あの視線は、あの時の視線と似てるから。

ねつとりとしていて、僕を捕まえて離さない。

あの時の視線と、同じ視線。

あの男は、いないのに。僕が、殺したのに。

なのに、それなのに。

“怖い”

あの視線が、“怖い”。

誰？

僕を捕まえて離さないあの視線は、誰？

怖くて怖くて仕方ない。

獲物を狩りに行く氣にさえならない。

外に出れば、あの視線が追ってくる。

「嫌だ……なんで僕を見つめるの……あああああっ……！嫌だ嫌だ
……！なんで……なんで、あの男と同じ視線で僕を見つめるの……
！嫌だ……見つめないで……あああああっ……！」

震える身体を搔き抱く。

怖い。怖くてたまらない。

どこまでも僕を追ってきて離さない。
ねつとりと僕を絡め取つて離さない。

蜘蛛の糸のよう、囚われたら、蜘蛛に食われるまで連れられない。

お願いだから僕を見つめないで……！

ーとある誰かの視点ー

あの子の家の前まで来た。

不審に思われないように、建物の影に隠れる。

あの子の部屋はカーテンが閉められていて、中が見えない。
姿を見せてはくれないだろうか。

姿を見るだけでも、この身体は興奮する。

あの子を手にしたら、どれ程の興奮を味わえるのだろうか。
それにしても、あの子はもう姿を見せてくれないのでだろうか。

今日はもう寝てしまったのか。

そうだとしたら仕方ないが。

仕方ない。帰るとしよう。

どうせ、三日後にはあの子が手に入る。
おやすみ、鼎。よい夢を……。「…………」

また、あの視線だ。

外に、いる。僕を見つめてる。

怖い。嫌だ。見つめないで。

なんで僕を見つめるの。なんで僕なの。
なんで僕ばかり！

布団を頭まで被る。

まだあの視線を感じる。お願いだから早く帰つてよ。
帰つて！

「はあっ……はつ……あ……」

あの時のことと思い出してしまって、呼吸が乱れてくる。
その瞬間、あの視線が、消えた。

ほつと息を吐く。

でも、あの視線は明日もきっと僕を追つてくる。
どうすればいいのか分からぬ。
考える前に、疲れた。

今日は、もう寝よう。あれから三日経った。
もうすぐで全ての授業が終わる。

あの視線のせいで、なんだか疲れた。

学校の中でも、時々あの視線を感じる。

あの視線は、学校関係者？教師？

あの時と同じ視線を向ける誰か。

目的も一緒？あの男のように、僕を……。

嫌だ……嫌だ嫌だ嫌だ！！

あんな目に合うのは一度どじめんだ！

誰だ。僕を見つめるのは誰だ！

殺してやる。見つけたら、真っ先に殺してやる！

「……っ……！」

まだ。また、あの視線。
怖い。あの視線が、怖い。

誰だ。

一番疑わしい人物は目の前にいる。

気づかれないように、目だけでその人物を見る。

数学教師の、芹中 勉。教科書の問題を解説しながら、あの子を見る。

あの子は今日も美しい。

今日こそ、行動に移そう。

古典的で、誰もが思いつく方法だが、睡眠薬で眠らせるのが最良のやり方だろう。

ドラマでクロロホルムを染み込ませたハンカチを、口と鼻を押さえ吸引させて気絶させる、という場面をよく見るが、あれは出鱈^{でたらめ}田もいいところだ。

クロロホルムで人を気絶させることなど、まず無理だ。せいぜい気分が悪くなる程度。

クロロホルムには毒性があり、肝臓や腎臓に多大な影響を及ぼす。気絶させる程吸引した暁には、癌になり死亡するのが関の山だろう。しかも、皮膚に触れれば爛れてしまい、最悪の場合火傷のような跡が残ってしまう。

口や鼻にクロロホルムを押しつければ、見るも無惨に口と鼻が腫れ上がり、爛れてしまうだろう。

全く、嘘も甚だしいところだ。

あの子を最もらしい理由で呼び出し、睡眠薬を溶かした飲料を飲ませよう。

そして、私の自宅である子を、存分に味わおう。
ああ、授業の終わりを告げるチャイムが鳴った。
さあ、行動するとしよう。

「杜塚、悪いが放課後私の所に来て、資料の片付けを手伝ってもらえないか?」「杜塚、悪いが放課後私のところに来て、資料の片付けを手伝ってくれないか?」

帰る準備をしていたら、芹中 勉がそう言つてきた。
僕を見つめるあの視線、芹中 勉が一番疑わしい。
だからといって確証もない。もし芹中 勉があの視線の人間なら、
僕に何かするつもりだろうけど、もし違つたら恥をかくのは僕だ。
ここは仕方ないから手伝つか。

「分かりました。準備が終わったら資料室に行きます」

「すまないな。助かるよ

ああ、これでもし芹中 勉があの視線の人間だつたら、芹中 勉は
僕を捕らえるつもりなのかな。
怖い。またあんな目に会うんじゃないかと思うと、怖くてたまらない。
でも、行くつて言つてしまつたから、一応は行かないと。
大丈夫。芹中 勉はあの視線の人間じゃない。大丈夫……。

「じゃ、薪沢。そういう訳だから先に帰つといて

「分かつた。じゃあな~」

手を振り薪沢と別れる。北館にある資料室に向かう。

資料室の扉の前で、一度呼吸を整える。

「……っ…、大丈夫…」

資料室の扉を開ける。

「先生、いますか?」

「ああ、来たか。すまないね。そここの資料を片付けてほしいんだ。
私はこちらを片付けるから」

芹中 勉はなぜか歴史研究部の顧問を務めている。
その資料の片付けを手伝つみたいだ。

資料の片付けに二十分かかった。「助かつたよ。ありがとうございます」

芹中 勉が笑いかけてくる。

「いえ、これくらいは。でも、資料を集めることは言いませんが、
集める度にちゃんと片付けた方がいいですよ。集めるだけで、自分
だけでは片付けられない程になるまで溜め込む。先生の悪い癖です」

片付けを手伝うのはこれが初めてじゃない。

これまでに十回以上は手伝ってきた。

「はは。片付けようとは思つんだがね、なかなか行動に移らないん
だよ」

「それが駄目なんですよ。いつか資料に漬れますよ」

「そうだな。氣をつけようとするよ。紅茶でも飲むかい?」

「じゃあ、はい……」

資料の片付けを手伝う時、芹中 勉はいつも紅茶を僕に薦めてくる。いつもなら警戒せずに済むけど、今日は違う。

芹中 勉が一番疑わしい人物である限り、警戒した方がいい。

「はい。今日はダージリンだよ」

「ありがとうございます」

コップを受け取り、コップの底を見る。沈殿物は……ない。中身をほんの少し、口に含む。苦味は……ない。

睡眠薬は入つてないのか？

「難しそうな顔をして、どうかしたのか？紅茶に何か入つていたか？」

「あ、いえ。いただきます」

芹中 勉は紅茶を飲んでいる。睡眠薬入りなら、飲まないよね。これで飲まなかつたら怪しまれる。味に異常は感じられない。

警戒のし過ぎなのかなあ？

ーとある誰かの視点ー

ああ、鼎が紅茶を飲んだ。

睡眠薬が入つていなか確認していたが、そんな簡単に発見出来ない睡眠薬を使ったのだよ。

私はこの睡眠薬に慣れてしまったから、飲んでも眠りはしない。

効果が現れるまで、後十分。「杜塚は卒業したら大学に行くのか?」

「はい。そのつもりです。まだ、どこの大に行こうか決めてないですけど」

半分程飲んだ紅茶を見つめながら喋る。

「杜塚の成績ならどの大学にも行けるさ。阪大でも田舎したうじうだ?」

「考えてみます」

なんだうつ。なんか、違和感を感じる。

まるで、時間を稼ぐために話してるように感じる。
さつきから時計をしきりに見て、時間を気にしているのも変だ。
いつから時間を気にしている?

僕が、この紅茶を飲んだ時からだ。
飲んでからゆうに八分は経っているはず。
まさか……！

「先生、そろそろ帰つてもいいですか?」

芹中 勉は一度俯き、顔を上げる。

そこには、学校で見せる教師の目は微塵も失せ、代わりに獲物を狙う、獰猛な肉食獣の目が、爛々と輝いている。

「なんだ。気づいてしまったのか?」

「…………！」

まづい。早く、早く逃げないと。

芹中 勉が立ち上がり、近づいてくる。

「逃がさないよ、鼎

「！」

嫌だ。僕を名前で呼ぶな。

早く、逃げないと、また僕は……。

逃げようとして、いきなり視界が歪み、まともに立つていられなくなる。壁に手をつき、やっとのことで身体を支える。

「……あ

まづい。こんなに早く効きはじめる、強力な睡眠薬だつたなんて。立つことさえ出来なくなつて、床に倒れる。

芹中 勉が、僕を見つめている。

油断するんじやなかつた……。馬鹿だ、僕は……。

目を開けているのさえ、辛くなつてくる。

目を閉じたらいけないと分かつても、意思に関係なく瞼が下がつてくる。

意識を失う前に見えたのは、不気味に微笑みながら僕を見る、芹中

勉。

ーとある誰かの視点ー

「ああ……やつと、手に入れた」

眠っている鼎の頬に触れる。

ああ、なんと触り心地のいい肌なのだろう。
髪に触れる。やはり、触り心地のいい髪だ。柔らかく、綿のよくな
髪。

やはり、この子は天の作りし芸術作品なのだ。
鼎を抱き抱える。

さあ、自宅に連れ帰つて、存分に鼎を味わい可愛がつてやろう。

「愛しているよ、鼎……」

ーとある誰かの視点ー

自宅に着き、鼎をベッドに寝かせる。

恐らく、抱いても抵抗出来ないと思うが、万が一抵抗されてもいい
ように、繩で両手を縛つておいた。

あああ……興奮して仕方ない。

下半身に血液が集中して、はち切れんばかりに勃起している。

この子の身体はどんな感触がするのだろう。

ああ……早く、この身体に、はち切れんばかりに勃起した私のものを埋め込みたい。

早く目覚めてくれないだろうか。

あの睡眠薬は即効性があり、なおかつ効き目が切れるのも早い。一
時間程度で切れる。そして、もうひとつ効果が魅力的だ。

もうそろそろ目覚めるはずなのだが……。

ああ、鼎の瞼が微かに動いた。

いよいよだ……。「……う……」

のろのろと目を開ける。

薄暗く、見慣れない部屋だ。

「…………」

記憶を辿る。田が覚める前に僕は……。

「…………」

そうだ。僕は芹中 勉に睡眠薬を飲まされて眠ってしまったんだ！
起きようとして、身体に全く力が入らないことに気づく。

手首を見ると、縄で縛られている。

嫌だ。怖い。僕は、また、男に犯されるの……？

嫌だ、嫌だ、怖い……。

なんで、なんでまた、あんな怖くて嫌な思いをしなきゃいけないの
……？

右を見る。

「…………！」

不気味に微笑む芹中 勉が、すぐ傍にいた。「やつと田を覚まして
くれたね……、待ちわびたよ」

芹中 勉の手が、伸びてくる。僕の頬に触れる。
嫌だ、触るな。あの男と同じ手付で、触るな。

「嫌だ、触る、な……」

身体に力が入らない。声さえも満足に出せない。

「ああ、声が出ないだろう。あの睡眠薬はね、田覚めてから三時間
は、自由に身体を動かせない効果があるんだよ。魅力的だろう？」

三時間……？三時間もこの男の好きなように、身体を弄ばれるのか？

嫌だ、そんなの嫌だ！

なのに、いくら動かそうとしても、身体は動かない。

「そんな顔をしなくてもいい。痛くないよう、優しく抱いてあげよ！」

「…………嫌だ……離せ……嫌だ……！」

芹中 勉の指が、僕の唇をなぞる。

遂に、僕の身体に覆い被さつてきた。

僕の頸に指を添え、顔を近づけてくる。

抵抗したいのに、身体が動かない。それが、すごくもどかしい。

芹中 勉の唇が、僕の唇に触れる。舌が、入り込んでくる。暴君のように、口腔内を撫で回す。

早く終わってほしい。それだけを思つ。やつと唇が解放される。

芹中 勉は微笑みながら僕を見る。

僕は睨みつけることしか出来ない。シャツのボタンを外される。全て外して、胸を触られる。

胸の突起したものを、舐められる。

突起をついたように軽く吸つた後、全体を口に含まれる。

「…………！」

なんで、なんで身体は勝手に気持ちよくなるの。

なんで身体は感情を裏切るの。

嫌なのに、本当に嫌なのに。

指と舌が突起を執拗に撫で回す。

首筋を、執拗に舐められ、刺激される。

その度に、寒気が走る。快感、と言い換えてもいいかもしれないほ

ど。

あの時と同じだ。僕の身体を熱く、ねつとりとした舌と指が這いすり回る。

身体は感情を裏切つて勝手に昂つていいく。

何もかもが嫌だ。

思えば、あの男さえ現れなければ、あんなことにならずに済んだんだ。

あの男さえいなればよかつたんだ。

せめて、あの人だけでも、殺さずに済んだんだ。

あんな風に恨まずに、殺さずに済んだんだ。

でも、今更後悔はしない。許しはしない。

「それそろ、本番とこいつか

「！」

「嫌だ、嫌だ！それだけは嫌だ！

「嫌だ、それだけは……嫌……離、せ……離して……」

ズボン越しに、わざと異様に昂つた芹中 勉のものが、下半身に押し当たられる。

「！」

目尻に涙が溜まり、流れていくを感じた。

「うああああああああっ！」ズボンと下着を脱がされる。じっと、下半身を見られる。
気持ち悪い。

「君のこじまこじまつていてるのか…… 可愛いものだ」

芹中 勉の手が、僕のものに触れる。

そして、排泄器官としてのみ使われるところに、指を這わせられる。芹中 勉が何かを手に取り、中から透明なゼリー状の液体を手に出し、伸ばし始める。

「このローション、催淫剤のよつた効果もあるのだよ。催淫剤といつても、少し気持ちよくなる程度のものだがね。痛いのは嫌だろ？」

「痛い方がいい。

そんなことされて気持ちよくなるくらいなら、痛い方が全然ましだ！指が中に入ってくる。本来なら、受け入れるはずのない器官に入るのを感じて、圧迫感と気持ち悪さを感じる。

身体さえ動けば、この男を蹴飛ばして、殺してやるのよ。指が執拗に中を撫で回す。ぐるり、と中の襞を一周するよつと動いた。

ぎゅっと歯を噛む。なのに、力が入らない。

撫で続けられて、それがある一点で止まる。そこをぐつと押されて、無意識のうちに声が漏れた。

「う……」

ぞわっと、背筋を寒気が走る。
嫌だ、気持ち悪い。

そう思つても、身体は快感を訴えてくる。
嫌なのに。強姦されて気持ちよくなるなんて、絶対に嫌なのに！

「段々と開いてきたね」

「言つた！そんなこと！」

「そろそろいいかな」

そう言つて指を抜いた。けど、次に来るのは……。

今までとは質、量、ともに違うものが押し当たられる。
もう、諦めるしかないのか。そのままこの男に犯されるのを、受け
入れるしかないのか。

なら、せめて、早く終わつて欲しい。

「ああ、そんな顔をしなくていい。最初は痛いだろうが、すぐによ
くなる」

芹中 勉が僕の耳元で、そう囁いた。全てが終わつて、余韻に浸り
ながらベッドに座る。

鼎の身体は、思つた以上に極上だつた。

ひとつ意外だつたのは、鼎でも泣くのだ、といつこと。
泣いているところも可愛かつたが。

学校では常に冷静沈着で、表情らしい表情を見たことがなかつたら
り、てつきりこの子は泣くことはないと、勝手に思つていたのだが。
表情を見せるといえば、薪沢という生徒の前だけだ。
薪沢の前だけ、鼎は表情を見せる。

ほんの少しの変化とはいえ、笑顔を見せる。
なぜ、薪沢の前だけなのだろう。
気になるが、今考えることではない。
鼎の頬に手を伸ばす。

「嫌だ……一触るな……あああああつ……」

私が触れようとした途端、鼎が半狂乱になつて叫び、暴れようとする。

そんなに嫌だったのか？私はこんなに鼎のことを愛してゐるところのに。

私が抱いてきただいたいの子は、一回田からは喜んで抱かれる子ばかりだったのに。

仕方ない。ゆっくりと、快樂と私の愛を、鼎の身体に刻みつけるとしよう。

今日のところはこれ以上は無理だらうから、寝るとしよう。

鼎に近づく。

半狂乱になつて暴れようと構わない。

どちらにしろ、抵抗出来ないのだから。

鼎の頬に触れる。悲鳴のような声が、鼎の口から漏れる。

額に、軽くキスをする。

「おやすみ、鼎……」「はあ……はあ……あ……」

呼吸が激しく乱れている。

気持ち悪い。ただひたすらに、気持ち悪い。

この気持ち悪さを早くどうにかしたい。

なんで、なんで。こんな、嫌なことばかり……！

どうしてなんだよ……！

泣くのは後だ。

あの男はどこに行つた。

身体も少しずつだけど、動くようになつてきた。

逃げるなら今だ。「はあ……はあ……

ただひたすらに走る。よかつた。芹中 勉の住所を調べておいて。

調べてなかつたら、いくら家の近くでも迷うところだった。

あの後、縄を無理矢理ほどいて逃げてきた。

芹中 勉は寝ていたから、簡単に抜け出せた。

頑丈に縛られていたから、逃げることはないと油断したんだろう。まだ睡眠薬の効果が完全に切れてないのか、身体にあまり力が入らない。

疲れた。
：

一回立ち止まる。力が抜けて、膝をつく。

身体を焼き抱く。 気持ち悪い。気持ち悪くて仕方ない。

そこでやつと、ずっと泣きながら走っていたのだと気づく。

「……………」

やつとの思いで家に着く。

家全体が暗い。誰もいないのか？

鍵を開ける。中に入ると、人の気配はない。

ああ……そういうば、父ちゃんと母ちゃんとが忘れたば、出かけ
るつて書つてたな……。

那奈瀬は、大学で課題だつけ……。

「はは……本当に、」ついこう時に限って、誰もいないよね。あの時もさうだつたよね。あの時は本当に助けて欲しかつたのに……誰も……気づいてくれなかつたよね。薪沢は気づいてくれたのに……どうして家族は気づいてくれないの?」

暗闇に向かって咳く。今更期待はしない。

家族なんて所詮幻想。とつぐに壊れてる。壊れたまま、なんとか今まで壊れていないように見せかけて、繕つていただけ。

いつか壊してやろうか。あの時みたいに。
どうせ最初から壊れてるのなら、修復出来ないくらいに粉々に壊してやろうか。
いつか。

芹中 勉、お前は殺してやる。

明日にでも。

今日は風呂に入つて寝よう。

疲れた……。六月二十日 芹中 勉

僕には分からない

“愛”って何？

“絆”って何？

そんなもの、簡単に壊れてしまうのに

壊されてしまいのに

僕には分からない

とつぐの昔に捨てたから「おはよつ鼎。今日は大丈夫?」

とつぐの昔に忘れてしまったから

とつぐの昔に大丈夫?」

リビングに入ると、母さんが心配そうに訊いてきた。

「うん。 大丈夫。 今日は行ける」

昨日は学校を休んだ。 身体がすこぐだるくて、 痛かったから。
まだ少しだるいけど、 休むほどじゃない。

「はい、 朝ごはん。 昨日はびっくりしたわよ。 学校を休んだことが
ない鼎が、 いきなり休むんだもの。 本当に大丈夫？ 無理してないわ
よね？」

「うん。 本当に大丈夫だから」

ねえ母さん。 本当に僕のことがそこまで心配？

母さんも父さんも、 本当は僕のことなんか気にしてないくせに、 体
裁を保つために無理に心配しているようにしか、 僕には思えない。
実際昔はそうだったから。

いや、 昔は近所の目も気にしてなかつたか。

母さんはどうか知らない。 でも父さんは、 仕事と母さんにしか興味
ないんだろう？

僕のことなんか、 本当はこれっぽっちも気にしてないんだろう？
僕にはもう、 信じるなんて無理だ。 信じられない。

人を信じることなんて出来ない。

「じゃあさあ。 そろそろ行つてくる

鞄は玄関に置いてある。 後は学校に行くだけ。

「こつらつしゃい。 気を付けてね」

「いってきます」

リビングを出て、玄関で靴を履いて外に出る。

学校に行けば芹中 勉に会う。どんな顔をして僕を見るか楽しみだ。

芹中 勉、昨日は無理だったけど、今日こそ殺してやる。

芹中 勉の視点

教科書の説明をしながら、鼎を見る。

昨日は驚いたよ。逃げないように頑丈に縛ったのに、ほどいて抜け出したのだから。

昨日は休んでいたが、身体が痛かったのかい？

最初は痛くても、すぐに快樂に変わるといつに。

現に、可愛く喘いでいたではないか。

泣きながら、悲鳴のような囁ぎ声を上げていたではないか。
気持ちよかつたのだろう？

気持ちいいのに、認めたくなかったのか？

問題なのは、鼎を簡単に手に入れられなくなつたといつことだ。
どうするか。

生徒にはばれないように、鼎に視線を向ける。芹中 勉が僕を見て
いる。

それに気づいて、周りには気づかれないように芹中 勉を睨む。
睨んでるのに、芹中 勉は何を思ったのか、微笑んだ。

気持ち悪い。何を考えてるのか分からぬから、気持ち悪い。

授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

これで今日の授業は終わった。

芹中 勉が僕に近づいてくる。

「杜塚、放課後資料室まで来てくれないか」

「いいですよ。ちょうど、僕も先生に用事がありますから」「僕と芹中 勉、一人で資料室に入る。

「昨日は驚いたよ。あんなに頑丈に縛つたといつのに、ほどいたのだから」「

「ああ、あれですか。よくも頑丈に縛ってくれましたね。ほどくのに十分もかかりましたよ」

芹中 勉は椅子に座る。僕は立つたままでいる。

「あれを十分でほどいたのか。それほど嫌だったのかい？」

「ええ、嫌ですよ。あれは僕の感情も、家族も、運命も何もかもを狂わせて、ぶち壊したんですから。まあ、家族は最初から壊れてましたけど」

あんなことがなければ、僕が本当の快楽殺人者の道を辿ることはなかつたんだと思う。

破壊衝動を抱えつつも、周りの人間となんら変わりない子供でいたのかもしれない。

違うか。あれは、偶然にも重なった不幸の中のひとつにすぎない。どう転んでも僕は人を殺して、快楽殺人者の道を辿ってる。

「それじゃあ、君は一度……」

芹中 勉が驚いてる。

「それ以上は言わないでくださいよ。聴くだけで虫酸が走る」

「杜塚は私に報復したいのかね？」

「…………」

報復と言つても、あんたが考へてるものは絶対違つよ。

僕はお前を殺したい。

おとなしく、僕に殺される。

「先生、ついてきて欲しい所があるんですけど、いいですよね？」

・芹中 勉の視点・

鼎についてきて欲しい場所があると言われ、黙つてついて行く。まだ夕方だというのに、全く人気がない。

このような場所は初めてだ。

先程から三十分は歩いているが、いつたいどこに行くのだろう。僕の後を黙つてついて来る。

目的地は勿論、廃ビル。

近くまで誘い出して、スタンガンで氣絶させて、抵抗出来ないよう

に縄で縛つて、そして殺そう。

「どこに行くんかい？」

「もう少しで着きますよ。先にこの道を登つてください」

廃ビルに繋がる山道を指差す。

黙つて登り始める。僕も後に続く。

鞄からスタンガンを取り出す。気付かれていない。

ああ、廃ビルが見えてきた。

そろそろいいかな。

芹中 勉が廃ビルを見て立ち止まる

「あそこなのか？ 杜塚がついて来て欲しいと言った場所は？」

「そうですよ。あそこで僕に殺されてください」

「何？」

スタンガンのスイッチを入れる。

若干距離があるから走る。

僕の方を振り返る前に、スタンガンを脇腹に押しつける。

軽く痙攣を起こして、地面に倒れた。

これから奥の部屋に運んで縛りつけて、たっぷりいたぶって殺してやる。ベッドに縛りつけて、後は芹中 勉が目覚めるのを待つだけだ。

机の引き出しからナイフを取り出し、眺める。

今まで殺してきた獲物の血を、たっぷりと吸い込んだこのナイフ。ちゃんと手入れしてあるから、未だに切れ味は鋭く衰えていない。

刃先を舐める。

いろんな血の味がする。

そういえばこのナイフ、どうやって手に入れたんだっけ。

間違いなく買つてはいけない。

ああ、なぜかゴミ捨て場に落ちてたのを拾つたんだ。刃渡り十五センチの大振りのナイフ。

「……っ…」

微かな唸り声が聴こえ、後ろを振り向く。

芹中 勉が目を覚ました。
さあ、始めよう。

ナイフを持つて近づく。

「やつと目が覚めましたか。待ちわびましたよ」

「エリはビーバーだ？そのナイフで、私に何かするつもりかね？」

「ええ。今からこのナイフを使って、先生をたつぱりいたぶつて殺すんですよ。先生は僕の身体を好きに弄ったんですから、僕たつて先生を好きに弄つてもいいでしょう？だから、おとなしく僕に殺されてください」

ナイフを胸に、服の上から滑らせる。

芹中 勉もやへはり、命乞いをするのかな

命乞いされたつて助けやしないけど。

「.....VVU.....咄咄.....」

芹中 勉を見る。笑っている。
何が面白いのか、笑っている。

「ふむ、あたまがわがわつて、うー。」

「何が……おかしい……！」

「氣持ち悪い。何が面白いんだよ。これから殺されるっていうのに、なんで笑っていられる?」

「はははは……だつてそりだらう！これが笑わずにいられるかね！？あはははは！形は違えど、君と私は同類な訳だ！さあ、存分に私をいたぶつて殺してくれたまえ！君になら喜んで殺されよう！君に殺されるなら本望だよ！」

ぞつとする。なんで、そんなこと言えるんだよ。
気持ち悪い。

「だつたら……望みどおり、たつぱりいたぶつて殺してやる……」

ああ、なんだかイラつく。

芹中 勉が僕に殺されることを喜んでるからだ。

なんで喜んぶんだよ。僕はお前が恐怖に怯え、悲鳴を上げる姿が見たいのに。

まあいい。楽しめなくともいい。
お前が望んだんだ。殺してやる。
腕にナイフを深々と突き刺す。

「ぐつ……！」

悲鳴さえ上げないのか。今まで殺してきた獲物なら、腕にナイフを突き刺したくらいで悲鳴を上げてるのに。

ナイフを抜き、同じ場所にもう一度突き刺す。

「…………遠慮してるのかね？もつといたぶつてくれていいのだぞ？思いつく限りの残酷な方法で殺してくれたまえ。私は喜んでそれを受け入れよつ」

そんなに言つんなら、『えてやるや。

耐え難い苦痛を。

芹中 勉、僕は僕の方法で、お前を犯してやる。

「いいんですね？きつと氣絶するくらい痛いですよ」

「いいわ。私に耐え難い苦痛を『えてくれたまえ』

本当にいいんだな？嫌と言つても僕はやるけど。

芹中 勉の足の間に、身体を割り込ませる。

脱がせるのが面倒だから、ズボンを切り裂く。

その下から、異様に興奮した芹中 勉のものが、露になる。

「先生、僕にこんな」とされて、興奮してゐんですか？」

「ああそつた。興奮してゐるのだよ。これが興奮せずについられるかね？」

？」

普通は興奮しないよ。普通なら命乞いしてる。
どうでもいいけど。

男ならここが一番、苦痛を感じる場所だ。

芹中 勉のものを掴み、ナイフの刃先を少し突き刺した。突き刺すのを何度も繰り返す。

次第に血塗れになり、ズタズタになる。
なのに、芹中 勉は呻き声を上げ、少し苦痛の表情を覗かせるだけだ。

痛くないのか？おかしいんじゃないのか。
本当に苛つく。

これ以上やつても不満が募るだけだ。
お前をいたぶつたつて満足出来ない。
もういい。止めを指してやる。

止めを指す前に、脇腹にナイフを突き刺す。

「ぐうっ……！」

やつぱり、僕が欲しい悲鳴はくれないのか。

イライラする。何がなんだか分からぬ感情が沸き上がりてくれる。

怒りか、はたまた悲しみか。

ナイフを腹に突き刺す。そして切り裂いていく。

なのに、悲鳴を上げない。

芹中 勉を見ると、笑ってる。

僕以上におかしいんじゃないのか？狂ってるんじゃないのか？

なんで笑ってるんだよ。僕の欲しいものを、なんでくれないんだよ。もういい！

腹に何度もナイフを突き刺す。

次第に虫の息程度の呼吸しか聴こえなくなる。

それなのに、笑ってるんだ。

無意識のうちに、ぎりっと歯軋りをする。

心臓に突き刺すために、ナイフを振りかざす。

それを見ても、笑っている。

芹中 勉が声はほとんど出ていないけど、唇を動かす。

「…………！」

この期に及んで、まだそんなことが言えるのか。

どうして、あの時欲しかった言葉を、お前が言つんだよ。

「せよなら、先生」

ナイフを心臓に掛けて突き刺す。

芹中 勉は最後にこう言つた。

愛しているよ 鼎虚しい。

殺した後に必ずやつて来る興奮も、快樂も、満足感もない。

虚無感。

ただ、虚しい。なんで虚しいのかも分からぬ。
様々な感情が「」ちや混ぜになつてゐる。

笑いたいのか、泣きたいのか分からぬ。

ああ……死体処理をしなきやなあ……。

そろそろ死体処理の方法、教えようか。

解体した後、食べるんだよ。

さつきまで血が通つて、生きてた肉体は生でも食べられる。
食べられる部分は全て食べる。

食べられない骨は斧で粉々に碎いた後に、中身の見えない袋に詰めて、「ゴミ捨て場の「ゴミの中に混せて捨てる。

この方法なら、死体が見つかる心配はないだろ？

どこかに埋める方法もあるけど、埋めたら掘り返される心配がある。
だから、食べるんだよ。

さつきと死体処理を済ませよう。

夜道を歩く。

死体処理を一時間半で済ませて、シャワーを浴びて、今しがた粉々に碎いた骨を「ゴミの中に捨ててきた。

ふと、立ち止まって夜空を見上げる。

雲が月を隠し、ぼんやりとしか月の姿が見えない。

雨が降りそつで、降らない。

あの日も、こんな夜だった。

初めて人を殺した、あの夜も。

まるで僕を闇に引き摺り込むように。

暗い闇が、拡がっていた。

僕は自ら、暗い闇の中に墮ちたんだ。

何もかもが信じられなくなつて。

もう何も、感じたくないくて。

少し、昔話をしようか。

僕が快楽殺人者になるまでの話を。

下らない話だ。

一年三ヶ月前・七月一日 そして、僕は快楽殺人者になつた（前書き）

そして、僕は快楽殺人者になる

何もかもが信じられなくなつて
何も感じたくない

狂つてしまえば何も感じなくて済む

そう思つて

お前達のせいだ

人は簡単に変われない？人は簡単に変われる？ 変わるし、変わ
れないさ

一年三ヶ月前・七月一日 そして、僕は快樂殺人者になつた

授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響く。

チャイム鳴った途端、皆一斉に下校の準備を始める。

僕は日直だから学級日誌をつけて担任に渡してから、鞄に教科書や筆記用具を詰める。

正直、家には帰りたくない。

でも、帰るしかない。

憂鬱しか感じない。

「杜塚、そんな難しい顔してどうしたよ？」

薪沢が元気よく話しかけてきた。

薪沢が羨ましい。明るいのは、家族間が良好だからだろうから。僕の家族なんて……。

「お前さあ、なんか最近暗い顔してんの多くなつたよな。なんかあつたのか？」

「別に。何もないよ」

そう、他人に言つことは何もない。

「薪沢、部活でしょ？早く行つた方がいいんじゃない

「そうだな。じゃあ、また明日な！」

「うん。じゃあね」

元気よく手を振ってきたから、振り返す。

帰りたくないけど、帰ろう。

「ただいま……」

帰つてくる返事はない。今日もいなか。
リビングに入ると、母さんがいた。

化粧をしてよそ行きの服を着ている辺り、今日もどつか行くのか。
「あら、お帰りなさい。母さん今日も夜遅くなるから。夕飯は冷蔵庫にあるからね」

僕のことなんか見ずに言ひつ。

「うん……ありがと」

聴いていたのか分からぬけど、母さんは僕の横を素通りして玄関に向かう。

毎日毎日、どこに出かけるんだろう。

化粧を念入りにして、服もおしゃれな物を着て。

父さんも一年前くらいに、仕事が成功してからあまり家に帰つてこない。

兄さんも、毎日友達のところで寝泊まりしてゐる。
家には、僕一人だ。

だから、家にはあまりいたくない。

一人は、寂しいから。「着替えよ……」

とりあえず着替えよう。一階の自室に入る。

Tシャツとジーパンに着替えてテレビをつけるけど、視線はそっちに行かない。ただ、なんとなくつけているだけ。

……昔はこんな感じやなかつた。

父さんの仕事が忙しくなつて家を空けがちになつたのが、およそ二年前。

その頃から、徐々に家族の空気がおかしくなつてきたんだ。それ以前が、ドラマに出てくるような理想の家庭という訳じやなかつたけど、それでも、楽しいことがあれば会話が弾んだし、皆で笑い合つたし、父さんが一月も帰つてこないといふこともなかつた。確かに父さんの仕事が成功してお金は手に入つたけど、喜ぶ気には到底なれない。

兄さんは、喜んでるけど。

テレビ画面の中で笑い声が起る。

なんだか、一人ぼっちで立つてゐるような気持ちになつた。

昔はそんなこと思つたことなかつたのに。

母さんがいて父さんがいて兄さんがいて、僕がいた。少なくとも、家の中は安心出来る場所だつたのに。

今は、僕しかいない。

氣の置けない友達が一人でもいれば、こんなこと思わないのかな……。

家庭があれば満足だつたんだ、昔は。

車のエンジン音がした。窓の外を見ると、車がガレージ停まつたみたいだ。

珍しく父さんが帰つて来たらしい。

昔なら嬉しかつただろうけど、今は顔を合わせてもなんだかぎこちない顔しか出来ない自分が、嫌だつた。「おかげり

一階に下りて、父さんに声をかける。

「ただいま。久しぶりだな。元気にしてたか?」

「うん。元気だよ」

本当に、父さんは僕のことを気にしているんだわ? か……。

「母ちゃんと那奈瀬は遊びました?」

「母ちゃんも兄ちゃんも出掛けたる」

「やつが。眞で食べよつと思つて寿司を貰つてきたんだが。仕方ないな。一人で食べるか」

「うん……」

父さんは言えなければ正直、気まずい。

仕事が順調にいったるのか、父さんは機嫌がよかつた。

お酒を飲んで、寿司を食べながらにこやかに話すその姿は若々しい。父さんの方が母さんよりも三つ年上のはずなのに、父さんの方が若々しく見えるくらい。

ほとんど父さん一人が話す。確かに寿司は美味しいけど、やっぱり気まずい。

「やはりこの寿司はつまらない。今度から出前を取る」とするか

「うふ…… そうだね」

父さんの声と僕の相槌が対照的なのに、父さんはそんな粗鄙クビキにも眞づかないで、上機嫌に笑っている。

「どうだ、学校の方は」

……何が起こつても父さんが何かしてくれる訳じゃないのに。家庭そつちのけで仕事に行くくせに。

「うふ、楽しくやつてるよ」

「そうか。それはよかった」

……本当は関心もないくせに。

僕はいつからこうなったんだらう。内心と出る言葉のずれは激しく、本心を言葉に出すことはまずない。

それは家族だけじゃなく、誰に対してもそう。

「どうした? 元気がないな」

「もう? なんでもないよ」氣づかれないようじ、そつと、溜息を吐く。

本当に最近は家族だけじゃなく、幼馴染みの薪沢に対しても本心をさらさない。嫌気が差す。

いきなり、父さんが真面目な声で呼んだ。

「鼎」

「何？」

「仕事が忙しくて家に帰れないことは、済まないと思つていいんだ。これじゃあ一家の主として失格だわ。だからな、鼎に對して出来る」とはしてやりたい

思わず父さんの顔を見る。わざと違つて真面目な顔をしてる。

「だからな……」

「うん」

「鼎の口座にとつあえず一十万振り込んでおいた。これで当分は不自由ないだろ?」

「うだ、と父さんは笑う。

「うじて……うじて分かつてくれないんだろう?」

もしかしたら、ってそう思つたのに。また昔みたいに、家族が一緒に、つてそう思つたのに。

父さんの考えはそうじやなかつた。

少しでも期待した僕が馬鹿みたいじやないか。

お金なんて欲しくない。そんな物が欲しいんじやない。

そんな物では埋め合わせることが決して出来ない何か、その何かが欲しいのに。

僕以外は、誰も、欲しくないのかな……。

「うした?一十万くらうでは足りないか?」

少し不安そうな顔になる。でも、氣にしてるのは金額の多寡だけに

たか

過ぎない。僕の気持ちなんて氣にしてないんだ。

諦めて、少し笑う。

「ううん、ありがと」

「やうか。よかつた」

父さんが安心したように笑う。父さんはまだここにいるんだろう。

無意識のうちに、溜息を吐いた。

- 薬沢 波哉斗の視点 -

宿題に集中出来ねえ。幼馴染みの杜塚のことが、びつしても頭をよぎる。

あいつが、寂しそうに笑うからだ。

絶対、あいつは無理してる。

なんでもない、って言つて笑う時こそ、あいつが無理してる時だ。

少しくらい、思つてることを言えばいいのに。

言われても、俺は何も出来ねえけどさ。

でも、口にするだけでも違うんだ。

いくらでも聞いてやるのに。

やっぱ俺じゃあ、頼りねえのかな。

寂しそうに笑うから、気になるじやねえか。

あいつは優しくて、傷つきやすい奴だから余計気になる。

自分の中に溜め込んで、外に出さうとしない。

なあ杜塚、あまり溜め込みすぎると、こいつがパンクして取り返しの

つかないことになるぞ。

そうなる前に、誰でもいいから思つてることを言えよ。

言えるんなら、家族に言つた方がいいと思うけどな。

でも、お前の性格を考えたら、家族に言えないんだろ？

本当は寂しくて寂しくてたまらないのに、口に出せないんだろ？

俺に出来ることがあつたら、いくらでもしてやるのに。夕食を食べた後、父さんはまた仕事に行つた。

本当に仕事ばかり……。

やつぱり、本当は、僕のことなんか気にしてないんだ。どうでもいいんだ。

ねえ、家族なのに、どうしてこんなに遠く感じるの？

手を伸ばしても、届かない。

言いたいことはたくさんある。でも、言葉にしてしまえば、壊れかかっていたとしても、からうじて繋がってる家族の繫がりさえも、壊れてしまう気がして、怖くて、言葉に出来ない。

ねえ、手を伸ばして、いつか届くと、信じ続けていいのかな……。

その時、玄関の扉が乱暴に開いて、閉まる音がした。

一階に下りる。母さんが、帰ってきた。

服装も髪型も乱れて、泥酔して、帰ってきた。

「あ～、鼎、ただいま～。あはは、飲み過ぎちゃった」

…………母さんのこの姿を見るのは、嫌いだ。
こんな人じやなかつたのに。

「大丈夫？ちゃん歩ける？」

「あはは、大丈夫～」

立ち上がり千鳥足で歩く。全然大丈夫じゃない。

下手したらこじけて、どうかに頭をぶつけそう。母さんの手を取つて、リビングに連れて行く。そのまま、ソファーに座らせる。

「大丈夫？水でも飲む？」

「わうね～、持つてきて～」

冷蔵庫を開けて、中から水を出してコップに入れる。

「はい」

「ありがと～」

コップを受け取り一気に飲み干す。

「母さん、父さんが帰ってきたよ」

そつまつたら、母さんは嫌そつに顔を歪めた。

「ふん、あんな奴。帰つてきて何するのよ。ただご飯食べて、自分の自慢するだけじゃない。私の話なんか聽かないくせに。あんな奴、いつ死んでくれた方がせいせいするわ」

……やめてよ。お願いだから、僕の前でそんなこと言わないで。

「僕、もう寝るね。おやすみ」

「あー、わうわおやすみ～」

自室に戻つて、ベッドに潜る。

寝るには早いけど、寝てしまおう。

眠つてる間だけは、何も感じずに済むから。何も考えずに済むから。目を閉じる。目尻から、涙が流れるのを感じた。

はつとして頬も触る。濡れていた。

気づかぬいうちに、涙が流れいたらしい。

……母さんは、僕が泣いていたのも、気づいてくれなかつたんだ…。
目覚ましの音で目を覚ます。

また、朝が、今日が来た。

朝は嫌いだ。どんなに辛くとも、苦しくても、悲しくても、容赦なく今日といつ日が来たことを、突きつけるから。

カーテンを開ける。いつそ腹が立つくらいの快晴が広がつてゐる。空がどんなに晴れても、僕の心が晴れることはない。

昨日の母さんの『いつそ死んでくれればせいせこするわ』と、いう言葉が耳から離れない。

昔は仲のいい夫婦だつたのに。今は、冷えきつてゐる。なのに、父さんはそれに気づいてない。

母さんはきっと、父さんと離婚したらお金に困るから、離婚しないだけなんだ。

母さんと父さんの溝を埋めるなんて、きっと絶望的。もう、無理なのかな…。

制服に着替えて一階に下つる。

「おはよっ、ひみつおー、鼎。よく眠れた?」

「うん。大丈夫」

今日は機嫌がいいみたいだ。

機嫌が悪いと、起きてこないから。

朝食がちゃんと並べられてるのも、久しぶりな気がする。

座つて黙々と食べる。機嫌がよくても、母さんは父さんの愚痴を溢すに決まってるから。

あんな愚痴は聴きたくない。

母さんが父さんのこと嫌いなのは知ってる。でも、今は家族じゃないか。

家族なのに、ああいう風に罵るなんて悲しいじゃないか。

僕だって、父さんに言いたいことはたくさんあるよ。でも、罵りたいんじゃない。

ただ、気づいて欲しいだけ。

僕のいないところでは仕方ないよ。でも、お願いだから僕の目の前で、父さんを罵るなんてやめて。

締めつけられるように、痛むから。

どこが痛むのか、何が痛むのか、分からなくなつたけど。「なあ杜塚、今日これから暇か?」

今日の授業が全て終わつて帰る準備をしてたら、薪沢がそう訊いてきた。

「暇だけど、何?」

「ちょっと十分くらい残つてさ、ここを教えて欲しいんだよ

薪沢が数学の教科書を取り出して、教えて欲しくて欲しいという場所を指差す。

確かここ、前にも教えなかつたっけ?

「薪沢……あ、前にも教えたよね？分かりやすいように丁寧に、教えてはずなんだけど」

「マジ……めん！また分からなくなつたんだよ。教えてくだされ！」

「教えて欲しいのに、ふざけるのはどうかと思つけど。
まあいいか。どうせ帰つたつて僕一人なんだし。」

「ノート貸して。何度も口で説明するのも面倒だから、ノートにまとめる」

「いいのか？ ありがとう杜塚！」

薪沢からノートを受け取つて、大切な部分をまとめていく。
十分くらいで終わつた。

「ありがとう杜塚。マジ助かつた」

「帰り道を薪沢と二人で帰る。

「いいよ。それで理解出来なかつたら、薪沢の理解力が皆無つてことだからね。次は僕もお手上げだからね」

「分かつた……なんとか分かるようにする」

本当に薪沢は表情がよく変わるなあ。見てて飽きない。

「…………？」

ふと、後ろを振り返る。誰もいない。今、視線を感じたんだけどなあ。

気のせいなのかな？

「杜塚？どうした？」

「なんか今、視線を感じた気がしたんだけど……気のせいかな」

「気のせいじゃね？」

「そり……だね、そりだよね」

最近いろいろと神経が参ってるから、敏感になってるだけだよね。きっと。「でもさ、気のせいじゃなかったらどうするよ？」

そんな気味悪いこと言わないでよ……。

「考えたくないなあ……」

「あり得るぜ？学校の女子とか。お前、密かに女子に人気あるの知らねえだろ？」

「知らない。僕が？まつさか。僕のどこがいい訳？」

笑って手を横に振る。僕が人気あるなんて信じられない。からかわされてるだけだ。

「嘘じやねえよ。本当に人気なんだぜ。可愛いって

可愛いなあ……。これでも一応男なんだけど。なんだか複雑……。

「可愛いねえ……。僕、男なんだけどなあ」

「お前さあ、自分の顔、理解してねえだろ? 同じ男の俺でも思ひついで。お前は絶対、可愛いに分類されるつて」

自信満々で言つたじやないよ、それ。

「ねえ、十五歳の男子に可愛いはないよ。あまり嬉しくない

「ま、そりゃそうだな。補足として、学校のホモ共にも人気なんだぜ?」

それを聞いて一気にぞわっと鳥肌が立つた。

「やめてよー! 冗談だよね、それー?」

僕の通つてる学校には、なぜかホモと呼ばれる人種が多い。

「いや、これがマジなんだよ。密かに杜塚を食つちゃおつつて奴がいるから、氣をつけろよ?」

「あ~やだやだ。気持ち悪い。鳥肌が収まらないよ。ビジョしてくれるの」

少し恨みを込めて睨んでやる。

「なんだ、あいつのこと思い出したのか?」

にやにやと面白そうに笑う。他人事だと思つて。

他人事だけど。

一度だけゲイに付きまとわれたことがある。
かなりしつこかつた。いくら断つてもしつこく迫つてくるし。

挙げ句の果てが襲われかけるし……。

薪沢が助けてくれたからよかつたけど……助けが来なかつたりどうなつてたか。

トラウマだよ……。

その後、そのホモは引っ越したから、今はどうしてるのか知らない。

「じゃあ杜塚、今日はありがとな～。また明日ー。」

「うん、また明日」

手を振つて別れる。

……さて……嫌な日常に戻ろう。「…………！」

視線を感じて振り返る。

誰もいない。けど、確かに視線を感じる。

誰かが僕を見てる。

ねえ薪沢、気のせいじゃなかつたみたいだよ。
じつと僕を見つめて、離さない。

姿を見せずに、じつと見つめてくる。

怖い……。

嫌だ。怖い。

あの視線、ねつとりとしてて僕を離そつとしないから、怖い。
嫌だ。僕を見つめないで。

全速力で走る。まだ僕を見つめる。

あまりいたくないけど、早く家に帰ろ!つ。
あの視線にずっと晒されるよつました。

「ただいま……」

返事はやつぱり返つてこない。
もうどつか行つたのかな…。

さつきの視線、家に入るまでずっと追いかけてきた。
馬鹿なことをしちゃつた。あの視線の誰かに、家の場所を教えるよ
うなものだ。

なんで僕を見つめるんだろう。

怖い。誰か大人で、相談出来る人がいたらしいのに。
寂しくて、怖くて、どうしてこんな思いばかりしなきゃいけないの?
誰か助けてよ……。リビングに入つて電気を着ける。
そしたら、母さんがソファーに座つていた。

「母さん? 電気も着けずに何してるの?」

のろのろと僕を見る。

僕を見るその目から、霸氣も生氣も感じられない。

そして、すぐさま視線を足下に戻す。

何があつたんだろう。

「何があつたの?」

「あの人気が帰つて來たのよ。それで喧嘩したの。本當になんなのよ、
あいつ。金を持つてなかつたら今頃離婚よ! 金を持つてることに感

謝るのね！

怒りを露にして、叫ぶように言ひ。

泣きそうになるのをじらえて、唇を噛む。

そんなこと、聴きたくない。

ねえ、いつからそうなったの？

仲がよかつたはずなのに。
父さんが仕事ばかりで、家庭のことなんかそっちのけだから、腹
が立つの？

それとも、何か別の理由があるの？

気づかれないように、溜息を吐く。

これじゃあ、僕の話なんか訊いてくれそうにない。
訊いても、相槌するだけに決まってる。相談にならない。

黙つてリビングを出る。

母さんは一度も、僕に視線を戻すことはなかった。

ベッドに横になる。何もする気が起こらない。

このまま、離婚になっちゃうのかな…。

ふと、窓から外を見る。ほぼ満月まで満ちた月が見えた。
その時、視線を感じた。あのねつとうとした視線。

「…………！」

嫌だ。まだいるの？なんで帰ってくれないの。

怖い、嫌だ、見つめないで。

これ以上、僕を追い詰めないで。

怖くて、布団を頭から被る。

もう嫌だ。こんな思いばかりもう嫌だ。

助けて。

誰か助けて……。最初に視線を感じた日から、もひ回りへ回りへ経つ。あの視線は毎日、僕を追ってくる。

いくら逃げようとしても、僕を捕まえて離さない。

どこまでも追ってくる。

もう嫌だ。なんで僕を見つめるの。

怖くて怖くて仕方ない。

いつか、あの視線に喰われてしまいそうで怖い。

蜘蛛の糸に絡めとられた獲物が、必ず蜘蛛に喰われてしまつようこそ、いつか喰われてしまいそうで、怖い。

今日は土曜日。学校は休み。

一日家にいよう。外に出たら、あの視線が追つてきやうで怖い。

その時、携帯が鳴った。薪沢の着信音じゃない。

誰だらう。

携帯を開くと、わたなべ 渡部 まさみ 真美と出でている。

渡部さんはクラスは違うけど、同じ中学三年の同級生だ。

最初に声をかけてきたのは渡部さんだ。そしてなぜか、携帯番号と

メールアドレスを交換した。

たまに僕を遊びに誘つてきたりする。

携帯に出る。

「もしもし」

『もしもし、杜塚君? あのね、今日空いてる?』

「空いてるけど、どうしたの?」

『数学と英語でね、分からないところがあるの。杜塚君、数学も英

語も得意でしょ？教えてもらえないかなあと思つて。私がそつち行くから》

「いいよ、僕が渡部さん家に行くから。途中まで迎えに来てくれる？渡部さん家どこにあるか知らない」

《本当に？ありがとうー。じゃあ駅に待ち合わせでいい？》

「うん、分かった。じゃあ、また後で」

《ありがとう。じゃあね》

通話を切つて携帯を閉じる。

渡部さんには悪いけど、うつ病といふ気晴らしにはなる。さて、出かける準備をしよう。きっと、この時に全ての歯車が完全に狂つたんだろうね。

最初から、軋んで狂い始めてた歯車が、この時に完全に壊れて、狂つたんだよ。

この時に違う選択をしてれば、また別の未来があつたんだろうね。どつちにしろ、明るい未来なんてないけど。

駅に着いた。渡部さんはまだ来てない。

「早く来すぎたかな……」

それから十分くらじ経つて、渡部さんが来た。

「！」あ～ん。遅くなっちゃった。待つた？

走つて来たのか、息を切らしてゐ。

「ううん。僕もさつき来たばかりだから

「やつ? ならよかつた。じゃ、早速行こ」

「うふ

何かいいことでもあつたのかな。すじぐ機嫌がよそりと見える。
二十分くらいして、渡部さん家に着いた。

「渡部さん家、大きいね」

僕の家もそれなりに大きいけど、渡部さん家は他の家と比べても大きい。

「さ、入つて入つて」

「あ、うん。お邪魔します」

「あ~、頭パンクしそう。杜塚君、休憩しない?」

「うん。そうだね。休憩しようか」

「じゃあ、飲み物持つてくれるね。お茶とジュースどっちがいい?」

「僕はお茶でいいよ」

「分かった。ちょっと待つててね」

渡部さんが部屋から出る。

あれから一時間半くらいは経つ。いつの間にか結構時間建つたな。

言つたら悪いけど、渡部さん、分からなこと「*ハヤシ*だよ…」。連立方程式とか一次関数とか証明とか、高校受験に出できそつなものばかり分からないなんて。

もう少し詳しく説明した方がいいかなあ。

渡部さんが戻つて来た。

「はい、お茶。よく冷えてるからおいしくよ」

「ありがとう」

「チップを受け取る。

「…………？」

底に何か沈んでるけど、なんだろう?「*ハイ一バッグ*のカスかな。それにしてはなんか白い感じがするけど。

一口飲む。気にする程でもないけど、後味がなんか苦い。

「ねえ杜塚君、私、受験ヤバイかなあ?」

「ん~、数学は少し、ヤバイかもだね…」

「やつぱりー!杜塚君、もうちょっと詳しく教えて!..」

「うん。分かつた」「あ~、終わったー!杜塚君ありがとね」

「うん。分からなかつたらまた言ひてくれていーから

言いながら田を擦る。

なんだろ？……さつきから異様に眠くて仕方ない。

早く帰つた方がいいかな。これ以上眠くなつたらまずいし。

「杜塚君？どうかした？」

「あ……いや、ちょっと眠いだけだから大丈夫」

そう言つたら、渡部さんの唇が少し笑つたように見えた。
気のせいだよね？

「少しじゃなくてさ、すぐ眠いんじゃない？」

「なんで、そんなこと聞くの？」

「だつて、さつき睡眠薬入れたから」

睡眠薬……？ 睡眠薬つて、あの不眠症の人気が眠るために使つ、あの

睡眠薬？

どうして……？

「なんで、僕に……？」

ああ、駄目だ。身体を支えるのが辛くなつてきた。身体を支えきれない。

ソファーに身体をもたれさせる。目を開けているのも、辛い。

眠っちゃいけない。でも、容赦なく意識が奪われていく。
渡部さんが僕の耳元で、嬉しそうに囁いた。

「だつて、彼が杜塚君の身体が欲しいって言つんだもん。『ごめんね。』
彼におとなしく抱かれてあげて？」

抱かれてあげてって、どういう意味？

彼って、誰？

僕に、男に抱かれろって言つたの？

嫌、だ。助けて、誰か…。

ああ、そうだつた。助けてくれる家族なんて、いないんだつた…。

もう、意識が…。

意識を失う瞬間に、目尻から涙が流れしていくを感じた。

- 渡辺 真美の視点 -

やつと杜塚君が眠つた。

「ごめんね？ 睡眠薬なんか飲ませちゃつて。

でもね、援助交際してる彼が杜塚君を欲しいって言つんだもん。

連れてきてくれたら十万もくれるって言つんだもん。

実際杜塚君、男の子にしては身長も低くて華奢だし、何より可愛いもんね。

男子と分かつても、抱きたくなるのかもね。

「ごめんね？ 私のために犠牲になつてね？」

彼を呼びに行こ。「んつ……」

ふと、目を覚ます。

見慣れない部屋だなあ……。いつの間に寝たんだろ。

あれ……？ なんで僕……、寝てたんだつけ……？

覚めきらない脳で必死に記憶を辿る。

「やつだ、僕……睡眠薬飲まされて……」

腕を見るとベッドに縄で、頑丈に縛られている。ほどこうとしてみるけど、ほどけないよつて縛られてるのか、びくともしない。

焦りばかりが募る。

渡部さんは僕に、彼におとなしく抱かれてあげて、って言つてた。つまり、眠らされてる間に、その“彼”が来ているに違いない。ほどけてよ、お願ひだから。なんでほどけてくれないの。

嫌だ。嫌だよ。男に犯されるなんて嫌だ。

なんで、なんでこんな目に合わなきゃいけないの？

こんな目に合わなきゃいけないようなことを、僕がしたの？

してないじゃないか。ただ、望んだだけじやないか。

昔のよつて、仲のいい家族に戻りたいって、望んだだけじやないか

……！

それの、何がいけないの？

その時、ドアが開いた。

「…………！」

渡部さんと、見知らぬ男が入ってきた。

「起きた？」めんね。騙しかけつて

悪びれた様子もなく、微笑みながら言つてくる。
男が近づいてくる。

「嫌だ… 来ないで！」

叫んでも無駄だつて分かつてゐる。

「怖いのか？怖いだろ？な。俺の視線をずっと怖がつて避けてたもんな」

「えつ……？」

今、なんて言ったの？

俺の視線をずっと怖がつて避けてたもんな……？

「じゃあ、あなたが……ずっと僕を……？」

「もう少し。お前の身体を抱いてみたくな。お前は、の人と同じ感触がするのか？」

の人と同じ感触つてどうこう」と？

の人つて誰？

男が僕に覆い被さつてくる。

シャツを脱がせられる。男の舌と指が、僕の身体を這いずり回る。

「や……嫌……離して、やあああああつ……」

どれだけ叫んでも、這いずり回る舌と指は止まらない。
嫌だ、このままだったら僕は……。

「やだあつー離してーーつああああああああつ……」「……はあつ……
はつ……はつ……」

震える身体を搔き抱ぐ。呼吸が乱れて酸素をつまく吸い込めない。
痛い……。

「はあっ…………う、ううううう……」

涙が止まらない。

なんで、なんであんな怖くて、痛くて、嫌な思いをしなきゃいけないの？

「杜塚君、大丈夫？」

渡部さんの手が、触れようと伸びてくる。

「触るな！近づくな！」

「『めんね？』だってね、杜塚君を連れてきたら十万もくれるって言うんだもん」

十万……？それじゃあ、僕は、金のためにあの男に売られたっていうのか？

金なんかのために！

どういつもこいつも、金ばかり！

「はい。杜塚君のバッグ。彼がね、終わつたから帰つていひつて

何も言わずに鞄をひつたくつてこの家から出る。

早く家に帰つて風呂に入りたい。あの男の感触や唾液が、身体に残つてるから。

身体が、痛い……。

何かが、痛い……。家に着いてすぐに風呂に入つて、念入りに身体を洗つた。なのに、あの男の感触だけが、まだ抜けない。気持ち悪い。

痛い、身体中が、痛くてたまらない。

“痛い”。

痛いのは、身体だけ？

胸の奥が、痛くてたまらないのは、気のせい？

どこが痛いのか分からぬ。

何が痛いのか分からぬ。

どうして、助けてくれる家族がいないの？

ふと、鞄に見慣れない封筒が入っているのが見えた。

なんだろうと思つて、封筒を開ける。

「……っ…、ふざけるな…！」

封筒の中には、十万が入つてた。

これで、何も言つなつてことか？

力を込めて握つたせいで、封筒がぐしゃぐしゃになる。

「ふざ…けるな…………、ふざけるな！」

封筒を床に叩きつける。

「ふざけるな！僕は、こんなものが欲しいんじゃない！金なんかいらない！僕は、金なんかなくてもよかつたんだ！金なんかなくてもいい、平凡でも、ささやかなことで笑えた、昔のように仲のよかつた家族が欲しかつただけだ！昔のように仲のよかつた家族に戻りたかつただけだ！それの、何がいけないんだよ！」

虚しい静寂に吸い込まれていく。

叫んでも、誰にも届かない。

痛いのはどこ？

痛いのは何？

分からぬ。いつの間にか、分からなくなつた。

ぺたん、と床にへたり込む。

「うあああああああああつ……」今日は月曜日。学校は休んでる。

電話してないけど。

何もする気が起こらない。

昨日はたまに水を飲んだり、トイレに行つたりする以外は、何も食べずにずっと寝てた。

母さんは、僕がこんな状態でも気にならないみたいだ。

様子を見に来ることもなかつたから。

しかも、昨日の晩に出掛けてから帰つてこない。もうすぐで四時半になる。

やつぱり、僕のことはどうでもいいんだな。
胸の奥が痛い。怪我した訳じゃないのに。

なんでこんなに痛いのか分からない。

どうやつたら、この痛みは消えるんだろう。

どうしたら、楽になれるんだろう。

これ以上、こんな思いをするのは嫌だ。

その時、インターホンが鳴つた。

誰だろう。無視しこうかな……。

また鳴つた。一回二回としつこい。

仕方ない。出るか。すぐ帰つてもらえればいいことだ。

ベッドから出て玄関に向かう。

扉を開ける。

「薪沢……」

- 薪沢 波哉斗 -

「杜塚、お前、何かあつたのか？」

何かあつたとしか思えねえ。

泣きながら、疲れきった顔をしてる。

もしかして、自分が泣いてることに気づいてねえのか？

「別に。何もないよ。少しだるいだけ」

「嘘吐くなよ！ 何もなかつたんなら、なんで泣いてんだよー。」

はつとしたようひこ、頬に触る。

驚いてるつてことは、気づいてなかつたんだな。

「…れ、は……」

この期に及んでまだ言い訳するのかよ。

なんでも言つてくれねえんだよ。

「何があつたのか言え。言つまでも、帰らねえからな」

そう言つたら、諦めたように溜息を吐いた。

「分かつたよ……。話すから、中に入つて」

言われて中に入る。薪沢に一昨日あつたことを、全て話し終えた。
すごく驚いてる。当たり前か。

話したんだから、もういいよね。帰つてくれるよね。薪沢には悪いけど、今は一人でいたい。

「警察には行つたのか？」

「警察？なんで？」

何言つてるんだろう。どうして警察が出てくんの？

「だつて、こんなのはレイプじゃねえかー警察に行つて話した方がいいって」

「警察が何をしてくれたっていうの？あいつらを、裁いてくれるの？警察に行つたって何もしてくれないよ」

「そんなの、分からねえじゃねえかよー」

「ああ、イライラする。なんでそんなに食い下がるんだよ。警察が、何をしてくれるっていうんだよ！」

「行つたつて無駄に決まつてるー僕は子供で、あつちは大人なんだ！あいつらに、うまくあしらわれて終わりに決まつてるー家族でさえ何もしてくれないので、他人に何が出来るっていうんだよ！」

「でも、行つてみないと分からねえだろ。だから」

「もういい。もういいんだ。

家族でさえ何もしてくれないので、他人に期待はしない。家族にも、もう期待しない。それでいいじゃないか。

「帰れよーもういいからーお願いだから、もつ帰つてよー」

そう言つたら、薪沢が悲しそうな顔をした。

何か言おうとしたけど、言葉が見つかなかつたのか、結局何も言わなかつた。

「じゃあ……帰るや」

「うん」

薪沢を見送つて鍵を閉める。

「「めん、薪沢……。僕のことは気にしなくていいから……、本当は、薪沢が心配してくれたのは嬉しかつたよ。でも……、僕なんかのために、薪沢を巻き込みたくないんだ……」

涙が止まらない。

胸の奥が痛くてたまらない。薪沢が帰つてから、ベッドに横になる。いつの間にか空は暗闇に包まれてる。
そういうば、昨日から何も食べてない。流石にそろそろ何か食べた方がいいかな……。

部屋から出てリビングに向かつ。

鍵が開く音が聴こえた。扉が乱暴に開かれる。

母さんだつた。

慌てた様子だけど、その様子じやあまた出掛けんんだね。

「あ、鼎、すぐ出掛けんから」飯は適当に食べといてね

「うん……」

小走りで自室に向かつ。

覗いてみると、服や化粧道具を大きめの鞄に詰め込んでる。

泊まり掛けか……。二田へらいこは帰つてこないな……。

自室に向かう。

考えたくないけど、不倫の一文字が浮かぶ。
今まで考える度に振り払ってきた言葉。

部屋に入る。

違うよね。不倫なんかじゃないよね。
せめて、それくらいは信じていいよね。

服を着替える。

母さんには悪いけど、尾行しよう。
尾行して、不倫じゃないと確かめよう。
そうすれば、不安のひとつは消える。
ねえ、母さん。不倫なんかじゃないよね?
せめて、それくらいは信じさせてよ。

玄関に向かう。

母さんが玄関を出たところだつた。
僕も鍵を閉めて家を出る。

どこかに向かう母さんの後ろ姿は、嬉しそうに見えた。母さんの後

をつけた。

どうやら駅に向かうらしい。

全然、僕の尾行に気づいてない。
ねえ、嬉しそうにどこに行くの。

やっぱり家族より、そっちの方が大切なの?

僕は、寂しくてたまらなかつたのに。一人は嫌だつたのに。

母さんは、それを知つてははじやないか。

それでも、そっちの方が大切なんだね。

母さんが立ち止まつた。

僕も建物の影に隠れて立ち止まる。

しばらくして、嬉しそうな顔をして手を振り出し始めた。

母さんの視線の先に目を向ける。

「…………あ、ああ…………」

母さんの手を振る先には、あの男が、いた。

僕を犯したあの男。

母さんは嬉しそうにあの男に駆け寄る。

「嘘…………だ……、嘘だって、言ひてよ…………」

母さんは男に抱きつき、口付けを交わす。

僕が見ているのも知らないで。

「あ、ああ…………」

僕の中で、かろうじて形を保っていた何かが、壊れる音がした。鍵を開けて家の中に入る。

どうやって家まで帰つて来たのか覚えてない。
一階に向かい部屋に入り、ベッドに倒れ込む。
最悪だ……。信じたものが、悉く（ことごとく）裏切られる。
胸の奥が、痛くてたまらない。

「ねえ、母さん……、僕は、その男に犯されたんだよ……。それを知つて付き合つてゐるの……」

不倫だけの方がまだよかつた。

よりによつて、不倫相手があの男なんて。
どう見ても、深い仲。

ねえ、自分の息子を犯した男に、抱かれてるんだよ。
それを知つてて、抱かれてるの。

腕に痛みが走る。

腕を掴む手に力が入り過ぎて、爪が皮膚を傷つけたみたいだ。
ほんの少し、血が滲む。

涙が滲む。

もう、嫌だ……。

なにもかも、嫌だ……。

「あああああああああああっ！！」ふと、目を覚ます。
どうやら、いつの間にか寝てたらしい。

枕が濡れてる。寝ながら、泣いてたのか。

今まで起こったこと全てが夢だったら、どんなにいいだろ？
あの男さえいなければ、母さんが今みたいになることはなかつたの
かな。

「ああ……そうか……、あの男の言つてた“あの人”って、母さん
だつたんだ……」

そう考へれば辻褄が合つ。

はは……、不倫相手の息子に欲情するつて、どんな神経してんだよ。
僕がどれだけ怖くて、痛くて、傷ついたと思つてるんだ！
僕を犯した後、母さんを抱いたんだろう？
あんな男に抱かれる母さんも、神経疑うよ。
信じてたのに……。どれだけ、傷ついたと思つてるんだよ……。
ねえ、何を信じればいいの？
それとも、信じていいものは、もうないの？
ふと、車が止まる音がした。

窓から覗くと、父さんの車が止まっている。

期待しないって思つたけど、やつぱり期待してしまつ。ねえ、話を聞いてよ。せめて、話くらい聞いてくれるよね？

一階に下つると、父さんは玄関で靴を履いてた。ねえ、もう行つちやつの？少ししゃべり、話を聞いてよ。お願ひだから。

「父さん……」

「ああ、鼎。悪いな。すぐ行かなければならぬんだ。すぐ帰つて来るからな」

そつと家を出る。

伸ばしかけた手を、下ろす。

すぐ帰つて来るつて、いつ？

帰つて来ないくせに！

なんで、なんで氣づいてくれないんだよ！？

僕が泣いてるのに、なんで氣づいてくれないんだよ！

僕を見たじやないか。僕の顔を見たじやないか。

なのに、なんで氣づいてくれないんだよ！

ぺたん、と床にへたり込む。

「もつ……こい……、もつ、嫌だ……」

こんな思いばかり、もう嫌だ。

「もつ……疲れた……」

「こうしたじ、樂になれる？

「こうそ、壊れてしまえば……樂になれるのかな……」

そうだ、壊れてしまえ。

「いっそ、狂つてしまえば、楽になれるのかな……」

そうだ、狂つてしまえ。

そうさ、壊れてしまえ。狂つてしまえ！
これ以上何も感じなくて済むように。

傷つかなくて済むように。
壊れてしまえば、狂つてしまえば、何も感じなくて済む。

傷つかなくて済む。

壊れてしまえ、狂つてしまえ。

壊れるために、狂うために、復讐を。

あの三人に、復讐を。

短絡的発想とか知るか。

苦しみから逃げてるとか知るか。

殺人が罪とか知るか。

殺してしまえ。

「まずは、渡部 真美。お前からだ」復讐するにしても、警察に捕まらない方法を考えないと。

まずは殺すために、人気の少ない場所か、民家から離れた廃墟を探さないと。

これにはうつてつけの廃墟がある。

家から四十分くらい歩いた小さな山の中に、ぽつんとひとつそりと建つていて、忘れ去られた廃墟。

元々は事務所として使われていたらしい。

中さえ綺麗に掃除すれば、十分使えるはず。

あそこなら昼間でさえ人通りが少ないし、夜なら人気なんてゼロだ。
殺害場所はあそこでいい。

殺す方法はどうしようか。

あつたり殺すんじゃつまらない。

ゆつくりと、じわじわと苦痛を与えて、いたぶつて殺してやる。
ナイフだったら、ゆつくり苦痛を与えて、いたぶれるかな。

切りつけて血を流させて、出血によつて命が流れていく恐怖を、味
わわせてやろうか。

命がじわじわと削られて、死が向かってくるのを味わえればいい。

殺害道具はナイフにしよう。

調達しないと。

最後に、渡部 真美をどうやって誘き寄せよつか。

直接電話したら怪しまれそうだし。

ああ、そこまで頭いい訳じゃないから、適当な理由をつけねばきっ
と来るな。

援助交際をしてるんなら、金を渡すフリをすれば、飛びついてくる
に決まってる。

待つてろ、渡部 真美。お前を殺してやる。

いたぶつて散々苦しめて、殺してやる。

僕があとなしく黙つてると思うなよ。

ずっとひた隠しにしてた、僕の中の凶暴な破壊衝動を、存分に解放
してやる。

わあ、準備を始めよう。早速準備に取り掛かる。

まずは廃墟を使える状態にしないと。

箒とかバケツとかは、ゴミ捨て場から拾つてこよう。ビニール袋
んだし。

しつちゅう落ちてるしね。

雑巾だけ持つて行こう。

洗面所に行って雑巾を持ってくる。

流石に雑巾をそのまま鞄に入れる気にはなれないから、ビニール袋

に入れて鞄に入れる。

さて、簞とバケツを探しに行こう。

「ん……、ここにもないのか……。ショッちゅう落ちてるのよ。人が欲しい時に限ってないなんて」

近くのマンションのゴミ捨て場を二ヶ所見たけど、なかなか見つからない。

こういう時に限ってないなんて。

「……？」

奥の方で何かが光ったのが見えた。
ゴミを退けてみると、ナイフが落ちてた。

拾つて眺める。

刃渡り十五センチくらいのナイフ。刃こぼれしていないし、綺麗だ。
少し手入れすれば、十分使える。
思わぬ収穫だね。買わなくて済む。
ナイフを鞄に入る。
後は簞とバケツを探すだけ。

家から持つてきた方がよかつたかな。

まあいいや。ゴミ捨て場はいくらでもあるし、すぐ見つかる。

次の場所に行こう。「やつと見つけた」

六ヶ所目の一「ミ捨て場で、やつと簞とバケツと見つけた。

今思えば、家から持つてきた方が確実によかつたよね。時間かかることもなかつたし。
さて、廃墟に向かおう。

廃墟の扉の前に立つ。扉は思つたほど劣化していない。
開けて中に入る。

流石廃墟。埃や蜘蛛の巣やらですごい。

一歩足を踏み出すだけで、埃がすごい舞い上がる。

鞄に鼻と口を覆える布は入つてたかな。

作りは至つてシンプルだね。

二階に続く階段と、シャワー室と奥に部屋があるだけだ。

奥の部屋に入る。意外と広い部屋だ。

机と椅子が部屋の隅にぽつんと置かれてて、何故かベッドが置いてある。

折り畳み式のベッドだ。使ったら使おう。

閉じてあつたから広げてみる。

違和感なく広げられた。

錆び付いてもないし、十分使える。

鞄の中に布が入つてないか探す。

あつた。これで埃は防ぎきれないけど、ないよりはマシ。
さて、掃除に取りかかるつ。

多分三時間くらいかけて、ようやくこの部屋と廊下と、シャワー室の掃除が終わる。

「やつと終わった……。それで十分使えるね

どうしても取れない汚れは仕方ないけど、埃や蜘蛛の巣は全部取つた。

そういうえばシャワーって使えるのかな。

廃墟だし使えないか。

まあ、確かめるだけ確かめよう。

シャワー室に入り、蛇口を捻る。

しばらく流していると茶色い水は出なくなり、透明な水が出てくる。

触つてみると温かい。

「まさか使えるなんて。好都合だけど。ちやんと管理されてないのかな」

まあ、そんなことばざりでもいいはず。

蛇口を閉める。

これで大体の準備は整った。

後は、渡部 真美を呼び出すだけ。

明日の夜、決行しよう。

善は急げってね。

人を殺すのはどんな感覚がするのか、楽しみだ。朝になる。

学校はどうじょうか。行く気にならないし、休んでしまおう。

渡部 真美に電話でもしてみようか。

携帯を鞄から取り出して、通話ボタンを押す。

すぐに出た。

『もしもし。杜塚君、どうしたの?』

普段通りの声。僕をあんな目に合わせたことを、なんとも思つてないんだな。

まあいいや。僕の怒りと憎悪を、存分にぶつけ味わわせできる。

「今日、夜空てる?」

『空いてるけど、何?』

「ちょっとぞ、今日の九時に、大駿公園まで来てほしいんだけど、大丈夫?」

『いいけど、なんの用事?』

「来てくれたなら教えてあげる」

この女なら、別に金なんか口実にして誘き寄せなくても、いつ言えば簡単に引っ掛かってくれるんだった。

『ん~、分かった。九時だよね』

「うん。待ってるよ」

通話を切る。

本当に楽しみに待ってるよ。午後八時十三分。そろそろ家を出てもいい時間だ。

日中はナイフの手入れと、スタンガンを手に入ってきた。
バッドで殴つたりしてもいいけど、怪しまれるといけないからね。

スタンガンの方がコンパクトだし、隠しやすい。

人を氣絶させる程度の電流だから、これくらいかな。
鞄に入れる。

さあ、準備は整った。

出掛けよう。

大駁公園に着く。

時計を見ると八時四十七分。少し早く来りやつたな。
まあいいか。十分待つたらいいだけだし。
十分なんてすぐだ。

九時になる。渡部 真美が来た。

「こきなり呼び出しだつしたの？あ、やつぱりあのじと怒つてる
？」

…………、「」の女、イライラする。

自分ばかり可愛くて、周りがどんなに傷つけつが、なんとも思つて
ないんだな。

あんな田舎わされて、怒らない奴がいると思つのか？

「そりゃあ、少しほね

本当は腸が煮えくつ返つて仕方ないけど。

「本当にじめんね。お金なしで杜塚君に抱かれてあげるから、それ
で許してくれる？」

この女、何ほざいてんだ？

お金なしで僕に抱かれてあげる？

何ふざけてんだよ。

お前みたいな女、誰が抱くか。散々いろんな男に抱かれたくせに、元
抱いたらこいつちまで腐る。

お前に性欲なんてこれっぽっちも感じない。

そんな男ばっかりだと思つなよ。

「ついてきてほしい場所があるんだ。いいよね」暗い夜道を歩く。
本当に人の気配が全くなない。
ちらりと後ろを見る。おとなしくつっこいて来てる。
廃墟に続く山道に着く。

「ここに入るの？」

少し不安そうな顔をして聞いてくる。
まあ、実際夜のこの山は不気味だしね。
僕はなんとも思わないけど。

「うん」

僕が歩き出すと渋々ついて来る。
いつスタンガンで氣絶させようか。
逃げられたら終わりだし。
廃墟が見えてきた。

まあ、この女隙だらけだし、いくらでもチャンスはあるか。

「何あれ？こんなとここんなのが建ってるなんて知らなかつた」

僕の前に立つて廃墟を眺める。

馬鹿だなあ。僕の前に立つなんて。

僕に、どうぞ襲つてくださいって言つてみるようなものだよ。
鞄からスタンガンを取り出す。

スイッチを入れる。瞬間、バチバチと火花が散る音が響く。
渡部 真美がその音に気づいて、振り返る。
気づくのが遅いけどね。

腹に押しつけたら、びくっと身体が震えて、地面に倒れる。スイッチを切つて、鞄に直す。

部屋に運んで、繩で縛りつけて、田を覚ますのを待とつ。
さあ、いよいよだ……。わざと薄暗くした部屋で、渡部 真美が田
覚めるのを待つ。

手首をベッドに頑丈に縛りつけた。

田が覚めたら、最初にどんな反応するかな。
どんなことを言うのかな。

まあ、イライラするようなことばかり言つんだらうなび。
どうやつていたぶつてやううか。

その時の気分で決めよう。

鞄からナイフを取り出す。

手入れして研いだから、切れ味は上がってる。

後ろで、声が聴こえた。

さあ、始めよ!……。「やあ、田が覚めた?」

声をかけてみる。きょとんとしてる。

まだ状況の把握が出来てないらしい。

縛られてることに気づいて、手首を見る。

「え? 何これ? 杜塚君、なんで縛るの?」「

「なんで? 自分で考えてみたら。分からぬ?」

渡部 真美の目が泳ぐ。記憶を探つてるのか。

「もしかして、縛つてやるのが好きなの?」

ああ、お前のことだからそいつひつけたよ。

「残念。僕はお前なんか死んでも抱きたくない。目的は復讐だよ」

まだナイフは見せない。

「復讐？ なんで私が復讐されなきゃいけないの？」

この女、本気で言つてるのか？

お前は金のために僕を騙して、あの男に売つたくせに！

「ねえ、本気で自分は悪くないと思つてるの？」

「私はあいつが連れて来て欲しいって言つたから、連れて行つただけじゃない！ 私は悪くない！ 恨むなら、あいつを恨んでよー！」

ああ、うつさいなあ……。

イライラする。イライラしてるのに、頭が妙に冷めてるのよね、なん

でだろう。

「ねえ、最初から彼氏の所に連れて行くつもりで、僕に声をかけたの？」

なんでそんなこと聞くんだろう、って表情で僕を見る。
本当に殺されるとは思つてないんだろつな。

「そりよ。悪い。杜塚君だって、私に声をかけられて嬉しそうだったじやない」

ああ、うつ。普段女子と喋つたことがあまりないから、少しは嬉しかったよ。

今思えば、虫酸が走るけど。「私だってあいつのお願いがなかつた

ら、あんたなんかに声をかけなかつたわよ！それに気づかなかつたあんたも悪いわよ！あんた一人で舞い上がりつてたんじゃないの！？わざわざとこれ外しなさいよ！」

黙れ……。黙れ黙れ黙れ！

うるさいつるさいうるさい、うるさい！

寂しかつた時に声をかけられたから、嬉しかつたんだ！

それの、何がいけないっていうんだよ！

もういい。もう何も信じない！何もかも信じない！

人間なんて信じない！

信じられるのは自分だけだ！

「そう。最後にそれを聴けてよかつたよ」

ああ、まだ僕の中に僅かでも迷いがあつたんだな。
おかげで吹っ切れたよ。これで、心置きなく殺せるから。

「これで、君を心置きなく殺せる」

ナイフを渡部 真美の首に突き付ける。

初めて、恐怖の表情を見せた。

ナイフではなく、僕の目を見て。「や、やめてよ……。本当に殺すつもりじゃないよね……？」

怖がつてる。すごく怖がつてる。

さつきまでのあの威勢はどうしたんだよ。
ほら、もっと言いたいこと言つてみろよ。

「残念だけど、最初から君を殺すつもりで呼び出したんだよ。今度は僕が、君を好きなようにいたぶつてやる」

ナイフを頬に這わせる。

「やあああー！」めんなさい、「めんなさい！なんでもするから…殺さないで！助けて！」

なんて耳障りな命乞い。更に半狂乱になつて叫び出した。これが悲鳴なら、心地よく聴こえるのかな。

「誰が助けるかよ。苦しんで死ね」

そう言つたら、ますます半狂乱になつて叫ぶ。

耳障りだ。イライラして仕方ない。

立ち上がって、渡部 真美の腹を蹴りつける。

苦しそうに咳を繰り返す。

思い切り蹴りつけたから当たり前か。

どうやつていたぶつてやろうか。

爪……。爪をナイフで剥がしてやるつか。

どれほど痛がるのかな。

左の掌を掴んで親指を動かせないよう指で固定して、ナイフの刃先を爪の間に宛がう。

「やだー！やめてよー！」

色々叫ぶけど、無視する。

ナイフを爪の間に潜り込ませる。

潜り込ませながら、中でナイフをぐじぐじと動かしてみる。

凄まじい悲鳴を上げる。

ああ、これだ。苦痛によつて上げる悲鳴。苦痛と恐怖に歪む表情。

僕が求めてたのは、これだ。

ナイフを根元まで一気に潜り込ませてナイフを抜き、根元しか繋がつてない剥がれかかった爪を、無理矢理引き千切った。「あ、あ、あ、あ、あ、ああああっ！」

悲鳴。苦痛に苛まれた凄まじい悲鳴。
ああ、ぞくぞくする。興奮していく。
もつと聴きたい。

爪を全て剥がしていく。ゆっくりと、時間をかけて。
指の爪を全て剥がし終わった時には、僕の手も血塗れになっていた。
少しも気持ち悪いと思わない。むしろ、このぬるっとした感触が気持ちよく感じる。

ふふ……。人を痛めつけるって、こんなに気持ちがいいんだ。

足の爪も剥がしてやろう。

足を掴んだら、足をばたつかせて抵抗してきた。

うつとうしいなあ。おとなしくしろよ。

言葉じや半狂乱になつて叫ぶだけだから、ナイフで突き刺すのが手つ取り早いか。

しつかりと握つて、ナイフを太股に突き刺す。
皮膚を破り、血管と筋組織をぶづぶづと断ち切つて潜り込むこの感触。

すごく気持ちいい。

悲鳴を上げて、少しおとなしくなる。

足の爪を時間をかけて、剥がしていく。

全て剥がし終わつて、渡部 真美の顔を見てみる。

涙で酷い顔になつてゐる。僕が見ているのに気づいて、助けを乞つような眼差しを向けてくる。

助けないよ。まだまだいたぶつてやる。

だから、あつさり死ぬなよ。さて、どうやつていたいたぶつてやろうか。至るところを切りつけて、じわじわと追い込んでやろうか。うん。そうしよう。

少しだけ力を込めて、ナイフを足に食い込ませ、這わせる。

ぶづぶづと、皮膚と多少の血管が破れていく。

それを、足の至るところに繰り返していく。

切りつける度に悲鳴が上がる。

切りつける場所がなくなつたから、今度は腕に。腕も同じように切りつけていく。

悲鳴は上がるけど、なんだかさつきまでよりも弱々しくなってきた。意識も朦朧としてるのか、焦点が定まつていない。まさか、もう限界？ もつと楽しませてよ。

目にナイフを少し食い込ませてみる。

やつぱり悲鳴が弱々しい。

もうそろそろ限界なのか？

もう少し楽しみたいのに。

そう思いながら脇腹にナイフを突き刺して、中でナイフをぐりっと動かして肉を抉る。

悲鳴が上がらない。

「あれ……？」

確かめてみると、いつの間にか心臓が止まって、呼吸もしていない。

ショック死かな？ 出血もよく見れば酷いし。

あーあ、死んじゃったか……。「なんだ、案外あっさり死ぬんだな。人間って」

もう少しこいたぶつてやりたかったのに。
まあ、死んでしまったのは仕方ない。

「死んだのか。僕が殺した」

不思議と恐怖とか、そんなものはない。

むしろ……。

第一が入み土ガてモト主ノ一。

恐怖なんてこれっぽっちも感じない。

心の底から沸き上がってくるのは、今まで感じたことがないくらいの興奮、快感。そして、それらを混ぜ合わせた満足感。どうしよう。楽しすぎて笑いが止まらない。

笑いすぎて腹筋が痛い。

ああ、今まで感じたことのない興奮と快感。
すごく気持ちいい。最高だよ。

また、味わいたい

復讐だから、死んだことに余計興奮を感じるのかな。
斧さないよ。死んだとしても。

絶対に許さない！

「次は母さん……、いや、杜塚早苗。お前だ」

「あ……そういえば、死体処理の方法、考えるの忘れてた」

一番重要なことなのに、忘れるなんて。

殺すことだけに集中し過ぎて、忘れてた。
どうしようつか。

一般的なのは土に埋めることだらうけど、掘り起されたる心配がある。

かといって、他にいい方法が思いつかない。

.....。

人間って、食べられるのかな.....。

今でも人間を食べる風習が残ってる村があるくらいだし、食べられないことはないはず。

まあ、美味しくはないだろうな。

食べちゃえ。

あ、骨はどうしよう。いくらなんでも、骨は食べられない。

骨つて粉々に碎いて燃やしたら、灰になるのかな？

骨は粉々に碎いて、他の「ミミ」に混ぜてばれないかどうか、試してみようか。

食べる前に、食べやすいように解体しよう。

確か、蜘蛛の巣だらけの掃除道具に紛れて斧や鎌があつたな。
本当にここ、なんの事務所だつたんだろう。

どうでもいいけど。

斧を取りに部屋を出る。シャワー室の隣にある扉を開ける。
かなり埃臭い。仕方ないけど。

掃除道具を避けて、斧を見つける。

持つてみると、結構重い。扱えないことはないけど。

扉を閉めて、斧を引き摺つて部屋に戻る。

壁に斧を立て掛ける。渡部 真美をベッドから下ろす。

手首の繩をほどいて、床に落とす。

血塗れになり、絶望と苦痛と恐怖に染まつた表情を見下ろす。

なんて、美しいんだろう。

生きてる姿よりも、死んで血に染まつた姿が、美しい。

絶望と苦痛と恐怖に染まつた表情が、余計美しく見せてるんだ。

ああ、人間は絶望と苦痛と恐怖に染まつた表情が、一番美しいんだ。だらだらとただ生きてる人間の姿ほど、醜い。

復讐が終わつても、殺し続けよう。

僕自身の欲望を満たすために。

人間の恐怖と絶望と苦痛を搾取するためだ。

さて、さつさと解体して食べてしまおう。斧を振りかざす。やつぱり重い。重さで腕が震える。

腕を狙つて一気に振り下ろす。肉を断ち、骨にじりつと当たる感触が伝わってきた。

血飛沫が辺り一面に舞う。

僕にも飛び散る。顔と制服を血が染める。

制服を着てきたのは失敗だつたかな。まあいいや。兄さんのを借りればいい。

顔に着いた血に触れる。ぬるつとしていて、すこく気持ちいい。

「あは、あはは……」

ああ、僕は今、不気味に笑つてゐんだろうな。
唇が三日月型に歪んでるのを、感じる。

舐めてみる。当然、鉄の味がする。

美味しくもなんともない。

個人によつて、血の味は違うのかな。

まあ、どうでもいいけど。

もう一度振りかざして、振り下ろす。

力が足りないのか、骨が断ち切れない。

もう一度振り下ろす。

ようやく断ち切れ、床にがつんつと音を立てて当たる。

案外人体解体つて難しいな。思つたより時間がかりそうだ。
同じように片腕、足、胴体、首を切断する。

解体に四十分もかかった。

床も壁も、僕の全身も血塗れ。

今更だけど、いろんな男に抱かれた身体を、今から食べるんだよな。
今更だけど、気持ち悪くなつてきた。

でも、仕方ない。

死体が発見されるよりマシだ。

さて、食べてしまおう。血塗れの床に座る。

さて、どこから食べよう。

柔らかい部分は後で食べて、固そうな部分から食べるか。
腕を掴む。切断面を噛んでみる。

歯が肉に食い込むにつれ、血が溢れてくる。

溢れた血は顎を伝い、膝と床にぽたぽたと滴る。

なんだ、人間の肉つて案外簡単に噛み千切れるんだ。
食べるには苦労しないで済みそうだ。

これくらいなら食べられる。

固くならない内にさつさと食べよう。

「……食べた」

食べきつた。全身が解体した時よりも血塗れになつてゐる。
濃厚な血の匂いが、僕の脳を刺激してきてたまらない。

全身が血に包まれて、すごく気持ちいい。

これが渡部 真美の血じゃなかつたら、余計気持ちいいんだろうな。
後は、骨を碎くだけ。

骨を一ヶ所に集める。

このままだつたら飛び散つて仕方ないな。確か、ネットみたいな物

があつたはず。

一旦部屋を出て、掃除道具の中から網の細かいネットを見つける。これなら、少しあは飛び散るのを軽減出来るかな。

戻つて骨をネットにくるむ。

斧を持ち、力を込めて骨に振り下ろす。

骨が碎かれる音と、ひび割れる音が響く。

このネット結構頑丈だな。斧を振り下ろしたのに、切れてない。

同じことを繰り返す。骨が粉々になるまで、斧を何回も振り下ろす。

「これくらいでいいかな」

見るからに骨はぼろぼろ。

袋に入れてどこかの家庭のゴミに混ぜとけば、骨といふことがほとんど分からぬ。

机の引き出しを開ける。袋ないかな。

一番下の引き出しを開ける。

あつた。黄色いごみ袋。これに入れよう。

ネットをごみ袋に入れて、骨を振り落とす。

引っ掛けつて取れない骨は手で取り除く。

死体処理はほとんど終わった。

後は、この部屋を掃除して、シャワーを浴びて、骨をゴミに混ぜて、帰ろう。バケツに水を溜めて持つてくる。
さて、掃除しようか。

雑巾を床に置いただけで、雑巾が血の色に染まる。

これだけの血の量だし、当然か。

一度洗つただけで、水が濃い血の色でいっぱいになる。

何回も水を変えないと仕方ないな。

たまに水を変えながら、黙々と床と壁を拭ぐ。

掃除が終わり、シャワーを浴び、服を着替え、後は骨を処分するだけ。

血塗れになつた制服は洗つたけど、やっぱり血を洗いきれなかつたから、ここに置いておく。

あの制服は、人を狩る時の正装にしよう。

骨の入つた袋を鞄に入れて、部屋を出る。

外の扉を開けて、ふと空を見る。

雲が月を隠し、月の姿がぼんやりとしか見えない。

雨が降りそうで、降らない。

月の光がぼんやりとしか届かないから、薄暗い。

どうやら刃も、僕を見捨てたらしい。

墮ちるところまで墮ちるところとか。

ああ、墮ちてやるぞ。どこまでも。

光が一切届かない暗い闇の底まで、墮ちてやる。

骨を捨てて、わざわざ帰ろう。

骨を近くのマンションのゴミ捨て場に混ぜて捨ててきて、家に着く。電気が着いてる。誰かいるのか。

ドアを開けて中に入る。

リビングを覗いてみると、兄さんの那奈瀬がいた。「……帰つてたの」

声をかけてみる。なんで帰つて来たのかは、分かつてゐる。

「鼎、父さんも母さんもいねえのか？」

「いなこよ。見たら分かるでしょ」

ああ、なんかイライラする。

今のは嫌いだ。高校に入つて悪い友達と付き合つて、金がなくなればこうやって帰つて来て金を要求する。

大嫌いだ。大嫌いだ。

確認するように心の中で、大嫌いだ、と繰り返す。

そうする度に、何かがキリキリと痛み出す。

何が痛いのか、なんで痛むのか、分からぬのに、痛い。

「父さんから金、もらつてねえの？」

金を渡さなかつたら不機嫌になつて、僕に八つ当たりしてきたこともある。

流石に暴力はなかつたけど、言葉で。

ああ、あの男が勝手に入れた十万を渡してやる。

あんな金、いらない。使いたくもない。

手元に置いといたら、吐き気がする。

「持つてくる。十万もあれば十分でしょ」

「ああ。てか、父さんお前に十万以上の金渡してんのか」

それがどうしたんだよ。まともに家に帰つて来ない上に、問題起こしたりするからだろ。

金は渡すから、さつわとどつか行つてよ。

今の兄さんの姿は、見たくない。大嫌いだ。

二階の自室の引き出しから、十万の入つた封筒を持つてくる。

「はい」

「サンキュー。父さんにはうまく誤魔化ししてくれ」

その前に、気にしないよ。父さんは。

「お前、なんか雰囲気変わった?」

僕をじろじろ見てくる。

そりやあ、人一人殺したんだから、雰囲気も変わるんじゃない?
その上、母さんとその不倫相手も殺そうと思ってるんだから。

「別に、気のせいじゃない?」

「ふーん、ま、いいけどな。じゃあな」

返事はしない。

玄関が閉まる音がする。出ていったか。
家族でさえ、これなんだ。
こんなのは、もう家族じゃない。
人間なんて、信じない。「……」

窓から差し込んでくる朝日が眩しい。

時計を見ると九時四十八分。

学校、もう始まってるな。

いいや、行かなくて。めんどくさい。

人間がたくさんいる場所に、今はいたくない。

前とは逆だな。人を殺す前と、殺した後の感情が。

前は家に一人でいるのが寂しくて、学校に行ってたのに。

今は、人間なんて信じられなくて、人間が嫌いになつて、行きたくない。

でも、なんなんだろ？。

吹っ切つたはずなのに、胸の奥がけくつと、まだ痛んでる。
もう傷つかないようこ、何も感じずに済むよつこ、やつひいて渡部
真美を殺したのに。

これから、母さんと不倫相手を殺そつと思つてゐるの。なのこじつ
して、胸の奥がまだ痛む？

分からぬ。ふと、目を覚ます。

……また寝てたのか。

喉が渴いた。水を飲みに下に下りよつ。

部屋を出て一階に下りる。

「…………？」

リビングから灯りが漏れてる。誰かいるのか。
誰がいたってどうでもいいけど。
扉を開ける。

「母さん……」

母さんがいた。霸気が全く感じられない。

あの男と何かあつたのか。

母さんが、ぱつと僕を見る。

なんだら？。田だけが爛々と輝いていて、気持ち悪い。

「鼎…………、母さんとちょっと出掛けない…………？」

「え…………、分かつた。ちょっと着替えてくる

「すぐ着替えてくるのよ」

なんなんだ。気持ち悪い。
とりあえず着替えよう。

自室に戻つて服を着替える。

あの日、気持ち悪い。なんだか狂氣じみていて。
……念のため、折り畳み式ナイフを持つといつ。
何が起こるか分からない。
リビングに戻る。

「着替えてきたよ」

「せう。じゃあ行きましょ」

そつ言つとさつさと玄関に向かつて、靴を履いて出る。
僕も靴を履いて鍵を閉める。

母さんの後ろ姿が、不気味に見えた。無言で歩く。どこに行くつも
りなんだろう。

あまり来たことのない場所だ。人通りも少ない。
周りに、誰もいない。

なんでこんな所に僕を連れ出したんだろう。
公園に入る。僕もついて行く。
突然、立ち止まつた。

「ねえ……鼎」

「何……？」

「母さんね……好きな人が出来たの」

「 わい……」

知ってるよ。そんなこと。

わざわざ、それを言つたためにここまで来たの？

違うよね。絶対。

母さんを見たくないで、母さんに背を向ける。

母さんのあんな姿を見るのは嫌だ。

「母さんね、あの人と別れて、その人と一緒になりたいの」

「うん……」

知ってるよ。それも。
身体が震えてる。

どうして？

涙が出そうのは、どうして？

吹っ切ったはずじゃないか。

なのに、僕は、まだ、母さんを……。

母さんが近づいてくる気配がする。

「その人にね、言われたの」

ちひりと母さんを見る。ポケットから、何かを取り出したりとしている。

「家族を殺せたら、一緒になつてやるって」

「…………っ！」

ポケットから何か光る物を取り出して、僕に向かって振り下ろす。とつさに避ける。

「…………」

避けたけど、遅かった。右腕が切り裂かれてる。
押さえるけど、深く切り裂かれたのか、血が止まらない。
母さんを見る。目が狂気の色で爛々と輝いてる。

本気で、僕を殺すつもりだ。

ナイフを、僕に向けてきた。母さんが完全に理性を失った、狂った
目で僕を見つめ、奇声を上げながらナイフを振り下ろしてくれる。
避けながら、泣きたくなってきた。

なんで、こんなに悲しくなるんだ？

一度は吹っ切ったのに。殺そうと思つたのに。
なんで、こんなに未練があるんだよ。
でも、もう仕方ないや。殺さないとこっちが殺される。
あんな男のために殺されるなんて、ごめんだ。

避けるのをやめて、動きを止める。

母さんがナイフを振り上げ、向かってくる。

一步、踏み出す。

ドスッ

「あ……？」

母さんが訳が分からぬと言つよつたので、腹を見る。

ナイフが深々と、腹を貫いている。

僕が突き刺したナイフが。

ナイフを振り上げようとしたから、力ずくで胸まで切り裂いてナイ

フをぐりっと動かして、傷を抉る。

ここまでしたら、もう助からない。

ナイフがカラシッと落ち、母さんの身体が脱力する。

母さんの体重が僕にかかる。

重力に任せて、母さんの身体と一緒に地面に倒れる。

「かつ……、し……」

何か言つてゐるけど、聴き取れない。

恨めしそうな目で、僕を見つめている。母さんの身体を退かす。朦朧とした目をして、浅く早い呼吸をしながら、何かに必死に手を伸ばそうとする。

手の先にある物を見る。

ナイフだ。そんな状態なのに、それでも、あの男のために、僕を殺したいの？

そんなに、僕が邪魔だつたの？

僕は、母さんのことが好きだつたのに。信じてたのに。

一度は本気で殺そつと思つても、こんなに未練が残るくらい好きだつたのに。

なのに、母さんにとつて僕は、邪魔で邪魔で仕方なかつたんだ。あの男との仲を引き裂く、憎悪の対象でしかなかつたんだ。息子でも、殺したい程憎い存在だつたんだ。

涙が滲んで、頬を流れしていく。

母さんがいつの間にか、ぴくりとも動かなくなつていて。身体を眺める。自分の血と、母さんの血で赤く染まっている。

「あはは……僕がずっと欲しかったものは、最初からこくら望んでも、手に入らなかつたんだ……」

父さんにとって僕は、いてもいなくても同じ存在で、母さんにとって

ては憎むべき存在だつたんだから。

「あはは……本当に、もつといや……」

殺すことの楽しみを、気持ちよさを知った後なんだ。

一人も殺した後なんだ。

もう、戻れない。戻る必要はない。

殺す快樂を、思う存分貪つてやる。

「僕は、快樂殺人者になつてやる。墮ちるところまで、墮ちてやる。殺して、何が悪い」それはそうと、母さんの死体どうしよう。こんな所で解体して食べるなんて無理だしなあ。

このままほつといて、誰かに発見されて、警察が来るとして、僕は疑われるのかな。

うまく演技すれば、疑われないかな。

あの不倫相手の男が疑われればいいのに。

ああ、いいこと思いついた。

あの男は、そいやつて殺してやろう。

ああ、どっちにしたつて死体処理出来ない訳だし、この今までいいか。

母さんの持つてたナイフだけ、持つて帰ろう。
折り畳み式だから、ポケットに入れて持つて帰れる。
死体を振り返る。

「バイバイ、さよなら、杜塚 早苗」

家に着いて、血塗れの服をバレン^{ヒヨウ}に混ぜて、血を洗い流す。

家に着くまでに、よく人と会わなかつたものだな。

まあ、好都合だけど。

傷口に風呂の湯がしみて、痛かつた。

傷口は血の量に比べて、あまり深くは切り裂かれてなかつた。普通なら病院で見てもらつた方がいいだらうけど、なぜこんな怪我をしたのか絶対に聽かれる。

嘔を吐いて怪しまれるのは「めん」だ。

消毒してガーゼを当てて、包帯を巻くだけの簡単な手当をする。化膿したらその時だけ、まあ大丈夫だらう。

そんなことより、警察だ。

まあ、これも来たら来たでその時か。

今日はもう寝よう。

なんだか疲れた。「ふう……」

溜息を吐く。

今日の晩、警察が来た。勿論、母さんのことだ。

犬の散歩をしてた主婦が、母さんの死体を発見したらしい。母さんがどうか確かめるために、警察署まで行つた。

まあ、母さんしかあり得ないんだけど。

僕が殺した訳だし。

警察は、息子の僕が殺したとは思わないのかな。

疑われないのなら、それでいいけど。

警察署に着いて、靈安室に通された。

そこにいたのは、やつぱり母さん。

「母さん」と言いながら、涙を流して迫真の演技をしてやつたよ。しばらくして父さんがやつて來た。

「早苗?」と言いながら、母さんの身体にしがみついて泣いてたけど、馬鹿馬鹿しくて見てられない。

今まで散々ほつたらかしにしてたくせに。不倫してたことも、知らないんだらう。

それとも、知つてわざとほってたとか？

母さんの身体にしがみついて泣くのも、わざとじりじり見えるよ。

父さんが警察にいろいろと訊かれてたけど、きっと事情聴取つてやつだらう。

今日はそれだけで帰された。

帰りは父さんの車で帰った。

運転する父さんの顔を見た時、さつきまであんなに取り乱してたのが嘘みたいに、落ち着いてた。

ねえ父さん。父さんが嬉しそうな表情をしてるようを感じたのは、
気のせいじゃないよね。警察署から帰った後、父さんはまた仕事に
向かった。

普通なら、自分の嫁が死んだら仕事びこなじやないの。
やっぱり、嬉しそうに見えたのは、気のせいじゃないんだな。
まあ、どうでもいいか。

鞄から携帯を取り出す。

渡部 真美の携帯を。

あの男の情報を得るために、持ってきたんだ。とても役に立つたよ。
あの男の名前は弓沢 浩次。

三十一歳で、何をしてるのかは知らない。

そして、渡部 真美が僕を案内したあの家は、弓沢 浩次の物だと
分かつた。

はは、弓沢 浩次はずっと僕が罠にかかるのを、息を潜めて待つて
たつて訳か。

今度は僕が、お前を罠に嵌めてやる。

母さんを殺した罪を、擦りつけでやるよ。

弓沢 浩次にメールを送る。

明日、そつちに行つてもいい？ すぐ返事が帰つてきた。

いいぞ。何時に来る？

くすりと笑う。馬鹿だなあ。なんにも知らないで。

渡部 真美は死んだのに。まあ、知らなくて当然だけど。

搜索願いとか家族は出したのかな。

しょつちゅう家出とかしてるとしたら、帰つてこなくとも心配しないで搜索願い出されないかも。

まあ、どうでもいいか。

失踪したことが分かつても、殺されたかどうかさえ警察には分からぬいんだから。

死体は絶対に見つからない。

絶対に見つからない場所に、僕の腹の中に隠したんだから。さて、返信しよう。

じゃあ、九時くらいに

すぐに返事が帰つてくる。

分かつた。待ってるが

返信する。

うん。楽しみにしてる

携帯を閉じる。

さあ、明日で復讐劇が終わる。

最高の終わらせ方を考えよつ。田覚ましの音で田を覚ます。田覚ましを止めて起き上がる。

午後三時。今日も学校は行かなかつた。

今日で復讐を終わらせる。

殺す前に、色々と聞き出そひ。

母さんとなぜ、そういう関係になつたのか。

一緒になるつもりだつたのか。

僕が襲われたことを、母さんは知つていたのか。

家族を殺せたら一緒になつてやると、本当に言つたのか。

あんな男だ。訊けば本当に殺されると思わず、調子に乗つて喋るに違ひない。

あの男の言葉は全て、僕の神経を逆撫でするようなものばかりだろうけど。

まあいいさ。最後には一思いに死んでもらひ込んだから。

鞄の中身を確認する。

スタンガンに繩、そしてナイフ。指紋を残さないための革手袋。

これだけあれば十分。

夜が楽しみだ。

そういうえばまともに何も食べてない。

何か食べよう。夜になつて、弓沢 浩次の家へと向かう。

駅を通りすぎ、左に曲がり、住宅街に向かう。

九時前だから、まだちらほらと人通りがある。

人通りがあるけど、あの男の家の玄関の周りは高い塀と木に囲まれているから、例え人が通つたしても気づかれない。

革手袋を嵌める。

弓沢 浩次の家の前に立つ。

いよいよだ。

インター ホンを押す。

『入れ』

門の扉を開け、中に入り玄関の前に立つ。

スタンガンを取り出し、スイッチを入れる。バチバチと音を響かせ、火花が散る。

玄関が開く。

弓沢 浩次が僕の姿を見て、驚きに目を見開く。

「お前……！？」

相手は大人。単純な力では敵わない。素早く腹にスタンガンを押し続ける。

痙攣を起こして、あっけなく倒れる。

弓沢 浩次を中に引き摺つて玄関を閉め、鍵をかける。これから中に運んで、縛つて、始めよう。

死の恐怖を、存分に味わって死ね。弓沢 浩次を部屋の中に引き摺る。

人間つて不思議だね。こういう状況の時、普段出ないような力が出るんだから。

さて、縛ろう。

縄を鞆から出す。

あつ……このまま縛つたら縄の跡残るかな。縄の跡が残つたら困る。

タオルとか布を当てて縛つたら、跡が残らないかな。分からぬけど、タオルでも当てて縛ろう。

タオルを探す。両手両足、四枚必要だ。

洗面所ならタオルあるかな。

洗面所でタオルを探す。引き出しを開けると、タオルが詰まってる。

四枚、持つていぐ。

弓沢 浩次は気絶したままだ。まだ、起きる気配は全くない。腕にタオルを一枚当てて、後ろ手に縛る。

足もタオルを一枚当てて、縛る。

あまりきつく縛っていない。かといって、ほどけないように縛った。これで縄の跡が残つたら仕方ない。

縛り終えたし、起こそうかな。

用覚めるのを待つほど、僕は気が長くないんだ。腹を渾身の力を込めて、思い切り蹴る。

「がつ……！」

苦しそうに咳を繰り返す。

弓沢 浩次が僕を見る。

僕は見下ろす。

「お前、これは何の真似だ？」

「何つて、分かんないの？ 抵抗出来ないよ！」縛つたんだよ

「縛つて、どうするつもりだ？」

「復讐。その前に、いろいろと答えてもらつ

「復讐？ 復讐だと？ なんだそりや。面白い。その前に聽かせろ。真美はどうした？」

渡部 真美をどうしたかって？ それを聞いてくるとは思わなかつたよ。

「殺してやつたよ。一思に」 「殺した? [冗談で]言つてゐるのか?」

「冗談? [冗談で]言つてゐるよう見えるの?
見えてたら、目がおかしいんじやない?
眼科行つた方がいいよ。」

「[冗談で]言つと思つてんの?」

「本当に殺したつて言つのか?」

「殺したんだよ。ナイフで爪を残らず剥がして、身体中切りつけ、
腹を突き刺して、殺したんだよ」

じつと僕の目を見てくる。

まるで、奇怪なものを見る目で。
なんで僕をそんな目で見る?

「お前、おかしいんじゃないのか?」

おかしい? 僕が? おかしいだつて?

何がおかしいんだ。僕はおかしくない! 異常じやない、狂つてなん
かない!

おかしいのは、お前らの方だ!

「黙れ! 僕の質問だけに答える! 余計なことは言つね!」

ああ、くそ! いたぶつてやりたい!

我慢だ。我慢しろ。傷つけたら、計画通りいかなくなる。

「答える。母さんに本当に、家族を殺せたら一緒になつてやるって

「言ったのか？」

「言つたら、にやりと笑つた。

「言つたさ。まさかあのバカ女、本当に殺りやがったのか？・そしたら、傑作だな。ヒヤハハハ！」

「ぶちつと、僕の中で何かが切れた音がした。怒りで身体が震える。我慢だ。冷静になれ。

そう思つても、抑えきれず腹を蹴る。

「余計なことは言つくなつて言つたはずだ。聴こえなかつたのか？」

「はつ、これが笑わずにいられるかよ！あの女、つづづくバカだな！俺にしちゃ都合のいい女つてだけなのによ。俺の気を引こうとして散々金を貢いでくれたぜ」

母さん、こんな男に金を貢いでたのか。
こんな男のために。

握つた拳に力が入る。傷つけたら駄目だ。

僕が訊かなくても色々と喋る。何も言わずに聴いていよう。

「ホント、俺の言いなりもいじりだ。お前、母親に見捨てられたんだぜ？俺が息子を抱かせられて言つたら、迷いもしないで抱かせてあげるつて言いやがった」

「ああ、それ以上何も言うな。

もういい。もうたくさんだ。

それ以上は気がおかしくなりそうだ。

「それで、昨日、離婚するから一緒になってくれって言つてきやがつた。一緒になるなんて冗談じゃねえ。誰があんな勘違いバカ女と一緒になるかつての。それでふざけて家族を殺せたら一緒になつてやるって言つたら、ホントに殺りやがつた！」りや傑作だよー。

どうやら、我慢の限界が訪れたみたいだ。

頭が沸騰してるように感じる。

なのに、感情は妙なほど、冷えきっている。

足元に置いてある鞄からナイフを取り出す。

弓沢 浩次の髪を掴んで、首筋をよく見えるようにする。ナイフを首筋の動脈に当てる。

「黙れよクズが。黙つてたら調子に乗りやがつて」

弓沢 浩次が初めて、恐怖に顔をひきつらせた。「本当、我慢して黙つてたら好き勝手言つてくれるな。まあ、僕が訊きたかったこと全て話してくれたからよしこあるか」

ナイフを首筋に当てたまま、独り言のように言ひや。

弓沢 浩次が恐怖を色濃く宿した瞳で、僕の目を見つめる。

「なんだ、怖いのか？さつきまでの威勢はどうに行つたんだよ」

挑発してみる。何か言おうとしたけど、結局何も言わない。なんだ。これくらいで怯むのか。

つまらない。もっと抵抗してみせろよ。

ナイフを見せただけでこれかよ。さつきまでの威勢は僕をなめてたからか。

まあ、当然か。中学生に殺されるとは思わないか。

もつここや。聴きたこゝとは詰けたし、わづ用はない。

死んでもらおう。

ナイフを一気に引く。一瞬遅れて、血が噴水のように湧き出す。
何か言つてゐるけど、何を言つてゐるのか分からぬ。

命乞ひだらうけど。

モーテルの日記

流れ出した血で床に血溜まりができる。

時間が経つにつれ、弓沢 浩次の息が段々と浅く細くなり、目の光
が虚ろになっていく。

僕はたまたま、沢治次が死ぬのを眺めた。かく待つ

死ぬのは怖いか？じわじわと訪れてくる死を、死の恐怖を存分に味わつて、死ね。しばらくして、弓沢 浩次が全く動かなくなる。血溜まりを踏まないよう気を付けて、死んだのか確かめる。
呼吸はない。

首に指を当てて脈を探る。
脈もない。
死んだか。

死んだが。

ああ、唇が二田円型に歪んでいるのが分かる。

渡部 真美を殺した時と同じ快感、興奮、満足感が押し寄せてくる。

笑う。笑い続ける。

「あははははははは……あ～、たと、仕上がりいか」

その前に、手に着いた血を洗い流した方がいいかな。

でも、洗い流したらルミノール反応が出るかな。

この部屋以外で血の痕跡が出るのは困るし、仕方ない、鞄に入ってるタオルで拭こう。

タオルで血を拭いて、縄をほどいていく。

はまた使うとして、タオルはどこかに捨てよう。

血を踏まないようにして、弓沢 浩次の腕を顔の側に持つていく。その手に、ナイフを握らせる。

血塗れのナイフを。

革手袋をしてるから、僕の指紋は残っていない。

警察がうまく騙されてくれれば、杜塚 早苗を殺害後、自殺。だから傷つけられなかつたんだ。

自殺のはずなのに、暴行された痕跡があるのはおかしいでしょ。だから、傷つけなかつたんだ。

母さんを殺した後に自殺してもらうために。

状況だけ見れば自殺。

今の杜撰な警察なら、自殺で片付けるに違いない。

弓沢 浩次、お前は杜塚 早苗殺しの罪を被るんだ。

それが、お前にに対する僕の復讐。弓沢 浩次を見下ろす。

まさか、一度狙つた獲物に殺されると思わなかつただろう？
恨むのなら僕じゃなくて、自分を恨むんだね。

自分の浅はかな行動を。

部屋を見渡す。僕に繋がる痕跡がないか探す。

床も隅々まで見て調べる。

毛髪の一本でも落ちてたら最悪だ。

指紋は大丈夫だ。革手袋をしてるし、死体に着いた指紋も検出される心配はない。

時間をかけてゆっくり探す。

大丈夫だ。僕に繋がる痕跡は残つてない。
鞄に縄とタオルを詰める。

部屋を出ようととして、振り返る。

「バイバイ、さよなら、『沢 浩次』

地獄にでも墮ちてる。
さて、帰ろう。

血の着いたタオルを、中身の見えない袋に入れて他のゴミと一緒に混ぜて捨てて、帰つて来た。

鍵を開けて中に入る。相変わらず誰もいない。

それでもいい。今回のことでの、家族でも信じちゃいけないって分かったから。

もう誰も信じない。信じられるのは自分だけ。

僕は、僕のためだけに生きる。

つい数日前の、家族を求めてた僕とはさよならだ。
もう誰も求めない。求めちゃいけない。

僕は、一人でいい。

とりあえず、今日は風呂に入つてさと寝よう。

「あ、あ、あ、あ、あああああつー！」

ドスツ ザシユツ

今日も僕は人間を殺す。

ああ、悲鳴とナイフを突き刺す感触が気持ちいい。

今日の獲物は女。犯した後に、いたぶり続けた。
でも、もう限界そう。

もういいか。楽しめたし。楽にしてやるよ。

ナイフを心臓^目掛けて突き刺す。

ナイフを抜き、また突き刺す。

それを何回か繰り返す。

「あはははははははー。何度もやっても最高だよー。すゞく気持ちがいいー！」

そう、すゞく気持ちがいい。やめられない。

今日で十三人目。まだまだ殺すよ。

殺し続ける。

さて、死体処理をしよう。

あれから一ヶ月経つ。

父さんは相変わらずだけど、那奈瀬が変わった。

母さんが死んだのがショックだったのか、あれだけ荒れてたのがおとなしくなり、今は荒れてた時の面影がない。

勉強も真面目にやって、大学に行くつもりらしい。

どうでもいいけど。

そういうえば今日、珍しく父さんが帰つて来るつて言ってたな。

僕と那奈瀬、二人に大切な話があるらしい。

なんなんだろ。大切な話つて。

あの仕事ばかりの人間が珍しい。

玄関が開く音がした。帰つて来たらしい。

「那奈瀬、鼎。下りて来てくれ。話したいことがあるんだ」呼ばれたから、仕方なく一階に下りる。

リビングの扉を開ける。

父さんの隣に、見知らぬ女が座ってる。

母さんよりも若い。

大切な話をすると言つて女を連れて来て、なんの話をするつもりだ。
……まさか、な。

「鼎、那奈瀬、座りなさい」

後ろを見ると、いつの間にか那奈瀬が立っていた。
中に入つて椅子に座る。

「このは甲田 彩菜さん。そして、この二人は私の息子の那奈瀬
と鼎だ」

父さんが僕達を紹介すると、甲田 彩菜という女が僕達に微笑んで
きた。

「よろしくね。那奈瀬君、鼎君」

そんなことはどうでもいいから、わざわざと本題に入つてよ。
なんとなく、予想はつくけど。

「父ちゃん、この人と結婚しようと思つているんだ」

……やつぱりか。

「母さんが死んで落ち込んでた時に、彩菜に随分世話をついてな。
いつの間にか付き合つようになつた。それで、結婚したい。お前達
は許してくれるか?」

許すも何も、結婚しようがどうでもいい。

でも、母さんが死んだ後に付き合つようになつたってのは、嘘でしょ？

母さんが死ぬ前から不倫関係にあつたんでしょう？
それで母さんが死んだから、好都合と思つて結婚つて話になつたんじゃないの？

父さんが警察署から帰る時嬉しそうだったのは、その人と結婚出来るから嬉しかつたんでしょう？

まあ、父さんが誰と結婚しようがどうでもいい。

僕の楽しみさえ邪魔されなければ、それでいい。僕が口を開こうとしたら、

「俺はいいよ。結婚しても」

「え、いいんだ。つつきり反対するのかと思ったけど。

「僕もいいよ」

そう言つたら、二人共嬉しそうな顔をする。

「ありがとう。那奈瀬君、鼎君。これからよろしくね

結婚すればこの女が母親になるのか。

それすら、どうでもいい。

嬉しそうにしている父さんを見る。

本当、呆れる。馬鹿みたいだ。

僕の身に何があつたのか知らないで。

まあ、いいさ。

僕はこれからも自らの快楽のために殺し続ける。

それだけのことだ。「んつ……

ふと、目を覚ます。

いつの間にか眠っていたみたいだ。

髪の毛を触ると寝癖が酷い。

直すのに時間がかかるな。

そういえば夢を見た。二年前くらいに、初めて人間を殺した時の夢を。

下らない話だつたろう?

つまらない話だつたろう?

下らなくてつまらない話だけど、これが過去に起こったことの全て。

僕が快楽殺人者になつた理由。

今の世の中、僕のような子供はたくさんいるんだろうな。

そんな子供が溢れてる中で、僕は耐えきれなくなつて快楽殺人者と
いう道を選んだ。

僕は、弱い。

今の僕は、どうなんだろう。

強くなれたんだろうか。

分からぬ。

まあ、どっちでもいいさ。

弱かろうと強かろうと、僕が人間を殺し続けることに変わりはない。

今日も、獲物を探しに行こう。

七月一日 死にたがり・選ぶは何か

僕にも殺さない人間は存在する

自殺志願者

自殺志願者だけは殺さない

なぜかつて？

本物の自殺志願者は、殺されることに喜ぶからだよ

僕は悲鳴を聴きたいのに、自殺志願者は笑って喜ぶ

殺したって、満足出来ない

だから、自殺志願者だけは殺さない

-とある誰かの視点 -

地面を見下げる。

学校の屋上から。

ここから飛び下りたら、死ねるかなあ。

今まで色々と試してきたけど、失敗ばかりだった。

手首を切つてみたり、電車に飛び込もうとしてみたりしたけど、なぜか失敗してばかり。

なんでなんだろう。

僕みたいな死にたがる人間は死なないで、生きようと必死な人間ば

かり死ぬのは、なんでなんだろう。

理不尽だ。

両親が死んで、意地悪な親戚に引き取られて、毎日鬱憤の捌け口にされて、学校では友達さえいなくていじめられて。こんな僕が生きててなんになるんだろう。

ただ呼吸をして、無駄に生きてるだけじゃないか。酸素を無駄に消費してるだけに感じじる。

ごめんなさい。無駄に生きて。

ここから飛び下りて、頭から落ちたら死ねるかな。飛び下りよう。

「ごめんなさい。僕の汚い死体を晒すことになつて。

ごめんなさい。僕なんかがのうと生きて。

ごめんなさい。

これから、死にます。

さよなら。

一步、踏み出そうとしたら、

「君、死にたいの？今から死ぬの？」授業の終わりを告げるチャイムが鳴る。

今から昼食。今日は一人で食べたい気分だから、屋上に行つて食べよう。

周りがガヤガヤとうるさい空間で、食べたくない。

本当、こいつらよく飽きないよな。

毎日毎日同じようなことばかり話して、騒いで。

馬鹿馬鹿しい。愚の骨頂だ。

耳障りだ。

学校などといつ牢獄に、一日の半分を費やされてしまうのだから、

本当に馬鹿馬鹿しい。

勉強だって、教師の下手な授業より、家で一人で勉強してるのがマシだ。

あんな下手な教え方で、よく教師なんか勤まるな。
考えれば考えるほど、馬鹿馬鹿しい。

「杜塚、お前一人で食べんの？」

薪沢が話しかけてきた。

「うん。屋上で食べる」

「そつか。分かった」

薪沢が席に戻って、他の生徒と喋る。
席を立つて屋上に向かう。
後ろから、声が聴こえてきた。

「薪沢お前、よくあんな奴と喋れるよな」

「へ？ なんで？」

「だつてあいつ、気味悪くねえ？ 何考えてるか分かんねえし」

ああ、なんて耳障りな不協和音。

そりやあ、お前達みたいな馬鹿共に、僕の考えてることなんか分かるはずがないだろ？

本当に耳障りだ。

教室を出て屋上に向かう。屋上に行くまでの間も、耳障りな不協和音は絶え間なく耳に響く。

本当、お前達が羨ましいよ。

そんなことで毎日騒げる脳が。

屋上に続く階段を上る。

やつと耳障りな不協和音が遠退く。

屋上の扉を開ける。

屋上の縁に、誰か立っていた。

縁に立つて地面を見下ろしているのか、俯いている。

自殺、か。

まあ、どうでもいい。

自殺しようが僕には関係ない。
でも、なんとなく気になった。

……気になつた？僕が？他人に興味を持つたつていつの？

馬鹿馬鹿しい。僕が他人に興味を持つなんて。
そう思いながら目が離せないのは、なぜだろ？
あの背中が、かつての僕に似てるからか。
分からぬ。なんで、自殺志願者に興味を持つんだろう。
縁に立つていた誰かが動いた。
飛び下りるつもりなのか。

「君、死にたいの？今から死ぬの？」

気づいたら声をかけてた。
ゆっくり僕を振り向く。

-とある誰かの視点-

後ろを振り向く。

これで「やめるんだ！」とかだったら、散々言われてきた言葉だから飛び下りてたけど、「君、死にたいの？これから死ぬの？」なんて言われたのは初めてだから、気になつて後ろを振り向いた。

誰だろう。知らない。

襟まで伸びた少し長めの黒髪。

身長は男子にしては低め。

顔は非の打ち所がないほど整つていて、綺麗だ。

カツコいいというより、綺麗。

そして、なんだかすごく独特な雰囲気を感じる。独特な雰囲気のせいでの、近寄りがたく感じる。

「君、一年一組の藤山 葉月だよね」

「え…? うん」

なんで知ってるんだろ？ 一度も話したことないのに。

「なんで僕のこと知ってるの？」

「なんでって、この学校の全校生徒の名前と顔、覚えてるから」

何かの冗談？ 全校生徒三百十一人の名前と顔、全部覚えてるっていうの？

「で、君死ぬの？」

「え？ あっ……」

どうしようつ。さつきまでは本気だつたのに。
気分が削がれたなんて言つたら、言い訳だ。
突然、この高さが怖くなつた。

「まあ、死のうがどうしようが僕には関係ないから、どうでもいい
けど。飛び下りるなら、飛び下りてくれて構わないよ」

「すごく酷い言い様……。こんな人初めてだ。

彼が僕に興味をなくしたのか、反対側の方に行つてしまつ。
僕も彼の後についていく。

なぜか、彼にすごく惹かれたんだ。

違うか。彼には僕に興味を持つていて欲しいんだ。

弁当を食べる彼の横に座る。

彼が、僕に視線を向けてきた。

「……死ぬんじゃないの？」

「えつと……今日はやめとく」

「ふうん……」

「あの……君の名前、教えてくれる……？」

冷たい視線を向けてくる。

どんな暗く深い闇も呑み込んでしまつような、無感動で凍てつく闇
を孕んだ視線を。

「僕の名前？僕は杜塚 鼎だよ」弁当を黙々と食べる。

藤山 葉月が隣に座つて、僕が弁当を食べるのをじつと見てくる。
何が面白いんだろう。

まあ、別にいいけど。

そのまま弁当を食べ終わる。
まだ僕を見つめてくる。

「ねえ、僕を見て何が楽しいの」

そう訊いたら、おひおひおひし出した。

「あ……『じめん』。嫌だよね……『じめん』」

「僕は一言も嫌とは言つてないよ。僕を見て楽しいの、とは訊いたけど」

「あの、その……綺麗だなって……」

何を言つてんだろ？ 綺麗？ 何が？

「綺麗つて何が」

「その、杜塚君が…。細いし、顔も綺麗だし…」

綺麗、ねえ。外見なんてどうでもいいから気にしたことがない。
まあ、身長が低いのは否めないくらいか。
休憩の終わりを告げるチャイムが鳴る。

「じゃあ、僕は行くから」

立ち上ると、何か言いたそうにならむとさ。
きっと、これ以上関わることはないだろうつな。

「あ、あのー」

大声で僕を呼び止める。

「何?」

「あの… よかつたら、友達になつてもらうれる?..」

「… 友達? この僕に?」

この僕に友達なんて、どうかしてるんじゃないの?
まあいいか。断る理由もない。
もしかしたら、面白いものを掉めるかもしれない。

「別に。 いいけど」

びっくりしたような表情をする。

「あ… ありがとうございます。」

嬉しそうな表情をした。ぎこちない笑顔。

そうか。藤山 葉月も一緒になの。
だから、気になつたのか。「杜塚、今からさあいつらとゲームセンに
行くけど、杜塚も一緒に来ねえか?」

放課後、薪沢がそう誘つてきた。

薪沢が指差す方をちらりと見る。

男子が三人。あからさまに嫌そうな顔をしてる。

安心してよ。そんな嫌そうな顔しなくても、僕は行かないから。
薪沢もどうして聞いてくるんだろう。

僕が行かないって言うの分かってるだろう。

。。。

「僕はいいよ」

「そつか。分かつた」

少し残念そうに三人の方に戻る。
忘れ物はない。帰ろう。

教室を出たら、藤山 葉月がいた。
僕を見た途端、嬉しそうな顔をする。

「何?」

声をかけたら、今度はおろおろとし出した。

「あ、あの……い、一緒に、帰つてもいい……?」

「別に。いいけど」

嬉しそうな顔に戻る。顔にそこまで表情として現れてる訳じゃない
けど。

先に歩き出す。

慌てて、後を付いてきた。

- 藤山 葉月の視点 -

杜塚君の後を付いていく。

段々と人気のない道に入つていくけど、どうに行くんだろ？

周りが畑や田んぼばかりの公園の中に入る。

屋根のあるベンチに迷いなく進む。

段ボールが置いてあるけど、なんだろう？

杜塚君がベンチに鞄を置いて、段ボールの中を覗く。

段ボールの中から、猫が飛び出してきた。

見事に、猫をキャッチする。

よく見ると子猫だ。黒と白の斑模様まだいひだの毛色をしている。包帯を巻いてるけど、怪我をしてるのかな。

「杜塚君、その子猫ビビったの？」

「道端で怪我したまま捨てられてるのを見つけたんだよ。だから、
ここで世話をてる」

鞄から包帯と薬を取り出した。

「家では飼わないの？」

「母さんが動物嫌いだから」

それなら、仕方ないのかな。

「杜塚君は、猫好きなの？」

「動物が好きなんだよ。猫が特に好きだけ。人間なんかより、この子達の方がどれほど純粹で綺麗か」

……そつか。杜塚君も人間嫌いなんだ。

学校ではあんなに無表情だったのに、子猫に向ける表情はすぐ優

しいもんね。

子猫もすごく杜塚君になつてゐる。

杜塚君は、子猫を見ながらすゞぐ優しそうに微笑んでゐる。

あの微笑みを向けられる子猫が、羨ましい。猫に包帯を巻く間、藤山 葉月はじつと動かずに、ただ僕が包帯を巻くのを見つめてくる。じつと見つめて、何が楽しいんだろう。

まあ、いいか。

前足に包帯を巻き終わる。

爪の状態を見る。だいぶ治つてきてるみたいで、ほつとする。
最初見つけた時は酷い状態だった。

酷く衰弱して足からは出血して、爪は血管を傷つけるほど深く切られてて。

明らかな虐待。

助かるか心配だつたけど、元気になつたからよかつた。
鳴きながら腹を押してくれる。餌が欲しい合図だ。

鞄から餌や水、皿が入つた袋を出す。
餌は缶詰め。蓋を開けて、皿に移す。
地面に皿を置く。勢いよく食べる。
水を餌の隣に置く。

「この子、元気になつたらどうするの?」

一番困つてることを聽いてきた。

「どうしようか困つてる。一番いいのは、この子をちゃんと飼ってくれる人が見つかるといいんだけど。君は飼えないの?」

「『めん……。僕の家じゃ虐待されちゃう……』

セツニヒ た後におりぬれとしゆつした。

まあ、理由はなんとなく分かる。

猫が膝に飛び乗ってきた。

耳の後ろを撫でる。

気持ちよさそうに皿を開じた。猫を段ボールの中に入れる。

「おとなしくしてゐるんだよ。明日また来るから」

名残惜しそうに鳴いてくる。

でもそれだけで、すがり付いてきたりしない。

頭をもう一度撫でて、その場を後にする。

藤山 葉月が当然のようについてくる。

「猫、心配じゃないの……？」

「心配だよ。子供に苛められるかもしれない。車に轢かれるかもしれない。元の飼い主が見つけて連れ帰るかもしれない。だから、その可能性を少しでも少なくするために、ここでは話してゐるんだよ」

「せつか…。あの子猫、拾ってくれたのが杜塚君で幸せだね」

本気で言つてゐるのかな。あの子猫にとって一番幸せなのは、ちゃんと可愛がつてくれる飼い主に巡り会つことだと想つけど。

藤山 葉月を見る。

ほんの少し笑つてゐるけど、寂しそうだ。
ぎこちない笑顔。

かつての僕と、同じもの。

昔を、思い出す。ゆっくりと歩く。まだ、藤山 葉月がついてくる。家が同じ方向なら仕方ないけど。

「君や、なんで死のうとしたの？」

なんとなく訊いてみる。

「えっと、その……生きても意味がないと思つて……だから……」

「生きてても意味がないって、どうして？」

そう訊いたら、泣きそつた顔になつた。

「両親が死んだ後、意地悪な親戚に引き取られて……毎日のように苛められるの……。学校でも苛められるし……だから、死んだ方が楽だつて……」

じゃあ、あの時本気で死ぬつもりだったのか。邪魔したつもりはないけど、邪魔をした訳か。

「それで、君はまだ死ぬつもりなの？」

藤山 葉月が俯く。まるで、僕の視線から逃げようとするみたいだ。

「分かんない……」

ああ、本当に弱々しい目をしてる。

ちょっと押しただけで崩れてしまつぱり、ぱりぱり。さつきの返答で分かつた。

きっと、藤山 葉月は死ぬ。

近いうちに。

僕は、それを見届けよう。その後、藤山 葉月と別れて帰ってきた。
すごい名残惜しそうな顔をしてたな。

まあ、嫌いな親戚夫婦のところに帰るんだから、当然か。
確かに、苛められるって言ってたな。

藤山 葉月が見たら、僕の今の家族は羨ましく見えるのかな。
実際は、家族らしく見せてるだけだけど。

元々不倫から始まってるんだ。

最初から歪な形で始まつたんだから、いつか壊れるに決まってる。
そういうえば那奈瀬は、不倫のことは知ってるのか？
まあ、知つてようが知つてまいが、どうでもいいけど。
そんなことよりも、今日はどうしようか。

今日も行くか。どうせ明日、土曜日だし。

遅くなつてもゆっくり寝られる。

一階から僕を呼ぶ声が聴こえる。

ご飯を食べて風呂に入つたら、出掛けよう。

獲物を狩りに。

- 藤山 葉月の視点 -

杜塚君と別れて、家に続く道をとぼとぼと歩く。

帰るの、嫌だな……。

どうせ、苛められるだけなのに……。

でも、帰らなかつたら余計に苛められる。

どつちにじたつて苛められる。

杜塚君は、周りの人間とは違う気がする。
なんでそう感じるのか分からぬけど。

でも、杜塚君なら、僕を理解してくれる気がする。

どうしてここまで惹かれるんだろう。

飛び下りようとした僕を見つめるあの田を見たからかな。
無感動で冷徹で氷のように冷たくて、奥底に哀しみを隠したあの田
を。

杜塚君なら、僕なんかが傍にいても許してくれるかな。

僕は、誰からも疎まれる。

存在が、邪魔。

家が、見えてきた。

- 藤山 葉月の視点 -

家の扉の前で一旦立ち止まって、溜息を吐く。

どつちして、僕はこんな思いばかりしなきやいけないんだろう。

人間は皆平等とか言つけど、あんなの嘘だ。

皆平等なら、どつちして僕はこんな思いをしてるの?
母さんがよく言つてた。

神様は乗り越えられる試練しか与えないって。

それも嘘だ。全然乗り越えられないじゃないか。

そもそも、神様なんて人間の空想が作り出したものじゃないか。
そんなの、僕は信じない。

思いきつて扉を開ける。

テレビの音が聴こえる。

靴を脱いで中に入る。居間を覗くと、おばさんがテレビを見てた。

「ただいま……」

一応、声をかける。僕に見向きもしない。

最近は、僕の存在すら無視され始めた。

諦めて、自分の部屋に戻る。

ベッドと机と本棚しかない、殺風景な部屋。

玄関が乱暴に開く音がした。

おじさんだ。一番、会いたくない人。

- 藤山 葉月の視点 -

廊下からドタドタと乱暴な足音がする。

「あんた、また酔つて帰ってきたの？医者から酒は控えろって言われてるのに

「ああん？医者がなんぼのもんじやい。好きなもん飲んで何が悪い言つねん。葉月はおいらんのか！？おい、葉月！？」

またか……。お酒くらい自分で買いに行けばいいのよ。溜息を吐く。仕方なく立ち上がる。

部屋の扉を開けて、廊下に出る。

「はー……」

「ねえ葉月、酒買つてこー。」

「……はー」

おじさんからお金を受け取つて、家を出る。
近くの酒屋さんまで、とぼとぼと足を運ぶ。

今日は機嫌がいいのかな。

部屋にいきなり入つてきて、蹴られたりしなかつたし。
帰つたら分からぬけど。

酒屋さんで日本酒とビールを買つて、来た道を戻る。
なんとなく、腕を捲る。

傷だらけの、汚い腕。

最近は、煙草を押しつけられた。
なんで、痛い思いばかりしなきゃいけないんだ？
僕が何か、悪いことしたのかな。

溜息を吐きながら、家に入る。

- 藤山 葉月の視点 -

「ただいま……」

「何をぐずぐずしどんねん…あいつも持つてこんかいー。」

やつぱりこいつなるか……。

こいつやって買いに行かせて、遅いって理由つけねちねち何か言つてきて、暴力を振るうの好きだもんな。

「遅いわ。もっと早く買いに行けんのか?」

「……すみません」

買つてきたお酒をテーブルの上に置く。
おじちゃんが椅子に座つてふんぞり返つている。
その姿を見る度に、嫌悪感が沸き上がつてくる。
醜い顔を更に醜く歪ませて、偉そうにふんぞり返つて。
自分が偉いって、勘違いもいいところだ。

「なんじゅいその田はー!」

テレビのつまモンを、顔田掛けて投げつけられる。
咄嗟に腕で顔を庇つ。

痛いな……。

本当に、嫌になる。

何も言わずには踵を返し、玄関に向かう。

「おーーーー行くんじゅー!」

おじさんの声を無視して外に出る。

こんな所にいたくない。

どこかに行こう。獲物が起きるのを待つ。

今日の獲物は富木みやぎ 信仁のぶひと。二十八歳の会社員。

酔つてたみたいで、自分からびぶつかつてきたくせに、文句を言つてきた。

散々言つてきたな。

まあ、散々言わせて満足したといひを、背後から襲つた訳だけど。

わて……今日はどんな方法でいたぶつてやるか?

皮膚を剥ぐのもいい。

骨を折るものいい。

ああ……久しぶりに目隠しをしていたぶつてやる。何も見えない状態で、何をされるか分からなくなつて、きっと半端ない恐怖だろうな。

机の引き出しを開け、布を出す。

宮木「信」の頭を起こして、布を結ぶ。

目を覚ましたら何も見えなくて、慌てるだらつなあ。どんな反応をするか、楽しみだ。

早く起きてくれないかな?なかなか起きない。酔つてたし、尚更かな。

早く楽しみたいのに、こいつの時に限つて時間が経つのは遅い。このまま自然に起きるのを待つかどうじようかな。

強引に起こそうかな。

酒も入つてることだし、せつと待つてたら遅くなる。起こしてしまおう。

手加減なしで腹を蹴る。反動でベッドが軋む。流石に起きた。身体を折り曲げて咳をする。

「何しやがるーおー、こりゃあなんの真似だー?」

随分と威勢がいいな。こいつは獲物は威勢だけだから、後でどれだけ悲鳴を上げるか楽しみだ。

「何って、腕を縛つて田隠しをしたんだよ。分からなの？」

「やつこいつとを語いてんじゃねえよーなんでこんな」とをするか
訊いてんだよー。」

「なんでって、分からない？」

まあ、分かるはずがないか。

「俺が知る訳ねえだらーお前、ちつとも餓鬼か！？タダで済むと思
うなよー！」

「うわせいなあ。どうでもここととをいやいやいや。そろそろ、自分がどうこの状況に置かれてこるのが、分からせてや
るわ。」

首筋にナイフを当てる。せつとひんやりした感触に、恐怖が沸き上
がってきてくる」とだらり。

「これがなんなか分かる？ナイフなんだけど、どうなるか分かる
よね？これ以上」ひちやくひつよつなり、殺すよー。」

まあ、どうせいたぶつて殺すけどね。ひとつ、と息を飲む音がある。
自分が置かれてる状況、分かった？
れあ、どうする？まだ強がる？命乞い？

「ここのクソ餓鬼ータダで済むと思つなよー。」

ただで済まないのは君の方だよ。
自分が政治家の息子だからって、何をしても許されるなんて思つて
るんだもつね。

僕が教えてあげよつ。

絶望と恐怖を。

「タダで済まないのは君の方だよ? 今からたつぱり、いたぶつてあげる……」

ああ、興奮してきた……。
心臓がすごく脈打つてる。
ナイフを舐める。

さあ、狩りの時間だよ……。
たつぱり血を、吸わせてあげる……。凄まじい悲鳴を上げて暴れる。
はは、あははははは!

本当楽しすぎて笑いが止まらないよ。
血を舐める。ああ、不味いなあ。
例えるなら、焦げたパンのような味がする。
酒ばっかり飲んでるんじゃないの?
だから血の味まで不味くなるんだよ。

指落とすの飽きたな。

なんとなしに親指を折る。

「きつ」と音がして、指が本来とは逆の方向を向く。

ああ……骨が折れるこの感触も気持ちいい。

そうだ、今日は首を切り裂いて、死ぬのを眺めてやる。ナイフに着いた血を舐める。

身体が極限まで昂ってきて、不味いのも気にならなくなつてくれる。
殺す前に、もう少しじだけいたぶつてやる。

「うひょウカナ。

耳を削ぎ落としてやる。

耳を摘まむ。ナイフを耳に当てる。
何をされるのか分かったのか、やめると何度も叫んでくる。
構わずにナイフを食い込ませ、滑りせる。

「ニギヤああああああー！」

ああ、いい悲鳴だ。更に、僕を興奮させてくれる。
がりがりと、削ぎ落とす。

ほぼ、一部の皮とほんの少しの肉しか繋がっていない状態になる。
ナイフで落とさず、手で無理矢理千切る。

ぶぢぶぢと、肉と皮が引き千切られる感触が伝わってくる。
最後まで残った皮がなかなか千切れない。
仕方なくナイフで切断する。

過呼吸のような息づかいが聴こえてくる。
切断した耳を口に入れれる。
耳は少し固い。

噛みながら畠木 信一を見める。

田隠しをしてるから分かりづらこねど、田隠しのトコ無様に泣いて
るんだろうな。
いい様だ。

噛んでた耳を飲み込む。

さて、首を切つてやる。耳の切断面に爪を食い込ませる。

「あ、あ、あ、あああー！」

更にぎりぎりと食い込ませて、引っ掻く。

爪の間に肉の破片が入り込む。

普通なら気持ち悪いだろうけど、今はそれすらも気持ちいい。

いつの間にか血塗れだなあ。

手に着いた血を舐めて、爪に詰まつた肉の破片を歯で取り除き、飲み込む。

ナイフを握り直し、首に当てる。

怯えたのが伝わってきた。

つつと、ナイフを滑らせる。

滑らせたせいで、皮膚が少し切れて血が滲む。

滲んだ血を拭い、舐める。

ナイフを首に突き刺す。ナイフを首の骨に達するまで、深々と突き刺す。

悲鳴が上がるけど、血が逆流して「じぼじぼ」とした音にしかならない。喉の中で血が溢れて、苦しいだろうなあ。

「あはは……ねえ、苦しい?」

僕の方に首を向ける。

可哀想に。目隠しで僕の姿見えないでしょ。

どうせ死ぬんだから、最後に目隠しを取つてあげる。
目隠しを取つたら、虚ろな目で睨んできた。

へえ……まだそんな気力あるんだ。

ナイフを刺した場所に指を入れて、肉を抉る。

悲鳴は「じぼじぼ」と音になつて消える。

これほどの血が流れたんだし、そろそろ死ぬかな。
息づかいもほとんど聞こえない。

しばらくして呼吸と脈を見る。

呼吸も脈もない。瞳孔も開いてる。
死んだか。

「死んだね…………あははは、あはははははははは…」 「あは
ははははははは…………はあ……ふふ…」

ひとしきり笑う。

「さて……と、解体しよう」と

部屋の隅に置いてある斧を手に取る。
この斧も長いこと使つてるなあ。
たくさんの血を吸つた。

手入れしてあるから、まだまだ使える。
ベッドを壊す訳にはいかないから、死体を引き摺り下ろす。
斧を持ち上げ、死体に振り下ろす。

死体の肉を噛み千切り、噛む度に生肉を噛む生々しい音が響く。
この腕を食べ終われば、後は内臓だけ。
さつさと食べて骨を碎いて帰ろう。「よし……終わった」

骨を碎き終わつた。

服に着いた骨の粉塵を払い落とす。
まあ洗うから気にしなくていいか。
掃除しよう。床も壁も血が飛び散つてゐる。

この血の飛び散つて出来た模様を消すのはもつたいないとは思つけ
ど、仕方ない。

腐敗し出したら臭いが酷いから。

部屋を出て、バケツと雑巾を持ってくる。
血を黙々と拭き取っていく。

十分かけて血を拭き取る。

後はバケツの水を捨てて、シャワーを浴びるだけ。

シャワー室に向かう。そこで血の色に染まつた水を捨てる。
一旦脱衣室に出て、タオルと着替えが置いてあるか確かめる。

大丈夫だ。

さて、服を脱いでシャワーを浴びよう。ザー、という水の流れる音
を聴きながらシャワーを浴びる。

なんとなく右腕を見る。

肩の関節から肘にかけて走る、消えない傷痕。

あの女が僕を殺そうとした時に出来た傷。

あの女がいたという痕跡が、僕の身体に傷痕として残つてゐるのが、
腹立たしい。

傷痕に爪を突き立て、ぎりぎりと引っ搔く。

「は……あはは……」

勿論、痛い。

皮膚を傷つけたみたいで、血が滲む。

シャワーが少し沁みる。

血は洗い流したし、もう出よ。

ふと、思う。両親が違う人物だったら、僕の人生はまた違うものになつてたのかと。

まあ、そんなこと考へても無意味だ。
もしもや、偶然なんてない。

あるのは、必然だけ。

僕が快樂殺人者になつたのも、必然。

着替え終わり、片付けを済ませ廃ビルから出る。
空を見上げる。今日は新月か。月が見えない。

あの猫は大丈夫かな。

人間を殺した後に猫の心配なんて、おかしいと思うかい？
僕にとつては拾つた猫の方が心配だよ。人間はどうだつていい。
価値観の問題だね。

帰る前に様子を見ていく。猫がいる公園までゆっくりと歩く。
街灯が少ないので、暗い。

でも、この暗闇は好きだ。

この静けさも。聴こえてくるのは、虫の鳴き声や風の音、木々が風
に揺られて葉が擦れあう音。
自然の音しかしない。

人間が発生させる不協和音は聴こえない。

昼は不協和音に溢れ過ぎてる。

脳髄が忌々しい不協和音に犯されそうになる。

だから、この場所で聴く夜のこの静けさは好きだ。

自然の音しか聴こえないから。

公園が見えてきた。

猫のいる段ボールを覗く。気持ちよさそうに寝てる。
何事もなくてほっとする。
名前はつけてない。これ以上愛着が湧かないように。
何が起こるか分からないうち。
これ以上愛着が湧いたら、何かあつたら悲しくなる。

だから、名前はつけない。

猫が起きた。欠伸をして、僕に気づく。
手を伸ばすと、僕の手にじやれついてくる。
自然に、笑みが洩れた。

- 藤山 葉月の視点 -

家を出たのはいいけど、どこに行こうか……。
どこにも行くところなんてない。

僕に居場所なんてない。

「はあ……」

溜息しか出ない。

仲のよさそうなカップルや、家族連れが視界に入る。
母さんや父さんが生きてたら、こんな思いしなくて済んだのかな。
母さんも父さんも、どうせならあの時僕も一緒に連れてってくれ
ればよかったのに。

あの時、横断歩道を家族三人で歩いてたら信号無視した車が突っ込
んてきて、轢かれたんだ。

母さんと父さんは、病院で死んで僕だけ助かった。

こんな思いするなら、あの時助からなかつたからよかつた。

「はあ……」

「どうかな……。」

……あの猫のところに行つてみよつかな。
動物は、見てるだけでも癒される。
行ってみよう。

猫のいる公園に着く。

杜塚君がいた。

- 藤山 葉月の視点 -

杜塚君がいた。

膝に猫を乗せて、喉を撫でてあげてる。

杜塚君が微笑んでる。

猫も嬉しそうに杜塚君にじやれつく。

どうしよう。邪魔しない方がいい。

帰ろうか……でも、どこに？

居場所と呼べる場所なんか、僕にないのに。

かといって、ここにずっと突っ立つて居ても気まずいし。

おろおろとしてるうちに、杜塚君が顔を上げて僕を見た。

目が合った。

「君、こんな時間に何してるの？」

「その、家を出てきたの……」

「やつ

それだけ言つと、興味をなくしたように僕から視線を外す。

「杜塚君は、どうして？」

「散歩のついでに様子を見に来ただけ」

こんな時間に散歩なんて、家族の人心配しないのかな。
僕が気にすることじゃないけど。

座つてもいいかな？

隣に座る。杜塚君が一瞬僕を見たけど、何も言わずに視線を猫に戻した。猫を撫でてたら、視線を感じて顔を上げると、藤山葉月がいた。

僕が見つめると、おろおろとじ出して目を泳がせる。
なんでそこまで動搖するんだらつ。

睨んだ覚えはないけど。

「君、こんな時間に何してるの？」

声をかけたら、案の定余計におろおろとじ出した。

「その、家を出でたの……」

「わい

視線を猫に戻す。

鼻をつついてやると、びっくりしたような顔をした後に、手に爪を引っ掻けて指を舐めてくる。

「杜塚君はどうして？」

「散歩のついでに様子を見に来ただけ」

正確には散歩じゃなくて、わざわざ一人殺してきたんだけどね。

猫が舐めてるこの手は、さっき血塗れだつたんだよ。

藤山 葉月が恐る恐る隣に座つた。

ちひりと視線を向けて、すぐに猫に戻した。ただ無言で、猫を撫でる。

猫じゅらじを田の前でちひりつかせると、喜んで猫じゅらじゅらしつく。

見ててとても和む。

藤山 葉月がじつと見つめへくる。

「ねえ、家を出でたって、どうして？」

まあ、なんとなく理由は分かるけど。

意地悪な親戚に暴力を振るわれたとか、そんなとこだひりうね。

「その……おじさんに物投げられて、それで……」

やつぱりか。僕の場合、暴力がなかつただけまだマシだったのかな。

育児放棄も十分虐待のように感じるけど。

暴力がないだけまだマシか。

最後に殺されかけたけど。

結果的には僕が殺した訳だけど。

猫が眼そうに欠伸をした。

遊び疲れたかな。そろそろ寝かせるか。

猫を段ボールに寝かせる。

丸くなつてすぐに眠りにつく。

僕もそろそろ帰ろう。

「僕、帰るけど」

「あ……じゃあ、僕も一緒に帰つていいい……？」

「別に」

何か言おうとしたけど、待たずに出歩き出す。

藤山 葉月が慌ててついてきた。無言で歩く。

一切会話はない。別にそれでいいけど。

田の前から車がやって来た。

黒い乗用車。普通に通り過ぎる。

スピードは結構出てたけど。

不自然な息づかいが聴こえて、後ろを見る。

藤山 葉月が地面にへたり込んでる。

両手で口を押さえて、身体をガタガタと震わせてる。

「……大丈夫？」

声をかけると僅かに頷く。

傍にしゃがんで、背中をさする。

しばらくして、ようやく震えが治まった。
相変わらず気持ち悪そうだけど。

「じめん……。もう、大丈夫」

そんな青白い顔して、大丈夫はないだろうけど。

「杜塚君は、夜は好き？」

いきなり、そんなことを聞いてきた。なんでそんなこと聞くんだろ
う。

まあ、いいけど。

「夜？好きだけど、なんで？」

藤山 葉月が深く息を吐く。

「僕……夜が怖いんだ」

「…………」

何も言わずに、黙つて聞く。

「僕が小学生の時に事故に合つたんだ……。僕と両親で歩いて、信号無視の車に轢かれて……それ以来、夜が怖いんだ……」

「…………」

それで、両親が死んで親戚に引き取られたって訳か。
僕も、昔は夜が嫌いだったな。

夜は一人きりで寂しかったのを覚えてる。

「ごめん、つまんなないこと話して……」

「別に」

よつやく呼吸が整い始める。

さする手を離して、立ち上がる。

藤山 葉月が立ち上がろうとする。

まだ足が覚束ないみたいだ。見ていて危なつかしい。
手を伸ばす。

僕の手を掴んで、ようようと立ち上がった。「ごめん……ありがと

「ひ

「いいよ、別に」

歩きながら喋る。

夜が怖いなら、出なければいいのに。

ああ、そうか。意地の悪い親戚のせいで、家にいるのが嫌なのか。
僕だったらどうするだろう。

今の僕だったら計画を練つて、確実に殺してる。

昔の僕なら、やっぱり我慢してただらうか。

……してゐるな。

ただひたすら我慢して、溜めに溜め込んで、そして爆発させて。

藤山 葉月なら、爆発させるという発想すらなさそうだな。

溜め込んだものを外に出すといつ発想すら持たずに、死ぬことを選ぶんだろう。

最後の最後で、藤山 葉月がどんな最後を選ぶのか、楽しみだ。

「じゃあ、僕は帰るから」

「うん、今日はありがとつ

藤山 葉月と別れる。

振り向き様、悲しそうな寂しそうな表情が見えた。家に着く。
家族を起こさないように、静かに扉を閉め、鍵をかける。
喉が渴いたな。お茶を飲もう。
そう思つてリビングに向かつ。
扉を開け、足が止まる。

「兄さん、まだ起きてたの？」

那奈瀬がいた。テーブルにノートや本を広げてゐる。
勉強してゐるのか。

「おー鼎。お前にこんな時間までビリエッキ崇めてたんだよ。
また猫か?」

那奈瀬がカツチラーメンを食べながら、振り向いてきた。

「やうだよ。悪い?」

今まで何回も猫の世話をしてきたことを知つてゐるから、夜に散歩に行くのは猫のところに行つてると思つてゐる。本当は違つけど。まあ、やう思わせといひ。

「いや、別に。どうせなら、飼えば?」

「母さんが嫌がるでしょう」

「母さんなら説得すれば、飼ってくれるんじやね?」

「まだどうつか。まあ、やつてみるか。

「まだ起きとくの?」

「まだな。課題が終わんねえんだ」

「やつ、おやすみ」

お茶を飲み、自室に戻ってきた。

猫のこと、言つてみようか。

携帯を開く。着信一件。

開いてみると、薪沢からだ。
内容を見る。

明日遊べねえ？

といつものだつた。明日遊べない……か。

どうしようか。確かに予定はない。

今日は土曜。休日で人間がじつた返す中を、わざわざ出かけるのも
なあ。

どうするか。

時計を見る。午前三時十分。

薪沢のことだから、今日は土曜だし起きてるな。
メールしてみるか。

遊べるけど、何？

送信。

一分くらいで、すぐさま返信が来た。

遊ぶつていよつ、ウマイつて噂の、最近出来たラーメン屋があ
るんだよ。

一緒に行かね？

ラーメンか……。かなり魅力的。

いくらでも食べられる。

人間がごつた返す中を出かけるのは嫌だけど、食べた後すぐ帰れば
いい話だ。

行く。そこ美味しいんだよね？

行つたやつは皆ウマイって言つてゐるが

じゃあ行く。十一時に待合室でいいの？

うん。十一時

分かった。また後で

おー、またなー

携帯を閉じる。

田覚ましを八時に合わせて、布団に潜る。
すぐに睡魔が襲ってきた。田覚ましの音で、夢の微睡みから一気に
引き起こされる。

「ん……

手探りで田覚ましを探す。

手に何か当たる。形を探ると田覚ましだ。
勢いよく黙らせる。

布団を被つて、じばりぐるのままでいる。
十分ほど経つて、田を擦りながら起き上がる。
窓を開けて、朝日を浴びる。

今日は快晴。雲ひとつない。

着替えて、下に下りよう。

タンスからジーンズとシャツを出す。
寝間着を脱いで、それに着替える。

寝間着を持つて下に下り、寝間着を洗濯機の中に入れ、洗面所で顔を洗う。

リビングに行くと、母さんが朝食を並べてた。

「あい。鼎、おせよ」

「おせよ」

椅子に座る。

ああ、そうだ。猫の「」と、言つてみようか。

「ねえ 猫さん

「ん? なあ?」

「猫、飼いたんだ」

猫と聞いて、やっぽり嫌な顔をした。

「……猫?」

「うそ。怪我してて、家で世話をしたいんだ。……駄目っ。」

少し考える仕草をする。

僕は返事が返つてくるまで待つ。

「鼎の部屋から出れないんだ、いいわよ

よつやく返事が返ってきた。

「それなら、飼つていいの？」

「ええ、いいわよ」

凄く嫌そつな顔をしてる。

僕の部屋で飼うんなら、余計な心配はしなくていい。

帰りに、猫を連れて帰ろつ。

名前、付けないとな。ご飯を食べた後、しばらくやることがないから自由で読書をする。

時計を見る。九時半。そもそも出るか。少し大きめの黒い鞄に財布だけ入れる。持つしていくものは財布だけで十分。下に下りる。

「母さん。僕、出掛けてくるから」

テーブルを拭いていた手を止めて、僕を見る。

「あら、薪沢君と？」

「うん」

「分かったわ。いつらっしゃい。夕飯までには帰つてきな」

「うん。いってきます」

さて、駅に行く前に「ノンビリに寄り合。

猫の餌を買いに。

きっとお腹をすかしてるだろうから。玄関を出る。太陽が眩しい。餌だけじゃなくて、水も買って行つた方がいいな。

この日差しで脱水症状でも起こしたら大変だ。
とりあえず、コンビニに行こう。

コンビニに着く。

このコンビニは、家から歩いて五分くらいの距離にある。
家から近いから結構便利だ。

猫のまぐろ味の缶詰と水を買い、コンビニを出る。
そして、猫のところに行こう。

公園に着く。

人間はいない。いつも通り。

ベンチに鞄を置いて、段ボールの中を覗く。
僕を見て、元気に鳴いてきた。
餌がほしいみたいだ。

段ボールの側に置いていた皿に缶詰と水を入れて、猫に食べさせる。
食べるのを、じっと眺める。
食べ終わって、僕の膝に乗ってきた。
頭を撫でる。

「名前、決めないとな。どうしようか」

毛色が斑模様だから、まだらとか。

「……まだら。まだらじょりつ」

適当すぎるかな。まあ、いいか。

猫、じゃない。まだらが鳴いた。日が昇ってきて、暑くなってきた。

まだらが蝶を追いかけて遊ぶ。

飛び跳ねてみたり、楽しそうだ。

生ぬるい風が、髪を撫でていく。

なんとなく、胸騒ぎがするのはなぜだろう。

このまままだらを、置いていっては駄目な気がする。

立ち上がり、まだらの傍にしゃがむ。

まだらが座つてきょとんと見つめてくる。

とても純粋で、無邪気な瞳。

穢れた僕なんかとは全く比べ物にならない、綺麗な瞳。

飼い主になるのが、僕でいいんだろうか。

後ろから、いきなりガサツといつ足音が聴こえた。

思わずまだらを抱き抱える。

「あ……杜塚君……驚かして、ごめん……」

なんだ、藤山 葉月か。

てっきり、まだらを捨てた飼い主が捕まえに来たのかと思った。飼い主が連れ戻しにやつて来るなんて、考えすぎか。
きっともう、死んだものと思つてゐるはず。

連れ戻しになんてまずない。

けど、万が一、見つけたら？

きっと連れ戻されて虐待されて、今度こそ殺される。

それは、嫌だ。

心底、嫌だ。

いつの間にか僕は、この猫に、まだらに、心底愛着を持つてしまつたみたいだ。

こんなに愛着を持つなんて、初めてだ。
今まで何回も、猫を世話してきたのに。
どうしてまだだけ、こんなに愛着持つのだろう。

「杜塚君どうかした？」

「いや、なんでもない」

時計を見る。十一時一十分。

そろそろ駅に行つてもいい時間帯だ。

「杜塚君、誰かと約束してるの？」

「うん、やつ

藤山 葉月が残念そうな顔をした。

「なんなら、一緒に行く？」

「え？僕が？で、でも……」

「いいよ、別に。あいつなら、文句言わないだらう」

一瞬、俯き、

「じゃあ、行つていい？」

と、嬉しそうに言った。藤山 葉月を連れていくのないことにして、
問題はまだ。「どうしようか……」

電車に乘るし、行くのは飲食店だしな。
連れていくのが駄目なのは一目瞭然。
でも、胸騒ぎを無視するのも気が引ける。
万が一、ということがある。

「杜塚君……？」

藤山 葉月に心配そうに呼ばれた。

「……」めん。行こうか

大丈夫。きっと大丈夫。
僕の考えすぎだ。

まだらを段ボールの中に入れようとしたら、まだらが嫌がった。
暴れて抵抗してくる。

服に爪を引っ搔けて、離れようとしない。

こんなこと、初めてだ。抵抗なんてしたことなかつたのに。
連れていってつて、ことだらうか。

……やっぱり、連れていこう。

鞄の中でおとなしくしていくれれば問題ないし。

「連れていくの？」

「うん。離れないから。この鞄なら、余裕で入るし

まだらを鞄に入れる。

今度は嫌がらなかつた。まだらを鞄に入れる。身体が小さいから、
すっぽり収まつた。

「おとなしくしてよ

耳の後ろを撫でる。

まるで返事するかのよつこ、ニヤーと鳴いた。
時計を見る。

「行こうか。あいつより遅れるなんて嫌だし」

「うそ、誰と待ち合わせしてるの？」

「薪沢って言つて、分かる？」

考へるよつこ俯いた。

「「」めん、名前だけじゃ分かんないや……」

まあ、そつだろつね。違つクラスだし。
そもそも、面識ないはずだし。

「行くよ」

「あ、うん」

僕のすぐ後ろを黙つてついてくる。
まだらは、鞄の中でおとなしくしてゐる。駅に着く。時計は十一時五
十分を示してゐる。
勿論、薪沢はまだ来てない。
今日はどうやら遅刻するだろな。

「薪沢君、まだ来てないね」

「いいんだよ。あいつ、遅刻魔だから」

「や、そり……」

そういえば、藤山 葉月は財布持つてるんだどうつか。
心配になってきた。

「ねえ、電車に乗ってラーメン屋に行くなざーちゃんと財布持つて
る?」

「うん。大丈夫。ちやんと持つてるよ」

なら安心だ。なんとなく散歩してるだけのイメージがあるから、財
布持つてないのかと思った。

「薪沢君、来ないね」

藤山 葉月がぼそっと呟く。

「いいんだよ。こつものことだから。あ、来た」

「え?」

薪沢が来た。『只今絶賛妄想中』といつ、明らかに痛すぎるシャツ
を着て。

藤山 葉月も、これには流石に引いたみたいだ。薪沢が息を切らし
ながらやってきた。

「また遅刻。八分一一秒」

「いちいち細けえなあ、相変わらず。で、誰？」

薪沢が藤山 葉月を指差す。

藤山 葉月はおろおろと自分の名前を言おうとするけど、声が全く出でない。

激しい人見知りなのか、それとも誰かと喋るのが苦手なだけなのか。まあ、どっちでもいいけど。

でも、この場は僕が喋るべきか。

「違うクラスの藤山 葉月。途中で会つたから連れてきた。で、こっちのアホ面は薪沢 波哉斗」

「アホ面つて酷くねえ！？」

「違うの？それか間抜け面？」

「いや……もういいです」

諦めて脱力した。本当、薪沢は弄つて飽きないな。

藤山 葉月が笑つてゐるし。

「薪沢、回れ右」

「お、おお？」

素直に回れ右をする。

背中に『じカツプ命、誰か揉ませて』の文字。
端に小さく『冗談ですよよ』とある。

藤山 葉月が地味に引いてる。

「ハハ、う奴なんだよ。面白いでしょ」

「うそ…… そうだね」

笑ってるけど、明らかに顔をひきつらせて引いてる。
まあ、あれだからね。

薪沢は分かつてないみたいだけど。「どうかしたか?」

薪沢が藤山 葉月に話しかける。

「あ、えっと、面白い服だね……」

「面白いけど痛すぎるよね」

間髪入れずに割って入る。

薪沢が服について語り出したら面倒だ。
興味ないのにやたら長いし、必要以上に熱く語る。
何より、痛すぎるのを分かつてないのが痛すぎる。
周りの引いた田が分かんないのかな。
まあ要するに、馬鹿なんだね。

「痛すぎるってなんだよー?お前今日、いつも以上に酷いやー!?

「ハハ? 気のせいだよ」

「……なんかもうこいや。とりあえず、行こう!」

「うん」

電車に揺られて五分。目的の駅に着いた。
ラーメン屋までは歩いて五分。

「なんか食べてきたのか？」

「朝に少しね。これからいつぱい食べる」

「なんか……杜塚一人で店の売上の半分食いそうだな……」

- 藤山 葉月の視点 -

……なんなんだろ？。この光景。
凄まじい光景が広がってる。

杜塚君の前にはとんこつラーメンと炒飯一杯、それに餃子二十個。
これだけでもすごいのに、既に完食した皿が十皿以上積み上がってる。

ラーメンとか炒飯とかいろいろ。

しかも、食べる早さが凄まじく早い。

この店に入つて一時間は経つたけど、この一時間の間に一十皿以上
食べる早さが凄い。

ほら、こうしてる間にラーメン完食した。
で、また注文。

「すいません、醤油ラーメンに餃子二十個お願ひします」

どんだけ食べるんだね？。

その細い身体の中に、どうやつたらそれだけの量が入るの？僕なんて、味噌ラーメン一皿でお腹いっぱいなのに。

あれだけ食べて、太らないのも不思議。

店の人もだけど、他のお客さんも唖然としてるし……。

- 藤山 葉月の視点 -

薪沢君が「杜塚一人で店の売上の半分は食いそうだな」と言つたのを思い出す。

確かに言える。今なら分かる。

なんなのあの量。

さつきからまた皿が増えてるよ？

もう少しで三十皿越えるよ？

その凄まじくあり得ない量を、なんで無表情で涼しい顔して食べれるの？

なんか、意外すぎる。

まさかこんな大食漢とは思わないよ。

イメージ出来ないもん。

実際見てもまだ信じられないもん。

どうなつてんのその胃袋。

「なあ杜塚、これ食つてみるよ」

「どれ？」

薪沢君が指差す方を見る。

その瞬間、杜塚君が固まった。

僕も見てみる。

激辛レッドラーメン、というラーメンが書いてある。

なんか、すごい辛そり。

「薪沢、これを僕に食べろと？」

「おう、食べれるだろ？」

「僕が辛いの大の苦手だつてこと、分かつて言つてる？」

「おう、分かつてゐる。すいませーん、激辛レッドラーメンひとつ！」

「ちよ、馬鹿！何してんの！？」

杜塚君が初めて動搖した。

それだけ辛いの苦手なんだ。

しばらくして問題のラーメンが運ばれてくる。

杜塚君の前に。

杜塚君が、明らかに冷や汗を流しておひおひとしている。
なんか、本当に意外すぎる。

杜塚君が、激辛ラーメンひとつで動搖するなんて。目の前に静かに
鎮座する、激辛レッドラーメンとこの名の敵を睨む。
なんなんだよ、この毒々しい赤。
無理。こんなの無理。

七味唐辛子でさえ、僕にしたら辛いの！」

こんなの食べたら二途の川が目の前に広がるよ。

「薪沢、お前食べる？」

「やだ。もう食えねえし。お前まだ入るだろ？」

「入ったとしても、これは無理。薪沢が頼んだんだろ。食べろよ」

「だからもう食えねえって。頼んだのに食わねえのはもつたいねえだろ？任せた」

任せられてもものすごい困るんだけど。
どうしよ。これ。

本当に無理だつて。
匂いだけで無理だつて。

藤山 葉月を見る。

勿論、食べてという意味を込めて。
首を横に振りやがつた。

く……、僕が食べるしかないのか。

ええい、自棄だ自棄。三途の川でもなんでも見てやる。

- 藤山 葉月の視点 -

「杜塚君……大丈夫……？」

恐る恐る声をかける。

「大……丈、夫」

うん。分かるよ。大丈夫じゃないよね。

顔を少し赤くして、涙目になつて机に突つ伏してゐるんだもん。
机に涙の後が残つてるよ。

大丈夫じゃないよね。

食べてる間が凄かった。

涙を流しながら吐きそうになりながら、たまに咳き込みながら食べ

るんだもん。

そんなに苦手なら、途中でやめればいいの。

食べ物は残さないのがルールとか？

食べるの手伝おうとしたら、「いや、いい」って目に涙を溜めながら言われたし。

本当に大丈夫かな……。

魂の抜けた人形みたいになつてる。ああ、涙が出てくる。

喉が焼けそんぐくらい熱い。実際燃えてるんじゃないかな。これ。胃がびっくりしてるのか、さつきから食べたものが上がつてくるんだけど。

ああ、マジで死にそう。死にかけた。

一口目からヤバかった。

最初は美味しいんだよ。最初だけは。

後からやつてくる辛さが地獄なんだよ。

凄まじく辛かつたんだけど。

吐きそうになりながら食べたよ。

途中で三途の川が見えそつたよ。

薪沢は僕を殺す気か？

途中で藤山 葉月が手伝おうとした時に、食べさせればよかつた。意地で断つたけど、やめとけばよかつた。

マジで死にそつたよ。

やつぱり辛いものは撲滅すべきだと思つ。おかわり自由の置いてあるお茶を、残らず飲み干してやつと落ち着く。

それでもまだ、喉の奥に辛いのが残つてゐるけど。

微妙に残つてゐるのが気持ち悪い。

「杜塚、今更だが激辛ラーメンの料金は俺が払わせていただきます

「当たり前だよ。払わなかつたら頭かち割るよ？」

「冗談だけどね。僕がかち割るなんて言つたら[冗談に聽こえない]。それにしても辛いのが残つて気持ち悪い。口直しに何か食べようかな。

「すいません。味噌ラーメンひとつ」

「まだ食つのかよー?」

「当たり前。口直しにね」

「お前の胃袋つて底無し沼だな……」

そんな真顔で言つ」とかな。

むしろ、なんで皆これくらい食べれない訳?
僕からしたらそっちの方が不思議なんだけど。
味噌ラーメンがきた。

で、五分でスープまで飲み干して完食。

藤山　葉月が軽く引いてる。
まあ、気にしなくていいや。

その後、料金を払つて店を出る。

総額一万八千六百円。

まあ、これくらい普通か。
うん、よく食べた。

- 藤山　葉月の視点 -

なんか今日は、驚きの連続。

杜塚君があんなに凄まじい大食漢だと思わなかつた。
辛いのが滅茶苦茶苦手つてことも。

なんかほそつと「辛いものは撲滅すべきだと思ひ。うん、撲滅すべきだよ」なんて聽こえたし。
その時の顔が真顔だつた。

よっぽど嫌いなんだね。いつか本当に辛いものの撲滅同盟なんて作つてそう。

そして最後に味噌ラーメン。

うん。どうなつてんだろうね。あの胃袋。

本当、あの細い身体のどこに入るんだろ。

あれだけ食べて太らないのも、ものすごい不思議なんだけど。

ああ、二万円を涼しい顔して出したのもびっくりだよね。

いいなあ。あれだけ持つてて。

僕はそれだけもらえないから、ちょっと羨ましい。

そういうえば杜塚君、きっと気づいてないとと思うけど、満足そうに表情が緩んでる。

いつもの硬い冷静沈着な無表情がどつかに飛んでる。
満足そうなのがすごいひしひしと伝わってくるし。

なんか、本当に人は見かけによらないなあ。

だつてあの杜塚君が食べ物ひとつで、凄く幸せそうな顔してるんだもん。

食べ物つてすゞになあ。「で、この後どうするよ?」

僕は帰りたいけどね。薪沢、予定考えてなかつたんだ。

「考えてなかつたの?」

「うん。考えてませんでした」

「考えてないなら、帰るけど。他に特に何もないんでしょ?」

「まあ、特に何も気になるもんはねえな」

「それなら帰りたい」

まだらのこともあるしな。

人ごみの中にずっといるのも嫌だし。

まだらが、鞄の中でもぞもぞしたかと思つと、隙間から顔を覗かせた。

まあ、じつと動かずに我慢していたから、いいか。

「おお、この猫かわー。飼つてんの？」

薪沢がまだらの頭を撫でる。おとなしく撫でられる。

「まあね」

「まあ、杜塚猫好きだもんな。この前本屋で、猫の写真集見てた時はちょっとびっくりしたぞ」

それ、今言つことついでに言つと、買ったんだけど。

藤山 葉月がちょっと驚いた顔をしてる。

まあ、僕が猫の写真集見るとかイメージ出来ないのは、認めるよ。

- 藤山 葉月の視点 -

その後、結局帰るところになつて、帰ってきた。

それについて、杜塚君が猫の写真集を見る光景、あまり想像出来ないな。

「今日はありがとな。杜塚の食べっぷりには感動した」

「僕は薪沢の頭のネジのぶつ飛び具合に感動したよ」

「…………それは、俺が馬鹿だと言いたいんですか?」

「ああ?」

「うん。いいや。気にしないでおく。じゃあな!」

薪沢君に手を振る。明るい人だなあ。

僕はああいう風に明るく笑えない。

「君は帰るの?」

杜塚君にいきなり聽かれた。

確かに予定はない。でも、帰りたくない。

「まだ、帰りたくない……かな」

「そう。僕はちょっとパートに行くから、ついてきたいのなら、ついてくればいい」

そう言って、歩き出す。

慌てて杜塚君の後を追いかけた。

- 藤山 葉月の視点 -

杜塚君の後をついていく。
どこに行くんだろう。本屋とか?

杜塚君つて難しい内容の本読んでそうだよね。
エスカレーターを下りて一階に着く。

あれ？ 本屋は三階だよね？ 本屋に行くんじゃないんだ。
前を見ると杜塚君がある店に入った。

ペットショップに。

杜塚君、動物飼つてるのかな？

確か、母親が動物嫌いだから飼つてないって言つてなかつたっけ？
だから、あの猫も飼えないって。

それか、猫の餌を探しに来たとか？
まあいいや。中に入ろつと。

中に入つて杜塚君を探す。

餌のところかな？ と、思つたらクツショーンを見てた。

無表情ながら凄い真剣に。

心なしか、ちょっと目が輝いて見える。

白い生地に、水色の水玉模様が入つたクツショーンを見る。
それをじーっと、凄い真剣に見る。

見ようによつては睨んでるように見える。

ひとつ頷くと、猫用のトイレの砂も持つて、レジに行く。
あの猫、飼えるようになったのかな？ ペットショップに入る。
まだらを飼うにしても、そのための道具が全くない。
動物用のクツショーンとトイレの砂くらい、あつた方がいい。

クツショーンを見る。

いろんな柄があるけど、やっぱリシンプルな方がいい。
やっぱリシンプル・イズ・ベストだよ。

でも、真つ黒や真つ白すぎるのもなあ。
シンプルな柄が入つてるやつにしよう。

白の生地に雪模様か、白の生地に水玉模様か、どっちにしよう。
雪模様の方を手に取る。

うーん…… 雪模様はまだらの毛色と合わないなあ。

水玉模様の方が合つたな。

手に取り、眺める。

うん、これにしよう。

トイレの砂を持ってレジに行く。

三千円くらいした。

あ、そうだ。ついでに爪研ぎも買おう。

買って、入り口に行く。

藤山 葉月が待っていた。「杜塚君、この子飼えたよひになつたの?」

「まあね」

「名前、決めたの?」「

「うん。まだらって」

そういえば、僕に対してあまりおひしなくなつたな。
どうこう心境の変化だらう。

僕に対して親近感を持つよひになつたとか?
まあ、どうでもいいけど。

「杜塚君になつこてるし、この子ひとつでも幸せだね

「だといいけどね」

まだらを飼えるのは純粹に嬉しい。

でも、僕の手はたくさん人の血で汚れてる。

ただ世話をだけじゃなくて、飼うんだ。

ただその時だけ世話をだけじゃない。最後まで面倒を見る」とことなる。

こんなに汚れた手で、純粹で綺麗な命に触れていいのか分からぬ。

今更すぎるけど。「君、この後どうするの?」

「えつ？」

やよとんとした表情を向けてくる。

「僕の用事は済んだけど、君が寄りたい場所あるなら、付き合いつけて？」

言いながら、自分で何言つてるんだろうと想いつ。

用事は済んだんだから、せつせと帰ればいいのに。

自分から付き合うなんて、僕らしくない。

「寄るとい」、ないかな。杜塚君はその子のことがだつてあるし、早く帰つた方がいいよ。その子疲れちゃうよ

確かに何時間も鞄の中で揺られ続けてたから、疲れさせてるな。

「じゃあ帰るけど、君は？」

「僕も帰る」

鞄からまだらを出して、鞄をベッドに置く。

まだらが部屋を興味深そうに見回す。

至るところを見回して、足でつづいたりして遊ぶ。

見ていてとても和む。

下から、母さんが呼ぶ声がした。夕食か。

ドアを出ようとしたら、まだらがじつと僕を見てくるのに気づく。

「おとなしくしてねんだよ。すぐ戻つてくるから」

返事するかのよひに、にやおん、と鳴いた。

七月十二日 死にたがり・選ぶは共犯

ふふ……あはは、あはははは！

まさか、こんな結末があつたとはね

全く、面白いや顔がペシペシとつつかる。

その刺激によつて、夢の微睡みから一気に意識が覚める。

目を開けると、まだらの顔がすぐ目の前にあつた。

「いやー、と鳴いてくる。

「おはよっ」

言いながら鼻をつつく。

目を見開いて、びっくりしたような表情をする。

この反応が面白くて可愛くて仕方ない。

鼻を撫でると気持ちよさそうに目を開じる。

で、鼻をつつくと目を見開く。面白い。

抗議するように鳴いてくる。

頭を撫でてやつて、欠伸をしながら起きる。膝に乗つてきて、腹を押しながら見上げてくる。

机の上に置いてあつた缶詰めを、皿に移す。

喜んで食べ始めた。着替えて朝食を食べて、忘れ物がないか調べる。

大丈夫だ。

そういうえば今日は午後から雨が降るつて予報だから、傘を持って行こう。

まだらが足にすり寄つてくる。

鞄を持って、頭を撫でる。

「おとなしくしててね」

「いやあ、と鳴いた。

「はい、鼎。お弁当」

母さんから渡された弁当を鞄に入れて、靴を履く。

「ありがとうございます」

「行つてらつしゃい。氣をつけたね」

「はーい」

笑顔でそう言つて、玄関を閉める。

「あ、おはよう。鼎君」

「おはよう。葉月」

朝とはいえ、暑い日差しの中、葉月が待つてた。「今日夕方から雨だつけ?」

「うん、やつ」

僕は無表情で答えるけど、葉月は笑顔だ。
あれから笑顔になることが増えた。
心に引っ掛かってたものが取れたからか。

あれが起きるまでは、見る」とのなかつた笑顔。

本人もあれが起きるまでは、ずっと何かが引っ掛かってて笑えなかつたんだろう。

「鼎君?..どうかした?」

「いや、葉月つて本当は笑顔でいることが多いんだね」

「やうへ…そうでもないよ」

そんな」と言つてゐけど、今も笑顔だよ。

僕と葉月が名前で呼び合つようになつたのは、訳がある。たつた数日で葉月の周りの状況が一変した。

それに僕も関わつた。

僕と葉月は共通の秘密を共有している。する」とにした。だから、名前で呼び合つようになつた。もし、この秘密が暴かれれば僕と葉月は一人共、共倒れになる。どちらか一方の秘密が暴かれても同じ。暴かれれば、いずれ一方も倒れることになる。いわば、運命共同体。

今から話そう。

数日間の出来事を。説明するには、七月六日に起こつたことから話した方が分かりやすいだろう。

まさか、こんな結末が待つてたなんて、本当に思いもしなかつたよ。

もうすぐ、昼休みになる。

やつと昼だ。周りの不協和音を聴いてると、本当に恥々しい。
教師も教師で、放つておくから余計なめられるんじやないのか？
今は世界史。説明の仕方に工夫も何もないから、つまらない。
正直飽きる。説明されなくとも分かるし。
はあ……、早く終わってくれないかな。

やつとチャイムが鳴つて、昼休みになる。

今日も屋上で食べようかな。

きっと藤山 葉月がいるだろ？けど、屋上に行こうと、立ち上がる
うとした時だつた。

「なあなあ、杜塚君よ」

「…………」

無言で目だけで、話しかけてきた相手を見る。

中森 孝なかもり たかし。三組の男子だ。

視線を鞄に戻す。

三組の男子が僕になんの用だ。

「無視か？人が話しかけてんのに無視か？」

うるさいなあ。なんなんだよ。

お前みたいなちやらちやらした奴は大嫌いだ。
茶髪に腰パン。耳にはたくさんピアス。

そのスタイルがかっこいいと思ってるんだろ？けど、見ていて格好悪い。

吐き気がする。何がかっこいいんだか。

これ以上僕に話しかけてくるなという意味で、ぎろりと睨む。睨んだら、一瞬びくとした表情を見せて去つていった。

なんなんだ、一体。

まあ気にすることじやない。

屋上に行こう。

屋上の扉を開ける。

いつも弁当を食べる場所に座る。

今日は藤山 葉月は来てない。

昨日はまるで、僕が来るのを待つてたまたまに座つてたけど。まあ、いなくとも別にいいけど。なんで気になるんだろう。

弁当を食べ終わる。

食べ終わってすぐで行儀悪いけど、トイレに行こう。

- 藤山 葉月の視点 -

昼休みのチャイムが鳴った。

今日も屋上に行こう。教室の中は居心地が悪い。

僕に向けられる視線が痛い。

とても、冷たく感じる。

僕の被害妄想かもしれないけど、居心地が悪いのは変わらない。それに、さつさと行かない僕を苛めるグループに捕まっちゃう。

屋上に行こう。もしかしたら、杜塚君に会えるかもしない。

「藤山君、ちよつと付き合つてくれよ」

「…………」

……しまったなあ、捕まつちやつた。

腕を捕まる。

今日は何をされるんだろう……。

バシャツと音を立てて、水に濡れた床に倒れる。

立ち上がろうとしたら、背中を蹴られてまた倒れる。

頭に水をかけられる。

気持ち悪い。トイレの床だから。

三人の男子が、笑いながらぶ濡れの僕を眺める。

ぎりっと唇を噛む。

悔しい。こんな奴らにいいようにされて。

でも、抵抗しても三人相手に僕の弱い力じゃ敵わない。

休み時間が早く終わるのを願うしかない。

「邪魔なんだけど。どうしてくれない?」

思わず顔を上げる。

杜塚君がいた。

- 藤山 葉月の視点 -

杜塚君が無表情なまま、冷たく暗い視線を三人に向ける。

最後に僕を見る。なんだか、ほんの少しだけ冷たさが和らいだのは
気のせいかな。

中森君が杜塚君に近づく。

「見て分かんねえのか？ 今ちょっと取り込み中なんだよ。お前も一緒にしてやろうつか？」

中森君が杜塚君の手首を掴む。

その瞬間、杜塚君の目の色が変わった。
ぞつとするほど暗い瞳。視線だけで人を殺せそうなほど、暗い。

杜塚君に、殺されたいな……。

中森君が杜塚君を引っ張ろうとする。

でも、杜塚君はびくともしない。

掴んだ手首を一センチさえも引っ張れない。

「離せよ」

聴いたことのない冷たく低い響き。

本能的な恐怖に直接響くかのようだ。

杜塚君が左の手首を掴む、中森君の手首を掴む。

中森君が捕まれた手を離そうとするけど、全くびくともしない。

それどころか、ぎりぎりと指が食い込んでいく。

まるでそのまま折りそうな勢い。

杜塚君が中森君に足を引っかけた。

掴んでた手を離す。

引っかけられた中森君は、水浸しの床に背中から倒れる。
床に倒れてしづぶ濡れになつた中森君を、杜塚君が見下ろす。

「今後一切僕達に近づくなよ。次があつたら、殺すぞ」

なんか、杜塚君がそんなこと言つたら冗談に聽こえない。
中森君が青い顔をして逃げた。

残つた一人も逃げた。

杜塚君が僕に、手を差し出してくれた。
その手を掴む。チャイムが鳴るまでまだ時間があるから、屋上でいつも予備に持つてた制服と、身体を拭くためのタオルを貸す。

「あ、ありがとう。でも、いいの？」

おうおうと聴いてくる。

「いいから貸してんだけだ」

「ありがと」

身体を拭き始める。それにしても、未だにトレイに連れ込んで水を浴びせるとか馬鹿なことをするんだな。

そんな小さいことで喜ぶのか。

馬鹿馬鹿しい。

集団じゃないと行動出来ない馬鹿共が。

所詮一人じや何も出来ない人間が、偉そつ。

あの時僕を見て、青い顔をして逃げたのは、今までまともに抵抗した人間がいなかつたからだろうね。

ほんの少し殺意をぶつけてやつただけで、あんな風に逃げるなんて。

「タオルと制服、洗つて返すね」

「別に気にならないいけば」

チャイムが鳴った。

「とつあえず、戻ろつか」

「うん」教室に戻り、体操服に着替える。
五限目は体育。きっとマラソンだな。
学校の周囲四キロを一周するつていう。
めんどくさいな。まあ、教師の下手な説明聞いてるよりはマシだけ
だ。

校庭に向かう。

「お、来た来た。珍しいな。俺より後に来るつて」

「ちよっとね

「それにしても走るのがだな~」

「まあ、めんどくさいよね

薪沢が驚いたところ感じで、僕を見る。

「珍しいな。杜塚がそんなこと言ひつけ

「僕だってそれくらいは思ひつけ

「お前って全部の教科で成績いいから、そんなこと思わないのかと

思つた

何それ。一応僕だって人間なんだから、それくらいは思つよ。
思わなかつたら機械だよ。

先生が来た。四キロか。めんどくさい。「はあ…はあ、おま、なん
で、そんな涼しい顔してんの?」

薪沢と二人で計ハキロを完走。

少し暑いけど、それくらいだ。息切れとかもない。

「薪沢、体力ないんじゃない?」

「いや、それは違うと思つぞ?」

まあ、これよりも重労働な」としてゐるからね。
あれよりは走る方が楽だけど、別に好きで走つてゐる訳じゃないから、
めんどくさい。

「お前の身体つて、謎だよな

「何?謎つて」

「あれだけの量をペロリと食つちまう腹袋だろ。で、あれだけ食べ
て太らないのも謎だし、別に部活とかで鍛えてる訳でもねえのにこ
の体力。謎だろ?密かに家で鍛えてんのか?」

「いや、全くしてない」

きっとあれだろね。大の大人を運んでる訳だからね。

苦にならなくなつたし。

それで体力ついたんだろうね。

チャイムが鳴った。五限目終了。

六限目は現国だつたつけ。教室に戻り、制服に着替える。
教室の中は流石に暑い。まるで蒸し風呂状態。

扇風機がないんだから終わってるよね。

と、いうより明らかに扇風機を取りつけない、という前提の設計だし。

どう見ても扇風機を取りつけられる場所がない。

天井にでもつけるつもりだったのかな。

熱が逃げずに籠るから、余計に暑く感じる。

結果、集中力が散漫する。

教師の下手な説明に、暑すぎるせいで集中力散漫。

学校設立する時に気づかなかつたのかな？

まあ、僕は説明はまともに聞いてなくとも、ノートだけは取るけど。

チャイムが鳴った。

六限目が始まる。

六限目は現国だけど、先生が休みといふことで、自習になつた。

まあ、自習の方が気楽だ。

薪沢は堂々と寝てるけど。六限目が終わり、帰宅の準備を始める。
薪沢がまだ寝てる。気持ちよさそうに。夢でも見てるのか、表情が
緩みきつてる。

このままほつといたら起きないな。

仕方ない。首にチョップを叩き込んで、無理矢理起こす。

「「」はあつー？」

奇妙な聲を顎を上げて起きた。

「ちよ、おま、今本氣でやつせがつただね。マジで三途の三見えるかと思つたわ。」

「薪沢が起きないからだよ。わつやとしないこと歸るみ

「わつと待つてくれよ」

五分ほどして、やつと薪沢が帰宅の準備を済ませる。ドアの方を見ると、藤山 葉月が立っていた。

一緒に帰ろうつてどこか。

鞄を持って教室を出る。

「あの、一緒に帰つていいっ。」

「別に、こつけど」

後ろで薪沢が、置いてくなよーと叫びながら追いかけてきた。「お? 藤山も一緒に帰るか?」

「わ?……いいかな?」

藤山 葉月は薪沢にはだいぶ慣れてきたらしく。おどおどした様子が見られないから。

「おー、いいぞ。なあ杜塚?」

「うん」

ちらりと二組の教室を見る。

中森 孝とその他一人が、僕と藤山 葉月を見る。
睨んだら、そそくさと逃げた。

まだ分からぬみたいだな。今度来たら、腕の一本くらい折つてやるか。

そうしたら分かるだろ？

まあ、来る勇氣があるかだけど。

「杜塚？どうかしたか？」

「いや、帰ろうか」

「おひ

三人でロッカーに向かう。

- 藤山 葉月の視点 -

三人並んで歩く。杜塚君と薪沢君は、最近のニュースの話題で盛り上がってる。

盛り上がってるというか、薪沢君が楽しそうに話して、杜塚君が適当に相槌を打つって感じだけど。

僕はあまり喋らない。誰かと並んで歩くだけで、幸せだから。

「なあ藤山、轢き逃げで両親が死んで子供だけが生き残ったって、お前のことか？」

薪沢君が、いきなりそんなことを聴いてきた。

なんで知ってるの？杜塚君以外、話したことないのに。

「うん…… そうだけど、なんで知ってるの？」

「ニュースで見たんだよ。後一週間で時効だつて」

ああ……時効か。時効が成立したら、犯人は両親を殺した罪を背負うことなく、社会でのうのうと生きてるなんて。

許せない。両親を奪つたくせに。僕の人生を無茶苦茶にしたくせに。時効が成立するのを、首を長くして待つてるのを想像すると、怒りと憎しみで涙が出てきそうになる。

「薪沢、無神経すぎ」

「「めん……」

僕、泣きそうな表情しちゃったのかな。
ちょっと恥ずかしい。

「まあでも、犯人って以外と身近にいるかもだよね」

杜塚君がいきなり、そんなことを言った。

どういう意味だろ。 犯罪者なんて身近にいるものだよ？
例えば僕とか。この身体を、どれほどの血で染めてきたか。
きっと、殺した数だけの怨念が憑いてそうだよね。
まあ、そういうの信じないけど。

そういうれば殺人の時効って何年だつたっけ？

忘れたな。僕には時効なんて気にするだけ無駄だからいいけど。

最初に殺人を犯したのが一年前として、一年で時効が切れるはずがないしな。

それに殺戮を繰り返す限り、時効なんて関係ない。

「そういえば明田って創立記念日で休みだよな？」

薪沢がいきなり聴いてきた。

確かに明田は創立記念日だ。

「いや、ちょっと思い出しだけ。じゃあな！」

「じゃあな」

薪沢に手を振る。帰り道が違うから、ここで別れる。

「あの、杜塚君」

「何？」

「携帯の番号、交換しない……？」

僕の反応を伺いながら、話していく。

それより、藤山 葉月が携帯を持ってたのがちょっと意外。携帯持つてないと思い込んでたから。

「いいよ、別に」

赤外線受信でお互いのアドレスと番号を交換する。

「ありがとう」

「うそ

嬉しそうな顔をしている。アドレス交換とつま細なことでも、藤山葉月にとっては嬉しいことなのか。

「メール、してもいい?」

「やるために交換したんだけど」

「ありがと。あ、じゃあね」

「うそ。また」

藤山 葉月と別れる。わざわざ壁に。『ただいま』

靴を脱ぐ。その間に母さんが来た。

「お帰りなさい」

「…………？」

なんだか叶へたよっと元気がないように思える

「どうかしたの? 元気なによつて見えたね」

「やつ見える? 情けないわねえ。最近ね、お父さん帰つて来ないし、連絡もなかなかつかないの。やっぱり忙しいのかしら」

ああ、やつこいつる。確かに忙しきもあるかもしれないけど……。

妻子持ちでも浮氣をするような男だ。

母さんに飽きて、また他の女に手を出してなきゃいいんだ。

考えただけで吐き気がする。

僕がそんな男の息子だつて」とも、虫酸が走る。

「とつあえず、飯にするわね。出来たら呼ぶから」

「うん」「ただこま」

部屋の扉を開ける。開けた途端、まだらが足にじゅれついていた。しゃがんで頭を撫でる。気持ちはやうに田を閉じる。やつぱり猫はいい。自由気まで。その気紛れなどころが好きだ。まだらほど、僕になってきた猫はいなかつたな。そろそろお腹すこてるかな。

「ちよっと待つでね」

下に下りる。キッチンに入る。

「鼎? ビーフしたの?」

「なんでもない。まだらの餌を取りに来ただけ」

「やう。それにしてもあの猫、おとなしいわね。不思議なくらい」

「うふ。とても賢いよ」

冷蔵庫を開ける。猫用の缶詰めと水を取り出す。

「僕、部屋に戻るね」

返事を待たずにキッチンを出る。

部屋に戻ると、まだらが目を輝かせてじやれついてきた。まだらが餌を喜んで食べるのを眺めながら、ニュースを見る。

今日は火災が多いな。僕の住んでる地域の近くでも、火災があつたらしい。

一家全員犠牲になつたらしい。
まあ、どうでもいいけど。

「にゃああ

まだらが膝に乗ってきた。喉を撫でてやる。

ニュースが変わつた。次は殺人事件。一家全員、皆殺し。ただ、一家全員を適当にめつた刺しにしたみたいだ。

犯人はもう捕まってる。

殺人の動機は怨恨。恨み……か。

ただめつた刺しにするだけなんてやり方、生温い。

本当に恨んでるなら、本人の目の前で子供、夫か妻を惨殺して、絶望を植えつけた上で本人を殺せばいいんだ。苦しませ、絶望させた上でいたぶる。

少なくとも僕はそうする。

「鼎一、」飯よー

下から母さんが呼んでる。

「「」飯だつて。待つてね

「にゃあ

帰つてゐる途中だつた。

「おい、藤山。よくもやつてくれたよな」

「…………」

中森君と連れの二人が來た。

……なんなんだよ。しつこい。

きつと杜塚君がいないから、來たんだ。

杜塚君が言つてた。一人になつたらきつと來るだらうから、氣をつ
けろつて。

もし來ても、抵抗しろつて。

抵抗しないから、いつまでもなめられて苛められるんだつて。
言つて初めて氣づいた。

うん。そうだよね。諦めてばかりいるから、駄目なんだよね。

杜塚君、頑張つてみるよ。

- 藤山 葉月の視点 -

とは思つてもやつぱり怖い。杜塚君みたいに僕は強くない。
でも、こんな奴らにいいように扱われるのも、もう嫌だ。
杜塚君は助けてくれた。僕のために、厳しくしてくれた。
ぎゅつと鞄を握る。

後は僕の問題なんだ。僕が今までのまま、流されるままだつたら駄
目なんだ。

ここで何もしなかつたら、杜塚君の言葉を台無しにしちゃう。

「おい。 じつち来いよ」

腕を掴まれる。 その手を振り払う。

- 藤山 葉月の視点 -

中森君の手を振り払う。 暑いのとは関係なく、 汗が流れる。
やつちやつた……。 でも、 これくらいはしないと駄目なんだ。

「おいでやるのか？」

また腕を掴まれる。 振り払おうとしたけど、 今度はがつちつ掴まれ
てて、 振り払えない。
どうしよう。 どうしたらいいんだね。

「じつち来いよ」

ぐこつとくつ張られる。 一人に背中を押される。
どうしよう。 このまま連れて行かれたら、 確実に殴られたり蹴られ
たりしちゃう。

どうしよう。 どうしよう。

「う……うわあああああっ！」

絶叫しながらダメ元で、 中森君の顔をグーで殴る。
そしたら顔のど真ん中に、 拳がクリーンヒット。

中森君が鼻血を出して倒れちゃった。

他の一人が睡然としてる。

「うわああああああ！」

二人に渾身の体当たりをする。
不意討ちだったみたいで、二人共尻餅をつく。
その間に逃げる！逃げる時に手を踏んづけちゃったみたいだけど、
気にしない。

- 藤山 葉月の視点 -

「はあ……はあ……」

一旦立ち止まって呼吸を整える。
後ろを見る。追いかけて来ない……。
もう大丈夫かな……。
全速力でこんなに走ったの久しぶり。
心臓がばくばくいって、今にも破裂しそう。
それにして、ダメ元で殴つてまさか当たるなんて。しかも顔面の
ど真ん中に。
ちょっとすつきりしたかも。
はあ……でも、これから家に帰らなきやな。
帰るのやだな……。

「…………」

無言でドアを開ける。リビングの方から、酒に酔つた下品な笑い声
が聴こえてくる。

おじさんのが友達を連れてきたのか。

おじさんの友達も嫌いだ。

類は友を呼ぶって言つけど、あれは本当みたい。
似たような人ばかりだから。

帰つたのがバレないよう部屋に行く。
はあ……家にいたくない。

どうしようかな。

- 藤山 葉月の視点 -

「はあ……」

溜息しか出でこない。学校にも家にも、安心出来る場所なんてない。
居場所なんてない。唯一安心出来るとしたら、杜塚君の傍にいる時。
なんだか、すこく安心出来る。

そういうえば杜塚君って、薪沢君以外の人と一緒にいるの見たことないな。

話してると見たことない。

大きな笑い声が聴こえてきた。

本当……氣分悪い。

ここに来てからいい思い出なんて、ひとつもない。

おじさんもおばさんも、僕を厄介者としか見てないから当たり前なんだけど。

とりあえず、コンビニで買つてきた弁当を食べよう。

おばさんは最近、『飯さえ作ってくれなくなつた。

自分で作ろうと思えば作れるけど、台所に行けばおじさんの顔を見なくちゃいけなくなる。

顔も、見たくない。

ご飯食べてお風呂入つて、わざと寝よう。

「」飯食べた後、風呂に入ってきた。

暑いからつらわで扇ぐ。

おじさん達の声が、より一層大きくなつてきてゐる。

聴きたくないから、もう寝よ。」「に～」

顔にペシペシと何かが当たる。

目を開けると、田の前にまだらがいた。

今何時だ？携帯を開いて時間を確認すると、一時二十分。

いつの間に寝たんだろ。なんか夢見てたな。

確か、ただひたすら何か食べてたな。もう少し食べたかったな。

いきなりまだらが鼻を舐めてきた。

「うわっー。」

ざらざらとした舌が、かなりくすぐつた。

思わず飛び起きる。くすぐつたいの苦手なんだ。

まだらを顔の高さまで両手で支える。

「どうした？」

膝に乗せて背中を撫でる。そしたら膝から飛び下りて、ドアを引っ掻き始めた。

ああ、外に出たいのか。まあ確かに、外に出たくなるか。ここ数日、外に出てないし。

夜だし、気づかれないように外に出たら大丈夫だろ。まだらを抱き上げる。

足音をなるべく消して、玄関まで行く。

玄関を開けて鍵をかけて、まだらを地面に下ろす。

喜んではしゃぎ始めた。僕の後ろを、まだらがついてくる。

まだらに合わせて、ゆっくり歩く。

本当僕になつてゐるな。ひたすら僕についてくる。

今更だけど、やつぱりこんなになつくなんて、猫にしては珍しいな。
ふと立ち止まって空を見上げる。まだらも止まる。

雲ひとつない漆黒の空に、三田円が輝いている。素直に綺麗だ。
適当に歩いてるけど、どうしようか。このまま帰るか。

まだらを見ると、首を傾げて月を見上げてる。

自由に外に出してあげられないから、もう少し歩くか。

それか、公園で遊ばせるか。

しゃがんでまだらを抱き抱える。

腕の中で僕を見上げてくる。

頭を撫でる。

公園に着く。そしたら、声が聴こえてきた。

覗いてみると、中森 孝と連れの一人。
物影に隠れて、話を聞く。

「へや、あいつみてるよ」

「元してもよ、あいつ今まで何もしてしなかったつづーの元、いきなりどうしたんだ?」

「どうせ杜塚に何か吹き込まれたんだろ」

「え……藤山 葉月、抵抗してみせたんだ。

ダメ元で言ってみただけだ。意外とやれるんじゃないかな。

消極的すぎるんだよ。君は。それにしても、こんな時間に公園で荷めてる相手の悪態なんて、よつほど暇なんだね。

羨ましいよ、その能天氣さが。

あこづらがいるんじゃ仕方ないな。帰るか。

「帰りうか」

僕がそう呟つと、あ、と鳴いた。

歩き出でたとしたら、後ろから声をかけられた。

勿論、中森 孝に。

「おこ、お前」

立ち止まつはするナビ、振り返らない。

「お前ホント余計な」としてくれたよな

だから何?トイレンなんかであんなことをするお前達が悪いんじゃないか。

責任転換するなよ。

お前達には分からないんだろうな。お前達は楽しんでるんだうつて、いかに無様で格好悪いか。

それを見て見ぬフリをする、教師も教師だけど。

こんな奴らとともに相手出来ないんなら、教師になんかななるなよ。

勉強を教えるだけが脳じゃないだろ?」。

本当お前達みたいな低脳を相手にするし、イライラする。

「おい、また無視か?」

ああ、本当つるや。

振り返つて中森 孝を睨む。無言で、ほんの少しの殺意を込めて睨む。

本当、これでどうか行けよな。

これで向かつてくる奴は、本当に馬鹿だつてことだ。

見逃してやるうとしてるのに。

お前達はどうするんだろうな？

「あん時は油断しただけだ。勘違いするなよ」

なんだ。馬鹿だつたか。少しば賢いかと思つたけどな。
仕方ない。お前達が弱いつてことを教えてやるか。

所詮集団でないと行動出来ない人間なんか、たかが知れてる。
一人では何も出来ない弱い人間なんだから。

まだらを地面に下ろす。

「ちよつとの間離れてるんだよ」

まだらの方がよっぽど賢いな。言われたことちやんと分かつてるし。
さてと、一瞬で終わらせるか。

振り向くと、中森 孝が近づいてきてる。

もう少しこっちに来い。もう少し。

ああ、これくらいでいいか。

間合い十分。

走つて一気に間合いを詰めると、中森 孝が驚いた顔をして怯んだ。

走る勢いのまま、中森 孝の胸ぐらを掴んで背負い投げ。

地面に叩きつけられて、きょとんとしたアホ面で見上げてくる。

綺麗に決まつた。

ついでに股関を思いつきり踏んづける。

男ならここが一番こじたえるだろ？

「このこと、別に学校に言つてもいいよ? その代わりお前達のやつ
てきたこと、明るみになるけど」

それでもいいなら言つてみる。

まあ、お前達には無理だろうな。股間を押されてうずくまる中森
孝を見下ろす。

ふん、いい様。

本当なら腕の一本くらい折つてやりたかったけど、それをやつたら
流石にマズイからね。

僕の方が悪いってことになる。

まあ、こいつらが学校に言つたとしても、教師は相手にしないだろ
うな。

学校にとつて都合の悪い生徒は切り捨てるつていうのが、教師のや
ることなんだから。

まあそれは、こいつらが一番よく分かっていることだらう。

「バイバイ

それだけ言つて、まだらを抱き上げて角を曲がる。
帰ろう。

家に着いた。

喉が渴いたな。水を飲もう。

リビングのドアを開ける。そしたら、母さんがテーブルで腕を枕代
わりにして寝てる。

父さんの帰りを待つてて、そのまま眠ったのか。

ソファにあつたタオルケットをかける。

悪い予想が現実にならなければいいけど。

冷蔵庫からペットボトルを出して、水を飲む。ペットボトルを戻して、そのまま部屋に戻る。ベッドに潜り込むと、まだらも潜り込んできた。強い太陽の光で日を覚ます。

カーテン閉めるの忘れてたな。
眩しくて布団を頭まで被る。

「んー……」

あれ？ 太陽がさつきより高いな。
時計を見てみる。午後十一時三分。
うわ……滅茶苦茶寝過ごした。
まあいいか。今日休みだし。
起き上がって布団を捲ると、まだらが氣持ちよせやつにお腹丸出しへ寝てる。そつとしついで。
タンスから服を出して着替える。

欠伸をしながら洗面所に向かうと、歯を磨く那奈瀬がいた。

「おはよう」

「おはよう。珍しいな、お前がこんな時間に起きてくるなんて。一度寝か？」

「まあ、そんなとこ」

那奈瀬が歯を濯ぐのを待つてから、顔を洗う。
今日はどうして過ぐるのかな。「おはよー、母さん」

リビングに入ると、母さんが食器を片付けてる最中だった。

「おはよー。那奈瀬先にご飯食べかけたわよ」

「うん。分かってる」

椅子に座って、テレビを見ながら黙々と食べる。
今日は平日だから、この時間テレビから流れてるのは勿論ニュース。
轢き逃げがどうとか言つてゐる。
ん……？ 轢き逃げ？

見ると、名字は違つけど確かに藤山 葉月の両親が轢き逃げに合つて、もうすぐ時効を迎えるみたいだ。
本当に時効迎えるのか。

まあ、僕には関係ないけど。

「いいやつさあ」

- 藤山 葉月の視点 -

夢と現実の間で、意識が微睡んでいるのを自覚する。
自覚したと同時に、一気に目が覚める。

「…………」

今、何時だろう。携帯を開いて時間を確かめる。
午前十時三十八分。

え？ 嘘、十時？ 完璧学校遅刻じゃん！

布団からばつと飛び起きて、氣づく。

あ、そうだ。今日創立記念日で休みなんだ。

休み……かあ。何して過ごしたらいいんだろ？

一日中家にいるなんて嫌だ。

かといって、行くところもない。

でも、家にはいたくない。

いきなり、びすゞと足音が聴こえた。
おじさんだ。

布団を被つて寝たふりをする。

乱暴に扉を開く音がした。

- 藤山 葉月の視点 -

寝たふりをしたって、どうせ蹴られて起きられるから無駄だけど、
素直に起きるつもりなんてない。

僕のわざやかな抵抗。

おじさんは抵抗とは思っていないだらうけど。

「おー、葉月ーーいつまで寝とんのやーー」

被つてた布団を無理矢理捲られて、ついでのよつこ蹴られる。
背中をおもいつきり蹴られたらから苦しい。
しづらへの間咳が止まらない。

「こつまで寝てやがるーーわざと起きて買つもん行つてこーー」

また蹴られる。なんで、こんな暴力受けた上でお前の命令をかなきやならない？
誰が行くか。

- 藤山 葉月の視点 -

散々僕を蹴りつけた後、満足そうに鼻歌を歌いながら出でていく。
所詮、僕を鬱憤晴らしにしか考えてないのがよく分かる。
ホント、引き取られた先がなんであんな人達なんだろ。
他に引き取ってくれる人がいなかつたからかな。

卒業したら、こんな家絶対に出てやる。

布団を片付けてたら、またドアが開いた。

今度はおばさん。汚らわしいものを見るような目で、僕を見る。
何かを投げてきた。よく見ると財布。

「それで買い物行つてきいや。行かんかつたらお前の晩飯ないから
な」

僕の「ご飯がないって、いつものことじゃないか。

何を今更。買つてきたって作る気なんて更々ないくせに。
なんだか分からぬけど、何かが込み上げてきて、財布をドアに投
げつけた。

- 藤山 葉月の視点 -

投げつけた財布を見つめる。どれくらい入ってるんだ？

見てみると五千円入ってる。

買い物には行きたくない。けど、おとなこへるの五千円を返すのも

嫌だ。

何か他のことに使つてやるうかな……。

そうしよひ。そつすれば家にいなくとも済む。

顔を洗つて服を着替えて、軽めに何か食べて出掛けよ。

顔を洗おうと思つて、居間の横を通つた時だつた。

「しつかし警察つつても大したもんやないなあ。葉月の親を轢いたのはわしやゆづの、元のひづので」

「ちよつとあんた、大きい声出しな。葉月はともかく、近所に聴こえたらどうするのよ」

「はん。それがなんや。葉月に聴こえても構わんがな。あんな根性なしの糞餓鬼に何が出来るゆうんや？」

「それはさうかもしれんけど」

「何を、言つてるの……？」

おじさんが、両親と僕を轢き逃げした犯人……？

震える手で、ドアを開ける。

「今のは……どうこうこと……？」

「なんや、聴こつたんかいな。もうこいつへん言つてほしこんか？」

なんぼでもゆうたるわ。わしが、お前の両親轢いてやつたんがな。
保険金とか入つてええ思いさせてもうたわ」

田の前が、真っ暗になつた気がした。

- 藤山 葉月の視点 -

頭がくらくらする。呼吸が荒くなつてくる。

おじちゃんが僕達を轢いた犯人？

おじさんが両親を殺した犯人？

こんな…… いん男に両親は殺されたの？

こんな男に！

こんな男のために、両親は死んだつていうのか！

悔しい。憎んだ犯人がすぐそこにいたのに、ずっと気づかずにいた
なんて。

握った手が震える。今まで感じたことのない怒りと憎しみで。

「！」

意味のない叫び声を上げながら、おじさんにぶつかっていく。

「なにするおじや、この糞餓鬼！」

必死で抵抗したのに、突き飛ばされて蹴られる。

「ふん。お前みたいな弱つちい餓鬼が勝てる訳ないや！」

「そー、片付けときや

弱い……。

涙が出てくる。なんで、僕はこんなに弱いんだろ？
両親を殺した犯人なのに。少しの報復も出来ないで。

「う……う、うううう……」

なんで、なんで。

両親が死んだのも、僕があんな目に合つのも、全部あの男のせいなのに！

視界の隅に、果物ナイフが写る。
さつき、林檎を剥いていた果物ナイフ。
それを、掴む。

「あああああああああっ！」

ありつたけの力を込めて、おじさんの背中に、果物ナイフを突き刺した。

- 藤山 葉月の視点 -

ぞぶつと果物ナイフが背中に突き刺さる。

「がつ……！？」葉月い、お前何してくれよったんやー…？」

「 っ！」

果物ナイフを引き抜いて、また突き刺す。

殺さなあや、殺さなあや……！

今手を止めたら、僕が殺される。

両親を殺して、今までの「つ」の人生をときたんだ。

復讐して何が悪い！

おじさんの身体と一緒に、床に倒れる。

起き上がつてくる前に、身体にナイフを刺す。

次第に動かなくなつていけど、構わずに刺し続ける。

「葉月、あんた何して……け、警察……！」

おばさんのが僕に、恐怖の混ざつた視線を向けてきた。

おばさんも知つてて隠してたんだから、同罪だ。

それに、警察なんか呼ばせるもんか。

警察を呼^めひつとするおばさんこ、ナイフを突き刺した。

「はあ……はつ、はあ……お、おばさん……？」

震える手で、おばさんに触る。

勿論、動かない。喉にナイフが突き刺されて、死んでる。

おじさんも、目を見開いて死んでる。

びつしようつ。大変なことしちゃった。

びつしようつ、びつしようつ……！

- 藤山 葉月の視点 -

真っ暗な夜道をとぼとぼと歩く。

どうしようつ……。どうしたらいいんだろうつ……。

おじさんとおばさんの死体は、家にそのままになつてゐる。
どうしようつ。このままだつたら、僕が殺つたつて分かつちやう。
嫌だ、あんな人達のために警察に捕まるなんて。

でも、このままじゃ絶対に捕まつちやう。

考えなきや、どうしたらいいか考えなきや……！

そういえばこゝ、どこだろつ……？

人気が全くな。建物も少ないし。
右には小さな山。

「…………！」

遠くから、微かに悲鳴みたいな声が聴こえた。
気のせいかなあ。

「…………！」

また、聴こえた。この山の中からだよね。
行ってみよう。勘違いなら、それで済むし。

- 藤山 葉月の視点 -

少し登ると、廃墟にしか見えない建物が見えてきた。
ここから、さつき聴こえた悲鳴みたいな声、したのかな。
動物に襲われたとかじゃないよね。そもそも、ここ人を襲うような

野生動物いないし。

勘違いじゃなかつたらやつぱり、誰かに襲われてるつてことだよね……。

建物の前に立つ。でも、僕が行つてなんになるんだろ？……。
そもそも、自分のことで精一杯なのに、何してるんだろ？
ドアノブに伸ばしかけた手を引っ込めて、俯く。
その時だった。

「ぎあああああああああ！」

思わずびくつと身体をすくませた。

聴いたことのない、人間のものとは思えない凄まじい絶叫。
尋常じやない。

怖いけど、震える手でドアを開ける。

中を覗くと、奥の方だけ薄く灯りがついてる。

足音をさせないように、慎重に歩く。

音をさせないように、少しだけドアを開けて、覗く。

「杜塚君……？」

目の前の光景が、信じられなかつた。

杜塚君が女の人の身体に馬乗りになつて、血塗れになつて笑いながら女人を刺してゐる。

女的人は、もう動いてない。それでも、杜塚君は楽しそうに笑いながら、女人を刺し続ける。

「ふ……ふふ、あはははははははは！」

本当に楽しそうに、笑い声を上げる。

普段あんな無表情なのに、人が死んだのが面白くて仕方ないようにな、

笑う。

無意識に後退りをする。それがいけなかつた。
つまづくものなんか何もないのに、足がもつれて転ぶ。

「誰だ！？」

杜塚君の、狂気に満ちた声。

どうしよう。見つかっちゃう。

でも、いつそ杜塚君に見つかって、殺される方が楽かもしれない……。

ドアが、開く。

「君が、なんで……！？」

杜塚君が、すぐ驚いた顔をした。「あ、あ、あああああああ……」

獲物が心地のいい悲鳴を上げる。

今日の獲物は女。かなり露出した服装をしてる。

胸の谷間を強調した服に、パンツが見えそうなほど短いミニスカート。

何がよくてこんなに露出してるので、理解出来ない。
まあ、どうでもいいけど。

腹に刺したナイフを抜いて、その中に手を入れる。

ああ……ぬるっとした血の感触が気持ちいい。

小腸に触れる。引き摺り出すか、どうしようか。

小腸を掴み、ぎゅっと握る。このまま握り潰してやるか。
一気に力を入れて、握り潰す。

ぶぢゅっと、肉が潰れた音と感触が伝わってきた。

「ああああああああ！」

本当、
気持ちいいよ。

もうひととお前の苦痛を僕に寄越せ。

抜いて、また刺す。それを繰り返す。

最初こそ悲鳴を上げて、苦痛に顔を歪ませてたけど、次第に動かな

笑いを堪えきれなくなつて、思い切り笑う。
その時だつた。

ドスンッと、音がした。

「誰だ！？」

ドアを見る。少し開いてる。

誰か見たのか。
僕が獲物を殺してるとこを。

男が／＼が生／＼作／＼がい 生／＼一／＼に／＼か／＼

「君が、なんで……！？」

そこにいたのは、藤山 葉月だった。

僕を、震えながら見上げてくれる。今にも泣きそうな表情をしてくる。

二人共に動かすにいる。

何も喋らずに、じつと見つめ合ひ。

今にも泣きそうなのは恐怖からなのか、それとも別の理由があるのか、見分けがつかない。

「今の、見たよね？」

俯いて、ゆっくりと頷く。

厄介なことになったな。知り合いじゃなかったら、躊躇なく殺せるのに。

「嫌だろ？ けど、中に入つて」

ドアを開けて、中に入るよう促す。

よろよろと立ち上がって、中に入った。

それにしても、なんで逃げないんだろう。普通なら、逃げよつとするのに。

まあ、逃がさないけど。

慌てすぎて無様にこけたりするから、パニックに陥った人間は捕まえやすい。

とりあえず、藤山 葉月をどうするか。

知り合いだし、選択肢をあげることにするか。

「見られたんだから、ただでは帰れない。警察に通報されたら困るからね。でも、君にふたつの選択肢をあげる。いいで殺されるか、今日のことをずっと胸にしまって生きていくか。君はどうする？ 僕の邪魔をしないんなら、帰してあげる。その代わり警察に訴おうとしたら、君を殺す」

藤山 葉月が女の死体を見つめながら、両手を握る。肩が震えてる。返事を待つ。

どうするのかな。帰つたとしても、今日のことを胸にしまつていけ

るのか。

途中で罪悪感に押し潰される可能性がある。

藤山 葉月が口を開く。

藤山 葉月の返事は、思いもよらぬものだった。

「ねえ杜塚君、人を殺しても疑われない方法、教えて」
「…………
はっ？」

一瞬、何を言われたのか分からなかつた。
思わずすっとんきょうな声を上げてしまふ。

「…………ごめん。もづ一回言つてくれない？」

俯いて、両手を握り肩を震わしながら、はつせりした口調で言つ。

「人を殺しても疑われない方法、教えて」

「…………何があつたの？」

ベッドに座りながら訊いてみる。

藤山 葉月が隣に座る。

持っていた肩掛け鞄から、血塗れのナイフを出してきた。

「それで、誰か刺したの？」

「お……おじさんと、おばさんを……」

そこまで言つて、泣き出した。背中をさする。そしたら、抱きつい
てきて大声で泣き出した。
仕方ない。泣き止むのを待つ。

しばらくしてやっと落ち着いて、事情を聴いた。

「ふうん、それで刺したんだ」

「うん……」

「教えるのはいいけど、それは僕を巻き込むってことだよ。つまりは共犯。犯人を隠すんだからね。それに、人殺しの罪を隠して生きていいくことになる。君は、それに耐えられるの？ 耐えられないなら、自首するんだね。まあ、覚悟があるなんなら、手伝つてあげるよ」

藤山 葉月に手を差し出す。

人殺しの罪を背負つ覚悟があるんなら、僕の手を取れるはず。

迷いなく、握つてきた。「そういうば、刺したのいつ？」

死後何時間経つてゐかで対策が変わつてくる。

「えつと……お昼くらい……」

「少なくとも九時間以上経つてゐのか……死後硬直してゐるから無理なんだけどな。」

ついさつき刺してきたなんなら、死亡推定時刻を誤魔化すこと出来た死後硬直した後じやそれは出来ない。仕方ない。他の方法でいくか。

「仕方ないから、直接君の家に行くよ」

「えつ……？教えてくれるだけでいいよ……？」

「それでもいいけど、実際に現状を見て考えた方がいいからね。少しのミスが、命取りになる」

まあ、警察は杜撰だからミスしたとしても気づかないかもしないけど。

- 藤山 葉月の視点 -

「あの……刺した時間が何か問題あるの？」

気になつて訊いてみる。

「死後硬直って分かるよね？」

「うん……？」

死後硬直ってあれだよね。死んだ後、身体が硬くなるんだよね。

「死後硬直は死後一時間程度経つてから始まるんだよ。脳から頸、首、全身と広がっていくんだ。全身が硬直するまで半日くらいかかる。死後硬直が始まると同時に死体の筋肉を動かすことによって、死後硬直を遅らせるこによつて死亡推定時刻を誤魔化すことが出来るんだよ。法医学では死後硬直がどれだけ進んでるかで、死亡推定時刻を割り出すからね。死後硬直が始まつてしまつたらそれが出来

ないんだよ。だから、他の方法を考える

杜塚君、詳しいなあ。それに、人を殺すことには慣れそつ……。
全身血塗れでいても平気な顔をしてるし。
人が死んでる部屋で、殺した犯人が隣にいるのに平氣でいる僕も、
変なのかもしねりいけど。

「悪いけど、君の家に行く前にこれを片付けるよ

これ？

杜塚君が立ち上がって女の人の死体の腕を掴むと、床に落とした。

「その死体、どうするの？」

片付けるつて言つてたけど、埋めたりするのかな。

「食べるんだよ

- 藤山 葉月の視点 -

「じめん。今、なんて？」

聽こえてはいるけど、理解出来なくて訊き直す。

今食べるつて言つたよね？ 口に入れて、噛み碎いて、飲み下して、
胃で消化するつてことだよね？

「だから、食べるんだよ。食べやすい大きさに解体して、残った骨
は砕いて捨てるんだよ」

聞き間違いやなかつた……。

食べる？　」のまま食べる？

「君には刺激が強すぎるとと思うから、外にいた方がいいと思うけどね」

גַּעֲמָה... נְעָמָן...

人間の死体を食べるところなんて、絶対見れない。

吐して気絶するのかアホ

語屋から出て、上元を闊めて灰は座る
アの匂いの如い、ガシシト音が徳

に入れ
て、
噛み碎く。

「お頃いかで御心目出試ひ。」

ふう
……なんか食べ足りないな。

伊勢守

斧を握る。

骨の処理を終わつて、ドアを開く。

「終わったよ」

解体する音や人肉を食べる音、骨を碎く音に怯えてた様子はない。案外、大丈夫だつたのかも。

「杜塚君……血塗れのままだけど……いいの？」

「今からシャワー浴びるんだよ。もう少し待つてて」

「ぐぐくと頷いた。

- 藤山 葉月の視点 -

ベッドに座つて杜塚君が来るのを待つ。

それにも、こんな短い時間で人間を解体して食べて、床を綺麗にするなんて出来るんだなあ。

このベッド随分茶色い沁みが目立つけど、血の跡なのかな……。

それだけの人がここで殺されたってことだよね。

行方不明になつた人のニュースつて、一部は杜塚君が殺したとか

たまに杜塚君が見せる冷たい瞳は、殺人犯の瞳だつたのかな。

そんなことを考へてゐるうちに、杜塚君が入ってきた。

ジャージ姿だけど、寝間着かな？

手に持つていた服を干す。

「終わったよ。行こうか」

「うん……」一人で無言で歩く。それにしても、こんな形で藤山葉月の家に行くことになるとはね。

元々、行く予定なんてなかつたけど。

僕の家とは反対方向に曲がる。

この時間だから、人通りは少ない。

目撃される心配はないな。

藤山 葉月が立ち止まる。

「……だよ」

「開けて」

鍵を取り出して、ドアを開ける。

中に入つて居間を覗くと、男と女が一人、刺殺死体となつて転がつていた。

男はめつた刺し。女は背後から喉を一刺し。
めつた刺しか……。どうするかな。

「杜塚君……？」

藤山 葉月がおろおろと詫いてくる。

「ねえ、君ならどういづ風に工作する？」

「えつと……強盗の仕業に見せかけるとか……」

「強盗か。確かにそれもありだけどね」

それだと、矛盾が出るんだよなあ。「強盗の仕業に見せかけるとか
くらいしか思いつかないけど……駄目なの？」

藤山 葉月が心配そうに聞いてくる。

「駄目つことはないけど、すぐ見抜かれると思つよ。強盗に見せ
かけた他殺だつて」

「なんで……？」

「君さ、この男背中と胸や腹を何十ヶ所に渡つて刺してるでしょ？ただの強盗犯が目撃されただけなら、ここまで刺さないんだよ。ここまで刺すのは、この男に激しい恨みを持つてる証。警察がこれを見逃したら終わってるよ」

「じゃあ、他に方法は……」

「んー、女が男を刺して、女は自殺か逆パターンを考えたけど、それも無理そだからね」

男が女を刺して自殺とかも考えたけど、男がめつた刺しながらも、女は背後から首を一刺し。自殺に見せかけるのは諦めるしかないな。「ねえ、この男と女恨んでる人間つていの？」

「分からぬけど、多分いると思ひ」

「そう。ねえ、強盗に見せかけることに賭けてみよつか？」

「えつ……？」

意外そうに見つめてくる。いましがた強盗は駄目だつて言つたばかりだから、当たり前だけど。

「今のは杜撰だからね。すぐ運がよければめつた刺しながらも、無視するかもね。それか、強盗に見せかけた殺人だつて分かつても、検討違いの推理をする可能性だつてあるしね」

鞄から革手袋を出して、嵌める。

さて、工作を始めよう。まあ工作といつても、部屋の中をそれらし

く見せるだけだけど。

「今から強盗に見せかけるために最低限部屋を散らかすから、君も手伝つて」

「あ、うん。どこを散らかしたらいい?」

「この一人が金を隠してそうな場所と、その周りをちょこつと散らかしたらいいよ」

「分かつた」

金を隠してそうな場所はとりあえず探してみた。
これくらいでいいかな。タンスの奥とかDVDのパッケージの中から五万見つけたし。

「あの、終わつたけど、これでいい?」

藤山 葉月が散らかした場所を見る。
散らかし方は似てるし、これでいいかな。

「あ、君引っ搔かれたりしてないよね?」

「してないけど、なんで?」

「引っ搔かれたりして皮膚の欠片が爪に挟まつてたら、君が犯人だつて断定されるから」

「あ、そつか……」

男の手を持ち上げて、爪の間を覗く。

何かが挟まってる様子はないな。わて、後する」とは……ないかな。
指紋は拭き取る必要ないだろつ。

僕の指紋は残してないし、そもそも強盗なんて入ってない訳だし。

「凶器と血の着いた服、持つてきて」

「あ、うん」

玄関に置いていた鞄を持ってきて、中から果物ナイフと返り血の着いた服を出した。

「これは僕が処分しようとよ」

「え……ここの?」

「うふ……」

警察と聞いて、自信なさげに俯く。

「警察に何言われても堂々としてるんだよ。目を泳がせたり、おろおろしたりしたら、何か隠してるので見抜かれるからね」

「うふ……頑張る」

「頑張るじゃ駄目だよ。絶対にだよ」

「分かった……」

そんな顔しなくとも、君なりつまくやれるよ。
気づいてないかな。

僕に隠す方法を教えてって言つた時の君、僕と同じ皿をしてたんだ
よ。

僕と同じモノを隠した皿をね。「後、アリバイだナビ監は僕と一緒に
にいたつて言うんだよ」

無言で頷く。

「なんで今になつて通報したのかが問い合わせられるかな……」

不安げに床を見る。そりゃあ、警察は疑つてなんぼだからね。

「そりゃあ縁いにかかるだろ? わ。家にこるのが嫌だつたから、今
まで帰らずにいたつて言えばいい。で、僕に会つたつて言えばいい
よ。一旦別れたけど、また会つたつて」

「ぐぐぐと頷く。緊張してるな。
でも、こざとなつたらきっと化けるだろ? わ。
楽しみだよ。

「最後に言つとくけど、僕達は共犯だ。お互いが秘密を握りあつて
る。分かるよね?」

藤山 葉月が怯えたように肩をすくませた。
無表情で睨んじやつたからかな。

「うん……」

「君の秘密が暴かれても、僕の秘密が暴かれても、僕達は共倒れになる。どちらかの秘密が暴かれたら、僕達は終わりだよ。殺人罪、共謀罪、いろんな罪を期せられるだろうね」

一回言葉を区切って表情を伺う。真剣な表情をしている。

「君は分からぬけど、僕は既に沢山の人間を殺しそぎた。少年法が適用されるか知らないけど、責任能力は証明されるだろうから、死刑かもね」

「し、死刑つて……」

「可能性はあるよ？君は執行猶予が与えられるかもしねないけど。でも、罪を期せられるのは嫌でしょ？」

それにはほつきりと頷く。

「じゃあ秘密を暴れないよう、秘密を共有し合おう。既に君も、僕の仲間なんだよ。僕と同じ殺人者。警察なんかに捕まるなんてごめんだよ。一人で、警察を嘲笑つてあげよう」

ああ、僕達は運命共同体なのか。

君じゃ、駄目だな。

「警察だって恨めしいんじゃない？両親を殺した犯人を今まで野放にしてたんだから」

そう言つたら、田つきが変わった。

「だから、一人で嘲笑つてあげよう。僕達みたいな子供の犯行を見抜けない間抜けな警察を。ねえ、葉月？」

驚いたように、僕を見た。

- 藤山 葉月の視点 -

名前を呼ばれて、杜塚君を見る。

今、僕を“葉月”って呼んだの間違いじゃないよね……？

初めて、名前を呼ばれた。今までずっと君だったのに。

杜塚君が氷のように凍てついて暗くて、でもそれでいて優しい瞳を向けてくる。

その瞳が、僕を掴んで離さない。

僕を闇に墮とそうと、笑ってる。

でも……そっちの方がいいかもしない…………。

きっと僕はどこかおかしかったんだ。

だから、衝動的にでも、人を殺せたんだ。

二人が死んだって、殺したんだって分かつた時、恐怖と一緒に喜びが湧き上がってきたんだ。

僕は、人が死んだことを喜んだんだ。

きっと僕は、そっち側の人間なんだ。

「氣づいた？なら、おいで」

杜塚君が、手を伸ばしてくる。

「僕と君は同じなんだよ。僕達は闇の中にいるべきだ」

光なんて、希望なんてただの幻。

現実は、あつさり僕の希望も光も粉々に打ち碎いた。

希望なんて、簡単に裏切られる。

だったら

杜塚君の、いや、鼎君の手を取った。葉月が僕の手を取った。最初はこんなことになるなんて、全く想像してなかつたのに。それどころか、死ぬだらうなつて思つてたのに。

死ぬとしたら、どんな死に方をするのか観賞してようと思つてたのに。

あの時だつて、僕に殺されることを選ぶのかと思つてたんだけど。それか、自殺とか。

いい意味で裏切られたよ。

まさか、こつち側に自らの意思で足を踏み入れるとはね。

まあ、人を殺せたつて時点でこつち側の人間なんだけれどね。僕はこう考へてる。人を殺せる人間は、それだけのモノを持つてゐんだつて。世間は狂氣つて呼ぶけど。

人を殺せない人間はそれを持つてないんだよ。

持つてないから、人を殺せない。

持つてたとしても、爆発させるモノがないから、結局持つてないのと同じ。

葉月は僕のように人を殺せはしないだらうけど、貶めることは得意そうだね。

これからどうなるか、楽しみだよ。

- 藤山 葉月の視点 -

鼎君が帰るのを見送る。

「あ、言ひの忘れてた。あの一人の財布のお金、抜いといてね。強盗なのに財布にお金があつたら不自然だから」

「あ、うん」

確かに強盗に入つて財布のお金盗まないなんて、おかしいよね。ちゃんと忘れないように抜いとかなきや。

「じゃあ僕は帰るけど、後は一人でもうまくやれるよね?」

微笑みながら僕を見据える。

「うん……大丈夫」

一人……ここからは一人でやらなくちゃいけないんだ。

「じゃあね。終わつたら電話かメールでもして」

「うん。ありがとう」

僕が手を振つたら、鼎君も手を振り返してくれた。

鼎君も帰つた。電話を見る。最後の仕上げをやらなくちゃ。受話器を取つて、警察にかける。

すぐ、繋がつた。

「警察ですか！？早く、早く来てください……おじさんとおばさんが、刺されて、倒れてるんです……」このまま帰ろうかと思つたけど、警察が来たのを見てから帰ろう。

葉月の家から死角となる建物の影に隠れて、パトカーが来るのを待

つ。

サイレンの音が聴こえてきた。

あれ？ こっちから聴こえてきた？

僕に近づいてくるし。

ここで突つ立つたら怪しいな。

歩いてただの通行人のふりをする。

パートカーが近づいてきた。

僕の横を通り過ぎる。

通り過ぎる瞬間、一人の警官と田代が合った。

見たことない警官だな……。最近移動してきた警官か？

まあ、どうでもいいけど。あの警官、このままこの事件の担当になるのか？

だとしたら、僕のここに来ることもあるかもしねりないな。

志を無くしたお前達が、僕達を捕まえることが出来るかな？

僕達は簡単にお前達に捕まらない。

お前達を嘲笑つてやる。

僕が頭脳を駆使しなければならないほど、追い詰めてみせる。

僕達を追い詰めてみせろ。

いつでも、受けてたつてやる。

僕を楽しませろ。

少しは手加減したんだから、見抜けよ？ 家に着いた。鍵を開けて中に入る。

誰も起きてないな。

二階の自室に戻る。ドアを開けると、まだらが足にじゅれついてきた。

まだ起きてたのか。僕が帰つてくるのを待つてたのかな。

抱き上げてベッドに座る。

葉月、うまくやつてるかな。期待してるんだから、失敗しないでよ。

そういうえば、何を言われても堂々としてりつて意味、伝わったかなあ。

堂々としてるといつても、何も本当に堂々と胸を張つて答えるってことじゃない。

そんなことしたら、逆に疑われる。

葉月は人見知りだから、初対面の人間にはおろおろとしやすいだろう?

おろおろしながらも、冷静さを失わずに必要以上に動搖しちゃ駄目だ。

あまりに動搖してしまうと、それも警察にどうしては疑うべき事項になる。

自分が一人を殺したこと隠すために、強盗に見せかけたんじゃないかって。

警察なんか気にせずに、いつもの君でいればいいんだよ。

そうすれば、警察なんか簡単に騙せる。

警察は僕達のような子供の犯行や心理を、見抜けないんだから。

- 藤山 葉月の視点 -

受話器を置いて、電話を切る。

警察が来るまで十分くらい。それまでにお金、どこかに隠さなきや。

おじさんの鞄から財布を出して、お金を抜き取る。

十五万も入ってるし。おばさんのも抜かなきや。

一人の寝室に入つておばさんの財布もお金を抜く。

おばさんも五万入ってるし。

二十万もあつたら何出来るかな。

今はどこに隠すか考えなきや。

きっと家中捜査されるよね。

どこに隠そう……。警察つて、タンスの裏まで調べるのかな。

タンスの裏に落としたら、見つからないかな?

僕の部屋の引き出しから封筒を取り出す。

合計一十八万を封筒に入れて、寝室に戻つて大きいタンスの裏に、封筒を落とす。

タンスを退かさないと手の届かない場所に落とした。
こんなところまで調べないよね？

おじさんの傍に立つ。

今までいい思いをしてきたんだ。これくらいの復讐、いいよね？

インター ホンが鳴った。

来た。

今から、被害者を演じなきや。

僕は加害者じやない、被害者。

急いで走つて、玄関を勢いよく開ける。

「おじさんとおばさんが中に……！早く、助けてください！」

身内が刺されて倒れてるんだから、これくらいの動搖はするよね？

- 藤山 葉月の視点 -

目の前でドラマでよく見るような現場検証が始まる。

事情を話すために居間のテーブルに座つて、今までの経緯を話す。右に座つてゐる三十代くらいの人 瑛士 つて刑事さんで、左に座つてゐる人が最近刑事になつたばかりの 鎌足 浩信 つて刑事さん。二十代前半くらいかな。

どうしよう、怖い。うまくやれるかな……。

うまくやらなくちゃ 鼎君まで捜査が回っちゃう。

『わふと手を握る。肩が微かに震えるのが分かる。

「通報が今の時間になつた理由はなんですか？」

濱沼さんがそう聴いてきた。

「昼は友達の杜塚君と遊んでたんです。五時くらいに別れて、家にいたくなかったから、そのままずっと外を出歩いてたんです。そしたら散歩してた杜塚君に会つて、そのまま話し込んでたら遅くなっちゃつて、家に帰つたらあんなことになつて……」

なんだか涙が出てきた。俯く。

考えようによつては、あの肩共は死んだことで罪を免れたんだよね。死ぬことが罰なのか、罪を背負つて生きるしが罰なのか、ビックリが最大の罰なんだろう。

- 藤山 葉月の視点 -

「おじやんとおばやんを恨んでる人つているかな？」

濱沼さんがいきなり、そつ切り出してきた。

「え……？ なんですか？」

ゆつくりと濱沼さんを見て、きょとんとした表情を向ける。危なかつた。思わずぱっと顔を上げると、じだつた。

過激に反応しちゃつたら疑われそうだ。

「深い意味はないけど、念のためにね」

「恨んでる人……多分いると思います……。お金を貸して、それを棚にあげてお金を絞り尽くすような」としてましたから……」

これは本当。僕は部屋にいたけど、さつさと貸した金返さんか！つて怒鳴る声、何回も聴いたから。

僕は知らないけど、沢山の人からお金巻き上げたんだと思つ。あんな酷い外道だから。

強盗に見せかけたつてことはバレても、この情報があれば容疑者は沢山出でくるから、僕達がやつたつてバレないかもしれないよね？

- 藤山 葉月の視点 -

「葉月君、はつきり言つとくけど、これは強盗殺人ではなく強盗に見せかけた殺人だと断定出来る」

どくんっと、心臓が高鳴った。

息が荒くなりそうになるのを、必死で抑える。

「じゃあ……誰かおじさんとおばさんを恨んでる人が、二人を殺して、強盗に見せかけたつてことですか……？」

「そういうことになるね。普通強盗なら調べるであろう場所はほとんど手つかずで、手袋を嵌めていたんだろうが、それでも指紋が残る場合がある。触った場所の指紋が拭き取られていなかつた。ミスでなく、わざとだとしたら余程逮捕されない自信がある犯人だね」

にっこり笑いながら、そう言つてくる。

笑つてゐるのに、怖く感じるのは気のせいじゃない。

僕と鼎君を捕まえるとしたら、この人かもしれない。

- 藤山 葉月の視点 -

現場検証が終わったのか、警察の人が帰り始めた。おじさんとおばさんの死体は司法解剖されるみたい。車の中に運ばれてくる。

そういうえば、おじさんもおばさんも死んで、これから僕はどうなるんだらう。

住むところとか、お金とか。

今までのままではいられないよね、きっと。

それでも、後悔はしない。

「それじゃあ、またいろいろ訊き合へると思ひなび、今日はこれで帰るよ」

「はい……ありがとうございました」

扉が閉められる。鎌足さんって人、じつと僕を見てきてなんだったんだろう。

僕、おかしい行動してたのかな？

そうだとしたら、聞いてくるよね？

大丈夫。ただ見てただけだよ、大丈夫。

おじさんとおばさんが倒れてた場所を見る。テープの後がうつすら残ってる。

とりあえず、終わった。

でも、本番はこれからだ。田覚ましの音で田を覚ます。

今日は妙に寝起きすつきりしてるな。

昨日の今日だからか。

葉月、大丈夫だつたかな。もう一人の警官があの濱沼 瑛士だから、きっと強盗に見せかけたことは見抜いてるだろうね。

他の警官なら分かんないけど。

あの人は眞面目だから、僕がわざと手抜きした場所も見抜いてるだろうね。

手袋をしていても、何らかの理由で指紋が残ることがあるらしい。手袋をしていても、指紋を拭く手間は省かない方がいいってことだね。

全ての強盗が指紋を拭いていくのか知らないけど。

まあ、あの人なら見抜くな。

それでも、僕と葉月がやつたなんて、思わないだろう？

濱沼 �瑛士だって、僕をおとなしい子供くらいにしか認識していないんだから。

でも、あの人は侮っちゃいけないかもね。

厄介な人物を敵に回したかもしね。

僕がバラバラ死体を発見したあの事件、解決したのは濱沼 �瑛士だから。

犯人は父親だつた。最初は恋人だと思われていたけど。

殺した理由は、恋人と結婚させてくれないなら出ていくと言つた娘の言葉に、激怒したかららしい。

人間、そんな下らない理由で我を忘れられるんだね。
僕達を追い詰めるとしたら、濱沼 �瑛士かな。

僕を、楽しませてよ？

いつでも、待ってるから。

さて、ご飯を食べて学校に行こう。「じゃあ、行つてきます」

キッチンにいる母さんに向かつて言つ。

「いつて、いらっしゃこと、咄つ嗟が聴こえたのを確認して、玄関を出る。

出たら、葉月がいた。

「鼎君、おはよー」

「おはよー。とりあえず、学校行こつか」

「うん」

学生が溢れかえる中、昨日のこと話をす。

「それで、どうなったの？」

「濱沼さんと鎌足さんって刑事さんが、事件の担当になるみたい。強盗はバレちゃった。でも、容疑者は沢山いるから、簡単には僕達に辿り着かないと思う。一人を恨んでる人、いっぱいいるから」

やつぱり濱沼 瑛士が担当になるのか。
鎌足とかいうのは、初めて聴いたな。

あの、僕と田が合った男か。

僕のところにも来るだろうな。昨日、葉月と本当にいたのかどうか。
まあ、実際はいなかつたけど。

これについてはアリバイ成立出来る。「ねえ、鼎君」

いきなり葉月が不安そうに僕を見てきた。

「何？」

「今更だけど、昨日僕と鼎君は一緒にいなかつた訳じゃない？その時間、鼎君は家にいて家族と一緒にいたりしたら、警察が来たら家族の人が家にいたって言つんじゃ……」

なんだ、そんなことか。

「それなら大丈夫だよ。出掛けたから。じゃなきや、一緒にいたつて言えなんて言わない」

家族だつて友達と出掛けたと思ってるはず。
まあ実際はあの廃墟で読書してたんだけどね。
あそこが一番居心地がよくて安心出来るから。
血の匂いがこびりついたあの部屋だけだ。

本当に安心出来るのは。

葉月は僕を裏切ることはないとさけど、周りは全て敵。
人間なんて信じるものじゃない。信じたつて裏切られるんだから。
何がきっかけで敵となるか分からない。

なら、最初から信じない方がいい。

まあでも、葉月のことは信じてあげてもいいか。
お互いの命を握りあつてるようなものだから。

僕を裏切ることは、自身の破滅も意味してる。

「そうなんだ。なんか、すぐくまぐま行きすぎてるね

「まあ、悪運が強いんだろうね。僕達は」

ロッカーを開けて上履きに履き替える。

「じゃあ、また昼に」

「うん」チャイムが鳴り、昼休みになる。

屋上に行こう。束の間だけど、この不協和音から抜け出せる。
鞄から弁当を出して、教室を出る。

葉月が待つてた。僕を見て、嬉しそうに笑う。

「行こうか。屋上」

「うん」

雲ひとつない空を眺めながら、弁当を食べる。

「やつしょば、これからどうするの？」

「どうするのって……何が？」

「だから、住む家とかこれから的生活費とかだよ。どんな人間であれ、養つもらつたのは確かだからね」

僕もなんだかんだ言つて、養つてもらつてる訳だからな。
そこは感謝するけど。

また、破綻しそうだよね。

「それなんだけど、生活費も家もなんとかなりそんなんだ。おじさんの通帳に一千万近く入つてたから」

「一千万ねえ、よく貯めたね」

あつと、巻き上げた金なんだろうね。

「後ね、大家さんが家賃は働くようになるまで払わなくていいって
言つてくれて」

嬉しそうに少し笑う。優しさつていうものに触れてこなかつたから、
嬉しいのか。

「ふうん……その大家さん、優しい人だね。損をするのは自分な
に」

そういう人ほど、この世の中では馬鹿を見る。
一方で葉月の親戚のような、ろくでもない人間ばかりおいしい思い
をするんだ。

世の中は、理不尽。

「うん。優しい人だよね」

言つて、少し暗い表情をした。

そんな人を騙してることが心苦しい？

それくらい握り潰さないと、この先もつと辛いことが待ってるかも
よ？弁当を食べ終わつて、空を眺めながらチャイムが鳴るまで話す。

「そついえば、瀧沼さんどうだつた？」

「真面目そうな人だつた。優しそうだけど、いざというときは怖い
人だと思つ」

「まあ、あの人はね。厄介な人を敵に回したかもね。でも、あの人
とやり合つなら面白いかもね」

「面白いって、僕達が犯人だってバレること前提？」

ちょっと目を丸くして聴いてくる。

「あの人なら徹底的に調べると思うよ？まあ、あの人はね。上層部は誰を犯人にするのか知らないけど」

僕らが無事であるということは、誰かの人生を犠牲にするということだ。

誰かを生け贋として、法律という“神”に捧げる。

僕らの犯行が暴かれない限り、生け贖は捧げられる。

例え身の潔白が証明されたとしても、逮捕されたという時点で犯罪者としてのレッテルが貼られる。世間は、その人間を犯罪者として見る。

その人間がどんな人間であれ、犯罪者というレッテルが邪魔をする。人生の中に、常に犯罪者というレッテルが組み込まれる。

人生を狂わされるということだ。

僕らがすることは、そういうことだ。

誰かの人生を犠牲にして、平穀を得る。

特に僕は自分の快樂のために、常に誰かを生け贖として、命も人生も食い潰して生きている。

でも、人間そういうものだろう？

人間は強欲なんだから。「そういえばもう一人の警官、なんていうの？」

濱沼 瑛士と一緒にいたんだから、あの警官もこの事件を調べるんだろうな。

移動なのか新人なのか知らないけど、鋭い目つきをしてた。

「鎌足さんって人で、一言も喋らなかつた。ただ僕をじっと見てき

て……。僕、疑われたかな」

「疑うのが仕事でしょ、警察は。ただ見てただけなのか、観察してたのかは知らないけど。見抜こうとして、そう簡単に見抜けるものじゃないと思うよ。人の嘘は。見抜こうと躍起になるより、一步下がってじっくり眺める方がいい時がある」

実際、僕はたくさんの人を殺してるのに、まだ無事なんだから。同じ場所であれだけ人が消えてるのに、未だに警察は僕まで辿り着かない。

連續殺人だから、犯人は前科のある人間だと考へてるのかな。子供がこんなことするはずないと？ そんな思い込みは捨てた方がいいよ。思い込みを捨てない限り、いつまで経っても僕に辿り着かない。

チャイムが鳴った。

意味のない授業に戻らう。

「戻ろうか。また放課後に」

「うん」

そつこえ巴、もつ少しで夏休みだな。「なあ、藤山」

帰り道、薪沢が複雑そうな顔をしながら、葉円に話しかける。

「……？何？」

葉月はきょとんとした表情で、新沢を見る。

「ニュースで見たんだけどさ、本当なのか？」

葉月の肩が揺れる。

「ニュース？へえ、ニュースでやつてたんだ。

朝にニュースを見なかつたから知らなかつた。

マスコミも情報が早いな。

考えようによつては、マスコミも不幸がなれば成り立たないよね。

不幸がなれば、誰も相手にしないんだから。

他人の不幸は蜜の味つてね。

他人の不幸を見るために、ニュースを見るよつなものじゃない？

所詮他人事だから、見てもすぐ忘れる。

誰しも心の中で、他人の不幸を嘲笑つて喜んでるんだよ。

「うん……ホントだよ」

「そつか……大変だな」

「助けてくれる人がいるから、大丈夫だよ」

嬉しそうに表情を綻ばせながら、言つた。助けてくれる人か。誰のことを言つてるんだる。

昼に言つてた大家とか？

まあ誰であろうと本人は嬉しそうだから、いいけど。

「それにしても、最近お前ら仲いいよな

「そう？葉月、どう思う？」

訊いてみたら、困ったように笑った。

「やう見えるんなら、そつなんじやない？」

一際嬉しそうに笑う。僕と仲がいいと言われたことが、そんなに嬉しいの？

「杜塚が名前で呼んでる……。俺だつて名前で呼ばれたことないのにー！」

大袈裟に泣き真似をしながら抱きつってきた。

びひょひょつかな。ウザイ。

「俺だつて一度くらい名前で呼ばれてみたいぞー！」

頭を撫で回すな。髪が無茶苦茶に絡まる。
薪沢、僕より随分背が高いからな。

並んだら僕の頭が薪沢の胸辺りにくる。
改めて自分の身長の低さを痛感する。
葉月だつて僕より頭ひとつ分高いのに……。

「薪沢、そろそろ離してほしいんだけど

「じゃあ名前で呼べ

「やだ」

更に頭を撫で回された。

「呼ばなかつたら鼎ぢゅんつて呼んでやるー！」

「絶対やだ」

「じゃあ名前で呼べー！」

「どれだけ名前で呼ばれたいのさ。確かに名前で呼んだ記憶ないけど。基本的に名前は呼ばないから。」

「はあ……波哉斗、離せ」

「なんか感動したぞ！これからは名前で呼び合おうじゃないか！」

「ちよ、薪沢落ちるー！」

「くつ？」

「この馬鹿！後ろに田んぼがあるの忘れてるとかあり得ないって！バランスを崩して、一人もとも田んぼに突っ込んだ。
うわあ……最悪。土はぬかるんでるし。
葉月が心配そうにおろおろとしている。

「二人共、大丈夫？」

「これが大丈夫見える？」

「杜塚……じゃない鼎ちゃん、顔に土がついてるぞ？」

「薪沢がそつと口を開いて顔に触ってきた。
更に泥がついたけど。」

「だから、ひやんは余計だつて。波哉斗しに鼻の頭に土、つこてるよ」

言われて鼻を拭う。

「お、ホントだ。ふ、あはははははー。」

いきなり、薪沢が笑いだした。

「人の顔見て笑わないでよ。……あははははー。」

なんか分からぬけど、おかしくて薪沢に釣られて笑う。近くの公園の水道で、顔と制服の上着を洗う。

身体についた泥はいいよ。洗えばすぐ取れるから。服についたらなかなか取れないのに。

しかもこれ制服なんだよ……、私服だったままだしもや。明日土曜で休みだから、まだなんとなるかもしねないけど。教科書とかが無事だつたのが、せめてもの救いだね。髪にも泥がついてるから、洗い流す。

びしょ濡れの状態で帰る訳だから、帰つたら母さん驚くだろうな。こんな状態になつて帰つたことないから。こんなこと初めてだよ。

まあでも、薪沢も悪気があつた訳じゃないし、許してやるか。

「全く……」

「悪い悪い。でも楽しいからいいじゃねえか

「まあ、ちゅうとは楽しいかも……だけど」

「鼎君、なかなか笑わないもん。きっと楽しいんだよ。ねえ、波哉斗君？」

そんなこと言つたら薪沢がつけあがるから、やめてほいんだけどな。

てゆーかさ、いつ頃達はそんな意氣投合したの？

「葉月だつてやうやくひらゆく。認めろー！」

「あー、はーはー。楽しかったよ」

「すっげー投げやりだな。まあいいや」

他人を信じちやいけない。裏切られるに決まってるから。かつ思つていても、なんでだらうな。

葉月は別として薪沢だけは、心を許してしまつ。
友情とかそんなもの、馬鹿馬鹿しい。いつか廃れてしまつ、そう思つてゐるのに。「とりあえず、帰ろつか」

濡れた上着を腕にかける。

絞りきれなかつた水気が、滴となつて垂れる。

「おー、そうだな」

薪沢つて本当、悩みとかなさそつだよね。

こんなことにも、本当に楽しそうに笑うんだもんな。

いろんな意味で、純粋なんだらうな。薪沢は。

僕にはないもの。

僕が人殺しだと知つたら、薪沢はどんな顔をするんだらう。まあ、考えるだけ無駄か。

「鼎ひやへん・ビリしたよ? そんな暗い顔して」

「その頭から割って脳を搔き回したら、少しそよくなんじやないかと思つんだが、ビリ思つへ。」

「すみませんでした。だから頭から割らないで」

そんな真剣に言わなくとも。

頭つていうか頭蓋骨は割りにくから、しないよ。

「杜……、鼎の[冗談で、なんか[冗談に聽こえないよな」

なんで言い直すんだる。いいけど。

実際、人を殺してるからじゃない?

「じゃあなーアティオス!」

「うん。バイバイ」

テンション高いなあ。まあ、あれでこそ薪沢だが。

薪沢の姿が見えなくなつた。

学生の“僕”は終わり。これから、また別の仮面を被る。「やっぱり波哉斗君つて面白い人だね」

「まあね。つき合つて飽きないからね。あいつの明るさは底なし沼なんじやないかな。そのおかげで、いつもたけど」

葉月が僕を見て苦笑いを浮かべる。

タオルを持ってたからある程度の水気は拭き取れたけど、やつぱり

髪や至るところから滴が滴る。

風邪ひかないかな……。

帰つたら風呂入らう。

「じゃあ、バイバイ」

「バイバイ。風邪ひかないようにね」

なるべく氣をつけるけどね。ひいたらその時だし。

葉月の家とは反対側の角を曲がる。

「…………」

家の前に一人の人間。やつぱり来たか。
近づいていくと、思つた通りの人物。

「濱沼さん、お久しぶりです」

笑顔で話しかけたら、濱沼 瑛士も笑顔で話してきた。

「やあ久しぶりだね。ところで、なんでびしょ濡れなんだい?」

「薪沢の阿呆がふざけてきて、田んぼに落ちたんです」

「確かにあの子なら分かるな。災難だね」

「もう災難も災難ですよ。それで、なんで濱沼さんが僕の家の前にいるんですか?」

柔らかな笑顔から一変、真剣な表情になつた。

「藤山 葉月君を知つてゐるかな?」

「ええ。友達ですか」

「昨日の昼から藤山君と一緒にいたつていうのは、本当かい?」「…ずっと一緒にいましたけど、なんですか?」

少し首を傾げて言つてみる。

「なら、一回別れて夜にまた会つたといつのは?」

「ええ。一度六時くらいに別れましたよ。夕食を食べて風呂に入つた後に、散歩に出たら、葉月にまた会つたんです」

「そうか。それだけ聴けたら十分だよ」

本当に?聴きに来たつてことは、少なからず葉月のことを探つてゐんじやないの?

「でも、なんでそんなこと聴くんですか?」

「鼎君、藤山君の両親が殺害されたことを知らないのかい?」

「えー? そつなんですか!?」

大袈裟に驚いてみる。

これで無感動とかおかしいからね。

それにしても、鎌足とかいうこの刑事、気に障るな。
僕のことを見極めようとするように見つめてきて。
僕の深い部分を、誰も理解出来はしない。

- 鎌足 浩信の視点 -

杜塚 鼎という高校生を観察する。
濱沼さんの質問に淀みなく答える。

一見して、不自然な点はない。

しかし、その不自然がないところが、不自然なように感じる。
まるで、最初から答えを用意していたような。
私の考えすぎなら、それでいいのだが。

あの子は、不思議な目をしている。

荒々しく、何者も深層までは踏み込ませない暗い瞳。憎悪、悲哀が
見て取れる。

その奥には何が隠されているのか、私にも分からぬ。

杜塚君が私をちらつと見てきた。

自分をじっと見る私が気に障ったのかもしれない。

「鼎君、ありがとな。助かったよ。さて鎌足君、帰ろうか」

「あ、はい」

これでいいのか？濱沼さんが二人の話を鵜呑みにしているとは、到底思えないが。

話がうまく出来すぎてる。

しかし、二人が事件に関与しているという証拠はどこにもない。
現時点では、殺害された一人と金銭トラブルがあつた人物が最重要参考人となつていて。

濱沼さんが歩き出したから、私も歩く。

杜塚君が玄関の手前で、私達を見つめている。

玄関のドアに隠れて見えなくなる瞬間、笑っているのが見えた。

禍々しく、悪魔のようだ。『ただいま』

靴を脱いでいると、すぐ母さんが来た。

僕を見て目を丸くしてゐる。

「鼎、そんなに濡れでどうしたの？」

「薪沢の奴がふざけてきて、田んぼに落ちたんだよ。それで公園で泥を洗ってきたんだ」

上着を母さんに渡す。広げて汚れ具合を見る。

「あらまあ、クリーニングに出しかねないわね。クリーニングに行つてゐ間にお風呂入つてきなさい。風邪ひくわよ」

「うふ。 そうする」

鞄を階段に置いて、風呂場に行く。

蛇口を捻ってお湯をはる。

髪とか身体を洗つてる間にはれるだろ。

脱いだ制服は出来るだけ丁寧に置んで、袋に入れる。

直に置いたら床が汚れるし。

風呂場のドアを閉めてシャワーを浴びる。

少し色のついたお湯が流れしていく。

髪を洗いながら鎌足とかいう刑事を思い出す。

気にくわない。あの瞳。

僕の瞳をじっと見てきて、そこに何が潜んでいるのか見極めようと

してきやがつて。

そんな簡単に見極められると思ひな。

僕は自分の欲求のために、快樂のために人を殺す。

その行動の本当の意味が分からなければ、僕のことなんて理解出来やしない。

僕は、弱いんだからな。風呂から上がって身体を拭ぐ。
あ……しまつた。着替え用意するの忘れた。

仕方ない、部屋で着替えよう。

バスタオルを腰に巻く。

脱衣場を出ると、ちよいつじ母さんが帰ってきたといふだった。
那奈瀬も一緒だ。

なんとなく気まずい。上半身裸で腰にバスタオル卷いただけだし。

「鼎つて結構、筋肉質な身体してんだな」

じろじろとかきつよひ見てくる。

「変態。弟の裸見て何ニヤニヤしてゐのぞ」

女がするみたいに胸を腕で隠してみる。

「そりゃあ俺はホモだからな！」

うわあ……笑顔で言ひ「じょなこよ。その単語を聞いたら鳥肌が立つ。

「冗談に決まつてゐるだろ。そんな顔するなよ。てか、そこまでドン引きするなよ」

母さん笑つてゐるけど、知らないから笑えるんだよ。

ホモにいい思い出なんてない。あつてもいらないけど。
本当に出したら怖気が走るし、鳥肌が半端ない。

「とつあえず着替えてくる」

「(ノ)飯出来たら呼ぶわね」

「うん」部屋の扉を開けると、まだらが待ちかねたようについつ寄つてくる。

抱き抱えようとしてしゃがんだ時、バスタオルがはだけた。
そしてタイミング悪くドアが開く音が、後ろから聴こえる。

「鼎、誰も見てないからって裸で過(ノ)すのはやめとけ。これって時に困るぞ。てか、部屋では裸族だつたんだな」

「違うからーそんな変態な趣味持つてないしー」

「違うのか？残念」

「…………弟に何を期待してるのや?」

「妹的キャラ？可愛や?」

「そもそも弟に、てか男にそんなもの求めるもんじゃないよ」

「ちっちゃかった時の鼎、めっちゃ可愛かったのにーお兄ちゃんつて抱きついてきたり可愛かったのにー」

「少なくとも今はしないよ」

なぜか胸に飛び込んでこい、みたいな感じで両手を広げてるから態度で拒否。

「で、そもそもなんの用事?」

「……忘れた。思い出したら言いつわ」

そう言って扉を閉める。なんだつたんだり。タンスから寝間着を出して着替える。

そういうえば鎌足 浩信、僕が笑ったとこ見られたかな。まあ、見られたって構わないけど。いつ、辿り着くのかな。

- 藤山 葉月の視点 -

鍵を開けて、玄関の前に立つ。扉を開けようと手が、なぜか震える。

開けるのを、躊躇う。

どうして? あの人達はもついないのに。死んだのに。僕が、殺したのに。

何を怖がってるの? あの人達が生きてて、また苛められるとでも? 僕は、まだ、あの人達に縛られてるの?

大丈夫。あの人達はもういない。怒鳴られることも、蹴られたり殴られるこも、無視されることもない。

あんな嫌な思いも、惨めな思いもしなくていい。もう、あの人達に縛られる必要なんてない。

思い切って扉を開ける。

しんとしていて、薄暗い。ほっとする。

ほら、大丈夫。もういい。

靴を脱いで、居間のテレビを点けてみる。

こんな普通のことさえ、今まで満足に出来なかつた。

とりあえず、着替えよ。

タンスから適当に服を持ってきて着替える。

Yシャツを脱いで、ふと腕を見る。

リストカットの醜い傷が残る腕。最近つけた傷がまだ、治りきつてない。

リストカットで痛みを感じることで、なんとか自分を保つてた。もう、自分を保つために自分を傷つける必要はないんだよね。

大丈夫。僕は大丈夫。

僕のことを理解してくれる人がいるんだから。

- 鎌足 浩信の視点 -

濱沼さんの後をついていく。

あの笑みは、何を示している?

我々を嘲笑うような笑みであるのと同時に、何かを期待するような笑み。

我々を嘲笑いながらも、期待する。

一体、何を。

まさか、自分が犯人だということをか?

自分が犯人だということを、早く突き止めるとでも?

まさか、な。彼には動機がない。

そもそも、殺害された二人とは繋がりがない。

しかし、あの笑みは何かを知っている。

何かの形でこの事件に関与しているのか?

しかし、関与したとしてなんのために?

不利益なことしかないというのに。

そもそも、金銭トラブルによる殺人という考え方自体が間違っているのか？

それは考えすぎか。

しかし、あの笑みの意味が分かった時、この事件は解決するのかもしない。

「濱沼さん、あの子……」

「ん？ 鼎君がどうかしたか？」

「いえ、普段どういう子なのかと……」

「とてもいい子だよ。成績も優秀なようだしな。でも優しくて傷つきやすい目をしてるのに、それを押し込めて強い自分を造り上げて、本来の自分を否定してるようにしか、俺には見えないんだよ。でも、母親が死んでしまって落ち込んでいたけど、今の母親とうまくやれてるようだから安心だよ」

あの子の目を見て、私は違うものを見ているんだな。
いずれにせよ、容疑者を割り出すことが最優先事項だ。

あの子達が関わっていないことを、祈る。そういうことがあって、今に至る。

やつぱり警察は馬鹿だ。アリバイがないって理由で、相原 謙一あいはら けんじと
いう無職の男が逮捕された。

勿論その男にも動機はある。

金を散々搾り取られた挙げ句、無職になつて金がなくなつても催促されてたんだから、恨みは強い方だろう。

そして、殺人犯。人生踏んだり蹴つたりと絶望してたりして。
まあ、他人がどうなるかと知ったことじゃないけど。

「鼎君、どうかした？」

葉月が僕の顔を覗き込んできた。
本当、明るくなつたな。初めて見た時は、今にも消えそうなほど、
弱々しい存在感しかなかつたのに。

「いや、逮捕された偽犯人、今頃何を考えてるんだろうって」

それを言つたら、暗い顔をした。

「やっぱり、罪悪感感じる?」

「ちよつと……」

「それくらい踏み潰さないと、この先大変だよ?」

「うん……頑張る

そう、頑張つてもらわないと。

君と僕は、この先離れられない運命を共有してゐるんだから。

七月二十八日 夏休みにて・失踪事件

この物騒な世の中、犯罪に巻き込まれないといつ保証はどこにもない

自分だけは大丈夫だと過信していると、痛い目に合ひつかもよ？

犯罪は、人を選ばない「暑い」

なんとなく呟いてみる。

……暑さが増しただけだった。

暑いのは苦手だ。かといってエアコンを点けるのもな……。
この部屋のエアコンの風、嫌いなんだ。

扇風機をさつきから点けてるけど、生温い風しか送られてこない。
この暑さだから仕方ないけど。

まだらもお腹を上にしてぐでぐでとしてる。

全身毛で覆われてるから、暑くて当然だろうな。
夏休みの課題を昨日までに終わらせてよかつた。

これからまだまだ暑くなるのに、課題とか集中出来ない。

「暑い」

仕方ない。那奈瀬の部屋に行こう。

エアコン点けてるはずだから。

まだらを抱いて、那奈瀬の部屋にノックなしで入る。
すごい涼しい。まさに天国と地獄。

「鼎、どした？」

「暑いから涼みに来ただけ」

「自分の部屋にあるだろ、ニアコン」

「今は点ける気分じゃないから、兄さんの部屋で涼む」

「気分かよ」

那奈瀬が諦めたように苦笑いをした。

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

テレビゲームをしながら、ちらりと鼎を見る。

我が弟ながら不思議だ。

いつも顔は笑ってるけど、目は笑ってない。目だけは無表情。ここ数年、きっと鼎は本当の意味で笑ってない。

それに、母ちゃんや父ちゃんは気づいてんのかな。少なくとも父ちゃんは気づいてないだろな。

あの人は俺達のことなんか見てないから。

鼎はいつ、笑わなくなつたんだろ。

心当たりがあるとしたら、本当の母ちゃんが死んだ時。

母ちゃんが何をしてたのかは知つてる。鼎が寂しい思いをしてたのも。

でも、あの頃の俺はそれを省みなかつた。

そして母ちゃんは浮氣相手に殺されて、鼎は変わつた。

母ちゃんが死んでも涙ひとつ見せなかつた。

優しくて寂しがり屋で涙もろいあいつが、だ。

母ちゃんととの間に何があつたのかは分からぬ。

でも、確實に言えるのは、今の鼎は弱い部分を押し込めて、強い自

分を造り上げてるってことだ。

鼎は自覚していないかもしれないけど。

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

「何?」

鼎がきょとんとした表情で見てくる。

「いつもちょっととした時の一瞬の表情は変わらないんだよなあ。

「お前、見てるだけで楽しいか?」

「見てるだけでいいんだよ。兄さんじゃ、課題とかあるんじゃないの?」

「んなもん後回し。こんな暑い時にやつてられつか

「そんな適当でいいの?」

欠伸をしながら呟われたくないぞ。

「いつも鼎は終わったのか?」

「昨日終わった」

「はやー。」

「兄さんは適切処理されるから、彼女にふりれるんだよ」

「やりと笑いながら俺を見てきやがつた。

「なんで知つてんだよ！？彼女いたことすら言つたことねえぞ！」

「趣味は人間觀察だから」

「その中にストーカーが入つてんだろ」

「そうそう。兄さんが人目を気にしながらスタバでキスしてたとか、実際に面白いもの見させてもらつたよ」

「ちょ、お前、マジでストーカーかよ！」

「ふざけてストーカーって言つただけなのに、何やつちやつてんの子！？」

「兄さんって見てたら飽きないんだよね」

笑顔で言つことじやねえ。

知りたくない弟の趣味を垣間見た気分……。

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

まさかの弟のストーカー趣味発覚。お兄ちゃんは泣きそう。

「まさか、気になる女の子ストーカーしてたりしてねえだろな？」

「そう言つたら真顔ではあつ？つて顔された。
いや、だつて、普通そう考へね？」

「別に女興味ないし」

「彼女ほしいとか思わねえの?」

「女に現を抜かすくらいなら、猫を見てる方が断然いい」

「女より猫の方が上つて……。」

お前の価値観が分かんねえよ。

「てかわ、お菓子でもいいから食べる物ないの?」

「…………確かさ、わざわざ寿司百五十貫くらい食わなかつたか?」

久しぶりに父ちゃんが帰ってきて、寿司の出前取つて、百五十貫くらい涼しい顔して食つたよな。

食べてる時は本当幸せそつた顔するよなあ。

「あれくらい普通でしょ。まだ足りないくらい」

どんな畠袋してんだよ。あれだけ食つてしまだ足りないとか。なんで太らねえんだろ。

ある意味羨ましい体質だよな。

「…………」

寝息がして横を見る。

我が弟は寝のも異常に早い。ちよつと皿を離した隙に熟睡。猫も鼎の腕の中で気持ちよさそうに寝ている。

「……俺の部屋なんだけどな……。」

「あ～、暑～い」

買い物から帰つてきて玄関を開ける。

家の中が蒸し風呂状態。

買つてきた物を冷蔵庫に入れて、すぐさま居間のエアコンを点ける。
すぐさま涼しい風が送られてきた。

今年の夏は涼しく過ごせるからいいな。

僕の部屋、エアコンないから扇風機で今までやり過ごしてたんだ。
涼しい居間で過ごしたかったけど、おじさんとおばさんがいるから。
今は天国。

嫌いな人がいなくなると、気持ちつて変わつてくるんだね。
手首のリストカットの痕、前まではすぐ見られるの嫌で隠してた
のに、今は見られても平気になつてきた。

自殺しようつて思うほど、落ち込むこともない。

前は毎日自殺しようかなつて考えてたのに。

今は、気分が明るい。

嫌いな人でも、殺したことには限りはないのに。

そこまで、あの人達に対する気持ちがなかつたのかな。

今更、考えるだけ無駄だけど。

テレビを点ける。ニュースが流れてきた。

「子供ばかりが失踪かあ……」「また誘拐事件?」

「みたいだな」

最近多いな。子供が失踪するの。

失踪と言わてるけど、誘拐だよな。間違いなく。

しかもこの近くなんだよな。失踪した子供が住んでるの。失踪したのも勿論、この近く。

「何？」

「鼎も誘拐されないよつに氣をつけろよ？」

「そんな間抜けじやないよ」欠伸をして上半身だけ起こす。うん。いい夢見れた。夢であろうと食べ物は偉大だよね。まあ僕の場合、お腹膨らんでもなぜか満腹にならないんだけど。で、いくら食べてもこれ以上太らない。我ながら不思議な体质。

それにしてもこの近くで誘拐か……。

男も女も関係なく、子供であれば誘拐されてるみたいだ。きっともう殺されてるんだろうな。

特別な理由がない限り、生かしておく理由はない。子供をいたぶること、そのものに快楽を覚えるなら尚更。僕は子供に興味はないけど。

子供の泣き叫ぶ声は嫌いだ。そこに恐怖が混じつてよつとも。殺るなら、大人。

ここ一週間殺してないから、そろそろ殺ろうかな。

-とある誰かの視点 -

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い
痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い

なんで? なんで叩かれなくちゃいけないの?

なんで蹴られなくちゃいけないの？

なんにもしないのに。

奏太かなた、おじさんに何かした？

ただ、おじさんの横通つただけだよ？

そしたらおじさんが奏太の口を塞いで、車に入れたんだよ？

奏太はなんにも悪いことしてない！

田を開けたら、おじさんが怖い顔して奏太を見てる。

「何見てやがる糞餓鬼ッ！」

お腹を蹴られて、頭を叩かれた。
目の前が、真っ暗になった。

.....。

-とある誰かの視点-

動かなくなつた餓鬼を蹴る。

ちつ。死にやがったのか。つまらねえ。

まだ鬱憤を全部出してねえのに。

餓鬼はあんま抵抗してこねえからいいけど、弱いんだよな。

当たり前なんだけど、くそ、イライラする。

なんなんだよ、部長の野郎。

上司の自分より俺の方が出来るからつて、てめえのミスを俺になすりつけやがつて。

思い出したら余計にイライラしてきやがつた。

餓鬼を蹴つてみる。

なんも反応しねえ。

ちつ……ホントもうちょいもてよ。

でも、だからって大人は抵抗してくるからな。力も強いし。
やつぱり鬱憤晴らしには餓鬼か。

どの餓鬼も長くもたなかつたけどな。

「おい、こいつ捨てとけよ」夜道を一人歩く。
勿論血の染み込んだ制服を着て。夜だから、血とは氣づかれにくい。
手には袋で隠したバット。

かれこれ一時間半は獲物を探して歩いてるけど、見つからない。

こういう日は本当に見つからないんだよな……。

どうしようか……。もう少しで十一時だし、見つけたとしても全て
終わらせるのに、今からなら三時半くらい。

今見つかるか分からぬ。

帰るのが五時とかになつたら流石に怪しまれる。
仕方ない。今日は諦めるか……。

「はあ……」

廃墟で着替えて、仕方なく帰る。

こういう日はよくある。

元々人気の少ないところだし、仕方ないけど。

突然、土を掘るよつよづく、ざくつといつ音が聴こえてきた。

周りを見渡す。すると、

「めんね、『めんね、とぶつぶつ咳きながら土に穴を掘る男がいた。』二十代前半くらいかな。見た感じ気弱そつ。

穴を掘り終えたのか、そこに子供らしき物を投げ込む。

子供……？まさか、誘拐された子供か？

そうだとしたら、今まで誘拐された子供はやつぱり殺されてる」とになる。

男の行動に気を取られて気づかなかつた。

後ろに、別の足音が迫っていたことを。
気づいた時にはもう遅かつた。

振り返つた瞬間、後頭部を殴られる。

-とある誰かの視点-

「『めんね』『めんね』『めんね』『めんね』『めんね』『めんね』『めんね』『めんね』『めんね』『めんね』

これで何回目だろう。子供を埋めるのは。

何も植えられてない畠の中に、今まで何人埋めたんだろう。

兄さんが死なせた子供を埋めるのは、僕の役目。

仕方ないんだ。僕は兄さんに養つてもらつてるから。

他人とどうしてもうまくつき合えない僕は、要領も悪いし仕事したつてクビ。

僕は養つてもうつて身なんだから、これは仕方ないんだ。

僕には兄さんしかいないんだ。

兄さんに見捨てられたら、どうしたらいいか分からない。

だから、子供には悪いけど、埋める。

子供が誘拐されたってニュースになつてゐるけど、気にしてられない。親が取材受けて悲しんでる姿見るけど、子供なんてまた産めばいいじゃないか。

穴の中に子供を入れて、埋める。

後ろから何かが倒れる音が響いた。
びっくりして後ろを振り向く。

「兄さん……？」

「全く、何やつてんだよ。餓鬼に見られてたぞ」

地面を見ると、高校生くらいの男の子が倒れてる。

「ここの子、どうするの？」

「決まってるだろ。連れて帰る」

この子も、埋めることになるのかな……。

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

「ふあ～」

欠伸をしながらベッドを出る。

カーテンを開けると雲ひとつない見事な快晴。
太陽が眩しい。随分高いな。今何時だ？

十一時四十七分。随分寝過^レした。十時に起きる予定だったのに。
まあいいか。

部屋を出て下に下りて洗面所で顔を洗う。
鏡を見ると寝癖がひでえ。

「母ちゃんおはよー」

リビングに入ると、母ちゃんが心配そうな顔をしてうつむいていた。

「ああ那奈瀬、鼎知らない?」

鼎? 鼎がどうかしたのか?

「鼎がどうかした訳?」

「鼎、帰つて来ないのよ。電話しても出ないし」

昨日確か、あいつ散歩行つてたよな。

それから帰つてきてないのか?

遅くなつても必ず帰つてくるあいつが?

部屋に戻つて鼎の携帯に電話してみる。

「.....」

出ないし。『んなこと今までなかつたのに。』
リビングに戻る。

「鼎、出た?」

「いんや、出なかつた」

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

「やつぱり出ねえか

携帯を閉じる。あれから何回かかけてるナゾ、やつぱり出ねえ。
本当どうしたんだ?

あいつが連絡なしで帰つて来ないなんて考えられねえ。
薪沢つちや藤の家に行つてるとか?
それでも、連絡してくるはずなのに。

一応、電話してみるか。
薪沢つちの番号にかける。
すぐに出た。一秒かからなかつたぞ。

『もしもし、珍しいんじゃね?お兄ちゃんから電話なんて

「悪いなにきなり。そっちに鼎行つてねえか?』

『来てないけど、鼎ぢやんつて言つたよな。』

今、確実に鼎ぢやんつて言つたよな。
どんな呼ばれ方してんだよ。

まあ……確かに鼎つて小さい頃は女の子によく間違われてたけど。

「いや……あいつ、昨日散歩に行つたきり帰つてこねえんだよ

『もしかしたら葉月ん家に行つてるとかねえかな?』

「あ～、そしたら藤も律儀に電話してくる気がするけどなあ……。
一応かけてみるわ」「うつ……」

酷い頭痛で目を覚ます。

視界が霞んでる。誰かいるけど、視界が霞んでるせいでよく見えない。

その前にここはどこだ?

僕の部屋じゃない。

なんで自分の部屋以外で寝てたんだ?

起きようとして、起きられないことに気がつく。

手首を縛られてる?

きつく縛られてるみたいで、簡単にはほどけない。

足もきつく縛られてる。

段々と記憶が戻ってくる。

殴られて、気を失ってる間に連れてこられたのか。

「やあ……気がついた?」

視界がさつきよりよくなつてきて、ようやく人影が誰なのか分かった。

昨日の子供を埋めてた男。

随分と気が弱そうだな。

何かに怯えてるかのような表情をしてる。

殴つたらそれで済みそう。

くそ、足さえ縛られてなければどうにか出来るの。

縛られてるか……。嫌なことを思い出す。

思い出しそうになると、呼吸が荒くなつてくる。

ああ、本当、嫌になる。

「君が悪いんだ……。見たりするから……」

男がそう言つてきた。睨むと、びくつと身体を竦ませた。

くそ……、僕の貴重な休みを……！

せつかくの休みが、こんな下らないことでぶち壊しになるなんて……

…と/or えず、現状打破には手足のロープをひとつにかかるしかないな。

そういうばもう一人はどうしたんだろ？

まあどうでもいいか。

「君……怖くないの？」

怖い？僕が？

「怖い？何を怖がる必要があるの？それよりも、夏休みの一回を潰される方が腹立つ」

「兄さんが帰つてきたら……、そんなこと言へなくなるよ」

兄さん？じゃあ兄弟で共犯なのか。

兄が子供を殺して、弟である田の前の「」の男が、子供を埋めりつて

ところかな。

でも、埋める時に「」めんねつて言つてたつてことは、少なからず罪悪感があるからかな。

「ねえ、埋める時になんで「」めんね、なんて言つの？罪悪感？子供に恨まれたくないから？」

そつ訊いたら、表情が強張つた。「ねえ、答えられないの？」

ただうじつじとして、視線を泳がせるだけでイライラする。

口を開いても、結局何も言わないし。

「ねえ、お兄さんと言われるから、子供を埋めるの?自分の意思?」

まあ、答えは分かつてるけど。

こんなうじうじした奴が、自分の意思で埋めるはずがない。

今までの人生さえも他人任せなんじゃないのか?

「……やつしないと、兄さんに見捨てられるんだ……。仕方ないじゃないか……」

見捨てられる?仕方ない?

そんなものに怯え続けて、なんになる?

人間、裏切りは付き物だらう。

「お前、見るとイライラする」

「えつ……?」

「イライラするって言つてんだよ。「うじうじうじうじ」と見捨てられる?都合よく使われてるだけじゃねえか。警察にバレてみひ。お前あつさり見捨てられるぞ」

今にも泣きそうな顔で僕を見る。

「や、そんな」と……

「あるに決まつてんだらうが。都合がいいから傍に置いてんだろ。危なくなつたら罪を全部お前になすりつけて逃げるために。それくらこ~~氣づけよ~~」

-とある誰かの視点-

男の子が睨んでくる。こきなり口調ががらりと変わった。

目が、怖い。

じつと僕を見つめてくる。

嫌だ。怖い。あの目が。

「警察にバレないとthoughtてんの？」

そんなの分からぬよ。僕は兄さんの言つことだけ聴いてたらいいんだ。

兄さんが僕を警察に売るなんて考えちゃ駄目だ。

兄さんは今まで僕の面倒をみてくれたじゃないか。なのに、なんで、そうかもしだいなんて思うんだよ。

「お前達が犯人だつてすぐ分かる。あんな粗末なやり方じや」

なんでそんなことが言えるんだよ。

そもそも監禁されてるのに、どうなるか分からぬのに、なんで平然としてられるんだよ。

見つめてくる。僕の目を。

耐えきれなくなつて、部屋を出る。本当に粗末だ。縄で縛るにしても、もつと厳重に縛るべきだ。

それに、ポケットに携帯入つたままだし。

何を考えてるんだろう。携帯をそのままにしてるとか。

手を使えないから、何も出来ないとでも？

ただきつく縛つていいだけだから、外そつと思えば外せる。面倒だから外すのは後でいいか。

腕を曲げて、ポケットから携帯を取り出す。

後ろ手で開きにくいけど、開いて葉月の携帯の番号をかけようと見て、見えないからアドレス帳からは時間がかかるな。

番号を直接打ち込む。

通話ボタンを押して、身体を捩つて携帯に耳を当てる。

葉月に電話かけたのは、家族だと動搖しまくって伝えたいことが伝えられずに見つかる可能性がある。かといって警察は時間かかりそうだし。

出で。早く出で。

『もしもし、鼎君！？』

かなり動搖した様子で、葉月が出た。

「葉月、落ち着いてよく聞いて」

『う……うん』

「その様子だと、僕が失踪したっていつのは知ってるよね？」

『うん。だからす』に心配したんだよ

「落ち着いてよく聞いてよ。この電話を切った後、警察に電話してほしいんだ」

『警察？』

「うん。警察に名塚町の手をつけられてない畑の中に子供が埋められてるって伝えて。犯人は兄弟と一緒に住んでるって」

『分かった……鼎君、大丈夫だよね?』

「僕は大丈夫。あんな奴らに殺されないよ」

「おい」

がらりと襖が開けられ、さつきと違う男がそこにいた。くそ……見つかったか。というか、帰つてくるの早くない?仕事してるのはずなのに。

まあそれはどうでもいい。

男には聽こえないように小さな声で云える。

「兄は短めの髪に眼鏡に吊り目。頬に何かで切つたような傷痕がある。弟は長めのぼさぼさの髪に狐目。結構瘦せてる」

「おい!何ぶつぶつ言つてやがるー.」

携帯に向かつて手が伸びてくる。

ここまでか。

「頼んだよ」

返事を聽く前に取り上げられる。伝わったか分からぬ。伝わったと信じよ。

「この糞餓鬼ー.どにかけたか知らねえがナメた真似しやがつてー.」

かなりいきり立つた様子で、腹を蹴つてくる。

「ぐつ……」

容赦なく蹴つてきたから、反射で咳が出る。

その後も何回か蹴られる。

くそ……、いたぶる立場の僕がいたぶられるなんて……！

「ちつ……なんなんだよお前。泣けよーやめてひつて噛みにしちゃー。つまらねえだらうが！」

知るかよ。そんなの。

僕自身でさえ、どんな時に泣くのか、分からなくなつたのに。

「へん……つまらねー」

どすどすと呪音をさせながら、部屋から出でこぐ。
怒鳴り声が聽こえてきた。

- 藤山 葉月の視点 -

『おこー何ぶつぶつ言つてやがるー』

『頼んだよ』

それを最後に電話が切れる。

「鼎君……？ 鼎君ー？」

名前を呼んだといひで、無機質な音が返ってくるだけ。

「うしょ。今の犯人だよね。見つかって」とは、今頃鼎君酷いことされてるんぢや……。

考える前に警察に電話しよつ。

鼎君がせつからく危険を承知で連絡してくれたんだ。
僕がしつかりしないと。

そうだ、濱沼さんならすぐ来てくれるかも。
よかつた。濱沼さんの携帯番号聽いといて。
濱沼さんの携帯にかける。

この時間がもどかしい。お願い、早く出で。

『もしもし、うしょしたんだい?』

「濱沼さん助けてください! 鼎君が、鼎君が殺される!」

『殺される? じゃあ、失踪は本当だつたのか……。落ち着いて順番
に話してくれ』

深呼吸をする。落ち着け。落ち着いてちゃんと伝えなきや。

「今鼎君から電話がかかって来たんです。名塚町の手のつけられて
ない烟の中に、子供が埋められてるつて。犯人は兄弟で一緒に住んで
るみたいですよ」

『やうか……ありがと。今から探しに行くよ』

「はー……お願いします……」

電話を切る。あ……兄弟の特徴言つの忘れた。
確か……兄は眼鏡に吊り目、弟は……。
あれ……? なんだか、見覚えがある気がする……。

まさか……。

-とある誰かの視点-

僕は馬鹿だ。なんで油断したんだろ。両手を縛つたんだから大丈夫だと思つてたのに。

あんな子見たことがない。

監禁されてるのに、泣きもしなければ怯えもしない。

逆に威嚇してくる。

あの目。あの目が怖い。無感動なのに、奥に暗い炎を静かに燃やしている目。

なんだか、怖い。あの子を監禁したのは間違つてたんじゃないかつて。

あの子に子供を埋めるとこ見られた時点で、僕と兄さんは破滅を迎えたんじゃないかつて。

あの子は、始末しなきゃ。

兄さんはあの子に興味をなくしたから、きっと今日はやらない。

僕が、始末して、埋めなきゃ。

その時、インターホンが鳴った。

びくつと身体が竦む。急いで玄関に出了。

「葉月……どうしたの？」

近所に住んでる藤山 葉月がいた。

「Jたにちは祐介さん。大した用事はないんですけど……僕の友達で身長が百六十センチくらいで、髪が肩にこりとかかるくらいの男の子見ませんでした？」

いるよ……。奥の部屋に。

「いや……見なかつたけど……」

その時、僕のポケットに入っていた携帯が鳴った。
思わず取り出す。うつかりしてた、あの子のなのに。
那奈瀬、とある。

見ると、葉月の顔色がみるみる変わっていく。
友達の携帯だから、知つて当然か。
葉月が後退りする。仕方ない……かな。

逃げようとするのを、背後から捕まえて羽交い締めにする。

- 藤山 葉月の視点 -

知り合いの、三嶋さんの家の前に来た。
鼎君が言つた犯人の特徴、三嶋さん兄弟の特徴そのもの。
三嶋さんは、六年前に引っ越ししてきた時からの知り合い。
二人共、優しい人なのに。
違うよね？たまたま似てるだけだよね？
僅かに震える指で、インター ホンを押す。
弟の祐介さんが出てきた。

「葉月……どうしたの？」

なんだか、雰囲気がいつもと違つ氣がする。
気のせいならいいけど。

「こんなにちは祐介さん。大した用事はないんですけど……僕の友達で身長が百六十センチくらいで、髪が肩くらいの男の子見ませんでした？」

「いや……見なかつたけど……」

祐介さんのポケットから携帯が鳴つた。

この着信音……聴き覚えある……。

祐介さんがポケットから携帯を取り出す。
鼎君の携帯を。

「！」

嘘だ……。祐介さんとお兄さんが犯人なんて……！
なんで、一人共優しい人なのに。
でも、鼎君の携帯を持つてることが犯人だつて証拠だ。
逃げなきや。ここにいたら危ない。

祐介さんが僕を見る。

ぞつとするほどの、暗い瞳で僕を見る。

マズい……マズい！

逃げようとして腕を掴まれて、首を腕で締めつけられる。
叫ぼうとして口を塞がれる。

暴れるけど、適わない。

扉を閉められる。しかも、お兄さんが来た。

「兄さん、手伝つてよ」

びっくりした様子で僕を見る。

「バレたのか？」

「うん。だから、手伝つて」

二人相手にどうすることも出来ずに、縛られた。

- 藤山 葉月の視点 -

「…………」

「…………」

痛い。鼎君の視線がものすごく痛い。

すごいじつとりと見てくる。いや、睨んでくる。

「なんで君がここにいるの？」

怖い。鼎君の声音が怖い。

「はあ……」

溜息吐かれちゃった……。

「『』めん……」

「それはいいよ。もう仕方ないんだし。でも、なんで捕まつた訳?」

「祐介さんと祐大さんは知り合いなの……優しい人なのに……。鼎君が言った犯人の特徴が一人の特徴そのものだったから、確かめようと思つて……」

「だからって……下手したら殺されてたんだよ? 迂闊すぎる。これからだつてしまふく危険なのに……特に弟の方が。何をするか分からぬい」

祐介さんの方が?でも、言われてみればそうかもしれない……。

「でも、警察にはちゃんと言つたよ?」

「！」の馬鹿!」

怒鳴られてびくっと身体が竦む。

鼎君が身体を捩つて近づいてくる。「！」の馬鹿!」

犯人が近くにいるつていうのに、そんな大きな声で「警察にはちゃんと言つたよ」なんて言つ奴があるか!

身体を捩つて葉月に近づく。小さな声でも会話出来る距離まで。とはいへ、かなり目の前まで近づく。

「襖の向こうでどちらかが話を聽いてる。警察に連絡したつこともきつと聽かれてる」「

わざわざから気配を感じる。僕達の話を聽いてる。

どうして捕まつたのかは別に聽かれても問題ないけど、警察に連絡したつていうのはまずい。

すぐにでも僕達を始末して逃げようと考えても、不思議はない。
くそ……時間はないな。縄を急いで外さないと。

「「」「めん……僕のせいで……」

「それはもういいよ。責めたって仕方ない。でも、早くしないと時
間がない」

手首の縄を外し終わる。次は足の縄。

「鼎君す」「……」

これくらい外せなくてどうするのや。実際にほどきやすい縛り方だつ
たから助かった。

葉月の縄もほどかないと。

葉月の腕の縄を外し終えた時、がらりと襖が開いた。

弟が、包丁を持って立っている。

・三嶋 祐介の視点・

葉月をあの子と一緒に奥の部屋に監禁する。
襖を開けたら、あの子が睨んできた。葉月を見て、驚いた目を見る。

「葉月……ー?」

「「」あん……」

「二人共、おとなしくしてよね……」

裸を閉める。

葉月はともかく、この子は危険だ。

知り合いとはいえ、仕方ない。この子と一緒に始末しよう。

兄さんは出かけた。今日はきっと帰つてこない。

僕だけで、二人を始末しよう。

大丈夫。縛つてあるから抵抗されない。

抵抗されても、うまく殺れるよ……。

「なんで君が「」にいるの？」

話声が聴こえてくる。裸の前に立つて、一人の話を聞く。
どうして捕まつたのか聴いてるみたいだ。

「でも、警察にまちやんと言つたよ？」

衝撃が走つた気がした。

警察にはちゃんと言つたよ？

そうか。さつきの電話の相手は葉月だつたんだ。

そして葉月は、警察に連絡した後にここに来たんだ……。

警察に連絡したんなら、いつ僕達が犯人だつてバレるか分からぬ。

すぐにも逃げた方がいいかも……。

今からでも、あの子達を始末して、兄さんを連れて逃げよう……。

台所から包丁を持ってきて、裸を開ける。

縄をほどいたあの子が、驚いた目で見つめてくる。弟が、包丁を持って立っている。

僕達を見つめてくる。狂気に染まつた暗い瞳で。包丁を持ってゆらり、と近づいてくる。

くそ……！ほどききる時間がない。

ある程度緩めて、弟に突進する。不意をつかれたのか、弟は僕と一緒に倒れる。

包丁を持つ手を押さえつけ、叫ぶ。

「逃げろー！」

ちゅうっと振り返ると、縄をほどいた葉月があおあおとしている。

「で、でも、鼎君は……」

「僕は大丈夫だから、早く逃げろー！逃げて、警察をー。」

「わ、分かった……！」

僕と弟の横を走っていく。

これで葉月は大丈夫だ。後は、この弟をどうにかしないこと。

「ぐう……っー！」

腹を蹴られた。その反動で床に倒れる。

弟が素早く起き上がり、僕にのしかかってくる。

その瞬間、腹に、衝撃が走った。

「はっ……」

見ると、腹に、包丁が刺されている。

「…………つ！」

精一杯の力で殴つて、その隙に逃げる。
血が、押さえていても、どんどんと流れしていく。
後ろを見ると、弟が追いかけている。

血塗れの包丁を持つて、逃げないと。刺されたこの身体じゃ、狂氣に満ちた人間には適わない。

思うように走れない。思ったより深く刺されてるみたいだ。
押された指の間からぽたぽたと、血が溢れていく。

足がもつれる。足から力が抜けて、転ぶ。

起き上がるうとして、襟首を掴まれて無理矢理立たされる。
そこに、

「ぐつ…………！」

深く、刃の部分が見えないくらい深く、突き刺される。
血が逆流してきて、吐き出す。

「君が悪いんだ……見たりするかひ…………」

僕の耳元で囁く。

ずるつと、包丁が抜かれる。支えがなくなつて、その場に倒れる。
血が、流れていく。皮肉だな……。今まで散々獲物に同じことをしてきて、それが還つてくるなんて。
傷口は熱いのに、身体は寒い。

「のままだったら、失血死だろうな……。

「はは……あははは……」

こんなことになつて氣づくなんて。

なんだ。僕はまだ“人間”だったのか。

“人間”を捨てようとしたのに、まだ捨てきれずにいるなんて。
情けない。やっぱり僕はまだ“弱い”。

“弱い”まま、終わるのか？

「死にたくないな……」

意識が、途絶える。

八月十九日　喪失〃回帰

僕は誰だ？

“僕”は誰だ？

僕は“僕”を否定した
“僕”は僕を否定する

本当のペテン師はどうちだ？

僕か？　　“僕”か？

僕には分からぬ

“僕”にも分からぬ

本当の『僕』はどうちだ？

僕か？　　“僕”か？

僕には分からぬ

“僕”にも分からぬ

君には分かる？誰かが、“僕”的首を絞めている。

暗くて、顔が見えない。

ただ、泣きながら“僕”的首を絞めているのは分かる。

“僕”に馬乗りになつて、泣きながら首を絞めている。

力が全く入つてないけど。

その時、周りが明るくなつて顔が見えるようになった。

ああ……お前か。

“僕”と同じ顔をしたお前。

“僕”とお前じゃ違つて、根本的には“同じ”なんだ。

“違つ”けど“同じ”。

“僕”が悪なら、お前は善。

“僕”が狂気なら、お前は優しさ。

“僕”はお前、お前は“僕”。

だからお前には“僕”を殺せないけど、“僕”にもお前は殺せない。

僕は“お前”を否定する。

“僕”もお前を否定する。

信じられるものもきっと存在する。

信じられるものなんか存在しない。

そんなことはない。

所詮全て偽りだ。

どうしてそう言える?

お前は裏切られたのを忘れたのか?

された訳じゃない。

なのに、どうして信じようとすると?

全てを疑つなんて寂しいじゃないか。

ビツセ裏切られるなり疑つ方が、信じない方がマシだ。

そりやつて全てを否定して、傷つけてから逃れるのか?

それの何が悪い? “僕”もお前も、全てを呑み込めるほど強くはない。

それでも全てを否定してなんになる?

なんにも。ただ否定するだけだ。

虚じへないのか?

虚じへ? むしろ清々しい。そつぱつお前は、全てを信じられたのか?

。

答えられないだろう？所詮そんなものさ。世界は。人間は。お前の“目”だけで見てみる。“僕”は眠つておいてやる。

そんな夢を見た。目を覚ますと、白い天井が見えた。
ここは……？周りを見てみると、点滴が腕に繋がってる。そして、
呼吸器。
なんで病院なんかに……。思い出せない。
起き上がろうとするが、腹に激痛が走った。
諦めてベッドに戻る。

「鼎？」

声が聽こえて、ドアの方を見る。

「鼎ー！心配したぞこの野郎！母ちゃん、鼎が起きた！」

走る音が聽こえてきて、女人人が泣きながら僕の頬に触ってきた。

「鼎、よかつた……！心配したんだから！」

この人達、誰だ……？そもそも鼎って、誰だ？
僕の名前か……？

分からない。思い出せない。

どうしてここにいる？この人達は誰だ？

僕は誰だ？

思い出せない、思い出せない。

「鼎……？」

女の人人が返事をしない僕に、流石に心配そうな目を向けてくる。

この人達は、家族なのか？

そうだとしたら、

「すみません……、あなたですか……？」

この人達にとつて残酷な言葉を、僕は浴びせかけた。

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

鼎が刺されてから三週間が経った。

三週間経ったけど、まだ鼎は目を覚まさない。

この病院に運ばれた時点でかなり酷い状態だったらしい。

呼吸停止の上に、更に心臓停止。

助からないことも覚悟しておけ、とも取れることも言われた。

一応一命は取り留めたけど、目を覚ますまで油断は出来ない。

鼎、早く目を覚ましてくれ。母ちゃんの悲しみ様が見てられない。
薪沢つちや藤もすごく心配してるぞ。特に藤は自分のせいだつて、
手がつけられないくらい泣いてたぞ。

父ちゃんは、あの人は鼎が死んでもなんとも思わねえのかな。

鼎が一命を取り留めたことだけ確認したら仕事に戻つて、それ以来
病院には来ない。

「トイレ行こ……」

「鼎？」

トイレから戻つてきたら、鼎が田を覚ましてた。
ぽんやりとした田を向けてくる。

「鼎ーー心配したぞー」の野郎ー母ちゃん鼎が起きたー。

お茶を買いに行つてた母ちゃんが丁度戻つてきて、大声で呼ぶ。
母ちゃんが驚いた顔をして走つてくる。

「鼎、よかつた……！心配したんだからー。」

泣きながら鼎の頬を触る。

なんだ？鼎の様子がおかしい。困惑したような田で、俺と母ちゃん
を見てくる。

まるで、初対面の人間を見るよくな。

「鼎……？」

母ちゃんが心配やつて聴いた後だつた。

「すみません……どうなたですか……？」

何言つてんだ？嘘だろ？「鼎……何行つてゐの？お母さんとお兄ち
やんよ？分からぬいの？」

涙を流しながら、悲痛な声で言つてくる。

分からぬい。この人達が誰なのか分からぬい。
この人達がそう言つんだから、家族なんだろ？

でも、思い出せない。

自分の名前すら分からない。思い出せない。
ここで目覚める前に何をしていたのか、どうして病院にいるのか、自分がどんな顔をしているのか、自分がどんな人物だったのか、分からぬ。

僕は誰だ？

記憶の全てが空っぽ。曖昧にぼんやりと残つてさえいな

「本当に分からぬの？」

「『みんなさー』……自分の名前さえ、分からぬんです……」

そう言つたら、更に悲しそうな顔を……。

「『みんなさー』……」あの後、先生が来て色々と聽かれた。
身体の調子は勿論だけど、何か覚えてることはないかとか。
本当に、何も覚えてない。自分の名前すら聞くまで分からなかつた
のに。

僕は杜塚 鼎というらしい。十七歳で高校二年。
一応名前は分かつたけど思い出した訳じゃないから、しつくりこない。単なる情報でしかない。

この病院で目覚める前、僕は誘拐された挙げ句に刺されたらしい。
一時は本当に死ぬ寸前だったとか。
なんで、思い出せないんだろう。
無駄にしか思えない知識なら、覚えてるのに。
例えば記憶について。

記憶には手続き記憶、プライミング記憶、意味記憶、短期記憶、エピソード記憶があるとか。

そんなことは覚えてるのに、なんで自分のことにしてや、家族のこと、過去を全て忘れたんだろう……。
何か、忘れたいことでもあったのかな……。

- 藤山 葉月の視点 -

携帯を眺める。電話、かかつてこないかな……。

鼎君が刺されてから三週間。まだ、目を覚まさない。
僕のせいだ。僕があの時、あんなことを言つたから。
だから、鼎君は刺されたんだ。

助かつたからよかつたけど、もし助かつてなかつたら、僕はどうしたら……。

祐介さん達はまだ捕まつてない。

血塗れで倒れてた鼎君を見つけたのは僕。

祐介さんの家から一番近い大家さんの家に行って、事情を説明して
電話してもらつて、鼎君が気になつて戻つたら、鼎君が血塗れにな
つて倒れてた。

かなりの血が出てて、ぴくりとも動かなかつた。

一番近くにあつた家に駆け込んで、救急車を呼んでもらつて今に至
る。

いきなり携帯が鳴つて、思わず机に落としちゃつた。

お兄さんからだ。鼎君、起きたのかな。

「もしもし」

《もしもし、俺だけど》

「はい」

『鼎な、起きた』

「本当にですかー…よかつたあー……」

安心して涙が出てきた。

『ただな……記憶なくしてんだ』

お兄さんの言葉に、衝撃が背筋を駆け抜けた気がした。

『鼎、何も覚えてないんだ。俺達のこともだけど、自分のことすら、忘れてるんだ。薪沢つちにはさつき電話した。今日は田原めたばかりだから、明日来てやつてくれねえか?』夜になった。面会時間はとっくに過ぎてるから、の人達は帰った。今更だけど個室つて、お金かかるのかな。

かかるとしたら、金持?

まあ、どうでもいいけど。

今日は何も食べてない。いきなり食べたら胃痙攣起こす可能性あるし。

出されたとしても、お腹すいてないから食べないけど。覚えてないけど、一ヶ所刺されてるらしい。全治一ヶ月。

一ヶ月は病院。退屈だな。

なんとなくベッドから出る。なるべくお腹の傷に響かないよう窓から月が見えた。星が沢山輝いてる。

トイレに入つて、鏡に写った顔を眺める。

男にしては、線が細い気がする。髪も肩まであって、ちょっと長め。あ、睫意外と長い。

それにしても身長……低い気がする。

……自分の顔見ても何も思い出さない。

今日はもう寝よう。朝の検診が終わって、朝食にお粥食べた後に寝てた。

気づいたら、あの入達が来てた。

「おはよう鼎。調子はどう?」

女の人気が笑顔で話しかけてくる。僕のために笑顔を作っているのが、一目で分かる。

「……大丈夫です」

敬語で他人行儀だったのがショックなのか、表情が少し曇った。思い出せないから、家族と言われても実感が持てない。

「なら大丈夫ね。今日友達が来てくれるわよ」

友達……？やつぱり思い出せない。
どんな人だろう。

「よう鼎！新沢 波哉斗さんが来てやつたぜ！」

「鼎君久しぶり」

一人は滅茶苦茶テンション高い。両腕突き出しながら入ってきた。Tシャツの『ヤらないか？』の文字はなんだろう……。
もう一人はおとなしめ。なんだか、似てる気がする。雰囲気が。
こっちが藤山 葉月か。

薪沢 波哉斗という人が僕を見ながら残念そうな顔をすると、床に膝をついた。

「なんだ……？お前の毒舌がないと物足りないと……？俺ってMだつたのか？」

真顔でそんなこと話き始めた。

面白い……。「しかし、お前が誘拐とか刺されたとか聽かされただけでも心臓口から飛び出すほどだつたつーのに、記憶喪失とか目玉ぼーん！レベルだぞ」「

田玉ぼーん！つて……。

「僕のせいなんだ……。僕を逃がすために鼎君は残つて刺されて……」

…

今にも泣きそうな表情で話す。

刺される前の状況は聽かされた。倒れてた僕を発見したのはえーっと、葉月らしい。

覚えてないことで泣かれるとか、勘弁してほしいな。

「自分のせいとか、僕は助かつたんだからもつ気に病むことはないと思つけど。記憶なんてそのうち戻るだらう」「

「う……う」と

「てかや、本当に何も覚えてねえの？」

「うん……。名前もまだ、自分のものなのか実感が持てなくて」

「そこまで酷いのか。」の俺様を忘れるなんて、薄情な奴め！」

両腕を突き出して、抱きついてきた。

勢いがあつたから、ベッドに倒れ込んだ。

「馬鹿！痛いって！傷開く！」

「すんません」

「こつちは本氣で痛いのに……へらへらと笑ってるからなんかムカついたから、顔面にパンチを食らわせといた。」チョー痛え。記憶なくしても力は相変わらず強いな」

「それは関係ないでしょ」

頬を押さえてるけど、そんな強く殴った覚えないし大丈夫でしょう。

「なあ、頭殴つたらほんつと記憶戻らねえ？」

真顔で聽くことか。それ。

「戻つても戻らなくても頭かち割つてやる」

「すんません。でも、記憶なくすつて頭打つたのか？」

「頭に外傷はないから、はつきりとは分からぬけど、脳に十分近くくらいは酸素行かなかつたから、そのせいで脳が何らかのダメージを受けたんじゃないかつて言つてた」

「ふーん……聞いても分かんねえや。早く記憶戻るといいな

「うん。やっぱり記憶ないと不安だから、早く戻つてくれると助かる」

なんだろう。葉月が僕の記憶が早く戻つてほしいうて言葉に、一瞬複雑そうな顔をした。

「鼎君、僕の顔がどうかした？」

「いや、何も」

笑顔に戻つた。一瞬だつたけど、なんだか苦しそうな、悲しそうな表情はなんだつたんだろう？

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

薪沢つちと藤が来た。鼎が一人を食い入るように、頭からつま先まで見る。下手したら睨んでる。
本人は多分気づいてないけどな。
やつぱり思い出せなかつたんだろうな。ちょっと残念そうな表情を滲ませた。

薪沢つちは相変わらずだな。

邪魔にならないように病室をでる、

「鼎、楽しそうだな」

「そうね。薪沢君とは私が結婚する前から仲よかつたんでしょ？」

「やうだなあ。幼稚園くらいからかな」

「やつぱつまだ、家族になりきれてないのかしら……」

ちよつぴり悲しそうに笑う。

鼎は本当の母ちゃんとの間に、きっと何があつたんだろうな。
だから、母ちゃんのことが信じきれないのかもしれない。
不謹慎だけど、これがきっかけになつたらいいな。

- 藤山 葉月の視点 -

家に帰つてきた。鍵を開ける。

記憶がないせいかな、ちよつと不安そつな顔してたけど、鼎君[元気]そうでよかつた。

鼎君、楽しそうに笑つてたな……。完璧な作り笑顔じゃない、楽し
そつに。

笑つてるけど、笑つてない笑顔じゃない。

本当は、きっとあんな風に笑うんだ。

記憶をなくしたつてことは、僕との秘密も忘れてるんだよね。
自分が沢山の人を殺した、殺人鬼つてことも。
記憶を取り戻した時、鼎君はどうなるんだろ？

記憶をなくす前の鼎君に戻る？

罪悪感に押し潰される？

それとも、

そう思つたら、素直に記憶が戻ることを喜べなくなつた。

過去に何があつて、どうして殺人鬼になつたのか、知らない。でも、殺人鬼に走らせたほどの何かがあつたんだよね。

僕の罪まで、半分背負つて。

思つんだ。

このまま、記憶が戻らない方が、鼎君は幸せなんじゃないかつて。
「今日は楽しかつた？」

「うん。楽しかつた」

女の人がそう聞いてきた。

敬語じゃなかつたのが嬉しいのか、笑つた。

まだ実感は持てないけど、家族なんだな。

僕の言葉ひとつで嬉しそうに笑ってくれる。

なんだか、こんな気持ちになるのは久しぶりだ、と思つのはなんだろう。

考えてみても分からぬけど。

波哉斗と葉月から聴いたけど、僕は勉強が得意で凄まじい大食いらしい。

勉強が得意かどうかは分からぬけど、大食いはそつかも。

病院食じゃ全然足りない。悲しいくらい足りない。

だから、常に空腹状態。でも、病院じゃこれ以上食べちゃいけないし、我慢。

帰つたら気が済むまでたらふく食べてやる。

「そろそろ時間ね。じゃあ母さん帰るわね。また明日来るから」

「うん。ありがとう。無理はしないでね

「無理なんてしてないわよ。おやすみなさい」

「おやすみ」

-三嶋 祐介の視点 -

なんとなく、家に帰ってきた。入らないけど。

兄さんは、どうしてるんだろう。

あの日から兄さんとはぐれて、連絡がつかない。

大丈夫かな……兄さん。新聞とかで捕まつたって書いてないから、大丈夫だとは思うけど。

どうして連絡くれないんだる……。

あの子の言つてた通り、僕はただの便利な道具でしかなかつたって

言つの？

自分で安全な場所に逃げて、僕はどうなつてもいいの？

そうだとしたら、酷いよ。

僕は、兄さんのために子供を埋めたのに。

兄さんのために、あの子を刺したのに。

あの子は死んだのかな……。

あの日、警察がまだ来なかつたから気になつて戻つてみたら、救急車である子は運ばれて行つた。

遠目から見ても分かるほど、顔が青白かつた。

あの時はまだ夢中で殺さなきやと思ってたけど、冷静になつてきた途端に怖くなつた。あの子は、大丈夫かな……。

死んでないよね？生きていてほしい。

ごめんなさい。ごめんなさい。

葉月の家に来てみた。

なんで、のこのこと來たんだろう。
僕は、葉月まで殺そうとしたのに。
自分の罪は分かつてゐるのに、警察に行く勇気はないんだ。
なんて、図々しくて臆病なんだろう。

「祐介さん……？」

驚いて振り向いたら、葉月がいた。

- 藤山 葉月の視点 -

今日も波哉斗君と一緒に、鼎君の見舞いに行つてきた。
行つたら気持ちよさそうに爆睡してたけど。

三十分くらい待つてたら起きて、波哉斗君がふざけて抱きついて殴
られてた。

波哉斗君は面白い人だよね。

鼎君は、僕達以外には友達いないみたい。

僕と友達になるまでは、波哉斗君以外になかったってことだよね。
それだけ、他人が信じられなかつたってことなのかな。

誰も信じるな、この僕のことも、全てを信じるな。最後まで信じて
いいのは自分だけだ、本当に信じられるのは自分だけだ。つて鼎君
は言つてた。

でも、それは本当に鼎君の心からの言葉なの?

本当にそう信じてるの?

人間は、自分さえも偽ることが出来るんだよ?
自分の心にさえ、嘘をつくことが出来るんだよ?

今の鼎君を見てたら思うんだ。

だつて、あんな風に笑うんだもん。

善意すらも否定することで、他人を信じないことで、自分を守つてたんじやないかって。

他人を傷つけることで、自分を守つてたんじやないかって。

それで、鼎君は満足なの？

それで、幸せになれるの？

家の前に、祐介さんがいた。

俯いて、悲しそうな顔をしてる。

「祐介さん……？」

思わず声をかけた。祐介さんが振り返つてくる。
今にも泣きそうな顔をしてる。

・三嶋 祐介の視点 -

葉月が、見つめてくる。

どうしよう。どうしよう……！

「あっ……」

葉月が、口を開く。

怖い、怖い。見つめないで。

怖くて、身体が動かない。

何を言われても仕方ない。自分のために、殺そうとしたんだから。
その事実は変わらない。

葉月は、僕を信じてくれてたのに。それを、裏切ったんだ。
何を言わっても仕方ないって分かってるのに、責められるのが怖い。
僕は本当こ、べつじょひもないほど臆病だ。

「はづ……れ……」「め……」

情けない。涙が出てきた。

泣きたいのは、怒りたいのは葉月なのに。

「祐介さん、僕はもういいです。謝るなら、鼎君に謝つてください」

そつ、穏やかな顔で、僕に笑つてくれた。

- 藤山 葉月の視点 -

「葉月……いいの？ 上がり込んじゃって

「いいんです。外で話すのもあれですし。外は危険でしょ？」

もしも警察に見られたら捕まっちゃう。

鼎君に言われるだらうな……。

君、馬鹿なんじゃないの？ 殺されかかったのに、匿つとか。甘すぎ
る。

なんか、鼎君が言いそうことすごい想像出来る……。

記憶が戻つて匿つたことがバレたら、絶対言われそつ……。

「とりあえず座つてください。お茶でもいります？」

「気を使わなくていいよ……。それよりも、あの子はどうなったの……？」

「鼎君はなんとか助かりました。……でも、記憶喪失になつたんですね」

助かつたと聞いてほつとした表情をしたけど、記憶喪失の言葉に畳然とする。

「記憶……喪失……？」

「はい……。僕のこととも家族のことも、自分のことさえも忘れてるんです」

「僕のせい……」

頭を抱えながら、俯く。泣いてるのを隠したいのかな。

「祐介さん、お兄さんはどうしたんですか？」

「兄さんと連絡つかないんだ。電話しても出ないし……。あの子の言つ通り、僕は兄さんにとつて便利な道具だったのかな……」誰かが僕の上に馬乗りになつて、首を絞めている。

僕のことを呆れたように見下しながら、力の入つてない手で首を絞めてくる。

おいおい、何都合よく全部忘却してんのさ？“僕”が引っ込んだからって、全て忘れて“僕”まで捨てよつなんて、都合よすぎないか？

何を言つてゐるのか分からぬ。

まあ、分からなくて仕方ないか。お前は“僕”を忘れてるんだからな。“僕”はお前さ。お前の心の一部。お前の“本質”。

とんとんと、僕の胸をつついてくる。

今のお前は“僕”を否定したがるだらうけどな。思い出したら、否定出来なくなるぞ。むしろ、今まで以上に“僕”を増幅させるかもな。だから、

顔を近づけて、耳元で囁く。

だから、わざと悪い出せ。わざと認めりよ。わづくつと皿を開ける。

記憶をなくしたまま目覚めたあの日から、毎日見る夢。

僕と同じ顔をした“僕”。

殺すつもりはないのに、首にかけられた手。

見下したような笑み。

狂氣を、狂喜を宿した瞳。

楽しそうな、笑い声。

夢の終わり、必ず耳元で囁く声。

早く思い出せ。早く認めろよ。

そこで、いつも田を覚ます。

思い出せ? 何を?

認めろよ? 何を?

夢に出てくる“僕”が僕の本質なのなら、僕は……。

僕はどんな人間だった?

僕は何をしていた?

胸の中で何かが渦巻いているのが分かる。

解放される瞬間を、舌なめずりしながら待ってるのを。

記憶が戻った時、きっと解放されるんだ。

記憶は戻ってほしい。

でも……、

記憶が戻った時、僕はどうなる?

十月十九日 回帰＝狂氣＝増幅

血塗れで笑う僕

寂しさで涙を流す僕

どちらが本当の僕なんだろう

どっちも僕なんだろう

ただ、狂気が勝つた（まさつた）だけの話だ

僕は、昔の弱い僕には戻らない

戻らないために、殺す

“僕”を生み出したのは“お前達”だ

おとなしく、死ね

泣き叫べ

死ね今日、退院して帰ってきた。

腹の傷はまだ完全に治つた訳じゃないけど、入院し続けるほどでもなくなったから、退院。しばらくは通院になる。

そういうえば、僕の父さんだという人は一回しか来なかつたな。仕事が忙しいらしい。

病院にいる間、何も思い出せなかつた。物の見事に。

いつそ清々しいほど思い出せなかつた。

部屋を眺める。

机とテレビと本棚とパソコンとベッド。
基本的な物以外置いてない。

ある意味殺風景。

余計な物を置きたくない性格だったのかも。

膝に乗せた猫が甘えたそうに鳴いた。

まだらと、僕が名づけたらしい。

元は野良猫で僕が拾つてきたとか。

嬉しそうに僕にじやれてくる。

抱き上げて、顔の高さに持ち上げる。

「いめんな。お前のことも覚えてないんだ」

- 藤山 葉月の視点 -

鼎君の見舞いから帰つてきた。

今日は土曜で学校休みだから朝から波哉斗君と病院に行つて、鼎君の家の前で別れて帰つてきた。

「あ、おかえり」

「ただいま。何もなかつた?」

「大丈夫だよ」

あの日以来、祐介さんと一緒にいる。

僕を殺そうとした犯人と一緒に暮らしてゐなんて、おかしな話かも
しれないけど。

でも、いいんだ。

祐介さんには僕が一人を殺したことを話した。鼎君のことは伏せて。なぜか、話したくて。

話してゐる間、じつと黙つて聴いてくれた。

話し終わつて、ふと思つたんだ。

僕がしてるのは犯人隠匿。

目の前にいる人物が犯人だと分かつてゐるのに匿うのも、犯罪。

祐介さんが捕まれば、いづれ僕が匿つたことがバレる。

そして、僕が警察に通報しても祐介さんの証言がなくとも、きっと

僕が匿つたことがバレる。

祐介さんは警察に捕まりたくないし、僕だって捕まりたくない。お互いにお互いの命を握つてゐるような状態。

だから、通報はしない。元から通報する気ないし。

それに、僕は鼎君との秘密だつてある。

絶対に、捕まりたくない。

-三嶋 祐介の視点 -

掃除も洗濯も全て終わつた。

後は葉月が帰つてくるのを待つだけ。

あの子は、優しい。こんな僕に、行くところがないなら聞いてくださいって。

その好意に甘えてる僕は、本当にダメな人間だ。

両親を自分が殺したつて言われた時は、流石にびっくりしたな……。

正確には両親じゃないけど。

でも、気持ちは分かる。

誰でも両親を轢き殺した人間に、拳げ句に虐待されてたら殺したくなるよね。

僕なら、殺してるな……。

玄関が開く音がした。

「おかえり」

そう言つと、笑顔でただいま、と言つてくれる。
兄さんは、いつからあんな風になつたのかな……。

「ただいま。何もなかつた?」

「大丈夫」

そう、大丈夫。何もなかつた。

僕達の生活は誰にもバレちゃいけない。
けど、あの子には一度会つて、謝らなきや。

記憶取り戻してからの方がいいかな。

今日退院したばかりなんだから、もう少し後の方がいいよね。
許してくれとは言わない。ただ、謝りたい。まだらと一緒にベッド
に寝転がっていた時だった。

「鼎ーー！暇だー付き合えー！」

ドアを勢いよく開けて、兄さんが入ってきた。
寝返りを打つて、背中を向ける。

「無視すんなよー！」

「…………ウザい」

振り返りもせずに言つ。テンション高すぎてウザい。

「……あ、『キブリ』

「 つ！」

意味不明な叫びを上げて飛び上がる。

まだらがびっくりして何かに向かつて威嚇する。

ゴキブリ大っ嫌いなんだ。あの黒光する身体に橢円形。すばしっこい上に飛ぶなんてマジあり得ない。

「『キブリ』嫌いなのは変わんねーな

笑いながら言いつてぐるのがムカつく。

「『キブリ』…………『ビ』？」

「嘘だ」

「…………。ヒシリで、それ何？」

脇に抱えてる本を指差す。まあ、どう見てもアルバムだけだ。

「見るか？俺と一緒に」

「アルバムは見る。兄さんはいらない」アルバムを眺める。
鹿を指差しながら兄さんにしがみついて泣いてるのは、どう考えて
も僕だな。

兄さんが横に座って、訊いてもないのにその時の状況を話してくれ
る。

「それなあ、お前が鹿せんべいやりたいって言つもんだからやつた

ら、鹿に追いかけて泣きながらじがみついて来たんだよ。小さい頃は可愛かったのに

「悪かつたね。今は可愛くなくて」

「いや、今も女装したら充分可愛い……」

「変態」

誰が女装なんてするか。

「昔は素直で可愛かつたのになあ……。女の子の服も素直に着てくれるたのになあ……」

落ち込み具合が本気だし。僕に何を期待してんだろ。

「その前に弟に女装趣味持たせよ! としないでよ」

「いいじゃねえか! 女装してメイド服着た可愛い弟が兄に『奉仕! 夢見たつていいじゃねえか!』

「変態! 何想像してんのヤーッ! 变態!」

「うわ……メイド服着た自分を一瞬想像しちゃったし……。

「はあ……。とにかくこの女人誰?」

小さい僕を笑顔で抱いてる女人。

母さんじやない。誰だろ?」

「あー……俺達の本当の母ちやんだよ」本当の母さん……？つまり、僕の産みの親つてことか。

じゃあ、母さんは義理の母親なんだ。

この人、父さんと離婚したのか、死別したのかどっちなんだろ。

「！」の人はどうしたの？

「あー……死んだんだよ」

「死んだ？ 病気か何かで？」

「隠したつて仕方ないから言つけど、浮氣相手に殺されたんだよ」

殺された……浮氣相手に……。

それは違う。あの女が悪いんだ。あの女が。
血に染まりながらも、最後まで恨み言を残して。
僕に、どうして死んでくれないのって。

……えつ？

何？今の記憶？それに湧き上がってきた怒り。
血に塗れた女人の人。血塗れのナイフを持った僕。

殺して何が悪い、と笑う僕。

「鼎？ どした？」

「ううん。なんでもない」ただひたすらにアルバムを眺める。
後ろで兄さんがいびきかけて寝てるけど。
いびきうるさい。蹴つて起こしてやろうかな。

それよりもさつきの……なんだつたんだろう。

写真の中で笑ってる女人が、恨めしそうな顔をしてナイフを僕を刺そうとしてくる。

そして、血塗れで倒れながら僕に手を伸ばしてくる女人。

それを、血塗れで涙を流しながら眺める僕。

涙を流しながら血塗れの両手を見つめて、笑う僕。

殺して、何が悪い。

「う…………ううううううう…………」

髪の毛を両手で掴んで、膝に頭を埋める。

この記憶は何?どう考へても僕の記憶なのは分かる。

でも、この記憶が本当なら、僕は本当の母さんを殺したんだ。

怖い。

僕が何をしたのか思い出すのが怖い。

暢気に寝る兄さんを見る。

兄さんは、きっと僕が何をしたのか知らないんだ。
思い出すのが怖い。

殺して何が悪い。

それは、つまり、人を殺すための言い訳。

僕は、消えない十字架を、重い罪を背負つていて?

記憶を取り戻したら、僕は、人を殺し続けるの?ふと思つ。
本当の母さんを殺したかもしれない。

それで、なんで誰かを殺したことには繋がるんだろう。
直感?

でも、なぜか分かる。僕は殺したんだ。
机の引き出しを調べよう。

記憶の手がかりが見つかるかもしないから。
開けてみたら、ガムや飴の袋が出てきた。
中身は入ってる。

その奥に、大量の免許証や生徒手帳。
これ、まさか、僕が殺してきた人から取った物とか?
そう考えたら、僕はこれだけの人を……?

「うへ……」

兄さんが起きた。

慌てて免許証を引き出しの奥に隠す。

「今何時?」

「四時半」

「一時間も寝てたのか」

欠伸をしながら起き上がる。
寝起きの顔間抜けだな。

足にまだらがじゃれついてくる。夕食までの間、ベッドにじっくり
として過ごす。

今日は父さんが久しぶりに帰つてくるらしい。
だから母さんが喜んでた。
張り切つて料理作つてた。
父さんのこと、好きなんだなあ……。

車の止まる音が聴こえた。

父さんかな？窓から覗いてみる。

車から降りる父さんと……女。

女……。

楽しそうに話している。

仕事の部下と考えても、楽しそうに話している。

部下じゃない？

ねえ……、その女、何？

楽しそうに話しながら、キス。

部下じゃないよね。キスするとか……。

これと同様な場面、見たことがあるな……。

母さんがいるのに他の女とキスなんて、浮気だよね。

お前はまた、僕達を裏切ったのか。

また……？ 考えても無駄だな。今は直感で感じるしかないから。
でも、これだけは確実。

浮氣なんて、許さないよ……？ 父さんの仕事の話を聞きながら、「

飯を食べる。

僕の皿に盛りつけられてる料理だけ、量が半端ない。
食べれるから問題ないけど。

さつき違う女とキスしてたのは、なんとも思わないんだね。

母さんを騙してゐる。

それにもかから自分の話ばかり。

母さんや兄さんの話は聴いてあげないの？

僕は記憶をなくしてゐるから、大した話は出来ないけどさ。

母さんなんて父さんの帰りますと待つてゐるの。

寂しそうな表情を微塵も見せず、嬉しそうに父さんの話を聴いて

る。

裏切られたことを知つたら、どうするのかな?
父さんに制裁を下す?
女に制裁を下す?

「鼎は大丈夫なのか?」

「うーん……大丈夫だけど記憶はなかなか」

「そうか。早く戻るといいな」

言い訳みたいに聴いてきた。

本当に心配なんてしてるのかな。
見舞いなんてろくに来なかつたくせに。
女と会つてたりして。

笑ってるけども、僕は知ってるんだよ。父さん。
あの女のこと、調べてみよう。肩まで湯船に浸かる。
今日はたらふく食べられて幸せ〜。

病院の一ヶ月間は本当ひもじかった。

あれだけ食べても満腹になんないのが不思議だけど。
あれだけ食べてよく太らないな。

代謝がものすごくいいとか?
まあ気にしなくていいや。

父さんは今日は家で休むみたい。

あれを見た後じゃ、体裁を保つためとしか思えない。
そういうえば母さん、父さんとの間に子供産んでないんだな。
僕が考えることじやないけど。

そろそろ出よ〜。

服を着て水を飲んで、部屋に戻る。

なんとなく鞄の中を調べる。学校の鞄。中身を全部出してみる。

まあ、調べたところで変わった物は何もない。

「んっ？」

底に何かある。底敷きを抜くと、袋にぐるまれた何か。袋から出してみる。

「…………」

血塗れの、ナイフ。僕の首を絞める“僕”。また……あの夢か。

僕は、少し少しずつ懇意に出てきたか。

嬉しそうに笑いながら、話しかけてくる。

僕は、母親を殺したのか……？

そうや。殺したのさ。でも、“僕”もお前も悪くない。あの女だつて、“僕達”を殺そうとしたんだからな。正当防衛さ。

…………。“お前”は、家族信じてるか？

んー……、まあ、信じてやつてもいい。那奈瀬と母さんはない。

僕も、同じだ。

……まあ、早く全部思い出せ。思い出しつつ、父をひがへる女の、殺してやるわ。

あの人を？

今までだつて殺してきたじゃないか。今更怖くなつたのか？そんなはずないよな？思いついて、早くこいつ側に来いよ。

殺す…………あの女を。放つておいたら、また他人に家族を滅茶苦茶にされる。そんなの、許さない。

そつや。母さんは父さんを本当に好きみたいだから見逃すけど、あの女はそつとは限らないだらう。金田町かもしけない。どうせこしき、また家族を壊される。

だから、

だから、殺してやるわ。今まで母さんを信じてこなかつた“僕達”が、信じじゆつとしたモノを作るためだ。「じゃあ行つてきます」

「こつてひつしゃー。氣をつけてね」

「うそ

母さんから弁当を受け取つて家を出る。

「あ、豊島おはよつ

「おはよつ葉月。別に迎えに来なくてよかつたのに」

今日から学校に行くことになった。

葉月が迎えに来るって言つから断つたけど、本当に迎えに来た。別に本当に迎えに来なくてよかつたのに。

学校までの道は分かつてゐるし。

まあいいか。一人で行くのもつまんないし。

昨日は部屋の中を調べてた。

そしたら本の中から浮氣現場を写した写真とか、ベッドの下から数種類のナイフが出てきたりした。

更にはスタンガンに、いつ誰を殺したか、を記録した日記帳。見つからないように隠したけど。

もう、僕が殺人鬼だつたのは確実だな。

ついでに父さんの会社の従業員を調べてみた。

個人情報見るためには、顔写真だつて載つてるし。

そしたら、あの女は従業員じゃないと分かつた。

どうやってあの女、追い詰めてやろうかな。「じゃあ、また後で」

「うふ、じゃあ」

葉月と教室は別だから、別れる。

「俺も昼一緒していいか?」

「別に。いいよ」

波哉斗が頭を撫でながら言つてくれるけど、何がしたいんだろう?

ホント、波哉斗の行動つて意味不明。

周りを見る。僕を嫌そうに見る人間がほとんどだ。なるほどな……。

チャイムが鳴つた。

席についた。

新学期が始まつてから教育実習生が来ているみたい。

一限目は数学。どんな実習生だろう。

チャイムが鳴つて、教育実習生が入つてくる。

「…………っ！」

息を、飲んだ。

父さんとキスをしていた、浮氣相手であるひつ、あの女。じつと女を見る。

名前は、里宮 春海。

黒板に読みにくい字を書いていく。

あの女、僕には気づいてないのかな。

杜塚 鼎つて名前、杜塚つて名字も鼎つて名前も、どうか分からな
いけど珍しいんぢゃないかと思うけどな。

杜塚つて名字を見て、もしかしたら息子ぢゃないかって思わないのかな？

気づいてないとしたら、馬鹿だね。

それもだけど……父さんも見境ないね……。

父さん、四十年代後半のはずなのに二十代に手を出すなんてね。

恥ずかしくないのかな？

恥ずかしくないんだろひつね。

本当……イラつく。

ねえ、父さんと最後までやつたの？

罪悪感とかないの？

人の母親から、家族から父親を取つて？

罪悪感とかないから、一人の夫であり父親である男を、取れるんだ

よね？

ひとつ家族を潰してもいいと考えてるから、付き合えるんだよね？
家族がいたなんて知らなかつたなんて通用しない。許さない。

許さない。

お前なんかに、家族を潰させない。

潰される前に、僕がお前を潰してやる。結局、授業が終わるまで僕に気づかなかつたみたい。

気づいてたかもしけないけど、無視したのかも。
何も知らないと思って。

父さんに近づいたのは、本当に好きだから?
金のためじやないの？

僕は、浮氣なんかで得た偽りの愛なんて、信じない。
結局金目当てなんだろ？
絶対、許さない。

「なあ、鼎也あ、ちよつとペコリしてね？」

昼休み、屋上で葉月と波哉斗と一緒に弁当を食べる。

「そう？ 気のせこじやない？」

あの女こどもひそむなうあの女のせいだ。
あの女こどもひそむなうあの女のせいだ。
あの女こどもひそむなうあの女のせいだ。
あの女こどもひそむなうあの女のせいだ。
あの女こどもひそむなうあの女のせいだ。

「何かあつたら、遠慮なく言つてね」

「うん。 ありがと」

でも、今は言ひ気が起きない。

- 藤山 葉月の視点 -

鼎君を見つめる。

笑つてるけど、たまに翳りがよぎる。

その翳りが気になる。

何か、思い出したのかな……？

それで、ピリピリしてるのかな。

なんだか、記憶をなくす前の日に似てる気がする。
気のせいならいいけど。

「ねえ、なんで僕の頭撫で回すのや?」

「なんかさ、お前の髪つて触り心地いいなーって

「ボサボサになるからやめて欲しいんだけど」

「やだ。 手櫛でなんとかなるだろ」

はあ、と諦めたような深い溜息を吐いた。

やつぱり仲いいなあ。 僕にはそんなスキンシップ出来ないもん。

鼎君もなんだかんだ言いながら、波哉斗君なら許してるし。

他人を信じるなって言つてたけど、波哉斗君なら信じられるんだろうなあ。

僕も、もっと鼎君に信じられるようになりたいなあ。「お。チャイム鳴ったな。教室戻るか」

「そうだね。戻ろうか

弁当箱を持つて立ち上がる。ゆっくり歩きながら教室に戻る。

「じゃあ、帰りに

「うん。後でね」

黒板の文字を[写すけど]、授業には集中出来ない。

まあ、先生に説明されなくとも理解出来るのが本音なんだけどな。あの女がどうしても頭をよぎる。よぎって、イライラする。

今日父さんが帰ってくるって言つてたな。

帰つたら、母さんや兄さんがいない場所で問い合わせてる。

授業が全て終わって、三人でロッカーに向かう。

その途中で、あの女が男子と笑顔で話しているのが見えた。

その笑顔の裏で、何を考えてるんだろうね?「じゃあ、また明日な!」

薪沢が手を振ってきたから振り返す。

「うん。バイバイ

「じやあね

ホントあこひ、朝からよくあれだけ元気でいらっしゃるな。ある意味感心だよね。

「熙和君、もはや何があったの？」

『まぢかうな顔をして、どうせいつもせかへて聞いてくれ。

「じやしへ」

「だつて、熙和暗に困つてゐから」

暗に困が。そうかもしけな。困つてみよつかなあ……。

「実はね、父さんの浮気現場見たんだ。キスしてたところ

言つてみたら、流石に驚いた顔をした。
そりやあそだよね。何か思い出して落ち込んでると驚いてたかも
しれなこのに、またか父さんの浮気とは思わなことね。

「もし何かあつたら遠慮なく言つてね。僕なんかに向ふ出来ないけど、聽くべからざ出来るから」

「うそ。あつがと。またね」

「うそ。また明日」

一通り話した後に、別れる。

愚痴を言つだけ言いまくつて、少しそつきりしたかも。家が見えてきた。父さんの車が見える。

「鼎じやないか、おかえり」

「ただいま。父さんもおかえり」

笑顔で話してくるけど、何考えてるの？

他の女と遊んでるくせに。

「ねえ父さん、里宮 春海とどんな関係？」 「ねえ父さん、里宮 春海とどんな関係なの？」

单刀直入に訊いてみた。表情ひとつ変えない。それがイライラ。

慣れてるんだろうね。表情を作るのが。
不埒な関係じやないぞ」

「春海のことをどこで知ったかは知らないが、鼎が思つてゐるような

ふーん……。不埒な関係じやない……ねえ。

異性を下の名前で呼ぶつてさ、それだけ親密じやないの？

「キスしてたのは、不埒な関係じやないの？」

「ただの挨拶だよ」

キスが挨拶ねえ……。外国なら挨拶でも通るかもしねないけど、こ

こ日本だよ？

挨拶つて、どんな言い訳だよ。

「母さんは、何も知らないんだね」

「母さんに私の交友関係の全てを語り trebuie必要あるか？」

「母さんに聽かれたら、そつ答えるの？」

そう聞いたら、黙り込んだ。まあでも、母さんにも同じように語り trebuieだらうね。

何も知らないんだね、という言葉に、交友関係を語り trebuie必要あるか？なんて、里富 春海と特別な関係だって語ってるようなものだと思するのは、僕だけかな。

「大人の付き合いで子供が口出しする必要はない」

そう言って、強引に会話を終わらせて家の中に入った。
てかで、何？子供が口出しするなって。

都合が悪くなつたらそつ言つんだね。

母さんには言わないよ。僕が口出しするようないじじやないから。
まいこさ。子供だと思つてなめるなよ。

お前の大切な愛人、滅茶苦茶にしてやる。ご飯を食べながら父さんの話を聞く。

相変わらず自分の話ばかりだけど。早く終わらないかな。
はつきり語つてどうでもいいし。

本当に罪悪感とかないんだな。

あんなので僕をあしらえると思わないでよ。

里富 春海だけじゃない。お前にも、痛みを味わわせてやる。
痛みだけじゃない。屈辱も。

うまくいけば、だけど。

里富 春海は生かしておきはしない。

風呂に入ってきた。ちゃんと拭いたのに、髪から滴が滴る。
机に広げた写真を見る。浮気を写した写真。

そこに、握りしめたナイフを、思いつき突き刺す。
「許さないよ……他の誰かが家族を壊そつとするなんて許さない。
内側から全てをぶち壊しにしようとお前も許さない。後悔させてやる」

まだ誰かを殺した記憶は戻らない。

けど、脳の記憶と身体の記憶は別物。

いくら脳が忘れていても、身体に染みついたモノはきっと忘れない。
最近気になるんだ。葉月の複雑そうなあの目。

僕の秘密を知ってるのかもしれない。

明日、訊いてみよう。ザシユ、ザシユ、ヒナイフを突き刺す音が響く。

刺して、抜く度に上がる悲鳴。

刺して、抜く度に跳ねる身体。

刺して、抜く度に飛び散る血。

ああ、なんて、気持ちのいい感触なんだろう。

なんて、鮮やかな赤。

なんて、楽しいんだろう。

夢だと分かっていても、気持ちよくて楽しくてたまらない。

「あはは……あははははっ！」

自然と笑い声が漏れる。

ああ……僕は人殺しの性から逃げられないんだな。

気持ちいいだろ？ 楽しいだろ？

うん。気持ちよくて楽しくて、仕方ないんだ。

そうだらなあ。どんなに逃げようとしたって、結局お前は殺人鬼なんだよ。快楽殺人者。これからも、殺して殺して殺しまくるのさ。

“僕”は所詮お前の一部。“僕”を爆発させたのはお前。ここまで“僕”を大きくさせたんだ。戻れると思うなよ。

殺して殺して殺しまくる……それでもいいわ。やっと、思い出してもきたんだからな。
殺してやるよ。

でも、それでも、“母親”って存在はお前にとつて大きいんだな。少しでも、未練を残すほど。

気づいてるか？母さんで埋め合わせてるの。母さんに執着し始めるの。

.....。

分かるよ。“僕”はお前。お前は“僕”。母さんを裏切つてほしくないんだろう？
だから、思い知らせてやれ。

言われなくとも。葉月と一緒に学校に向かう。

「ねえ葉月、君は僕が人殺しだって知ってるの？」

单刀直入に訊いてみる。葉月つて反応分かりやすいなあ。

驚いた顔して見てくるなんて、知ってるって言つてゐるようなものだよ。

「何か、思い出したの？」

「思い出した訳じゃないよ。でも、僕が殺人鬼だって確信はある」

「そう……。隠してて、「めん……」

俯いて、今にも泣きそうな顔をする。

「いいよ。葉月のことだから、記憶をなくしてゐる訳だし傷つけないために言わなかつたんだしょ」

「誰か、殺すつもりなの？」

「昨日、言つてた浮氣相手のあの女だよ。昨日は言わなかつたけど、浮氣相手は里宮 春海なんだ」

それを言つたら、言葉が出なかつたらしい。口をぱくぱくとさせて、目を見開いてる。

「ホントに？ あの人を、殺すの？」

「そうだよ。奪われる前に、殺す」

「そう……じゃあ、学校終わったら、鼎君が人を殺してた場所、教えるね」

「うん」

薪沢が笑顔で手を振つてくるのが見えた。

- 藤山 葉月の視点 -

授業中だけど、机に突つ伏す。集中出来ない。

鼎君……何か思い出したんだ。

また、人を殺すんだ。目の前で数式を説明してゐるあの人を。鼎君のお父さんの浮氣相手だつて言つてた。

そんな人には見えないのに。

人は、見かけで判断しちゃいけないってことなのかな。

鼎君、浮氣については本当に許せないみたい。

過去に、何かあつたんだろうな……。

僕に、何か出来ることはないのかな……。

人を殺すこと以外に出来る、解決法。

お母さんには浮氣のことは知られたくないって言つてた。

でも、お父さんはきっと罪悪感なんてないに決まつてる。僕が何を言つても聴く耳なんか持たないに決まつてるつて。

だから、あの人を殺すの？お父さんを苦しめるために？

僕が言えたことじゃないけど、鼎君は、本当にそれでいいの？

ただ殺して問題解決なんて。

そんなのじゃ、またお父さん浮氣するんじゃないかな。

鼎君、何か考へてるのかな。

僕には、見てるだけしか出来ないけど。教科書を鞄に詰める。やつと帰れる。

葉月は、本当は僕が人を殺すことで全てを解決しようとする」とい、思つところがあるんだろうね。

でも、僕は殺すよ。許さないから。

僕の疵きずを掘り返したんだ。疵に触れたきた人間は、容赦しない。

全てをぶち壊しきられる前に、全てをぶち壊しにしてやる。それにしても、どうして葉月は僕が殺人鬼だって知ってるんだろう。

僕が話すしかないけど。

秘密を話すってことは、よっぽどのことがない限り話す訳がない。何があつたんだらう。まあ、そのうち思い出すか。

「鼎ちやーん！帰りづばー！」

波哉斗……相変わらずハイテンションだね。

「だから、ちやんはいらないから」

「いいじやんかよ。つーか葉月が待つてんぜ？」

「分かつてゐる

「…………」

無言で歩く。波哉斗がとてもなくウザい。

なんで歩きながら抱きついて頭撫で回すんだろ、ここつ。

「波哉斗、離れる。ウザい

「ウザいなんて酷い！鼎ちゃんがひょうび腕にすりまつ取まる身體なのがいけないんだ！」

「悪かったなちやん！波哉斗がでかすぎなんだよー。身體のことは言つないすつ！」い気にしてるんだよ！」

「鼎はこれでいいんだって。これ以上大きくなんなくていい！ぐべ
らつ！」

なんかムカついたから、肘を腹に食らわせた。鳩尾に入れたかつた
な。

葉月が笑い出した。「はあ……まだ腹痛え……」

わざとらしく腹を撫でながら言つ。

「波哉斗が抱きついてこなきゃいいんだよ」

「いいじゃんかよ。ちょっとしたスキンシップじゃねえか。まあ、
今日はここに辺でアディオス！」

抱きつかれる方からしたら、すげえぞいんだけどね。
けど、本当、波哉斗は憎めないなあ。
でも、僕は波哉斗を騙することになるんだな……。
波哉斗には、知られたくないな……。

「うん。また明日」

苦笑いをしながら手を振る。
さて……。

「じゃあ葉月、案内して」

「…………」

人気のない道を歩く。田んぼや畠と、小高い山しかない。

その、小高い山に入つていく。

しばらく歩いていくと、いかにも廃墟という建物が見えてきた。
見た目はボロボロ。

でも、なんだろう……。なんだか懐かしい……。

扉を開けて、中に入る。中に入る。当然、薄暗い。

奥に進む。奥に進むにつれ、匂いが強くなる。

ああ……懐かしい、血の匂いだ。

気分が高揚する。この匂いが、たまらない。

奥の部屋の扉を開ける。一番、この部屋の匂いが強い。
部屋を見渡す。壁に染みついた血の跡。床についた斧による傷。床
につつすら残る血の跡。

ああ……蘇つてくる。

この机の引き出しに一番愛着のある愛用のナイフがあるんだ。
引き出しを開ける。銀色に鈍く輝く、沢山の人間の血を吸ったナイ
フ。

そのナイフを取り、光に翳す。

ああ……綺麗だよ、とても。

ナイフを口に近づけ、刃を舐める。

ナイフを舐めるのは、僕の癖。

僕の脳が勝手に錯覚してるんだろうけど、血の味がする気がする。
ベッドを見る。血が染み込んで変色したベッド。白い部分が見えな
い。

そのベッドにうつ伏せになつて寝転んでみる。ナイフを握つたまま。
ベッドの匂いを嗅ぐ。いろんな、血の匂いがする。

ここで、殺したんだ。容赦なく、このナイフで。

ああ……ここだ。ここが、僕のいるべき場所だ。

帰るべき場所だ。

「ただいま」

- 藤山 葉月の視点 -

鼎君が中に入った。僕も中に入る。

あの日、一度来ただけの廃墟。

この建物に染みついたこの匂い、血の匂いだよね。

一度嗅いだだけなのに、慣れたのかな。なんとも思わない。

鼎君が奥の部屋のドアを開けて、鞄を置いた。

懐かしそうな笑顔で、部屋を見渡す。

机の引き出しからナイフを出して、笑顔で見つめる。

そしてうつとりとした笑顔を浮かべて、ナイフの刃を舐める。

まるで、子供のように無邪氣に。

そして、ナイフを握ったまま、ベッドに寝転ぶ。

一度顔をベッドに押しつけると、大きく呼吸したのが分かった。顔を右に向けて、ナイフを見つめる。

「ただいま」

笑顔で呟いた。うつとりとした笑顔で、無邪気にナイフを見つめて。

「ねえ葉月、思い出したよ。ここで殺したこと。葉月との秘密。全部

「え……ホントに……？」

「ねえ葉月。僕もね、親を殺したんだよ。母親を「寝転んだまま、葉月を見つめる。自然に、唇が笑みを形作る。

「殺したって、本当で……？」

「本当だよ。でも、あっちだって僕を殺そうとしたんだから、正当防衛だよ」

そう、あれは正当防衛だ。あっちから殺意を持つて襲いかかってきたんだから。未だに右腕に残る傷痕。消せるものなら消し去りたい。

「じゃあ、今のお母さんって……義理の？」

「やつ、義理の母さん。記憶をなくして初めて思ったけど、本当の母親より母親らしいよ。僕がこんなこと思つなんてね」
本當、不思議だ。今まで信じてこなかったのに。
記憶をなくして違う視点で見ることで、価値観が変わるもんなんだな。

浮氣だけは、どうあっても許さないけど。

「あの人、殺すの？」

「そう言って、俯いた。

「やうだね。殺すよ

「僕に何か出来るなら、手伝つよ

「僕に何か出来るなら、手伝つよ

何か決意したような瞳で、僕を見る。

「どうして？葉月、本当は僕が人を殺すの、嫌いなんでしょう？」

「本当のことを言つと、反対だったよ。でも、今度は僕が鼎君の罪を半分背負つから」

そう。その覚悟、あるんだ。

僕と君は運命共同体。どこまでも、共に墮ちていく運命。ナイフを置いて手を伸ばす。

その手を、葉月は笑顔で取つた。「ただいま

母さんが笑顔で來た。僕も笑顔を返す。
あの後、葉月と別れてそのまま帰つてきた。

「おかえりなさい。今日は遅かつたわね」

「うん。ちょっと本屋に寄つてたんだ」

勿論、嘘だけど。僕が殺人鬼だなんて知られたくないから。
もし、僕が殺人鬼だつて知つたら、どんな顔をするんだろう。
まあ、その時はその時か。

「そりそり。来週ね、同窓会があるんだけど、母さん行つてもいい
かしら？」

楽しそうに両手を合わせながら、聞いてくる。

「勿論いこよ。そんなの僕に聽かなくていいの！」

「だつて、何も言わずに出かけたら駄目でしょ？夜遅くなると悪い
し」

「あ～そっかあ。でも行つていいなんて聽かなくていいよ。楽しん
できて」

「ありがとう。後ね、明日お父さん帰つてくれるって
父さんが……。最近やけに帰つてくるな。
僕があんなこと訊いたからかな。

「ねえ母さん」

「なあに？」

「もし、父さんが浮気なんてしたらい、どうする？」

そう訊いたら、表情が曇つた。

当たり前か。

「大丈夫よ。お父さんはいい人だから」

笑顔でそつ言い切つた。可哀想な人だな。信じてゐのに、騙されて。

「母さん、父さんのこと好き？」

「勿論、好きよ。鼎も那奈瀬もね」

「おかえり」

祐介さんが笑顔で出迎えてくれる。

「ただいま」

出迎えてくれる人がいるっていいな。

両親が死んだあの日から、出迎えてくれる人なんていなかつたから。帰りを待つてくれる人がいるだけで、心が軽くなるなんて。でも、祐介さんにも、これからやることは言えない。
もしかしたらバレるかもしれないけど、バレンタインに頑張らなきや。

僕は隠し事が下手だから。

とりあえず、鼎君から頼まれた物、用意しなきや。

釘と金槌と消毒用アルコール。

こんな物、何に使うんだろう? でも、必要な物なんだよね。

鼎君が誰かを殺すのは反対だった。

でも、僕だって人殺しで、拳げ句は鼎君まで巻き込んで。半分僕の罪を背負わせて。

だから、今度は僕が鼎君の罪を背負うよ。

僕は偽善者だ。

偽善者でもいい。鼎君のために、どんなことにも手を染める。

それが、人殺しでも。

ご飯を食いながら、ちらりと鼎を見る。

なんだろうな……。いつもと同じように見えるのに、なんか、違う。何が違うのかって聽かれたら、困るけど。

でも、なんか違うんだ。

なんというか、雰囲気が記憶をなくす前に戻った？
そうだとしたら、あいつ、もしかして記憶が戻った？

でも、戻つたんなら言つよな？

気になるんだ。本当の母ちゃんの写真見た時のあの反応。
写真を見た時の、あの暗い顔。

俺のせいで、何か思ひ出させちまつたのか？
なあ鼎、お前、変なことしてねえよな？

見ちまつたんだよ。ベッドの下に隠されてたナイフ。

そして、ノート。名前と口時と、殺害方法。

あれは、なんなんだ？どつこいつだ？

それに、机に写真をばらまいて、そこにナイフを突き立てて。
何か言つてたけど小さくて、許さないよしか聽こえなかつた。
ドアが少し開いてて、見ちまつたんだよ。

お前、何を隠してんだ？ちらりと、バレないように兄さんを見る。
朝から、僕を見る目が変だ。

もしかして、部屋に隠してた写真とか見たのか？

だとしたら、厄介だな。まだなんとも言えないけど。

後で部屋を調べよう。兄さんが何か見たのなら、動いてるはずだから。

でも、兄さんが気づいたとして、どうする？

殺すのか？危険因子を残さないために？

記憶をなくす前の僕なら、迷わず殺す決断をしてただろうね。

でも、記憶をなくして違う視点で家族と接してしまったことで、気づいたんだ。

母さんと兄さんが、僕のことを大切にしてくれてる」と。

記憶をなくす前なら、そんなもの信じなかつたの？」

気づかなかつたらよかつた。そうしたら、迷わず殺せたのに。

なんで、気づいたんだろう。そうしたら、こんな訳の分からぬ葛藤に苛まれる必要なんてないのに。

イライラする。僕は、“人”を捨てるはずじゃなかつたのか？こんなことで、悩んでどうする？

ご飯を食べ終わつて、部屋の中を調べる。

机の中の身分証明書や、本に挟んだ写真に動かした痕跡はない。まさか、一番最悪な物を見られたのか？

ベッドの下から、ナイフと日記帳が入つたケースを出す。蓋を開ける。

「…………」

位置が、違つ。順番通りに並んでない。

一番最悪な物を、見られた。

行動を起こせば、気づかれるかもしれない。

……それがどうした。邪魔をする人間は容赦なく殺すんだろう？

なら、殺せばいいじゃないか。家族だろうが、関係なく。

今まで、そう思つてきたじゃないか。

その時、ドアが開いた。

「鼎…………？」

兄さんが、無意識にナイフを握りしめている僕を、見る。「兄さん

…………」

兄さんが、握りしめたナイフを見つめる。

最悪だ。疑われていろいろつていうのに、こんなナイフを握りしめているところを見られるなんて。

「鼎、お前、それなんなんだ？」

そう言つて指差すのは、ナイフと口元帳。

「ノートの中身……見たの？」

「見たから、訊いてんだよ

ドアを閉めて、僕の横に立つ。

「そのノートに、父ちゃんの会社の人の名前書いてあつたよな？」

「うん」

「腕や足の骨を折り碎いて、ナイフでめつた刺しつてどうこいつことだよ？」

「いいや、言つちやえ。どうせ疑われた時点で終わるなんだ。
このままバラしちやえ。

「そのまだよ。斧の刃じやない部分を使って、殴つて折り碎くんだよ。楽しめなくなつてきたら、ナイフで死ぬまでめつた刺しにして殺したんだよ」

握りしめたナイフを見つめる。

「本気で、言つてゐるのか？」

声がちよつと震えてゐる。

「そうだよ。このハートに書いてる人全員、僕が殺したんだよ」

「嘘……だろ?」

「嘘じゃないよ。僕が、殺したんだ。僕は、殺人鬼なんだよ」

「…………」

「ねえ兄さん。母さんを殺したのも、僕なんだよ」

兄さんを見上げて、微笑む。

・杜塚 那奈瀬の視点・

「ねえ兄さん。母さんを殺したのも、僕なんだよ」

そつと、俺を見上げて微笑んだ。

子供のように無邪気な笑顔なのに、禍々しい闇を孕んだ笑み。なのに、泣きそうに見えるのは、なんでだろう。

「母ちゃんを、お前が……？浮氣相手に殺されたんだり……？」

「違うよ。母さんはね、浮氣相手に誑かされて、僕を殺そつとしてきたんだよ。だから、殺した。でも、正当防衛だよ」

怒りを露わにして、ナイフを握りしめて、吐き捨てるよつて叫ぶ。
俺は、何も言えない。

「母さんを殺して、その罪を浮氣相手に擦りつけるために、浮氣相手も殺したんだ」

何も、言えない。

「ねえ兄さん、ちゅうと外に出ようよ」

母ちゃんに鼎とコンビニ行ってくれって出てから、歩いて十五分。公園に着いた。夜だから誰もいない。
鼎がなんもない地面に、しゃがみ込んだ。

「いいでね、殺されそうになつて、母さんを刺したんだよ

淡々とした声で話す。氷のような冷たい瞳をして。

「母さん、最後にビリ死んでくれないのって言つて死んだんだよ。僕に、死んでくれないのって」

お前、母ちゃん好きだったもんな。そんなことが、ホントにあったのか？

「お前、ホントに殺したのか？だって、お前は優しい奴じゃねえか。虫も殺せないくらいの。なに、なんで……」

お前は優しい奴だろ？よく笑つて、よく泣いて。

それなりに、元気で狂つちまつたんだ?

「うむ…… やー」

かわいじて、聞き取れるくらいの小さな声。

「うむ…… やー」

叫びながら、俺に掴みかかってきた。

いきなりの不意打ちに、押し倒されて馬乗りになる。

「昔の僕はもういなんだよ！捨てたんだよ！もう戻れないんだよ！僕がこうなったのも、全部お前達せいぢゃないか！」

- 杜塚 那奈瀬の視点 -

449

「一年前、僕がどんな思いをしたか考えたことがあるのか！寂しくて苦しくて、なのに、お前達は話すら聞いてくれなかつたじやないか！」

怒りを込めて、泣きながら叫ぶ。

鼎の涙を見たのは、いつ以来だろ……。

「父さんは仕事仕事つて、話すら聴いてくれなかつた。自分の話ばっかりで。話したつて、僕の気持ちなんて分かつてくれなかつた」

胸ぐらを掴んでいた力が弱まる。
俺の胸に、顔を押しつけてきた。

「兄さんは、家に帰りすらしなかった。帰つて来ても、お金つて。兄さんの嫌味に、僕がどれだけ傷つけられたか知らないんだろう？」

「…………」

何を言つていいのか、分からぬ。

俺の言葉が、鼎を傷つけてるのは分かつてた。でも、俺は、そんなこと知るかつて、省みなかつたんだ。

「母さんは、毎日毎日どこかに出かけて。口を開けば、聴きたくない父さんの悪口ばかり。浮氣だなんて信じたくなかつた。でも、やつぱり裏切られて。挙げ句は、浮氣相手と一緒になるために、死んでつて」

俺は、今更何を言つてやればいいんだ？

「だから、信じられなくなつた。何もかも、家族も、敵だつて。それなのに……」

顔を上げて、俺を見つめる。

「記憶なんてなくさなかつたらよかつた。記憶なんて取り戻さなかつたらよかつた。そしたら、兄さんも迷いなく殺せたのに」

鼎が立ち上がる。そのまま、背を向けてどこかに行こうとする。

「鼎ーー？」

「こいつを警察に言つかは、兄さんの好きにしたらい。犯人を知つてゐるのに隠すのも、犯人隠匿罪になるよ?・証拠になる死体は見

つからないだらうけど。僕が食べて証拠隠滅したから。兄さんが決めたらいい。でも、邪魔するなら兄さんは敵だ」

わざ今までの悲しそうな表情は完璧に失せた。

変わりに、敵意を露わにした田を、向けてくる家までの道を、僕も兄さんも何も言わずに歩く。

兄さん、どうするのかな。

いつそのこと、警察に言つてくれればいいのに。そしたら、敵としてなんの迷いもなく殺せるの。

警察に捕まるのは嫌だから、逃げるけど。

そうなつたら、葉月も連れて行かなきやな。

いずれ、葉月のことも明るみに出る。

葉月、どう思うかな。今までの生活を壊されるとなるから、責められるかな。

でも、葉月だつて僕と運命を共にする覚悟はあるはず。

だって、僕と一緒に人を殺すことを選んだんだから。

ああ、そうだ。どうせ警察に言つながら、里富 晴海を殺した後に言つてほしいな。

今警察に言われたら、里富 晴海を殺せなくなる。

兄さんが警察に言つ前に、里富 晴海を殺そう。

兄さんのことだ。詫みに詫んで、時間がかかるはず。

予定変更だ。葉月に頼んでいた物が揃つてたら、明後日に決行だ。そうだ……兄さんの目の前で里富 晴海を殺すつてどうだらう？
ふふ……とつても楽しそうだ。

兄さんに口出しきせないために、兄さんにも殺さるつて手もあるな……。

まあ、これから考えようか。

「葉月、お風呂終わったよ」

「うん。もっちょとしたら入るね」

祐介さんに先にお風呂に入つてもらつて、鼎君に頼まれた物を鞄に詰めた。

釘と金槌と消毒用アルコール、本当に何に使うんだろう?
釘と金槌は少しさ想像つくけど……身体のどこかに打つとか。
アルコールは……分かんないや。

「葉月、携帯鳴つてるよ。あの子から」

「はい」

急いで出る。なんだろ。

「もしもし?」

《葉月?頼んでた物、揃つた?》

「うん。大丈夫だよ?」

揃つたか聴くつことは、計画実行?

《明後日、殺るから》

「うん、分かった」

《それとね、兄さんにバレた》

バレた……？まさか、人殺しが？

「ホントに？」

『うん、バレちゃった。兄さんが警察言つかもしれないから、そつなつた場合、僕と一緒に逃げる覚悟、しといてね』

「うん。分かつてゐよ。僕は、鼎君と一緒にだよ」

携帯の向こいで、鼎君が笑つたのが分かつた。

『そう。じゃあ、また明日』

「うん。またね」

携帯を閉じる。お兄さんにバレちゃつたんだ……。

お兄さん、どうするのかな……。

どうせにしても、逃げる覚悟はしないと。

逃げるなら、祐介さんも連れて行かなきゃ。説明しなきゃいけないし、鼎君にもちゃんと話さなきゃ。

「祐介さん、話したことあるんだ。落ち着いて聞いてね」

-三嶋 祐介の視点 -

眠れない。布団に入つて一時間くらい経つたけど、眠れない。少し顔を上げて、葉月を見る。ぐっすり眠つてゐる。眠れないのは、つい四時間前くらいに聞いた話のせいだ。

あの子は人殺しで、今までに沢山の人を殺してて、葉月のおじさんとおばさんの事件の隠蔽を測つて、記憶を取り戻して父親の浮気相手を殺そうとしてるなんて。

葉月は、浮気相手殺しを手伝うつもりみたいだ。

頼まれた物を準備して、あの子が望むなら、人を殺すつて。そして、そのことがあの子のお兄さんにバレてしまつたから、警察に通報されたら逃げるつて。

僕だつて捕まりたくない。本当は罪を償うべきなのは分かつて。子供を埋めて、あの子と葉月を殺しかけたんだから。

でも、捕まりたくない。

僕は、どうしたらいいんだろう。

二人が人を殺そうとしてるのを分かつてると、それをただ黙つて見てるなんて。

本当なら警察に言つべきなのは分かつてる。

でも、僕にはその勇気がないんだ。

僕は、臆病だ。とんだ卑怯者で、人間失格だ。

我が身可愛さに、葉月とあの子が血に手を染めるのを、黙つて見てるんだ。後十分で授業が終わる。早く、早く終われ。

明日に向けての準備をしないと。

後十分なのに、やたら長い。と言つより、今日は長かった。今日でこんなに長く感じたんだから、明日はもつと長く感じるだろうな。

はあ……つまんないなあ。しかも、数学で説明してるのあの女だし。教師を目指してるくせに、よく浮気とか出来るよね。

後、五分。

「あ、ごめん。忘れ物した。先に行つてて」

「ほえ？忘れもん？珍しいな鼎が。待ってるから行ってこいって

「うん、じめん！」

そう言つて教室に戻る。忘れ物は、嘘だけど。あの女、教室にいるかな。

いたら、問い合わせてやる。

教室に入ると、あの女がいた。

生徒名簿を眺めて、何を考えてるんだろうね。

「杜塚君、どうしたの？」

「先生に訊きたいことがあるんですよ。僕の父さんと、どんな関係ですか？」

单刀直入に訊いたら、流石に驚いた。

「なんの話？」

「僕の父さん、もりづか杜塚剛つよしっていうんです。知ってるでしょ？父さんとどんな関係だつて訊いてんだよ」

里富 晴海を睨む。そしたら、身体を竦ませた。

「何も……ただの友達よ？」

「へえ……ただの友達がキスとかするんですね

「餓鬼がつるさいわね。餓鬼は黙つてろよ」

作り笑顔をやめて、ウザそうな顔を向けてくる。

「父さんと別れる気、ないんですね」

「当たり前でしょ？ ねだれば金をくれるんだもの」

やつぱり、金田^{かなた}か。欲しかないんだな。

「餓鬼だと思つてなめんなよ。お前なんかに、父さんは渡さない。
父さんを手に入れられると思つなよ。お前を、僕は許さない」

ぐるっと背を向けて教室を出る。

里富 晴海、僕の父さんに手を出したことを後悔させてしまう。
明日が楽しみだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3503w/>

異常快樂殺人症

2011年12月19日14時49分発行